

平成三十年度 京都女子大学大学院 博士（文学）学位論文

# 慈覚大師円仁将来目録の研究

—入唐求法の活動と成果—

京都女子大学大学院 文学研究科 史学専攻日本史

特別研修者 小南 妙覚

# 目次

序章	一頁
第一章　円仁将来三目録『日本国承和五年入唐求法目錄』『慈覚大師在唐送進錄』『入唐新求聖教目錄』の成立過程	六頁
序言	六頁
第一節　伝教大師最澄による比叡山の開創と天台宗の開宗	九頁
(1)　比叡山の開創	九頁
(2)　天台・密教との出会いと修学	一一頁
(3)　入唐求法	一三頁
(4)　天台宗の開宗と止観・遮那兩業の設置	一六頁
(5)　天台密教の課題	一七頁
第二節　円仁入唐に至る経過と概要	二二頁
(1) 『慈覚大師伝』の諸本について	二二頁
(2) 円仁の比叡山修学と最澄からの付嘱	二四頁
(3) 入唐以前の円仁の活動	二六頁
(4) 円仁入唐の背景―円澄座主からの付嘱―	二七頁
(5) 円仁へ付託の「円澄疑問三十問」について	三〇頁
(6) 最澄からの夢告について	二三頁

第三節	円仁三目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の撰述とその背景……………	三四頁
(1)	入唐進発と天台山行不許可……………	三四頁
(2)	『承和五年目録』と『在唐送進録』の成立背景……………	三八頁
(3)	『承和五年目録』の作成と委託……………	四六頁
(4)	「円仁書」の委託……………	四八頁
(5)	『在唐送進録』の撰述と『承和五年目録』の将来……………	四九頁
(6)	『新求目録』の撰述経過……………	五五頁
結語……………	……………	五七頁
第二章	円仁将来三目録の書誌学的考察と将来物の概要……………	七三頁
序言……………	……………	七三頁
第一節	『日本国承和五年入唐求法目録』の書誌学的考察と将来物の概要……………	七三頁
(1)	『日本国承和五年入唐求法目録』の諸本の概要……………	七三頁
(イ)	京都青蓮院門跡吉水蔵旧蔵の青蓮院本（現京都国立博物館蔵本）……………	七四頁
(ロ)	旧個人蔵本（現京都国立博物館蔵本）……………	七五頁
(ハ)	四天王寺本……………	七五頁
(ニ)	活字本……………	七六頁
(2)	『日本国承和五年入唐求法目録』の翻刻と諸本の校勘……………	七六頁
(3)	『日本国承和五年入唐求法目録』に見られる将来物の概要……………	八七頁

第二節 『慈覺大師在唐送進録』の書誌学的考察と将来物の概要	一〇二頁
(1) 『慈覺大師在唐送進録』の諸本の概要	一〇二頁
(イ) 青蓮院本	一〇二頁
(ロ) 比叡山南溪藏本	一〇三頁
(ハ) 叡山文庫池田史宗藏本	一〇三頁
(ニ) 活字本	一〇四頁
(2) 『慈覺大師在唐送進録』の翻刻と諸本の校勘	一〇五頁
(3) 『慈覺大師在唐送進録』に見られる将来物の概要	一一五頁
第三節 『入唐新求聖教目録』の書誌学的考察と将来物の概要	一二〇頁
(1) 『入唐新求聖教目録』の諸本の概要	一二〇頁
(イ) 青蓮院本	一二一頁
(ロ) 高山寺本	一二二頁
(ハ) 比叡山南溪藏本	一二二頁
(ニ) 叡山文庫池田史宗藏本	一二三頁
(ホ) 活字本	一二四頁
(2) 『入唐新求聖教目録』の翻刻と諸本の校勘及び比叡山南溪藏本の翻刻	一二五頁
(イ) 『入唐新求聖教目録』の翻刻と諸本の校勘	一二六頁
(ロ) 比叡山南溪藏本『入唐新求聖教目録』の翻刻	一七二頁
(3) 『入唐新求聖教目録』に見られる将来物の概要	一八〇頁
(イ) 長安求得	一八二頁



(ロ) 五台山求得	二一〇頁
(ハ) 揚州求得	二一二頁
(4) 付表「円仁三目録揚州将来物一覧表」	二一五頁
(5) 付表「『慈覚大師在唐送進録』のみ記載の将来物一覧表」	二二四頁
結語	二二六頁
第三章 円仁の入唐求法と将来物蒐集の状況	二三四頁
序言	二三四頁
第一節 揚州における求法と将来物蒐集の状況	二三五頁
(1) 宗叡・全雅からの受法	二三五頁
付表①『入唐新求聖教目録』所掲の円仁揚州将来物一覧表	二三六頁
(2) 『入唐求法巡礼行記』及び目録に記載の将来物	二四七頁
(3) 『入唐求法巡礼行記』に記載のない目録所載の将来物	二五〇頁
第二節 赤山・五台山における求法と将来物蒐集の状況	二五七頁
(1) 赤山法華院での求法	二五七頁
(2) 五台山竹林寺での求法と将来物蒐集	二六〇頁
付表②『入唐新求聖教目録』所掲の円仁五台山将来物一覧表	二六一頁
(3) 大華嚴寺での求法と将来物蒐集	二六六頁
第三節 長安における求法と将来物蒐集の状況	二七五頁
(1) 開成五年(八四〇)の求法活動と将来物蒐集	二七五頁

付表③『入唐新求聖教目録』所掲の円仁長安将来物一覧表	二七六頁
(2) 会昌元年(八四一)の求法活動と将来物蒐集	三〇九頁
(3) 会昌二年(八四二)―五年(八四五)の求法活動と将来物蒐集	三一五頁
結語	三二四頁

第四章 円仁入唐求法の成果―比叡山仏教の確立を期して―	三三五頁
-----------------------------	------

序言	三三五頁
----	------

第一節 比叡山諸法儀の始修と整備	三三六頁
------------------	------

(1) 法華懺法の改伝	三三六頁
-------------	------

(2) 不断念仏の始修	三三九頁
-------------	------

(3) 灌頂の始修及び菩薩戒の伝授	三四二頁
-------------------	------

(4) 浄土院廟供の始修	三四七頁
--------------	------

(5) 天台大師供の始修	三四九頁
--------------	------

(6) 舍利会・文殊八字法・七仏薬師法の始修	三五三頁
------------------------	------

第二節 比叡山諸堂の創建と整備	三五五頁
-----------------	------

(1) 根本観音堂の創建	三五五頁
--------------	------

(2) 法華総持院の建立と熾盛光法の始修	三五八頁
----------------------	------

(3) 文殊楼院(常坐三昧院)の創建	三六四頁
--------------------	------

(4) 赤山禅院の創建	三六六頁
第三節 比叡山における円仁将来物の保存	三六七頁
結語	三六九頁
終章	三七六頁
参考文献	三八九頁
初出一覧	三九八頁

## 序章

本研究では、後に日本天台宗第三世座主となる慈覚大師円仁（七九四―八六四）が、承和五年（八三八・唐開成三年）に入唐請益僧として遣唐使に随行するまでの天台教団の状況や課題を円仁入唐求法の背景として考察するとともに、円仁将来目録三種、すなわち『日本国承和五年入唐求法目録』、『慈覚大師在唐送進録』、『入唐新求聖教目録』（以下『承和五年目録』、『在唐送進録』、『新求目録』）の成立事情を明らかにし、底本を青蓮院本に定めて翻刻を行い、現存諸本の比較検討を行う。次に、これら将来目録に記載されている經典や論疏をはじめとする将来物を円仁の旅行記である『入唐求法巡礼行記』（以下『巡礼記』）と照らし合わせて円仁の求法と将来物蒐集状況を明らかにしていく。さらに、将来物蒐集や入唐求法が帰国後どのように成果として結実したかを考察し、日本天台宗に与えた影響を解明していく。以上の事項を本研究の目的とするものである。

第一章「円仁将来目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の成立過程」では、円仁が入唐請益僧しょうやくに選出された背景や当時の天台教団における課題を考察し、上記円仁三目録がどのような経緯で成立したのかを検証する。

第一節「伝教大師最澄による比叡山の開創と天台宗の開宗」では、伝教大師最澄（七六六―八二二）による比叡山開創に遡り、最澄が開いた日本天台宗がいかにして円仁に受け継がれていったかについて考察する土台とする。特に、最澄においては天台宗開宗による止観業（天台法華経）・遮那業（真言密教）の設置や弘法大師空海（七七四―八三五）との交流などを通して、円仁入唐以前における比叡山での真言密教の課題を提示する。

第二節「円仁入唐に至る経過と概要」では、円仁の伝記を見る上での根本史料である『慈覚大師伝』の現存諸本の検討を行った上で、円仁が遣唐請益僧として入唐求法に至る経過を考察する。特に、天台宗第二世座主円澄（七

七二―八三七）からの天台教学に関する「円澄疑問三十問」を付託されたが、その第二問によれば、当時の天台教団が抱えていた大きな問題の一つとして天台と真言との教学的位置付けが課題であったことを述べる。

第三節「円仁三目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の撰述とその背景」では、当初の天台山行きが不許可になった過程を見た上で、揚州で求め得た将来物を記した『承和五年目録』『在唐送進録』、及び揚州・赤山・五台山・長安など九年三ヵ月の入唐求法によって求得した将来物を総合的に記した『新求目録』の撰述経過やその事情について、将来目録末尾の文章や『巡礼記』を用いて詳細に考察する。

第二章「円仁将来三目録の書誌学的考察と将来物の概要」では、円仁三目録の底本の翻刻と現存諸本の間に見られる異同の確認を行い、『大正藏経』収蔵の有無と将来物の内容についても考察する。

第一節「『日本国承和五年入唐求法目録』の書誌学的考察と将来物の概要」では、『承和五年目録』の現存諸本である（イ）京都青蓮院門跡吉水藏旧蔵の青蓮院本（現京都国立博物館蔵本）、（ロ）旧個人蔵本（現京都国立博物館蔵本）、（ハ）四天王寺本、（ニ）活字本（『大正新脩大藏経』本、『大日本仏教全書』本）の書誌学的考察を行い、現存最古の青蓮院本を底本として翻刻し、諸本との異同を列記した校勘記を作成する。次に、文字の異同と将来物の概要を考察する。

第二節「『慈覚大師在唐送進録』の書誌学的考察と将来物の概要」では、『在唐送進録』の現存諸本である（イ）青蓮院本、（ロ）比叡山南溪蔵本、（ハ）叡山文庫蔵本、（ニ）活字本（『大正藏経』本、『日仏全』本）の書誌学的考察を行い、青蓮院本を底本として翻刻し、諸本との異同を列記した校勘記を作成し、文字の異同と将来物の概要を考察する。第三節「『入唐新求聖教目録』の書誌学的考察と将来物の概要」では、『入唐新求聖教目録』の現存諸本である（イ）青蓮院本、（ロ）高山寺本、（ハ）比叡山南溪蔵本、（ニ）叡山文庫蔵本、（ホ）活字本（『大正藏経』本、『日仏全』本）の書誌学的考察を行い、青蓮院本を底本として翻刻し、諸本との異同を列記した校勘記を作

成するとともに、比叡山南溪藏本（二種）の翻刻を掲載する。次に、（イ）長安求得（ロ）五台山求得（ハ）揚州求得の順に、文字の異同と将来物の内容を考察する。

第三章「円仁の入唐求法と将来物蒐集の状況」では、円仁三目録及び『巡礼記』を史料として円仁の将来物蒐集の状況と入唐求法の内容について分析を行う。

第一節「揚州における求法と将来物蒐集の状況」では、『承和五年目録』の末尾に記載の、揚州における終南山宗叡からの梵漢・悉曇受法及び嵩山院全雅からの金剛界諸尊儀軌などの借写を行ったことを手がかりとして『巡礼記』の記述と将来目録とを照合し、将来物入手の状況、あるいは書写の背景を考察する。次に、『巡礼記』に記載されていないその他の多岐にわたる将来物についてその内容を分析するが、その中でも比較的多く見られる天台典籍については、求得の背景に揚州龍興寺と玉泉天台の流れを汲む鑑真との関わりが挙げられることを推論する。

第二節「赤山・五台山における求法と将来物蒐集の状況」では、円仁の赤山（現山東省威海市）における活動内容を考察するとともに、五台山での求法については、円仁将来本のうち、円仁の五台山求法の中心地となる竹林寺を創建した法照（<sup>ほっしょう</sup>—七六六—）撰の『浄土五会念仏略法事儀讃』を取り上げ、比叡山の浄土教に影響を与えた注目すべき書として考察する。大華嚴寺での求法の要点は、天台の行法である法華三昧を行っていた志遠座主（<sup>しおん</sup>七六四—八四四）らの元での天台典籍の書写が中心であったことを述べる。

第三節「長安における求法と将来物蒐集の状況」では、長安到着後の開成五年（八四〇）の求法活動については、密教持念の師を求めた円仁が大興善寺元政より金剛界大法を受けたことを中心に、その求法の内容と将来物との関連を考察する。会昌元年（八四一）の求法活動については、浄土教見聞と典籍の将来、元政より受法の伝法灌頂、城内での結縁灌頂の見聞に注目し考察する。さらに、胎藏界及び金剛界九会曼荼羅の制作を行い、青龍寺において胎藏大法と蘇悉地大法の灌頂を受けたが、それは義真からの受法であることを推論する。会昌二年（八四二）—五

年（八四五）には、玄法寺法全はつぜんより胎藏大法を受け、大安国寺元簡より悉曇章を審決し、インド僧三藏法月より悉曇の発音を学んでおり、その経過を中心に検討し、これら長安での真言密教の受法と将来物蒐集により、後に「一大円教」と称される円仁の教学に結びつくことについても考察を進める。

第四章「円仁入唐求法の成果―比叡山仏教の確立を期して―」では、入唐求法の成果が日本天台宗にいかなる影響を与えたかという問題について考察する。『慈覚大師伝』及び『日本三代実録』などの諸史料を中心に、帰国直後である承和十五年（嘉祥元年・八四八）以後の円仁の活動を整理し、それらと関連すると考えられる在唐中の出来事を『巡礼記』より抜き出し、『新求目録』を用いて関連する将来物にも着目し、入唐求法の成果と影響を明らかにする。

第一節「比叡山諸法儀の始修と整備」では、嘉祥元年の円仁による法華懺法の改伝は、開成四年（八三九）十一月赤山法華院での新羅式礼懺らいさんや五台山諸処における法華三昧の見聞に依ると考えられ、その影響を論じる。

仁寿元年（八五一）始修の念仏三昧は五台山での「五会念仏」を伝承したものであり、円仁は五会の音曲を象牙笛をもって吹き伝えたことなどについても考察する。

嘉祥元年に朝廷より灌頂の認可が下り、斉衡三年（八五六）以降に文徳天皇、貴族に灌頂を授けている。これは、長安での円仁の灌頂受法や見聞による成果であるが、本論では、円仁と公家との師檀関係についても注目する。

五台山竹林寺での廟供の伝承を起源として、円仁は斉衡三年に最澄の墓所である比叡山東塔の浄土院にて廟供を開始しており、元禄十二年（一六九九）に制定布告された『開山堂侍真条制』及び『浄土院規矩』に依拠して現在まで廟供が奉修されていることを考察する。

仁寿四年（八五四）に延暦寺座主就任後間もなく始修した天台大師供は、揚州開元寺での見聞の可能性があることを論じ、同年円仁が撰述した『天台大師供祭文』一卷、『天台大師忌次第式』一卷に依って儀式の内容を窺う。

長安での舍利会見聞の成果として貞観二年（八六〇）法華総持院にて舍利会を始修し、また嘉祥三年（八五〇）二月に文殊八字法、同年三月に七仏薬師法を修したことにについても取り上げる。

第二節「比叡山諸堂の創建と整備」では、入唐航海中の靈驗により嘉祥元年に根本観音堂（現在の横川中堂）を創建し、聖観音像と毘沙門天像を安置した背景として、円仁が聖観音と毘沙門天に対する信仰を持っていたことを明らかにする。

文徳天皇即位に際して円仁の奏上により建立された法華総持院は、密教道場である長安青龍寺での熾盛光法の見聞によるものであり、以後盛んに修されたことを『阿娑縛抄』『熾盛光法日記集』を用いて年表として整理し、考察する。

五台山にて文殊師利菩薩信仰を見聞した円仁は、貞観三年（八六一）五台山より将来した土石と香木を埋めて文殊楼を創建し、その遺言により公家に付嘱された過程を考察する。

また、入唐求法中に守護を受けた山東半島の赤山神を勧請したいという円仁の遺戒により、円仁没後の仁和四年（八八八）に円仁の遺弟が比叡山西坂本に赤山禅院を創建した過程を述べる。

第三節「比叡山における円仁将来物の保存」では、円仁将来物の保存状況について先行研究における考察を踏まえて、円仁入滅後始めは法華総持院の真言蔵に納められていたが、火災により天元三年（九八〇）前唐院に安置され、鎌倉時代初期までは円仁将来目録のうち四割程度の将来物が保管されていたことを窺い、史料上で確認できる範囲で将来物の保管についても言及したい。



# 第一章 円仁将来三目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の成立過程

## 序言

承和二年（八三五）、遣唐請益僧に任命された慈覚大師円仁（七九四―八六四）は、第十五次遣唐使の一行とともに承和五年（八三八）七月、揚州海陵県（現中国江蘇省南通県）に到着した。円仁が著わした旅行記である『入唐求法巡礼行記』<sup>2</sup>によると、まず揚州開元寺にて悉曇及び梵漢を学び、次いで向かった赤山法華院にて新羅式法会などを見聞し、五台山にて天台法門及び五会念仏を伝承し、最も長期にわたって滞在した唐の都長安においては、密教の伝授を受け会昌廃仏の混乱をくぐり抜けて大中元年（承和十四年、八四七）に帰国を果たしている。

比叡山延暦寺に帰った円仁は、嘉祥元年（八四八）以降比叡山における諸法儀の始修や諸堂の創建などの活動を展開させ、先師である宗祖伝教大師最澄（七六六―八二二）が開いた日本天台宗を確立し、今日に至るまでの台密の基礎を築いた。

その土台となるのが、上述した入唐求法であり、『入唐求法巡礼行記』（以下『巡礼記』）には入唐の様子が克明に記録されている。また、揚州・五台山・長安の三地域において多数の経論章疏を蒐集したことが『日本国承和五年入唐求法目録』（『大正新脩大蔵経』五五卷、一〇七四a）、『慈覚大師在唐送進録』（『大正新脩大蔵経』五五卷、一〇七六b）、『入唐新求聖教目録』（『大正新脩大蔵経』五五卷、一〇七八b）（以下『承和五年目録』、『在唐送進録』、『新求目録』）の三目録によって窺うことができる。

具体的には、『新求目録』の冒頭によると、揚州においては百二十八部百九十八卷、五台山においては三十四部三十七卷、長安においては四百二十三部五百五十九卷、合計五百八十四部八百二卷に加えて曼荼羅などの図像

をもたらししているが、さらに現存する『新求目録』の諸本に記載の将来物を数えると、実際には約七百部の経論章疏などを将来したことが窺える。『承和五年目録』、『在唐送進録』は揚州求得の経論章疏を記載したものであり、『新求目録』は承和十四年（八四七）九月唐より帰国して大宰府に到った円仁が長安、五台山、揚州の順に書き上げた総目録である。このうち、『承和五年目録』と『在唐送進録』を比較すると、全体的に同様の内容であるが、『在唐送進録』には梵漢両字經典の脱落が見られ、『承和五年目録』と帙数が異なるなどのいくつかの相違が見られる。

このような揚州求得の将来物を記した目録が、円仁と延暦寺によって各々作成されたのはいかなる事情によるものであろうか。この問題について考えるためには、これから将来目録の成立過程を窺う必要がある。それにはまず円仁の入唐求法行程について整理するとともに、円仁入唐の目的について考察しなければならない。

従来の円仁に関する先行研究を窺うと、円仁の入唐求法の内容や旅行記である『巡礼記』についての考察、天台教学及び密教教学から見た円仁の思想についてなど、幅広い分野にわたった論考が見られるが、円仁将来目録について取り上げた研究史を整理すると次の如くである。

佐藤哲英氏は「仏典の蒐集整備に関する伝教・慈覚・智証三大師の態度について」<sup>3</sup>において、入唐した最澄・円仁・円珍の仏典蒐集について考察しており、円仁についてはその入唐求法の概要をまとめ、どのような仏典を蒐集したかという点についてその特徴を考察している。神田喜一郎氏は「慈覚大師将来外典考証」<sup>4</sup>において、『新求目録』に著録された外典のうち、十一本の書目について中国の史料を用いて書物の内容や撰者、巻数などについて考証を行っている。牧田諦亮氏は、「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」<sup>5</sup>において、三目録の作成過程と内容を概観し、僧伽和尚信仰などの民間信仰が窺える将来物や唐代仏教の内容が窺える書物を数部取り上げて考察している。石田尚豊氏の「円仁の揚州求法について」<sup>6</sup>は、円仁将来目録についての直接的な研究であり、『巡礼記』に依って円仁の揚州・楚州における求法内容を考察し、三目録の作成過程と概要をまとめている。ま

た、「円仁三目録經典対照表」を作成し、三目録の関係性を整理するとともに、揚州求得の特色を窺い、弘法大師空海（七七四―八三五）撰『御請来目録』との比較という観点からいかなる密教經典を求得したかについて焦点を当てて考察している。しかし、これは揚州に絞った考察であり、また密教以外の書目についての考察は行われていない。石田氏の論考を受けて、高橋聖氏が「遣唐僧による請来目録作成の意義―円仁の三種の請来目録を中心に―」において、『承和五年目録』と『在唐送進録』の作成過程について石田氏の見解を批判しており、目録作成に関係する出来事として円仁が遣唐使に書簡を託した年月日を推測するとともに、請益僧・留学僧は将来目録を作成し政府に報告・還元する義務があり、将来目録は求法の成果を示す正式報告書であったことを指摘した。このように、先行研究においてはいくつかの観点からの考察が行われてきたが、三目録全体についての考察は見られず、将来物蒐集の背景や『巡礼記』の記載と将来目録の関連について十分な分析が行われていないのが現状である。

次に、円仁目録の校勘については、小野勝年氏が『入唐求法巡礼行記の研究』第四巻<sup>8</sup>の巻末に掲載している『入唐新求聖教目録』があり、高山寺に伝来している院政期の写本を底本として、平安時代末期の書写である青蓮院本と対校している。しかし、青蓮院本と比べると高山寺本には多数の欠本が見られ、底本としては青蓮院本を用いるのが妥当であると考えられる。また、『承和五年目録』と『慈覚大師在唐送進録』については、未だに校訂は行われていない。円仁目録の研究に取り組む上で課題となるのは、現在活字本として知られている『大正新脩大藏經』五五卷所収本が江戸期の版本及び『大日本仏教全書』本、あるいは高山寺本を底本としているため、現存諸本の中で最古の写本を底本として翻刻し、他の諸本との文字の異同を確認し、目録の内容を確定することである。その上で、揚州における将来物を記した『承和五年目録』及び『在唐送進録』、入唐総目録である『新求目録』の成立背景及び蒐集状況を考察し、それら求法が天台宗の基盤形成に及ぼした影響を論じる必要があると考える。

第一章では、円仁入唐の背景を探るため、円仁の師最澄の生涯を取り上げ、いかにして比叡山を開き日本天台宗の基礎を築いていったかについて、入唐求法の状況なども含めて取り上げていきたい。その上で、最澄が開いた日本天台宗がどのようなようにして円仁に受け継がれていったかという点を考える手がかりとしたい。次に、先学の研究を踏まえながら、円仁の入唐に至る経過とその目的を明らかにし、三目録の成立について検討を加えたい。

## 第一節 伝教大師最澄による比叡山の開創と天台宗の開宗

本節では、円仁将来目録の成立過程を考察する前に、まず最澄による比叡山開創から見ていく。それにより、本論において最澄が開いた日本天台宗がいかにして円仁に受け継がれ、充実していったかについて後に詳述する土台としたい。

円仁入唐の背景には、当時の比叡山が抱えていた問題が大きく関わっていた。それはすなわち、最澄生前の頃から継続していた課題であり、この点を確認するため、最澄による比叡山開創や日本天台宗の成立過程とその状況を考察しておきたい。

### (1) 比叡山の開創

最澄の門人である釈一乗忠が撰した『叡山大師伝』<sup>9</sup>には、「年十二、投三近江大国師伝灯法師位行表所<sup>10</sup>、出家修学。」(『伝教大師全集』〔以下『伝全』〕第五、附録二頁)とあり、最澄は十二歳の時に近江大国師大安寺行表(七二二―七九七)の元で出家修学している。そして、延暦二年(七八三)正月二十日に出された「度牒」(国宝・京都来迎院蔵、『伝全』第五、附録一〇一―一〇二頁)には、「沙弥最澄年十八(中略)右被三治部省宝亀十一年十

月十日符<sup>一</sup>僞、被<sup>二</sup>太政官同月五日符<sup>一</sup>僞、近江国分寺僧最寂死闕之替、応<sup>三</sup>得度<sup>一</sup>者。十一月十二日国分金光明寺得度 師主左京大安寺伝灯法師位行表。」とあり、十五歳であつた宝龜十一年（七八〇）十一月十二日、近江国国分寺の僧最寂の死闕を補つて近江の国分金光明寺にて行表を師として得度している。

次に、延暦四年（七八五）四月六日に出された戒牒（国宝・京都来迎院蔵、『伝全』第五、附録一〇三頁）によると、「僧綱 牒<sup>三</sup>近江国師<sup>一</sup>今年受戒僧事。僧最澄年廿（中略）牒上件僧、以<sup>二</sup>今年<sup>一</sup>受戒已畢。国師承知。經<sup>二</sup>於国司<sup>一</sup>、編<sup>三</sup>附国分寺僧帳<sup>一</sup>。今以<sup>レ</sup>状下。牒到奉行。」と記され、最澄は二十歳であつた延暦四年（七八五）四月六日、東大寺戒壇院で具足戒を受けている。

また、『叡山大師伝』には、「其年（延暦四年）七月中旬出<sup>三</sup>離憤市之处<sup>一</sup>、尋<sup>三</sup>求寂静之地<sup>一</sup>、直登<sup>三</sup>叡岳<sup>一</sup>、ト<sup>二</sup>居草庵<sup>一</sup>。」（『伝全』第五、附録三―五頁）と記され、受戒後間もない七月中旬、寂静の地を求めて初めて比叡山に登り草庵を結んでいることが知られる。

天台宗の開創に関しては、延暦寺諸堂記録のうちで最古とされる承澄（一二〇五―一二八二）撰『阿婆縛抄』「諸寺縁起」の「根本一乗止観院」の項において、

右寺縁起奉<sup>四</sup>為 平城大宮御宇桓武天皇兼欲<sup>三</sup>興<sup>二</sup>隆仏法<sup>一</sup>鎮<sup>三</sup>護国家<sup>一</sup>。延暦七年歲次丁卯、故十禅師前入唐法印大和尚最澄大師始所<sup>二</sup>造立<sup>一</sup>也。伝教大師始攀<sup>二</sup>此山<sup>一</sup>之後、為<sup>レ</sup>利<sup>三</sup>益安<sup>二</sup>樂<sup>一</sup>一切有情<sup>一</sup>、手自刻<sup>二</sup>伊王之形像<sup>一</sup>。（『大日本仏教全書』六〇、二七四頁中）

とあり、また『山門堂舎』の「根本中堂」の項には「根本中堂。初号<sup>二</sup>比叡山寺<sup>一</sup>、後稱<sup>二</sup>一乗止観院<sup>一</sup>、亦曰<sup>二</sup>中堂<sup>一</sup>。」「延暦七年戊辰伝教大師建立者、伐<sup>二</sup>虚空蔵尾自倒之木<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>本切<sup>一</sup>自手彫<sup>三</sup>刻薬師仏像一軀<sup>一</sup>安<sup>三</sup>置<sup>一</sup>之。（中略）此堂元者三字各別、文殊堂、薬師堂、経蔵等也。薬師堂以<sup>レ</sup>在中故曰<sup>二</sup>中堂<sup>一</sup>。」（『群書類従』第二四輯・四六八下―四六九上）などとあり、比叡山入山より三年後の延暦七年（七八八）に、虚空蔵尾の木をもつて自ら彫刻した薬師仏を安置して一乗止観院を創建したことが知られる。なお『山門堂舎』や『天台座主記』（渋谷慈

鎧編『校訂増補天台座主記』（以下『座主記』）比叡山延暦寺開創記念事務局、一九三五年、一頁）には、当初「比叡山寺」と号したと伝えられている。これをもって比叡山の開創とされ、日本天台宗の始まりとなる。

## （2）天台・密教との出会いと修学

次に、『叡山大師伝』に依りながら最澄の動向を見ていくと、上述したように延暦四年（七八五）二十歳の年に比叡山における修行生活に入った後、華嚴宗の典籍を修学読誦していた時の状況を次のように述べている。

於レ是大師随レ得、披コ覧起信論疏并華嚴五教等一、猶尚ニ天台一、以爲ニ指南一。毎レ見ニ此文一、不レ覺下レ涙。慨然無レ由レ披コ閱天台教迹一。是時邂逅<sub>中</sub>近值<sub>下</sub>遇知ニ天台法文所在一人上、因レ茲得<sub>レ</sub>写コ取円頓止観、法華玄義、并法華文句疏、四教義、維摩疏等一。此是故大唐鑑真和上将来也。（『伝全』第五、附録五―六頁）

すなわち、唐代の中国華嚴宗賢首大師法蔵（六四三―七一二）が撰述した『起信論疏』（『大乘起信論義記』、『大正蔵』四四・二八三b）や『華嚴五教章』（『大正蔵』四五・四八〇c）を読んでいる時に、天台法門を尚んで指南としている箇所を見出し、そこに引用されていた天台の教えに感動して涙を流したことが記されている。しかし、天台典籍の所在が知られず慨然としていたが、偶然その所在を知る人物と出会い、天平勝宝六年（七五四）二月に入京した鑑真（六八八―七六三）将来本である『円頓止観』『法華玄義』『法華文句疏』の天台三大部及び『天台四教義』『維摩経疏』などを書写したという。

最澄は、山林修行を開始した後入山の誓いを立てた「願文」を著しているが、そこに天台教学の影響が見られるのでその部分を以下に挙げると、

於レ是、愚中極愚、狂中極狂、塵禿有情、底下最澄、上違ニ於諸仏一、中背ニ於皇法一、下闕ニ於孝礼一。謹随ニ迷狂之心一、発ニ三三三之願一。以ニ無所得一而為ニ方便一、為ニ無上第一義一、発ニ金剛不壞不退心願一。我自レ未レ

得ニ六根相似位ニ以還不ニ出假ニ。(後略)(『伝全』五、附録四―五頁。)

とあり、無常である世間の現実を述べ、愚者の中の極愚で狂者の中の極狂である底下の最澄は諸仏・皇法・孝礼に背いており、迷狂の心に随いながら、天台の位である六根相似位に登るまでは山を出ないことを始めとした五つの心願を発したことが記されている。ここに見える愚、狂は『天台小止観』の言葉<sup>10</sup>であり、無常の世間と自身を見つめ深い内省を行う若き最澄が惹かれたのは、唐代に盛んであった三論・法相・華嚴・律などの宗ではなく、陳隋の時代に天台山における証悟により、天台の教理と実践を体系づけた天台大師智顗(五三八―五九七)の天台法門であった。

また、第五世座主智証大師円珍(八一四―八九一)が元慶八年(八八四)に撰述した『大毘盧遮那成道経義釈目録縁起』<sup>11</sup>の序文によると、

録之来由者、如ニ余所ニ聞、件義釈從ニ大唐ニ来ニ我国ニ且五本焉。今見有レ四。謂西大寺得清大徳或書ニ徳字一。請来本一十四卷。大暦七年到レ唐。未レ委ニ帰年ニ也。次高雄寺或名ニ神護一空海和尚本二十卷。貞観二十一年到レ唐。大同元年帰朝。次当寺慈覚大師本一十四卷。開成三年到レ唐。承和十四年帰朝。次余賚来一十卷。大中七年到レ唐。天安二年帰朝。都盧対勘大同小異。不レ免ニ巧拙ニ也。又聞、平安城山階寺或名ニ興福一有ニ一本一。是玄昉師入唐将来。昔我比叡祖大師、借ニ看昉本一不レ堪レ可レ写。当時還却。写ニ西大寺本一自充ニ披覧一。

とあり、当初最澄は玄昉(―七七六)(七一六年入唐、七三五年帰朝)将来の山階寺(興福寺)本を借覧したが、最終的には唐の大暦七年(七七二)に入唐した西大寺の得清(―七七二―)が唐より将来した『大日経義釈』を書写したことが知られる。これは最澄が入唐以前より真言密教に対して大きな関心を抱いていたことを証するものであり、後の入唐求法における密教受法に繋がっていくのである。<sup>12</sup>

さらに最澄が入唐に至る契機となったのは、延暦二十一年(八〇二)九月七日、天台典籍を閲覧した桓武天皇(七三七―八〇六、在位七八一―八〇六)が天台の教えは特に南都の諸宗より優れていることを知り、大学頭和気広

世（生没年不詳）と最澄に天台教学を普及させる方法を協議させたことであつた。<sup>13</sup> 天皇はその頃父光仁天皇（七〇九―七八一、在位七七〇―七八一）の仏教政策を継承し、南都仏教取り締まりを行っていた時であり、奈良時代から平安時代へ転換する中で既存の南都仏教に替わる、都を守るための新しい仏教を求めていた時に天台教学を見出したと考えられる。

### （3）入唐求法

上記のような桓武天皇の要請に応えて、最澄は「請ニ入唐請益ニ表」（『伝全』五、附録一一―一二頁）を上表している。

沙門最澄言、最澄早預ニ玄門<sup>一</sup>、幸遇ニ昌運<sup>二</sup>、希ニ聞至道<sup>三</sup>、遊ニ心法筵<sup>四</sup>。每恨法華深旨尚未ニ詳釈<sup>五</sup>。幸求コ得天台妙記<sup>一</sup>、披閱數年、字謬行脱、未レ顯ニ細趣<sup>二</sup>。若不レ受ニ師伝<sup>三</sup>、雖レ得不レ信。誠願差ニ留学生、還学生各一人<sup>一</sup>、令レ学ニ此円宗<sup>二</sup>、師師相統、伝灯無レ絶也。

これまで『法華経』の深旨を求めて天台を学び、鑑真将来の天台典籍を披閱し精読してきたが、誤字脱字や脱行も多く未だに細かい趣旨が明らかではないため、直接師の教えを受ける必要があるとして留学生と還学生一名ずつの派遣を求めた。なお、ここでは密教に関しては述べられておらず、当初の主たる入唐の目的は天台法門の求法であつたと考えられる。

これにより、唐への留学生と還学生を派遣することが認められ、留学生に門下の円基と妙澄が選ばれたものの、その後天皇は最澄自らが赴くようにとの詔を下した。<sup>15</sup> 次の遣唐使が帰国する際の便船で帰る留学生ならば長期の滞在となるため、すでに長年天台教学を研鑽してきた最澄に還学生として短期間で学ばせ、可能な限り早く朝廷の仏教政策に貢献させることを意図していたと考えられる。『叡山大師伝』によれば、延暦二十一年（八〇二）九



月十二日の勅により、「入唐請益天台法華宗還学生」（『伝全』五、附録一三頁）に任じられている。

なおまた最澄は入唐の折、遣唐使一行と別れて台州や天台山を目指し単独行動を取るため、延暦二十三年に得度することになる弟子で後に延暦寺の第一世座主となる義真（七七九―八三三）を訳語僧（通訳）として随行させることを上表して允許を得ている。<sup>16</sup>

かくして延暦二十二年（八〇三）四月十六日、第十四次遣唐使は難波の津より出港したが、二十一日暴風に遭い、<sup>17</sup>一年延期となった。延暦二十三年（八〇四）七月六日に至り、いよいよ肥前国松浦郡田浦より四船出航するも、第三、四両船は嵐により行方不明となった。<sup>18</sup>最澄の乗船した第二船も嵐に遭うが、難航しながらも明州鄞県（現浙江省寧波の東）に上陸することができた。<sup>19</sup>なお留学生として一行に加わっていた空海乗船の第一船は八月十日福州長溪県赤岸鎮（現福建省霞浦県福寧湾）に到り、明州に到った第二船の判官菅原朝臣清公など、二十七人は九月一日に長安城へ向かったことが『日本後紀』に記されている。<sup>20</sup>最澄と義真は公験を得て九月十五日に明州より天台山へ向かい、同月二十六日に台州に入っている。<sup>21</sup>台州ではちょうど刺史陸淳が天台山修禪寺の座主で中国天台宗第七祖道邃（生没年不詳）を招いて、天台法門の『摩訶止観』を講じさせていた。その折、陸淳は最澄の志を喜び、道邃に引き合わせた。そこで道邃は天台の典籍を写させ、また天台法門の心を最澄に授けたのである。<sup>22</sup>

天台の心を授かったことについて、最澄は弘仁十年（八一九）に著わした『顕戒論』において、

最澄義真等、延暦末年、奉<sup>二</sup>使大唐<sup>一</sup>、尋<sup>二</sup>道天台<sup>一</sup>。謹蒙<sup>二</sup>国徳<sup>一</sup>、台州得<sup>レ</sup>到。即当州刺史陸<sup>（淳）</sup>感<sup>二</sup>求法誠<sup>一</sup>、遂付<sup>二</sup>天台道邃和尚<sup>一</sup>。和上慈悲、一心三観、伝<sup>二</sup>於一言<sup>一</sup>。（『伝全』一、三五頁）

と自ら述べており、道邃は一言に天台の心要である「一心三観」を最澄に伝えたことが知られる。また天台典籍の書写については、『伝教大師将来台州録』（『伝全』四、三五―三六九頁、『大正蔵』五五卷、一〇五五b）によってその書目を知ることができる。

続いて最澄は天台山に登り、仏隴寺の座主行満（七三七―八二四）からも天台法門を授かっている。これについ

ては行滿手書の『行滿和尚印信』<sup>23</sup> によって受法の状況を窺うことができる。

さらに最澄は貞元二十年（八〇四）十月十三日に、天台山禪林寺の脩然（生没年不詳）より達磨付法の牛頭山法門を受け（『内証仏法相承血脉譜』（『伝全』一、二一五頁）、翌貞元二十一年（八〇五）三月二日には、台州（浙江省臨海市）龍興寺極樂浄土院にて道邃より天台円教菩薩戒（菩薩三聚大戒）を授与されている（『血脉譜』（『伝全』一、二三六頁）、『叡山大師伝』（『伝全』五、附録一七頁）。この点について『顕戒論』には「菩薩円戒授ニ於至信ニ、天台一宗之法門已具。」（『伝全』一、三五頁）とあり、菩薩円戒の受法によって天台一宗の法門が具備したことを記している。

さらに特筆すべきことは真言密教の受法である。『叡山大師伝』に、

大唐貞元廿一年四月上旬、来<sub>レ</sub>到船所<sub>一</sub>。更為<sub>レ</sub>求<sub>ニ</sub>真言<sub>一</sub>、向<sub>ニ</sub>於越府龍興寺<sub>一</sub>。幸得<sub>レ</sub>値<sub>ニ</sub>遇泰岳靈巖山寺鎮国道場大徳内供奉沙門順曉<sub>一</sub>。曉感<sub>ニ</sub>信心之願<sub>一</sub>、灌頂伝授。三部三昧耶図様契印法文道具等、目錄如<sub>レ</sub>別。順曉闍梨付法書云、大唐国開元朝、大三蔵婆羅門国王子、法号善無畏、從<sub>ニ</sub>仏国大那蘭陀寺<sub>一</sub>、伝<sub>ニ</sub>大法輪<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>大唐国<sub>一</sub>、転付<sub>ニ</sub>嘱伝法弟子僧義林<sub>一</sub>。亦是国師大阿闍梨、一百三歳。今在<sub>ニ</sub>新羅国<sub>一</sub>、伝<sub>レ</sub>法転<sub>ニ</sub>大法輪<sub>一</sub>。又付<sub>ニ</sub>大唐弟子僧順曉<sub>一</sub>。是鎮国道場大徳阿闍梨。又付<sub>ニ</sub>日本国供奉大徳弟子僧最澄<sub>一</sub>、転<sub>ニ</sub>大法輪<sub>一</sub>。僧最澄是第四付嘱伝授。唐貞元廿一年四月十九日書記、令<sub>ニ</sub>仏法永永不<sub>レ</sub>絶。阿闍梨沙門順曉録付<sub>ニ</sub>最澄<sub>一</sub>。（『伝全』五、附録一九頁）

とあり、また『顕戒論』にも、

明州刺史鄭審則、更遂<sub>ニ</sub>越州<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>受<sub>ニ</sub>灌頂<sub>一</sub>。幸遇<sub>ニ</sub>泰嶽靈巖寺順曉和上<sub>一</sub>。和上鏡湖東嶽、峰山道場、授<sub>ニ</sub>両部灌頂<sub>一</sub>、与<sub>ニ</sub>三種種道具<sub>一</sub>、受法已畢。（『伝全』一、三五頁）

とあることである。すなわち最澄は、貞元二十一年（八〇五）四月に至つて、明州刺史鄭審則の計らいにより、越州（現浙江省紹興市）の鏡湖東嶽の峰山道場において、泰嶽靈巖寺の順曉阿闍梨（生没年不詳）から真言密教の胎蔵

界・金剛界両部灌頂を受けることができたのである。

その後、貞元二十一年五月中旬に第一船に乗り、帰国を果たしている。最澄の帰朝報告は延暦二十四年（八〇五）七月十五日付の『進官録上表』（『伝全』四、三五〇頁）によってなされている。そこには将来した経・疏・記などは二百三十部四百六十巻であったことが記されている。その将来書目は『伝教大師将来台州録』（以下『台州録』、『伝全』四、三五一―三七〇頁）、及び『伝教大師将来越州録』（以下『越州録』、『伝全』四、三七一―三八四頁）によって明らかであり、天台山や台州で求め得た『台州録』には天台関係の典籍が多く、越州で求め得た『越州録』には真言密教の典籍が多数を占めている。

以上のように、最澄が入唐求法により日本に伝えた法門は『内証仏法相承血脉譜』にも示されているように、達磨大師付法（禪）、天台法華宗（円）、天台円教菩薩戒（戒）、胎藏金剛両曼荼羅（密）の四宗の法門であり、後に日本天台宗が総合仏教へと発展していく契機となったものである。

#### （４）天台宗の開宗と止観・遮那両業の設置

延暦二十五年（八〇六）正月三日、最澄は「請下続ニ将レ絶諸宗ニ更加中法華宗上表一首」を提出し、年分度者について南都六宗に天台宗を加えることを要請した。<sup>25</sup> それに対して下された正月二十六日の太政官符（「応レ分ニ定年科度者数并学業ニ事」、「伝全」一、七頁）には、「天台業二人、一人令レ読ニ大毗盧遮那経」、一人令レ読ニ摩訶止観」とあり、天台業二名のうち一人は『大毗盧遮那経』を読ませ、一人は『摩訶止観』を読ませ、密教、天台を専攻する僧侶を一名ずつ養成することが聴許され、日本天台宗の開宗が朝廷によって認められた。これにより、後に最澄が年分学生の修学規程として朝廷に上奏した『山家学生式』（弘仁九年五月十三日）の「天台法華宗年分学生式」（六条式）においては、

凡止観業者、年年毎日、長<sub>レ</sub>転長<sub>レ</sub>講法華・金光・仁王・守護諸大乘等護国衆經<sub>一</sub>。凡遮那業者、歳歳毎日、長<sub>レ</sub>念遮那・孔雀・不空・仏頂諸真言等、護国真言<sub>一</sub>。（『伝全』一、一二頁）

と説き、また弘仁九年（八一八）八月二十七日の「勸奨天台宗年分学生式」（八条式）では、「止観業、具令<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>習四種三昧<sub>一</sub>、遮那業、具令<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>習三部念誦<sub>一</sub>。」と示している（『伝全』一、一四頁）。

さらに、弘仁十年（八一九）に著した『顕戒論』においては、

大日本国天台両業授<sub>二</sub>菩薩戒<sub>一</sub>、以為<sub>二</sub>国宝<sub>一</sub>。大悲胎藏業、置<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>、修<sub>レ</sub>練真言契<sub>一</sub>。常為<sub>レ</sub>国念誦、亦為<sub>レ</sub>国護摩。摩訶止観業、置<sub>二</sub>四三昧院<sub>一</sub>、修<sub>レ</sub>練止観行<sub>一</sub>。常為<sub>レ</sub>国転<sub>レ</sub>經、亦為<sub>レ</sub>国講<sub>二</sub>般若<sub>一</sub>。（『伝全』一、一三一頁）

と述べており、天台宗の修学課程の基本を「止観業」と「遮那業」の両輪としていることが明らかである。このうち「止観業」は『法華經』、『金光明經』、『仁王般若經』、『守護国界主陀羅尼經』などの諸大乘經典の研鑽や『摩訶止観』に説く四種三昧の止観行の実践を修すこととしている。一方、「遮那業」は『大毘盧遮那成仏神変加持經』（『大日經』）、『孔雀明王經』、『不空罽索經』、『仏頂尊勝陀羅尼經』などの密教經典に基づき、真言密教の伝授や護摩を行うことなどを規定している。このように、最澄が定めた「止観業」と「遮那業」の新たな設置により、止観遮那両業にわたる内容の充実や教学的確立を図っていくことが当面の大きな課題であったといえよう。

## （5）天台密教の課題

最澄は新たに導入した止観業と遮那業について、高弟の泰範（七七八―八三七―）宛『伝教大師消息』弘仁七年（八一六）五月一日付の消息においては、「法華一乘真言一乘、何有<sub>二</sub>優劣<sub>一</sub>。」（『伝全』五、四六九頁）と記し、また空海宛『伝教大師消息』弘仁三年（八一二）八月十九日付の消息においては、「但遮那宗与<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>融通、疏宗

亦同。(中略)法華、金光明、先帝御願、亦一乘旨、与二真言「無レ異。」(『伝全』五、四四七頁)と述べるなど、天台法華の止観業と真言密教の遮那業とに優劣を立てず、いずれも一乗の教えとして尊重していたことが窺える。しかしながら、天台法華と真言密教との関係や、『法華経』など大乘諸経典と真言密教の『大日経』などの諸経典との教学的位置付けについては、未だに明らかにされていなかったのである。ここで後に円仁の密教の受法と密教典籍の将来につながる最澄時代の「遮那業」の状況について見ておきたい。先にも述べたように桓武天皇の勅許により、天台宗に止観業と遮那業との両業が置かれ、各一人の年分度者が認められたが、天皇側では密教部門を重視する考え方も強かったと考えられる。なぜなら、年分度者聴許の前年である延暦二十四年(八〇五)に、病に罹っていた桓武天皇が帰国して間もない最澄に早速毘盧舍那法を行わせているように、<sup>26</sup>真言密教の修法の効験に大きな期待がかけられていたことが知られる。しかし、『天台法華宗年分度度学生名帳』(『伝全』一、二五〇―二五三頁)によると、その後の比叡山の密教部門は厳しい状況に置かれていた。

天台法華宗年分度度学生名帳

自二大同二年一至二于弘仁九年一、合貳拾肆口之中住レ山一十口、相奪 養母、随レ縁、死去一口

僧光戒 養二老母一不レ住レ山 師主比叡山最澄 興福寺

僧光仁 巡遊修行不レ住レ山 師主比叡山最澄

僧光智 法相宗相奪 不レ知二師主一 西大寺

僧光法 法相宗相奪 不レ知二師主一 元興寺

已上四人、大同二年三年四年五年、合四箇年、天台法華宗、遮那業得度者

僧光忠 死去、弘仁六年夏

僧光定 住レ山 師主比叡山最澄

僧光善 法相宗相奪 不レ知二師主一 西大寺

僧光秀 法相宗相奪 不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>師主<sub>一</sub> 興福寺

已上四人、大同二年三年四年五年、合四箇年、天台法華宗、摩訶止觀業得度者

僧德善 住<sub>レ</sub>山 遮那經業 師主律師修円 興福寺

僧仁風 不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山 止觀業 師主律師永忠 大安寺

已上二人、弘仁二年、年分得度者

僧德真 不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山 遮那經業 師主比叡山最澄 興福寺

僧徳円 住<sub>レ</sub>山 止觀業 師主大安寺伝灯満位僧円修 興福寺

已上二人、弘仁三年、年分得度者

僧円貞 不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山 別勅法相宗相奪 興福寺

僧円正 住<sub>レ</sub>山 止觀業 師主比叡山最澄 興福寺

已上二人、弘仁四年、年分得度者

僧円修 不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山 遮那經業 師主比叡山最澄 興福寺 自移<sub>二</sub>高雄家<sub>一</sub>

僧円仁 住<sub>レ</sub>山 止觀業 師主比叡山最澄 興福寺

已上二人、弘仁五年、年分得度者

僧道慧 不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山 遮那業 師主 興福寺

一乗沙弥玄慧 住<sub>レ</sub>山 止觀業 師主比叡山最澄 比叡山止觀院

已上二人、弘仁六年、年分得度者

僧正見 不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山 別勅法相宗相奪 師主未<sub>レ</sub>識 未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>入寺<sub>一</sub>

僧正思 養<sub>二</sub>老母<sub>一</sub> 不住山 止觀業 師主比叡山最澄 未<sub>二</sub>入寺<sub>一</sub>

已上二人、弘仁七年、年分得度者

一乘沙弥道叡 遮那経業 師主比叡山最澄、比叡山止観院  
 一乘沙弥道紹 止観業 師主比叡山最澄 比叡山止観院  
 已上二人、弘仁八年、年分得度者  
 一乘沙弥興善 遮那業 師主比叡山最澄 比叡山止観院  
 一乘沙弥興勝 止観業 師主比叡山最澄 比叡山止観院  
 已上二人、弘仁九年、年分得度者  
 一乘沙弥弘真  
 一乘沙弥弘円  
 已上二人、弘仁十年、年分得度者

これによると、大同二年（八〇七）から弘仁十年（八一九）の間における二十六名の得度者のうち、弘仁九年（八一八）までの十一年間においては二十四名が得度しており、うち住山者十名の内訳は止観業の学生が七名、遮那業の学生が三名という実状であった。一方、比叡山を去った不住山者の内訳は、養母が二名、巡歴修行一名、死去一名、理由の不明な者四名、そして法相宗相奪が六名であった。その事情として最澄が主張する大乘戒の独立が果たせていなかったこともあるが、ことに遮那業の学生は十一年間でわずか三名と少なく、密教部門においては学生を引きつけるような教学体系が整っていないことを窺わせる。

また、留学僧として最澄と共に入唐した空海は、師の真言密教第七祖恵果（七四六―八〇五）の入滅により、長期の滞在予定を繰り上げて最澄より一年四ヶ月遅れて大同元年（八〇六）十月に帰国した。一方、自らの専門である天台教学を中心に求法した最澄は、密教に関しては船待ちの短時間を利用した僻地における受法であった。空海は、最先端の密教教学が興隆していた長安の都で不空の法流を受け継ぐ大家恵果より約二年間にわたって受法

しており、密教に関していえば両者の差は歴然としていた。それには、還学生という身分では長期にわたり求法することは不可能であるという、立場的な相違もあったといえる。

『伝教大師将来台州録』（『大正蔵』第五五卷、一〇五七c）に記された合計百二十部三百四十五卷（『伝教大師将来越州録』（『大正蔵経』第五五卷、一〇五八b）では台州求得を百二十八部三百四十五卷とする）のうち密教經典、陀羅尼、曼荼羅は、『新訳梵漢両字大仏頂陀羅尼』一卷、『梵漢両字随求即得陀羅尼』一卷、『梵漢両字仏頂尊勝陀羅尼』一卷、『梵漢両字千臂陀羅尼』一卷、『梵漢両字千手陀羅尼』一卷、『梵漢一字呪王陀羅尼』一卷、『梵漢両字陀羅尼』一卷、『梵漢両字随求即得曼荼羅』一張、『梵種子曼荼羅』一張、『大仏頂通用曼荼羅』一張のわずか十点であり、『越州録』においても百二部百十五卷中、密教關係の典籍は三十八部四十四卷に過ぎない。その一方、空海の『御請来目録』は二百十六部四百六十一卷のうち新訳密教經典が過半数を占めている。現在東寺に伝来している最澄筆『御請来目録』（『大正蔵経』第五五卷、一〇六〇頁）は、空海の帰朝後時を待たずに借覽書<sup>27</sup>写し、将来物の内容を具に確認した上で、新しい密教經典の借写を希望するにあたっての参考にしたものと考えられる。『伝教大師消息』によると、大同四年（八〇九）以降最澄は次々と空海将来の密教典籍の借覽を請うたが（『伝全』五、四四一―四六一頁）、法華（円）と密教（密）の一致を唱える最澄と密教最勝を説く空海との思想的立場の相違が生じ、また泰範が弘仁三年（八〇二）比叡山を去り、以後空海の弟子となっている。さらに最澄が弘仁七年（八一六）に著した『依憑天台集』序には「新来真言家、即泯三筆授之相承」。（『伝全』三、三四四頁）とあり、新来の真言家である空海は筆授の相承を滅ぼしたと批難するまでに至った。『伝教大師消息』<sup>29</sup>によると、弘仁七年以降両者の書状を介した交流は途絶えており、以後密教部門の充実を図ることは困難になっていったと考えられる。



## 第二節 円仁入唐に至る経過と概要

### (1) 『慈覚大師伝』の諸本について

このような状況の中、最澄の後に続いて入唐したのが慈覚大師円仁である。円仁の入唐に至るまでの経過と概要について、円仁の伝記である『慈覚大師伝』に基づき窺ってみたいが、まずは『慈覚大師伝』の現存諸本と伝記の性格について考察する。これについては、佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）で詳細に論じられているので、それを踏まえて紹介していきたい。『慈覚大師伝』には、第一に京都大原来迎院町の天台宗門跡三千院に伝来する通称三千院本があり、これは「比叡山延暦寺真言法花宗第三法主慈覚大師伝」との内題があるが、撰者と成立年代は不詳とされている。

第二に、「通行本」あるいは「現行本」と称される寛平入道親王真寂（斉世親王、八六七―九三一）撰が伝わっている。寛平入道本の活字本は、①『続群書類従』第八輯下、②『改定史籍集覧』第十二冊、別記第六十四、③宝永二年（一七〇四）刊『叡山四大師伝記』巻二、④明和四年（一七六七）刊の『叡岳四大師伝記』、⑤大正四年（一九一五）刊『華芳余輝』、⑥昭和六十三年（一九八八）刊『続天台宗全書』史伝二に収録されたものがある。また、写本は尊経閣文庫蔵本が古く、その奥書によると建長二年（一二五〇）九月に書写校合したものであることが知られている。この尊経閣本の写しである東京大学及び東京大学史料編纂所本及び明治期の写本である内閣文庫がある。<sup>30</sup>

この他に、『日本高僧伝要文抄』第二に『慈覚大師伝』が抄出されており、その奥書によると建長元年（一二四九）七月四日から同月三十日までの間に成立したものであることから、現存諸本の間で最古の写本であることが知られる。また、早稲田大学図書館蔵の二種の写本及び高野山大学図書館蔵の写本があることも佐伯氏によつて

指摘されている。<sup>31</sup>

第三に、『三代実録』貞観六年（八六四）正月十四日辛丑条の「円仁卒伝」が知られている。この他に、渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』（通称『渋谷目録』）によると、①天文八年（一五三九）写の円融藏本、②寛永十七年（一六四〇）二尊院事慶写の叡山文庫天海藏本がある。

次に、本伝記の撰者について窺うと、『叡岳四大師伝記』所収の寛平入道本の奥書（天台宗典編纂所編『続天台宗全書』（以下『続天全』）史伝二、春秋社、一九八八年、七四頁下）には、次のように見えている。

奉送 慈覚大師御伝一卷 納ニ華芳筥一

右伝故寛平入道親王所レ撰也。親王早出ニ俗塵一、深志ニ密教一、遂入ニ真言之秘区一。遍尋ニ諸師之遺跡一。以爲、道之津梁、莫レ先ニ大師一。而伝録不レ細。年代漸遙。或考ニ之古記一、或訪ニ門徒一、拾ニ其行事一、成ニ此伝名一。筆削未レ畢、奄然寂滅。遺ニ誠右近中将從四位上兼伊予權守源朝臣英明一曰、慈覚大師伝、余既濫觴。未レ遂ニ功績一。汝須下成ニ吾斯志一、奉レ附中座主闍梨上、蒙レ教之後、草藁早就。即令ニ内蔵權助從五位下小野道風書一之。英明朝臣去春卒。仍相伝飾装敬以奉送如レ件。

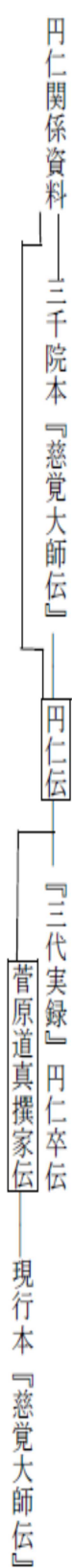
天慶二年（九三九）十一月三日

從四位上右兵衛督源朝臣英明

これによると、この『慈覚大師伝』は寛平入道親王の撰であり、親王は未完成のまま亡くなり、遺誠を受けた子の源英明が完成させ、それを小野道風が清書し、第十三世天台座主尊意（八六六―九四〇）に奉ったことが窺える。英明が亡くなったのは天慶二年（九三九）であることから、伝の成立はこれ以前と見做されている。<sup>32</sup> また、尊経閣文庫所蔵本の奥書（『続天全』史伝二、七四―七五頁）には、次のように記されている。

大師入滅後、已經ニ四十九年一矣。（中略）門徒数百、皆是孫弟。誰知ニ大師在世之德行一乎。（中略）爰正二位行權大納言兼民部卿、依ニ遺弟等之記一、綴レ文成了、作ニ一卷伝一。

円仁入滅後すでに四十九年が経った今、数百人の円仁門徒は皆孫弟子であるが、生前の円仁の徳行を知る者はおらず、そこで正二位行権大納言民部卿が円仁の遺弟の記によって一卷の伝記を成したとある。ここに見える「正二位行権大納言民部卿」を巡って、従来様々な説が提起されたが、佐伯有清氏はそれら諸説を踏まえた上で、権大納言民部卿とは寛平入道親王の外舅である菅原道真（八四五―九〇三）のことであると確定し、道真撰の「家伝」が存在していたことを推定された。すなわち、その官職名からして道真は寛平九年（八九七）七月十三日から昌泰二年（八九九）二月十三日までの間に『慈覚大師伝』（『家伝』）を執筆したとしている。また、佐伯氏は三千院本の成立年代について、光定（七七九―八五八）の伝記『延暦寺故内供奉和上行状』と比較し、書き出しの表現が類似していることから、「円仁示寂後あまり年を経っていない貞観年中のこと」と類推<sup>35</sup>している。さらに、寛平入道本及び三千院本、『三代実録』卒伝三本の比較によって、以下のような諸本系統図を提示された。



以上、諸本の概要について見たが、本稿では最新の刊本である『続天台宗全書』史伝二に所収の三千院本及び寛平入道本を用いて、入唐に至るまでの円仁の動向を見ていきたい。

## （2）円仁の比叡山修学と最澄からの付嘱

寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、円仁は延暦十三年（七九四）下野国都賀郡の壬生氏<sup>36</sup>に生まれ、その先祖は崇神天皇の第一皇子豊城入彦が東国を統治したことに始まり、郷人となったと記されている。円仁は幼少の頃より心に仏教を慕い、十余歳の頃夢に叡山大師（最澄）を見たという縁もあって、十五歳の時に鑑真の第三代弟子に

当たる大慈寺（下野国都賀郡岩舟町小野寺上耕地）の僧侶広智（一七九四―）に伴われて比叡山に登り、最澄に師事し、止観業の年分学生として修学を始めている。

三千院本によると、弘仁五年（八一四）正月十四日、宮中金光明会にて得度している（『統天全』史伝二、四五頁上）。これについては、寛平入道本では「弘仁五年官試及第。時年二十一。明年正月金光明会受三沙弥戒。」（『統天全』史伝二、六〇頁下）とあり、官試及第の弘仁五年の翌年、すなわち弘仁六年（八一五）のこととしているが、『天台法華宗年分得度学生名帳』に弘仁五年の年分得度者として「僧円仁、住山、止観業、師主比叡山最澄、興福寺。」（『伝全』一、二五二頁）と記されているので、弘仁五年に止観業の学生として最澄を師主として得度したことは間違いない。続いて弘仁七年（八一六）には、東大寺にて具足戒を受けている。『慈覚大師伝』両本は年号を記していないが、弘仁八年（八一七）最澄の東北巡錫に従い、上野国・下野国の両州で行われた伝法灌頂を受けている。また、寛平入道本によると、大乘戒の受法について「弘仁八年三月六日、又授三徳円及大師一矣。」（『統天全』史伝二、六〇頁下）とあり、同年三月六日、下野の大慈山寺にて最澄より円頓戒を受けていることは「最澄授徳円戒牒」<sup>37</sup>（国宝、『園城寺文書』一、二二〇―二二二頁）とも一致する。その翌年である弘仁九年の事項として、『叡山大師伝』によると、「九年暮春、大師告三諸弟子等一言、（中略）即自誓願棄三捨二百五十戒一已。」（『伝全』五、附録三三頁）とあり、最澄は東大寺の戒壇で受けた小乗戒である二百五十戒を捨てることを宣言しているが、これは南都仏教からの独立と大乘戒壇建立への強い意志表示であった。

『叡山大師伝』によると、

夏四月告三諸弟子等一言、我命不三久存一。（中略）乃有二信心一仏子数十四人。葉芬、円成、慈行、延秀、花宗、真徳、興善、道叡、乗台、興勝、円仁、道紹、無行、仁忠等。（『伝全』五、附録三九頁）

とあり、弘仁十三年（八二二）四月、余命の久しくないことを悟った最澄は、諸弟子を集めて遺誠を述べており、信心ある仏子十四名の中に円仁の名が見られる。

さらに最澄は、同年五月十五日に「付属書」を記して「五月十五日付属書云、最澄心形久勞、一生此窮。天台一宗、依<sub>二</sub>先帝公驗<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>同前入唐天台受法沙門義真<sub>一</sub>已畢。自<sub>レ</sub>今以後、一家学生等、一事已上、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>違背<sub>一</sub>。今且授<sub>二</sub>山寺私印<sub>一</sub>。」（『伝全』五、附録四一頁）と述べ、かつて入唐の際最澄の訳語として同行した弟子義真に天台一宗を委ね、「比叡山寺」の私印を授けて自らの後継者に指名している。

さらに続けて「院内之事、円成仏子、慈行仏子、一乗忠、一乗叡、円仁等、可<sub>二</sub>相莊行<sub>一</sub>。」（『伝全』第五、附録四一頁）と示し、円成・慈行・真忠・道叡らとともに当時二十九歳であった円仁の名を挙げて院内（比叡山寺）のことを付属している。同じく四月に記された最澄の「授慈覚大師付法文」の全文を以下に挙げると、次のようである。

莫<sub>レ</sub>謂<sub>下</sub>修<sub>二</sub>万行<sub>一</sub>、証<sub>中</sub>無上仏果<sub>上</sub>。我一心三觀推<sub>レ</sub>檢四運<sub>一</sub>、皆為<sub>二</sub>一心<sub>一</sub>、心与<sub>レ</sub>性合更無<sub>二</sub>分別<sub>一</sub>即真如故。

大日本国弘仁十三季歳次壬寅四月朔庚寅十九日戊申録<sub>レ</sub>旨、言<sub>二</sub>妙義<sub>一</sub>以付<sub>レ</sub>授円仁法師<sub>一</sub>。（『伝全』五、四二七頁）

最澄は入滅約一ヶ月前の四月十九日、円仁に「一心三觀」の要旨を伝えていることが知られるが、これら史料によって最澄の円仁に対する信頼と期待の大きさを窺うことができる。

### （3）入唐以前の円仁の活動

前述した小乗戒の棄捨により新たに提唱した大乘戒の勅許は、弘仁十三年（八二二）六月四日最澄が遷化した後の同月十一日に菩薩戒を伝えるべきの太政官牒が出され、ようやく承認されたのである。これを受けて、寛平入道本には「十四年四月十四日、中堂薬師仏像前、始受<sub>二</sub>大乘戒<sub>一</sub>。乃以<sub>二</sub>師兄義真<sub>一</sub>為<sub>二</sub>伝戒師<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>大師<sub>一</sub>為<sub>二</sub>教授師<sub>一</sub>。」（『続天全』史伝二、六一頁上）とあり、弘仁十四年（八二三）四月十四日根本中堂において初めて行われ

た大乘戒の伝授の際、円仁は教授師を務めている。

その後の円仁の活動については、最澄が弘仁十年（八一九）三月十五日に上表した「請レ立ニ大乘戒ニ表」には「毎年春三月 先帝国忌日、於ニ比叡山寺<sup>一</sup>、与ニ清浄出家<sup>一</sup>、為ニ菩薩沙弥<sup>一</sup>、授ニ菩薩大戒<sup>一</sup>、亦為ニ菩薩僧<sup>一</sup>。即便令ニ住山修学<sup>一</sup>、一十二年、為ニ国家衛護<sup>一</sup>。福<sup>レ</sup>利群生<sup>一</sup>、国宝国利、具如ニ宗式<sup>一</sup>等。」（『伝全』一、二四九頁）とあるように、毎年三月の桓武天皇の忌日（十七日）に比叡山寺において出家し菩薩沙弥となり、さらに菩薩大戒を受けて菩薩僧となった者には十二年間住山させるべきことを定めており、円仁もこの制度によって十二年間の籠山生活に入ったことが、寛平入道本に「其後大師、依ニ先師本願<sup>一</sup>、誓閉ニ山門<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>踏ニ塵路<sup>一</sup>。昼則弘<sup>レ</sup>伝天台法門<sup>一</sup>、夜亦修<sup>レ</sup>練一行三昧<sup>一</sup>。限<sup>レ</sup>之以ニ十二年<sup>一</sup>。」（『続天全』史伝二、六一頁上）とあることによって窺える。

円仁は籠山中、天台法門の弘伝と一行三昧<sup>38</sup>の修練に明け暮れていたが、山中の要請に応じ山門を出て、天長五年（八二八）夏には法隆寺で『法華経』を講じ、同六年（八二九）夏には天王寺で『法華経』と『仁王経』を講じ、北土（東北）で妙典を宣揚するなど精力的に活動していた。

しかし、四十歳の頃身疲れ眼病も患い、余命の長くはないことを悟り、比叡山の「北洞幽閑之处」すなわち横川の首楞嚴院に草庵を結び、三年間蟄居している（三千院本『慈覚大師伝』（『続天全』史伝二、四六頁上―下）及び寛平入道撰『慈覚大師伝』（『続天全』史伝二、六一頁上―下）。この間、蜜の如き不死の妙薬を飲む夢を見て回復し、石墨草筆をもって書写した『法華経』一部を小塔（後の根本如法塔）に納めている。

#### （4）円仁入唐の背景―円澄座主からの付嘱―

寛平入道本は承和二年（八三五）の出来事を次のように伝えている。



其人<sup>一</sup>。唯楞嚴院禪師可<sup>レ</sup>充<sup>二</sup>此任<sup>一</sup>。故我勸<sup>二</sup>此人<sup>一</sup>入唐請益。我命在<sup>二</sup>今夜<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>待<sup>二</sup>此人<sup>一</sup>為<sup>二</sup>深恨<sup>一</sup>耳。今以<sup>二</sup>請益大德所<sup>レ</sup>置三十余條疑問并伝法記草、雜書等<sup>一</sup>託<sup>レ</sup>汝。須<sup>二</sup>彼禪師帰朝<sup>一</sup>、必受<sup>二</sup>諮決<sup>一</sup>、是我懇志也。

(『新訂増補国史大系』第三十一卷、五四―五五頁、『日仏全』第六二、八一a)

とあり、承和四年(八三七)十月二十六日、円澄が臨終に際して弟子の慧亮に語った遺言が記されている。これによると、先師最澄は唐より帰国の際、天台山国清寺の座主と大衆に対して、自らの帰国後、常に請益僧と留学僧を天台山に派遣し、円教の深旨の疑点を決することを請うてあるので、自分の入滅後には汝(円澄)がその人選を行うよう命じられた。我(円澄)はこの遺命を受けて楞嚴院禪師、すなわち円仁を適任であると定め、「三十余條の疑問」及び「伝法記草、雜書等」を慧亮に託すので、円仁の帰朝後に必ず諮決を受けよとの言葉を遺したと伝えられている。なお円澄の遺言の年時が、『座主記』と『元亨釈書』とが異なっており、さらに検討を要するが、ここでは『元亨釈書』円澄伝の承和四年説に従っておきたい。

円澄がこのような言葉を円仁に遺すに至ったとされる背景にある、当時の天台教団はいかなるものであったのであろうか。まず円澄の伝記から見てみよう。『天台座主記』ならびに『元亨釈書』巻第二によると、円澄は武蔵国埼玉郡の出身であり、円仁と同じく俗姓は壬生氏という同族の出身であった。『元亨釈書』には、「十八事<sup>二</sup>道忠菩薩<sup>一</sup>、忠者鑑真之神足也。」(『新訂増補国史大系』第三十一卷、五四頁、『日仏全』第六二、八一a)とあり、十八歳の時鑑真の高弟道忠(七三五頃―八〇〇頃)に師事している。この道忠について、最澄門下の光定(七九―八五八)撰『伝述一心戒文』には、「道忠法師、菩薩戒寄<sup>二</sup>天台宗<sup>一</sup>。最初之時、城邑之中、在<sup>二</sup>於高座<sup>一</sup>、演<sup>二</sup>説宗義<sup>一</sup>。登<sup>二</sup>到叡嶺<sup>一</sup>、共<sup>二</sup>先之師<sup>一</sup>、写<sup>二</sup>一切經<sup>一</sup>、収<sup>二</sup>於經藏<sup>一</sup>。從<sup>二</sup>先師後<sup>一</sup>、供<sup>二</sup>一切經<sup>一</sup>。」(『伝全』一、六三八頁)とある。また同じく『叡山大師伝』には、「又有<sup>二</sup>東国化主道忠禪師者<sup>一</sup>、是此大唐鑑真和上、持戒第一弟子也。伝法利生、常自為<sup>レ</sup>事。知<sup>二</sup>識遠志<sup>一</sup>、助<sup>二</sup>写大小經律論二千余卷<sup>一</sup>。」(『伝全』五、附録七頁)と記され、東国の化主と称されていた道忠は、鑑真和上の持戒第一の弟子とされ、最澄を援助して大小經律論二千余巻を書



写し、それらは比叡山の経蔵に安置されており、最澄と関わりの深い僧侶であったことが窺える。なお、当時道忠は東国において一大勢力を持つ教団の中心人物であったことが知られている。<sup>39</sup>

円澄は同じく道忠の門下である広智に対して、承和二年（八三五）十一月五日付の書状を送っており、「円澄書状」（国宝）として現存している。<sup>40</sup> それには円仁の入唐について述べられているので、以下にその全文を挙げる。

大法之興将待ニ其人<sup>一</sup>。今為ニ弘法<sup>一</sup>特給ニ官符<sup>一</sup>。若拒<sup>レ</sup>逆者国家難弘不<sup>レ</sup>憚<sup>ニ</sup>劳苦<sup>一</sup>。早催<sup>ニ</sup>入京<sup>一</sup>。又仁与<sup>レ</sup>徳大禪師之所<sup>レ</sup>生子也。一入唐也。一入京也。此世之榮誰争<sup>ニ</sup>此事<sup>一</sup>。伏請<sup>ニ</sup>我大和上一勿<sup>ニ</sup>以為<sup>一</sup>恨。為<sup>ニ</sup>大事<sup>一</sup>故。幸重□□不住意<sup>リ</sup>且表<sup>ニ</sup>妙法之心<sup>一</sup>。

十一月五日叡岳老円澄状

謹上 雄野千部院大和上侍前<sup>41</sup>

承和二年

これによると、円澄は広智に早く入京するように催促し、円仁と徳円<sup>42</sup>は大禪師すなわち広智より生じた子であり、円仁の入唐と徳円の入京はこの世の榮えとなると述べている。円仁が入唐することになったことを円澄がいかに喜んでいたかが読み取れる一次史料である。

### （5）円仁へ付託の「円澄疑問三十問」について

円澄から円仁へ付託された「三十余条の疑問」は、『唐決集』<sup>43</sup>に「円澄疑問三十問」として収められており、以下にその項目を引用する。

唐決 円澄疑問 広修決答

一 法華為<sup>ニ</sup>二八教撰<sup>一</sup>之為<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>撰耶

- 二 毗盧舍那經何部何時何教撰レ之
- 三 光宅因果六義今家所破
- 四 為レ破ニ因果之実体一為レ破ニ邪執一
- 五 仏果隔生有無
- 六 円十二因縁生滅不生滅
- 七 別教傍正伏断義拋ニ何經論一
- 八 五忍次第如ニ仁王一大師配位不ニ相似一
- 九 円人經ニ歴ニ住已去ニ歟
- 十 実仏本師本時別号
- 十一 一家多用ニ四教一今更立ニ三教一何為ニ正義一
- 十二 退座五千涅槃中収者不レ見ニ明文一
- 十三 私録ニ異聞一者從レ誰聞レ法
- 十四 定性在ニ法華授記一何故初釈云ニ彼土得聞一
- 十五 依ニ法華疏一尸棄初禪何浄名疏云ニ二禪王一
- 十六 身子六心中退是何位退
- 十七 無情応レ発ニ修成覺一何故不レ爾
- 十八 苦集即滅道者為下滅ニ苦集一名上レ道乎
- 十九 六即何等聖教的出ニ其名一
- 二十 唯識唯心同異二師所レ立其趣如何
- 二十一 法華三昧証相門九種証相出ニ何經論一

- 二十二 円頓中道期ニ寂光一何故実報以為ニ其期一
- 二十三 体相章出ニ六師所レ立不審一其人与ニ所拠一
- 二十四 円伊三点何故釈与ニ經意一異
- 二十五 乘急人無ニ戒不レ備何故名為ニ戒緩一
- 二十六 癡迷与ニ無明一此ニ有ニ何殊一
- 二十七 五品十信差別不レ同諸忍位号亦異
- 二十八 見思即無明矣何故文云ニ一信已去斷思一
- 二十九 自ニ初品一至ニ初住一可ニ一生修証一者誰為ニ其人一
- 三十 六氣一一作レ氣其如何等

これらの内容は多方面にわたっているが、特に最澄が打ち出した真言一乗と法華一乗とに優劣を立てない円密一致説の根幹に関わる『法華經』と『大日經』との関係を問うたものが第二問である。ここでは「毗盧舍那經五時四教八所<sup>(其半)</sup>不レ説。為ニ法華前説一為ニ法華後説一、此義如何。」とあり、『毗盧舍那經』すなわち『大日經』は天台智顗が説いた天台の教相判釈である五時八教において、いずれに属するかを問うている。これらの問いは、当時の日本天台宗が抱えていた円密一致説の論拠としての天台と真言との教学的位置づけを明らかにしていかなければならないという課題を如実に反映したものと考えられる。

円仁の入唐の目的について、千田孝明氏は以下の二点に要約している。すなわち、「課題の一つは、法相宗以下南都宗派からの実質的な独立で、天台宗独自の弟子養成制度を確立することであり、二つには、先師最澄が入唐求法をもとに立宗した日本天台宗が、桓武天皇の御願により「止観業」と「遮那業」の学生を養成する宗門として出発したことで、「遮那業」(密教部)の充実が切迫した課題となり、さらには円教(顕教)と密教の新たな教

義理論を打ち立てるための疑問解決が急務となったことが挙げられる。」<sup>44</sup>と述べているが、延暦寺における未決の解決を始め、経巻類を充実させ、高僧から直接法門の奥旨を教わることを課題としていたと考えられ、このような課題を背負った円仁の入唐には、大きな期待が寄せられていたといえる。

### (6) 最澄からの夢告について

先にも取り上げたように、最澄入滅後夢に師が現れ、円仁を求法のために入唐させたい旨を語ったこと、また寛平入道本には、「時夢先師曰、汝旅中装束、須ニ与人等レ之。」（『統天全』史伝二、六一頁下―六二頁上）とあり、その年の冬に見た三度目の夢では「先師教曰、汝往ニ大唐一、就ニ真言門一、先問ニ天部一。就ニ天台門一、先問ニ中道一。」（『統天全』史伝二、六二頁上）とあり、最澄から旅中の装束は人と等しくするようにとの細かい点から、入唐して真言法門についてはまず天部を問ひ、天台法門についてはまず中道を問うように示されたことが伝わっている。これまでも見たように、『慈覚大師伝』にはしばしば円仁が入唐前後に見たこれらの夢についての話が記されているが、『巡礼記』にも入唐中に見た夢の話が記録されている。<sup>45</sup>その内容は最澄の夢、吉夢や奇瑞にまつわるものもあり、円仁は実際によく夢を見ていたことが窺え、『慈覚大師伝』が執筆された当時円仁が見た夢について伝承されていたと考えられる。最澄の夢告は円仁と最澄との心理的繋がり of 深さを表していると思われるが、それに加えて請益僧として選出された円仁が、当時まさに命がけの旅であった入唐に臨んで、無事に求法を全うすべく、旅中の服装といった生活面から、大陸の高僧に尋ねるべき教学上の問題に至るまで円仁が深く思索していたことの現れであろうと考えられる。

### 第三節 円仁三目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の撰述とその背景

入唐請益僧に選ばれた円仁は、承和五年（八三八）より入唐求法し、三種の将来目録を残しているが、それは第一に唐開成四年（八三九、承和六）四月二十日に円仁自ら撰述した『日本国承和五年入唐求法目録』、第二に承和七年（八四〇）正月十九日に延暦寺の僧らによって作成された『慈覚大師在唐送進録』、第三に承和十四年（八四七）十二月に作成された『入唐新求聖教目録』である。前者の二目録は、ともに揚州求得の成果を記した一覧であり、構成や記載の書目に多少の相違が見られる。『新求目録』は、帰国して間もない円仁が、揚州・五台山・長安における求得の内訳を網羅して作成したものであり、円仁入唐求法の成果報告書というべき総目録である。

これら三目録のうち、『承和五年目録』と『在唐送進録』という揚州の目録が二種類作成されたのはなぜだろうか。

そこで、本節ではまずこれら三目録がいかなる状況にて作成されたのかという点を明らかにするため、『続日本後紀』などの史料に依って、遣唐使一行の動向を追うとともに、『巡礼記』を用いて円仁の具体的な状況を窺い、『承和五年目録』と『在唐送進録』の末尾の文章と『巡礼記』の記述を対照させ、将来目録の撰述経過を探っていききたい。

#### （1）入唐進発と天台山行不許可

『続日本後紀』承和三年（八三六）五月十二日条<sup>46</sup>によると、出された勅には、「向ニ摂津国難波海口<sup>一</sup>、慰<sup>二</sup>勞聘唐使發遣<sup>一</sup>。」とあり、十三日条には、「是日、使等駕<sup>レ</sup>舶。」と見えることから、遣唐使は難波津から乗船してい

る。十四日、四船は纜を解いて出発した。<sup>47</sup>ところが、十八日暴風雨に遭い、摂津国輪田泊に一旦避難したもの、七月二日には四船ともに九州博多を進発した。<sup>49</sup>しかし、七月十七日条によると第一船と第四船は肥前国に漂着し、第二船と第三船は遭難した。<sup>50</sup>この時の様子を、遣唐大使藤原常嗣は『続日本後紀』同年五月二十二日条に見える上表文において、「臣常嗣等自三宮艤甫畢遠入二大瀛一。日夜漂簸。了無二生頼一。只待二蕭鏐於水波一。」（『新訂増補国史大系 続日本後紀』五六―五七頁）と綴っており、日夜漂流し続けた悲惨な様子が窺える。『続日本後紀』承和四年七月二十二日条によると、二度目の渡海を試みたものの逆風に遭い失敗に終わった。<sup>51</sup>

次に、遣唐使船が三度目に進発したのは、承和五年（八三八）六月のことであつた。<sup>52</sup>この間、遣唐使一行は大宰府に滞在していたと考えられ、円仁も約二年間渡海の時を待っていたと考えられる。円仁が記した『入唐求法巡礼行記』巻一は、承和五年六月十三日より始まっており、以下『巡礼記』に基づき、『慈覚大師伝』で補いながら円仁の入唐の状況を考察していきたい。なお、『巡礼記』の原文については、小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一巻―第四巻（鈴木学術財団、一九六四―一九六九年）に依拠し、原文引用の下には巻数と頁数を括弧内に「小野、巻数、頁数」として表示した。

六月十三日、博多にて第一・四船の諸使は舶に乗り、『慈覚大師伝』によるとこのうち円仁は第一舶に乗っている。<sup>54</sup>六月二十八日、掘港（現揚子江河口の如皋県東方）で大波に遭い船は難破したが、七月倉船（米塩などを積載する船、小野一・一一三頁注四）一艘に移り助けられ、揚州海陵県白潮鎮桑田郷東梁豊村（現江蘇省南通県）に到着した。八月一日、円仁と留学僧円載は、牒を使衙（遣唐使の本部・小野一、一六〇頁）に出し、円仁は台州（現浙江省天台县）国清寺に向かい、水手の丁勝小麻呂（後に唐風の丁雄満と改名）を求法の馳仕（従者）としたいことを請うている。この円仁の牒に対して、八月四日揚州府より届いた覆問書には、次のように記されていた。

彼状稱、還唐僧円仁・沙弥惟正・惟曉・水手丁雄満、右請往三台州国清寺一、尋レ師、便住三台州一、為下復從三台州一却来、赴三上都一去上。（中略）即答書云、

## 還学僧円仁

右、請往台州国清寺一、尋レ師決レ疑。若彼州無レ師、更赴三上都一、兼経三過諸州一。（小野一、一六六頁）

とあり、台州国清寺に行き、師を尋ねて台州に留まるのか、それとも台州から上都長安に赴くのかという質問に對して、円仁は台州国清寺に行き、師を尋ねて疑問を解きたいが、もし台州に師がいない場合は長安や諸州に赴きたいと返答しており、同じく質問を受けた留学僧円載も同様の回答を行っている。ここで、入唐当初より密教の本場である長安へ赴きたいという円仁の意思が見られることは、円仁の入唐目的を考察する上で注意すべきであらう。

開成三年（八三八）八月二十二日、揚州都督府の李徳裕（七八七―八四九）から出された牒によって、八月二十四日より円仁・円載及び僣従は揚州開元寺に滞在する生活が始まった。この間、以下のような遣唐使からの台州行きに関する知らせを受けている。

九月十六日条

長判官（長岑宿禰高名）云、得二相公（李徳裕）牒一僣、請益法師可レ向台州一之状、大使入京奏聞、得二報符一時、即許三請益僧等發三赴台州一者。未レ得二牒案一。（小野一、二二八頁）

九月二十日条

写三得相公牒状一僣、日本国朝貢使数内僧円仁等七人、請下往台州国清寺一、尋上レ師。右奉レ詔朝貢使来入レ京、僧等發三赴台州一、未レ入レ可二允許一。須下待二本国表章到一、令中發赴上者。委曲在二牒文一。（小野一、二二二頁）

九月二十九日条

又蒙二大使宣一僣、請益法師早向台州一之状、得二相公牒一僣、大使入京之後、聞奏、得二勅牒一後、方令レ向台州一者。仍更添二已緘書一、送二相公一先了。（小野一、二二四頁）

李徳裕の牒によると、大使常嗣の入京後でなければ請益僧らの台州行きを許可することはできないとのことであった。

そして、開成四年（八三九）二月八日、「得ニ長判官閏正月十三日書札一、使対コ見天子一之日、殊重面陳、亦不レ蒙レ許。仍深憂悵者。」（小野一、四〇〇頁）とあり、長岑宿禰高名が閏正月十三日に記した書状には、遣唐大使（藤原常嗣）が皇帝に謁見し申し開きを行ったが、勅許を蒙ることができなかったと述べられていた。二月十七日には、「十八日為レ向ニ楚州一、官私雜物等、惣載ニ船裏一。」（小野一、四〇四頁）とあり、遣唐使一行は帰国に向かうため公私の雜物を船に積み込んだ。十八日、円仁と円載は揚州開元寺を後にし、十九日に乗船した。二十日、「監国信、伝ニ大使宣一云、請益僧発コ赴台州一之事、大使到レ京、三四度奏請、遂不レ被レ許。」（小野一、四〇六頁）とあり、監国信（朝貢物管理官）春道宿禰永藏より台州行きの勅許が下りなかったことを聞かされている。<sup>55</sup> 楚州城に到着した二十四日、駅館にて円仁と対面した常嗣が宣して言うには、

大使宣云、到レ京之日、即奏下請益僧往ニ台州一之事、雇ニ九箇船一、且令レ修之事上。礼賓使云、未ニ対見一之前、諸事不レ得ニ奏聞一。再三催レ勸上奏、但許ニ雇レ船修理一、不レ許レ遣ニ台州一。蒙ニ勅報一偁、使者等帰国之日近。自ニ揚州一至ニ台州一、路程遙遠。僧到レ彼、求ニ帰期一、計不レ得レ逢ニ使等解纜之日一。何以可レ得レ還コ帰本国一。仍不レ許レ向ニ台州一。但其留学僧一人許レ向ニ台州一、五年之内、宜終給ニ食糧一者。対見之日、復奏。勅全不レ許。後復重奏。遂不レ被レ許。此慚悵者。」（小野一、四二一—四二二頁）

とあり、長安に到着した日、円仁の台州行きと九船の修理を上奏したところ、蒙った勅報には、遣唐使が帰国する日は近づいており、揚州から台州への路程は遠く遣唐使の出港日に間に合わないという理由で許可されず、後日再三上奏したが、ついに許可を蒙ることはできなかったという。一方、留学僧の円載は台州行きを許可されることとなった。先師と同様に、中国天台宗の根本聖跡天台山を訪ねると言う円仁の希望は砕かれたのである。



## (2) 『承和五年目録』と『在唐送進録』の成立背景

円仁は揚州滞在中、揚州開元寺を拠点として求法したが、このことについて『承和五年目録』の末尾には次のように記している。

前件法門等、円仁、去承和五年八月到<sub>二</sub>大都督府<sub>一</sub>、巡<sub>二</sub>歴城内諸寺<sub>一</sub>、写取如<sub>レ</sub>前。爰有<sub>二</sub>終南山 宗叡和尚<sub>一</sub>。学速<sub>二</sub>先達<sub>一</sub>、悟<sub>二</sub>究幽致<sub>一</sub>。能解<sub>二</sub>梵漢之語<sub>一</sub>、妙閑<sub>二</sub>悉曇之音<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>西天<sub>一</sub>辞<sub>レ</sub>旧到<sub>レ</sub>府。仁幸得<sub>二</sub>遇謁<sub>一</sub>、受<sub>二</sub>学梵天悉曇<sub>一</sub>、兼<sub>二</sub>習梵漢之語<sub>一</sub>。又逢<sub>二</sub>大唐内供奉弁弘阿闍梨付法弟子全雅阿闍梨<sub>一</sub>、諮<sub>二</sub>稟秘法<sub>一</sub>。和尚感<sub>二</sub>乎遠誠<sub>一</sub>、付以<sub>二</sub>秘要<sub>一</sub>。遂乃嘱<sub>二</sub>授念誦法門、并胎藏金剛両部曼荼羅・諸壇様等<sub>一</sub>。其後擬<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>行路遼遠<sub>一</sub>往還失<sub>レ</sub>時。有<sub>レ</sub>勅不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>発赴<sub>一</sub>、慨恨難<sub>レ</sub>及。所<sub>レ</sub>求法門雖<sub>レ</sub>未<sub>二</sub>備足<sub>一</sub>、且録<sub>二</sub>卷秩<sub>一</sub>勘定如<sub>レ</sub>件。<sup>56</sup>

これによると、円仁は揚州にて諸寺院を巡り目録に記載の經典を写し取り、幸いにも梵漢の語、悉曇の音に通じた終南山の宗叡と面会して梵天悉曇、梵漢の語を習うことができたのである。また、弁弘阿闍梨の付法の弟子である全雅阿闍梨より密教の秘法を授かり、円仁が遠方よりやって来たことに對して感じ入った全雅は、密教の念誦法門・胎藏金剛両部曼荼羅・諸尊壇様などを円仁に授けたことが窺える。そして、この『承和五年目録』と同様に、揚州における将来物を記した『慈覚大師在唐送進録』の末尾には、次のように記されている。

右得<sub>二</sub>請益伝灯法師位円仁書<sub>一</sub>、且所<sub>二</sub>求得<sub>一</sub>新訳撰集法門、并両部大曼荼羅等、送<sub>二</sub>延暦寺<sub>一</sub>。凡真言儀軌等、唐国和上等、尤有<sub>レ</sub>深<sub>二</sub>誠<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>妄散<sub>一</sub>。但其目録先附<sub>二</sub>第二舶栗田録事<sub>一</sub>者。仍且記録如<sub>レ</sub>件。

承和七年正月十九日都維那伝灯住位僧仁全

寺主伝灯住位僧治哲

上座伝灯住位僧道叡<sup>57</sup>

## 別当

この『在唐送進録』は、承和七年（八四〇）正月十九日付で、延暦寺の三綱の署名があり、在唐中の円仁より延暦寺へ宛てた書簡すなわち「円仁書」の内容が記録されている。つまり、揚州にて求得の新訳撰集の仏典ならびに両部大曼荼羅などは延暦寺に送ったが、真言儀軌などは唐国の和上が最も深く戒めたものであり、妄りに散佚すべきではないと記されたものであった。ただし、「其目録」は先に第二舶の栗田録事<sup>58</sup>に付したと述べているのであるが、その目録とはいずれの目録のことを指しているのであろうか。また、円仁がいつ誰に「円仁書」を託したのかなど、次に円仁の動向を『巡礼記』に依って追いながら明らかにしたい。

『承和五年目録』の末尾に記載の全雅阿闍梨は、『巡礼記』開成四年（八三九）閏一月二十一日条に初めて現れ、円仁に金剛界の諸尊儀軌などを借写させ、その後も二月五日円仁のために如意輪壇を作っている。そして、二月二十六日楚州にいる円仁を追って来たが（小野一、四二七頁）、これは三月五日条によると、「斎後、前面胎藏曼荼羅一鋪五副了。但未ニ綵色一耳。」（小野一、四五一頁）とあり、胎藏曼荼羅の作画のためであったことが窺える。なお未だ綵色せざるのみとあるのは、彩色を施す時間がなかったためと考えられる。

二月二十七日、「大座主寄<sup>59</sup>上天台山一書一函、并納袈裟及寺家未決、修禪院未決等、竝分<sup>60</sup>付留学僧一既了。」（小野一、四三三頁）とあり、天台山行きが不可能になったことを受けて、円仁は大座主（円澄）へ宛てた書状一函と刺納袈裟及び寺家未決・脩禪院未決などを円仁に分付した。

ここに見える「納袈裟」は、『元亨釈書』卷二円澄伝に、「澄勸<sup>61</sup>淳和大后<sup>62</sup>製<sup>63</sup>納伽梨<sup>64</sup>、施<sup>65</sup>国清寺衆<sup>66</sup>。」（『日仏全』六二・八一a）とあり、年代は不明であるが、円澄が淳和大后（正子内親王、八一〇―八七九）に対して納伽梨を作って国清寺の僧侶に奉納するよう勧めたことが伝えられている。これについては、『本朝高僧伝』円澄伝にも「嘗勸<sup>67</sup>橘皇太后<sup>68</sup>、裁<sup>69</sup>納袈裟数百襲<sup>70</sup>、施<sup>71</sup>唐国清寺大衆<sup>72</sup>。」（『日仏全』六三、四八b）と、同様のことが記されている。そして、「寺家未決」は上述した三十余条の疑問である。また、「修禪院未決」とは、天長元年

(八二四)に延暦寺の初代座主となった修禪大師義真による未決である。<sup>59</sup>

開成四年(八三九)三月五日の条には、

又縁<sup>二</sup>求法難<sup>レ</sup>遂、可<sup>レ</sup>留<sup>三</sup>住唐国<sup>一</sup>之状、献<sup>二</sup>大使相公<sup>一</sup>。具状在<sup>レ</sup>別。相公報宣云、如要<sup>二</sup>留住<sup>一</sup>、是為<sup>二</sup>仏道<sup>一</sup>、不<sup>二</sup>敢違<sup>レ</sup>意、要<sup>レ</sup>住即留。但此国之政極峻、官家知聞、便<sup>二</sup>違<sup>レ</sup>勅之罪<sup>一</sup>、有<sup>二</sup>擾悩<sup>一</sup>歟。但能思量耳云。」(小野一、四五一頁)

と述べている。すなわち、円仁は遣唐大使藤原常嗣に対して、求法が遂げ難いため唐国に留住すべきの状を献上したのであるが、それに対して、常嗣は留住したのであれば、これは仏道のためであるので留まれば良いが、中国の政治は極めて厳しく、このことが国家に知られたならば違勅の罪に問われ煩わしいであろうから、よく考えるようにとの返答をしている。

この直後の三月十七日、「運<sup>二</sup>隨身物<sup>一</sup>、載<sup>二</sup>第二船<sup>一</sup>。」(小野一、四五三頁)とあり、遣唐使が帰国のために新たに雇った新羅船九隻<sup>60</sup>のうち第二船に円仁は隨身物を運んでいるが、この時積み込んだ荷物こそ、後述する『在唐送進録』に記載の中身そのものである法門一簾などであつたと考えられる。さらに「亦令<sup>三</sup>新羅訳語正南商<sup>二</sup>可<sup>レ</sup>留之方便<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>定<sup>二</sup>得否<sup>一</sup>。」(小野一、四五三頁)と記し、遣唐使一行の一員である新羅人通訳の金正南に留住の方法を図らせたが、いまだに得否を定かにしないとあり、前述の常嗣からの返答を受けて円仁は留住を決めたと考えられる。この後の三月二十三日早朝、円仁は遣唐使船第二船に乗る直前、劉慎言に対して、「沙金大二両、大坂腰帶<sup>61</sup>」(小野一、四五七頁)を与えている。劉慎言はこの日の記事が初見であり、以後円仁の入唐求法が終わり帰国に向かうまで、その補佐に当たることになる人物である。

劉慎言は二十三日の夕方に「劉慎言細茶十斤松脯贈来、与<sup>二</sup>請益僧<sup>一</sup>。」(小野一、四六二頁)とあり、円仁に対して細茶十斤と松脯(乾燥させた松の種子)を贈っており、これを小野氏は「円仁と劉慎言との間における残留工作がまとまったことを暗示する。」(小野一、四六四頁)と述べている。この直後、「聞<sup>二</sup>唐人導<sup>一</sup>、第二船便以<sup>二</sup>今

月十四日<sup>62</sup>、發<sup>レ</sup>自<sup>ニ</sup>海州東海県<sup>一</sup>。未<sup>レ</sup>詳<sup>ニ</sup>虚実<sup>一</sup>。」(小野一、四六二—四六三頁)とあり、円仁は船上にて遣唐使第二船(栗田録事乗船)が三月十四日に海州東海県(現江蘇省)を出発したことを耳にしている。

同じく三月二十三日条には、「夜頭、請益僧送<sup>ニ</sup>延暦寺<sup>一</sup>消息一通、分<sup>ニ</sup>付大使兼從江博士栗田家繼<sup>一</sup>。」(小野一、四六三頁)と記していることは、『承和五年目録』と『在唐送進録』の成立背景を考察する上で注目すべきである。すなわち、円仁は延暦寺へ宛てた消息一通を大使の從者兼画師栗田家繼に分付しているのである。

この消息の内容を含め、円仁将来目録について先行研究では、石田尚豊「円仁の揚州求法について」<sup>63</sup>、高橋聖「遣唐僧による請来目録の意義—円仁の三種の請来目録を中心に—」<sup>64</sup>において論じられているので、それらを踏まえて再検討してみたい。

この二十三日の消息一通について、石田氏は「急遽作り上げた内訳書と、大陸留住を決めたいきさつを含めた消息」(石田、二〇四頁)としている。一方、高橋氏は「この書簡は『在唐送進録』に見える「円仁書」とは別物であったと考えられるのである。」(高橋、二頁)と述べ、石田氏の見解に対して「石田尚豊氏は『在唐送進録』に見える「円仁の書」が『行記』開成四年三月二十三日条に見える「消息」であるとしているが、後述のようにこの時点では円仁は第二船に乗船する栗田録事とは遭遇しておらず、この見解には従えない。氏は当初円仁が帰国に際して乗船した新羅船第二船と、その後に乗船した遣唐第二船を混同しているため、基本的な事実の認識に誤りがあるようである。」(高橋、一四—一五頁)と述べている。この両氏の見解について、将来目録の末尾と『巡礼記』に基づき検証してみよう。この消息について、『在唐送進録』の末尾の文章を再度見てみると、

右得<sup>ニ</sup>請益伝灯法師位円仁書<sup>一</sup>、且所<sup>ニ</sup>求得<sup>一</sup>新訳撰集法門、并両部大曼荼羅等、送<sup>ニ</sup>延暦寺<sup>一</sup>。凡真言儀軌等、唐国和上等、尤有<sup>レ</sup>深<sup>ニ</sup>誠<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>妄散<sup>一</sup>。但其目録先附第二船栗田録事<sup>一</sup>者。仍且記録如<sup>レ</sup>件。

とある。ここで、『在唐送進録』の末尾に見える「但其目録先附第二船栗田録事者」の一文が重要となる。「其目録」については後述するが、「其目録」を先に第二船の栗田録事に託したということは、「円仁書」を託す前に「其

目録」を第二船の栗田録事に託しているのである。しかし、先程も見た通り、三月二十三日時点で第二船の所在は不明であるため、二十三日に円仁が託した消息一通は、『在唐送進録』に記載の「円仁書」とは異なるといえる。したがって、この点については高橋氏の見解が妥当であると考えられる。そして、三月二十三日の消息一通の内容については不明であるが、三月二十三日に遣唐使とともに帰国の船に乗り、途中下船して天台山へ向かうことが円仁の留住計画であつたと考えられ、遣唐使一行と別れて自らは求法継続のため唐に残留することを伝える内容であつたのではないかと推測される。このような消息を遣唐使一行の中で画師栗田家継(栗田録事とは別人)を選んで託したことについては、円仁が揚州開元寺に滞在していた開成四年(八三九)正月三日、「始画二南岳・天台兩大師像兩鋪各三副」。(中略)令二大使僉從栗田家継写取」。(小野一、三三一頁)と見え、栗田家継が南岳慧思・天台智顗の肖像を一つの誤りもなく写し取っているが、こうした点から円仁は家継へ信頼を寄せていたと推測され、延暦寺宛ての書簡を「消息一通」として託したのではないかと考えられる。

先述の「其目録」については、石田氏は『送進録』と異なる目録で、これこそ『承和五年請來録』のごとき目録であろう。(石田、二〇五頁)とし、高橋氏は『承和五年目録』と考えるのが自然であろう。(高橋、四頁)としているが、両者の見解通り、『承和五年目録』であつたと見るのが妥当であろう。そこで、この目録がいつ遣唐使に託されたのかという点に留意しながら『巡礼記』を読み進めていくことにしたい。

新羅船九隻は三月二十四日の夜に進發し、三月二十九日海州の東海東海山の東辺に停泊し、四月一日船上にて「留学僧為レ送二叡山」、在二楚州」、分付音信書四通・黒角如意一柄、転付紀伝留學生長岑宿禰帰国」既了。」(小野一、四七四頁)とあり、留学僧円載が楚州にて円仁に託した、比叡山へ宛てて作成した音信の書四通と黒角如意(水牛や犀の角で作られた如意)一柄を、紀伝留學生の長岑宿禰に預け、唐に残留を予定している円仁に代わって日本へ送り届けてもらおうとしていることが分かる。

ここで船の進路について議論が起こり、新羅人水手(かこ)が一日北行した後密州管轄の大珠山に着くため、そこで船

の修理を行うことを意見しているが、これに賛同したのは大使常嗣のみであった（小野一、四七四頁）。四月二日、常嗣が諸船の官人を招集して進発について協議した結果、第二船の船頭長岑宿禰は、「其大珠山計当ニ新羅正西一。若到レ彼進発、災禍難レ量。」（小野一、四七六頁）と言ひ、新羅の情勢が穏やかではない状況を踏まえて、新羅の真西に位置する大珠山に向かったならば、災禍は計りがたいと述べている。当初常嗣はこれに同意しなかったが、同日「第二・三・五・七・九等船、随ニ船首情願一、従レ此渡海。」（小野一、四七七頁）と、長岑宿禰の意見に従ひ、第一・八船以外の船はこより直接日本へ向かつて渡海することを通達した。四月三日、金正南より「宜遷ニ駕第六・八船一者。」（小野一、四八一頁）、第六船か第八船に移るようにとの書状を受け取った円仁は、四日、日本に向かう予定の第二船を下りて、密州に行つて留住するため、弟子惟正・惟曉・従者丁雄満とともに第八船に乗り移った。ただし、西風が吹き出発できなかったが、常嗣はもし風向きが変われば密州に向かうとの宣を出している（小野一、四八二頁）。

そして、五日に第一船が出した牒によると、第一・四・六・八船は、船の修理のため先に密州に行くとの内容であった。円仁の留住方法については、「到ニ密州界一、留ニ住人家一、朝貢船発、隠ニ居山裏一、便向ニ天台一、兼往ニ長安一。節下不レ逆ニ斯謀一。」（小野一、四八三頁）とあり、密州にて人家に留住し、朝貢船の出発後山に隠れ、その後天台山と長安へ向かうという円仁の計画を常嗣も容認している。しかし、諸船の遣唐使らは密州を目指したいという常嗣の意に従わず、加えて連日順風が吹いており、常嗣の乗る第一船もついに直接渡海することになった。そこで、円仁は留住を決意し、「仍所ニ求得一法門一簾、両部曼荼羅壇様等盛ニ皮大箱一合一、寄ニ付第八船頭伴宿禰一兼付ニ隨身物一。」（小野一、四八三頁）とあり、揚州にて求得の法門を納めた簾一つ、両部曼荼羅などを入れた皮の大箱一合及び隨身物を第八船の船頭伴宿禰に託し、<sup>65</sup>惟正、惟曉、丁雄満とともに下船したのである。この法門一簾とは、『在唐送進録』に見える「雑第八」帙と「雑第九」帙の間にある「皮箱」以外の次の九帙を指していると考えられる。

大乘經律論合一十二部(第一帙)

梵漢両字真言儀軌讚 一十五部一十五卷(第二帙)

梵漢両字真言儀軌讚 一十六部一十六卷(第三帙)

章疏伝記七部一十二卷(第四帙)・四部一十卷(第五帙)・八部一十卷(第六帙)・一十四部一十四卷(第七帙)・六部十七卷(第八帙)

外書一十四部一十四卷(雜第九)

また、「両部曼荼羅壇様等盛皮大箱一合」とは、『在唐送進録』に見える「曼荼羅壇様并伝法和上等影二十二鋪」を納めた皮箱のことであると考えられる。そして、『在唐送進録』には、九帙の内容を列記した後、

別物 封皮箱一合

件箱、請益法師円仁書偈、般若理趣釈經一卷、梵字金剛經、梵本般若心經、梵字金剛經論頌、梵語雜名、十七壇様、護摩壇様、胎藏手印様、五秘密儀軌等、特<sub>レ</sub>盛一箱<sub>一</sub>。全封不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>開出<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>一思<sub>一</sub>故、不<sub>三</sub>是惜<sub>二</sub>法門<sub>一</sub>者。

とあり、皮箱一合の中に「般若理趣釈經一卷、梵字金剛經、梵本般若心經、梵字金剛經論頌、梵語雜名、十七壇様、護摩壇様、胎藏手印様、五秘密儀軌等」を別物として一箱に納め、皮箱に同梱したと考えられる。

これら法門類を伴宿禰に託したことは、『新求目録』揚州の部の末尾にも「右件法門等、大唐開成三年八月初到<sub>二</sub>揚州大都府<sub>一</sub>、巡<sub>二</sub>諸寺<sub>一</sub>尋訪抄写畢。先寄<sub>二</sub>付使下准判官伴宿禰管雄船<sub>一</sub>、已送<sub>二</sub>延曆寺<sub>一</sub>訖。」と記されており、間違いないものと確認することができる。

上記の『巡礼記』四月五日条(小野一、四八三―四八六頁)によれば、円仁一行は下船後、岸边に停泊中の新羅人十余人と遭遇しているが、ここに理由を問われ、朝貢使(遣唐使)の船に便乗した新羅人であることを告げ、円仁は金目の物があれば彼らに殺害されることを恐れて「所<sub>レ</sub>費隨身物乃至食物」を全て与えている。その後、

彼らの案内で宿城村（雲台山の支山・宿城山の西南麓）の新羅人宅に到着し、「新羅人慶元・惠湓・教惠等」と新羅人名を名乗り、便船に乗ってやって来たと答えており、このような事態に備えて予め新羅人を名乗ることを計画していたであろうと考えられる。しかし、村老（村長）王良は、言語の相違から日本の朝貢使の官客であることを見抜き、さらに弓箭を帯びて現れた子巡軍中（軍兵）三名の尋問を受けた円仁は、押衙へ提出する書状に、腹痛と脚気を患い、下船し水を求めて山裏に登るもいまだに快復していないこと、朝貢使船が順風により昨夜出航したこと、そこで炭船に乗った新羅人十人と出会い、うち一人を雇い宿城村まで来たことを記した上で、手持ちの物は「帔・衣服・鉢盂・銅鏡・文書・澡瓶及錢七百余・笠子等」であることを申告し、帰国のため人を派遣して送ってほしいと要請している。

そして、宿城村より百里あまりの山路を超えた円仁一行は、四月八日、海州に碇泊していた遣唐使第二船の栗田録事らとようやく面会を果たしたものの、このまま帰国せざるを得ない状況となった。円仁は、この時の心情を次のように吐露している。

僧等為<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>仏法一起<sub>レ</sub>謀数度、未<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>斯意<sub>一</sub>。臨<sub>二</sub>帰国時<sub>一</sub>、苦設<sub>二</sub>留却之謀<sub>一</sub>、事亦不<sub>レ</sub>応。遂被<sub>二</sub>探覓<sub>一</sub>也。左  
右<sub>レ</sub>議不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>留。官家嚴檢不<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>一介<sub>一</sub>。仍擬<sub>下</sub>駕<sub>二</sub>第二船一<sub>上</sub>帰中本国<sub>上</sub>。先在<sub>二</sub>揚・楚州一<sub>上</sub>覓得法門、并諸  
資物留在<sub>二</sub>第八船<sub>一</sub>。臨<sub>二</sub>留却<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>將隨身之物、胡洪島至<sub>レ</sub>州之会、並皆与<sub>レ</sub>他。空手駕<sub>レ</sub>船、但増<sub>二</sub>歎息<sub>一</sub>。  
是皆為<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>求法<sub>一</sub>耳。（小野一、五〇四―五〇五頁）

仏法を求めるための数度の謀り事は失敗し、ついに官家の見つかることとなり、第二船に乗って帰国することになった今、揚州にて求得の法門などは第八船にあり、留住に際しては隨身物を皆人に与え、求法を遂げられなかったという無念の思いが窺える。

開成四年（八三九）四月十日、円仁は第二船に乗船し、十一日に出発した船は山東半島を北上し、十八日登州の船上にて「請益僧為<sub>下</sub>早到<sub>二</sub>本国<sub>一</sub>、遂<sub>中</sub>果近年所<sub>レ</sub>發諸願<sub>上</sub>、令<sub>三</sub>卜部祈<sub>二</sub>禱神等<sub>一</sub>。」（小野一、五二七頁）と見え、



円仁は近年発した諸願を果たすため、無事速やかに帰国できるように卜部に祈祷させており、完全に留住を諦め帰国後のことを考えるより他にない状況であった。

### (3) 『承和五年目録』の作成と委託

ここで、『承和五年目録』の作成背景を考えてみたい。『承和五年目録』の奥書には、「大唐開成四年歲次己未四月二十日 天台宗請益伝灯法師位円仁録」とあり、開成四年（八三九）四月二十日の日付となっており、まさに航海中の船に揺られながらこの目録を仕上げたことになる。しかし、先程見たように求得の経論章疏は皆第八船に託したのであり、それら将来物を確認しながら目録を作成したことはあり得ない。四月二十日、円仁がいかなる状況であったかについて、『巡礼記』を見ると、この日の記述は「早朝新羅人乗ニ小船一來。便聞張宝高与ニ新羅王子一同レ心、罰コ得新羅国一、便令ニ其王子作ニ新羅国王子一既了。」（小野二、四頁）とあり、小船に乗った新羅人から聞いた、張宝高（一八四一）が新羅の王子とともに新羅国を討伐したことについて書き留めており、『承和五年目録』については触れていない。

張宝高については、円仁がこの後赴くことになる赤山に滞在中の『巡礼記』開成五年二月十七日条において張宝高へ書状をしたためていることが見え、その中で次のような文を書いている。「円仁辞レ郷之時、伏蒙ニ筑前太守寄ニ書一封一、転献ニ大使一。忽遇ニ三船沈ニ浅海一、漂コ失資物一。所レ付書札、随レ波沈落。悵悵之情、無ニ日不レ積。」（小野二、二〇三頁）と述べ、円仁は入唐前に筑前権守小野末嗣<sup>67</sup>から大使（張宝高）へ宛てた書状一通を預かっていたが、一度目もしくは二度目の航海失敗の際に書状も浅海に漂失したという経緯があり、この日張宝高<sup>68</sup>の動向に気を留めたと思われる。

そして、この間海上で時を過ごしていた円仁が、再び留住について考え始めたことが、四月二十九日条の記事

によつて分かる。すなわち、「令下新羅詔語道玄、作<sub>レ</sub>謀中留<sub>コ</sub>在此間<sub>一</sub>可<sub>二</sub>穩便<sub>一</sub>否<sub>上</sub>。道玄与<sub>二</sub>新羅人<sub>一</sub>商<sub>コ</sub>量其事<sub>一</sub>、却来云、留住之事、可<sub>二</sub>穩便<sub>一</sub>。」（小野二、一七頁）とあり、新羅人詔語道玄に留住について謀らせたところ、穩便なるべしとの返答を得ており、五月一日村勾当（村長に準じる世話係）王訓に留住のことを尋ねたところ、王訓より留住したのであれば円仁の世話をするとの協力的な返答を得ている。これを受けて、五月十六日留住の状を作成して林大使（赤山法華院の世話役）に送つたが、五月三十日、「自<sub>レ</sub>先至<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>住<sub>二</sub>此村<sub>一</sub>之事、報請<sub>二</sub>官人等<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>許。今日又請、未<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>允許<sub>一</sub>。」（小野二、四二頁）と見え、遣唐使は円仁の留住を認めようとせず、六月一日、「縁<sub>二</sub>留住之事<sub>一</sub>、暫請<sub>二</sub>舢舨<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>交<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>船。」（小野二、四三頁）と、留住のため舢舨を請うたものの依然として許可は下りなかった。

一行を乗せた第二舶は、六月七日の夜文登県清寧郷赤山村に停泊した。円仁の記述によると、赤山の裏にある赤山法華院は、張宝高の建立による新羅系の寺院であり、長年冬に『法華經』、夏に『金光明經』八巻の講義が行われていた。八日、円仁と惟正・惟曉は赤山法華院に登つて宿泊し、九日には栗田録事や新羅通事道玄らも来て一泊している。この間赤山浦は悪天候に見舞われ、二十三日に第二舶は激しい損壊を被り停泊を続けていた。円仁は赤山法華院で再び留住を考え、六月二十九日、「共<sub>二</sub>道玄闍梨<sub>一</sub>、入<sub>コ</sub>来客坊<sub>一</sub>、商<sub>コ</sub>量留住之事<sub>一</sub>。」（小野二、六三頁）とあり、道玄と留住について相談を行っている。

そして、七月十四日の朝、「辞<sub>二</sub>山院<sub>一</sub>、到<sub>二</sub>舶船処<sub>一</sub>。在<sub>二</sub>岸頭<sub>一</sub>、共<sub>二</sub>戒明法師及栗録事、和録事<sub>一</sub>辞別。」（小野二、六四―六五頁）とあり、円仁は赤山法華院を下りて戒明法師・栗田録事・和氣録事と辞別している。「辞別」したということは、当初円仁の残留に否定的であつた第二舶の遣唐使らが、円仁の残留を認めざるを得ず、円仁らを置いて出航する話がまとまったことを意味するのではないであろうか。

以上見てきた中で、『巡礼記』には栗田録事に『承和五年目録』を託したことについての記述は見られなかったが、先行研究では高橋氏が「第二舶出航の前夜、円仁は栗田録事に別れを告げに船に戻つて、その際に作成し

た目録、すなわち『承和五年目録』を託したと考えられるのである。」（高橋、四頁）と述べている。本目録を作成した四月二十日以降六月十日までの間、栗田録事と船上ないし赤山にて多く行動を共にしており、七月十四日に『承和五年目録』を託したと断定はできないが、七月十四日が円仁と栗田録事の最後の面会の日であったことを考えると、この日に『承和五年目録』を託した可能性は高いであろう。この時、円仁は自らに代わって『承和五年目録』を無事延暦寺に送り届けてもらおうよう頼んだのではないかと推測される。

しかし、七月十六日条には、「早朝從<sub>二</sub>彼山院<sub>一</sub>下、在<sub>レ</sub>路聞<sub>二</sub>人導<sub>一</sub>、船舶昨日發去。到<sub>二</sub>泊船処<sub>一</sub>、覺<sub>レ</sub>船不<sub>レ</sub>見。暫住<sub>二</sub>岸頭<sub>一</sub>。赤山院衆僧共來慰問。（中略）院裏老少深怪被<sub>二</sub>抛却<sub>一</sub>、慰問慇懃。」（小野二、六七頁）とあり、早朝山院を下りると、路上で第二船が昨日出航したとの情報を耳にし、船着場に行くと第二船の姿はなく、赤山院の僧等に慰問されたと記している。この文章からは、第二船が円仁の知らぬ間に出航もしくは遭難したかのように受け取れ、あるいは予定していた出航であったのか真相は分からないが、十四日に辞別している以上、近いうちに出航することは円仁も遣唐使との話で分かっていたであろう。円仁の留住計画は、このような形で無事成功したのである。そして、次の記事である七月二十一日条によれば、「本国相公已下九隻船來、泊<sub>二</sub>此赤山浦<sub>一</sub>。即遣<sub>二</sub>惟正<sub>一</sub>起<sub>二</sub>居相公<sub>一</sub>、兼諮<sub>二</sub>諸判官・録事等<sub>一</sub>。相公差<sub>二</sub>江權博士栗田家繼及射手左近衛丈部貞名等<sub>一</sub>、慰<sub>二</sub>問請益僧<sub>一</sub>、兼令<sub>レ</sub>問下第二船逢<sub>二</sub>危害<sub>一</sub>之事上。」（小野二、六九頁）とあり、遣唐大使以下九隻の船が赤山浦に現れ、常嗣が遣わした栗田家繼等と再会した円仁は、第二船が危害に遭ったことについて尋ねられている。この危害とは、先述した六月二十三日条の「舶当<sub>二</sub>羸磯<sub>一</sub>、悉已破損。」（小野二、五七頁）を指すものと見られる。

#### （４）「円仁書」の委託

次に、上述した「円仁書」について、円仁はいつ遣唐使に託したのであろうか。高橋氏は、七月二十一日に「円

仁書」を託したと考え、その内容は「入手した經典類の目録を作成したが、それは第二船の栗田録事に託してある」と、目録が經典類とは別便に託されていることを説明したものであった。第二船が日本に着くかどうか疑念が大きくなった以上、延暦寺に対して何らかの説明の必要を感じたのであろう。したがって、この時の書簡が『在唐送進録』に見える「円仁の書」であると考えられる。栗田家嗣(マ)にこの書簡を託したことは『行記』には見えないが、目録の内容、日付、そして遣唐使一行の帰国の際の動向から考えて、このように理解するのがもつとも妥当であろう。」(高橋、五頁)と述べている。

この時「円仁書」を栗田家継に渡したとすれば、『巡礼記』に記録されていても良いはずであるが、そのような記述は見当たらない。しかも、すでに見たように、第二船栗田録事との合流以降彼に「其目録」を託したのであり、それが『承和五年目録』であつたとすると、目録が完成した四月二十日以降、栗田録事と辞別する七月十四日の間に目録を栗田録事に託し、その後遣唐使の誰かに「円仁書」を託したのではないであろうか。「誰か」と述べたのは、『巡礼記』開成四年三月二十三日条で明確に栗田家継に消息を託したと記しているのと異なり、明記がなく栗田家継とは断定できないためである。しかし、①以前にも彼に書簡を渡していること②有能な画師として円仁の信頼が少なからずあつたという二点から、栗田家継を適任と見て彼に「円仁書」を渡した可能性は高いであろう。上記の内容を以下にまとめると、四月五日、遣唐使第八船に求得の法門類を託し、その後は推測であるが七月十四日遣唐第二船の栗田録事に『承和五年目録』を、開成四年(八三九)七月二十一日に帰国へ向かう新羅船九隻のうち第二船の栗田家継に「円仁書」を託したと考えておきたい。

#### (5) 『在唐送進録』の撰述と『承和五年目録』の将来

次に、これら将来物と書簡がいつ日本に到着したかについて見てみよう。『続日本後紀』承和六年(八三九)八

月甲戌(二十五日)条に、

勅ニ参議大宰権帥正四位下兼左大弁藤原朝臣常嗣、大式從四位上南淵朝臣永河等一、得ニ今月十九日奏状一、知下遣唐大使藤原常嗣朝臣等率ニ七隻船一廻<sup>中</sup>着肥前国松浦郡生属嶋上。(『新訂増補国史大系 続日本後紀』九〇頁)

とあり、承和六年八月十九日、藤原常嗣率いる七隻の遣唐使船が肥前国松浦郡に廻着しており、「円仁書」と求得の法門類はその後比叡山に送り届けられたのである。

『在唐送進録』の作成年月日が承和七年一月十九日であることから、延暦寺の僧らは将来物を受け取った当初「円仁書」に記された円仁の戒めを守り、送り届けられた皮箱に納められた經典類を開封することはなかったと考えられる。しかし、高橋氏が指摘したように、将来目録とは入唐求法の公的な成果報告書であり、円仁の入唐求法の成果を朝廷に報告する必要がある、自筆の目録が届いていないために延暦寺側で作成する必要があったのであろう。

そこで、開封を禁じられていた皮箱も含めて将来物の中身を確認し、円仁が梱包したままの状態で九帙の中身を目録化したのが『在唐送進録』であると考えられる。このため、『承和五年目録』との配列が異なっており、またその内容も相違が見られ、『在唐送進録』(青蓮院本)にはなく『承和五年目録』(青蓮院本)に記載されている書目を挙げると、次のように五十一点見られる。

金剛頂蓮華部心念誦儀軌 二卷

観自在菩薩如意輪念誦儀軌 一卷 (『在唐送進録』の活字本にあり)

唐梵両字一切仏心真言 一本

唐梵両字一切仏心中真言 一本

唐梵兩字灌頂心真言 一本  
唐梵兩字灌頂心中心真言 一本  
唐梵兩字結界真言 一本  
唐梵兩字秘密心真言 一本  
唐梵兩字秘密心中心真言 一本  
唐梵兩字大仏頂結護 一本  
唐梵兩字大随求大結護 一本  
唐梵兩字大随求結護 一本  
唐梵兩字天龍八部讚 一本  
唐梵兩字百字讚 一本  
唐梵兩字送本尊帰本土讚 一本  
唐梵兩字弥勒菩薩讚 一本  
唐梵兩字觀自在菩薩讚 一本  
唐梵兩字虚空藏菩薩讚 一本  
唐梵兩字金剛藏菩薩讚 一本  
唐梵兩字文殊師利菩薩讚 一本  
唐梵兩字普賢菩薩讚 一本  
唐梵兩字除蓋障菩薩讚 一本  
唐梵兩字地藏菩薩讚 一本  
唐梵兩字滿願讚 一本

唐梵両字毗盧遮那成仏神變加持經古慶伽陀讚 一本  
 浄名經集解関中疏 四卷 道液集  
 法華經銷文略疏 三卷 天長寺釈延秀集解  
 因明糝抄 三卷 章敬寺擇隣述（『在唐送進録』の活字本にあり）  
 観心遊心口決記 一卷 智顗述  
 観心十二部經義 一卷 灌頂述  
 形神不滅論 一卷 海雲撰  
 法華三昧修証決 一卷  
 天台智者大師所著經論章疏科目 一卷  
 鳩摩羅什法師随順修多羅四悉檀義不墮負門 一卷  
 四戒戒并大小乘戒決 一卷  
 天台大師答陳宣帝書 一卷  
 天台略録 一卷  
 智者惕松讚 一卷  
 天台智者大師十二所道場記 一卷  
 歎道俗徳文 三卷  
 唐故大広禅師大和楞伽峯塔碑銘并序 一卷  
 唐故大律師釈道円山龕碑并序 一卷 李邕  
 大唐大慈恩寺翻經大徳基法師墓誌銘并序 一卷  
 大慈恩寺大法師基公塔銘并序 一卷

唐故終南山靈感寺大律師道宣行記 一卷

大唐西明寺故大德道宣律師讚 一卷

天台大師答陳宣帝書 一卷

大唐新修定公卿士庶內族吉凶書儀 三十卷 鄭餘慶重修定

開元詩格 一卷 除隱泰字肅然撰

詩集 五卷

舍利五粒 菩薩舍利三粒辟支仏舍利二粒盛白蠟小合子并安置白石瓶子一口

このうち、梵漢両字の真言・讃が二十三部と最多であり、他に天台関係の書や外典などもあるが、『在唐送進録』が届けられた現物を確認して作成されたと考えられる以上、上記の物は遣唐使に託して送り届けられることはなかったといえるのではないであろうか。ここから先は推測の域を出ないが、『承和五年目録』と比べて『在唐送進録』に書目の欠落が見られる理由として、円仁が遣唐使第二船に法門類を積み込んだ開成四年（八三九）三月十七日から『承和五年目録』を作成した同年四月二十日の間に求得した物も含まれる可能性もあるが、帰国に向かわんとする状況下であり入手の機会は少なかつたと考えられる。

可能性として考えられることは、円仁が法門類を籠に納めた時点で、実は全ての将来物を入れなかったのではないかということである。梵漢の真言などは各々一本であり、それがどのような形態の書物であったのかは定かではないが、經典類と異なり、唐梵両字の讃は内容的に短い物で持ち運びが容易な書物であったと想像される。また、『大唐新修定公卿士庶內族吉凶書儀』三十巻などは、厳格な唐政府において外国人が滞在を継続するためには、役人との書状の往還が必須であつた状況で必携書であつたと考えられ、手元に所持していたのではないかと思われる。そして、上記の中に将来物の中でも信仰上きわめて重要度が高い「舍利五粒 菩薩舍利三粒辟支仏



舍利二粒盛白蠟小合子并安置白石瓶子一口」が含まれていることが注目され、自ら大切に保持していた可能性が考えられる。

また、法門類を預けた遣唐使船が無事本国に帰還できるという保証はなく、遭難して荒波に吞まれる可能性も高く、遣唐使に全ての将来物を託さなかったことが考えられ、また密かに天台山行きを計画していた円仁は、留住に際して必要な物に絞って手元に残し、弟子僧や従者と分担して携行した可能性も考えられる。

そして、これら『在唐送進録』に記載されていない将来物が『新求目録』に記載されているということは、結果としては将来できた物であろう。しかし、『新求目録』は全ての将来物を記していないことを示唆している史料があり、その史料とは、『前唐院第一御厨子宝物実録』である。<sup>69</sup>この中に、

（小塗箱）一口 納雑物

五臺山石 五裹

北臺土 一裹

とあるのは、円仁三目録に見えず、また、「大塗管 一合 納道具並雑物」に、三鈷鈴などとともに「象牙笛 一管」があるが、これも将来目録に記載されていないものの、五台山より「水鳥樹林所唱七五三等之妙曲」を、この笛をもって叡山に移したと伝えているものである。円仁の求法の成果の一つである五会念仏の将来に際して、この象牙笛が重要な意味を持つ法具であり、手元に置いてあえて求得の一覧に加えなかったのではないであろうか。

さて、『承和五年目録』を載せた粟田録事らの乗る第二舶は、『続日本後紀』承和七年四月八日癸丑条に、「大宰府上奏、遣唐知乗船事菅原梶成等所<sub>レ</sub>駕第二舶廻<sub>二</sub>着於大隅国<sub>一</sub>。」（『新訂増補国史大系 続日本後紀』一〇〇頁）とあり、同年四月庚申十五日条に、

得<sub>二</sub>今月八日飛駟奏状<sub>一</sub>、知下遣唐知乗船事菅原梶成等分<sub>二</sub>駕一隻小船<sub>一</sub>、廻<sub>二</sub>着於大隅国海岸<sub>上</sub>。梶成等漂<sub>二</sub>入

異域<sup>一</sup>、万死更正。(中略) 又准判官良峯長松所<sup>レ</sup>駕之船、全否未<sup>レ</sup>期。」(『新訂増補国史大系 続日本後紀』一〇〇頁)

とある。また同年六月十八日壬戌条に、「大宰府馳<sup>レ</sup>駟奏、遣唐第二船准判官從六位下良岑朝臣長松等廻<sup>レ</sup>着大隅国<sup>一</sup>。」(『新訂増補国史大系 続日本後紀』一〇六頁)とあり、第二船は菅原梶成と良岑長松率いる二隻の小船に分かれて乗り、梶成らの船は一旦異国に漂着した後、それぞれ大隅国に着いている。『承和五年目録』は、このような波乱に富んだ長旅の末に延暦寺へ届けられたのである。

## (6) 『新求目録』の撰述経過

最後に、第三の『新求目録』については、円仁はその末尾に次のように述べている。

以<sup>レ</sup>三前件経論教法章疏伝記及諸曼茶羅壇樣等<sup>一</sup>、伏蒙<sup>二</sup>国恩<sup>一</sup>随<sup>レ</sup>使到<sup>レ</sup>唐。遂於<sup>二</sup>揚州五臺及長安等处<sup>一</sup>尋<sup>レ</sup>師学<sup>レ</sup>法九年之間随<sup>レ</sup>分訪求得者。謹具<sup>二</sup>色目<sup>一</sup>如<sup>レ</sup>前。謹録申上謹言。

承和十四年月日入唐天台請益伝灯法師位円仁上

承和十四年(八四七)の何月に作成されたものであるかは記されていないが、このことについて石田尚豊氏は、「またこの目録の年時が「承和十四年月日」と記され、月日が漠然としていることは、粗稿は一応出来上がっていたと思われるが、博多到着後十二月までの長期にわたって作成したためであろう。」(石田、二〇〇頁)と述べている。

同年九月十八日、鴻臚館前に到着した円仁は、『巡礼記』承和十四年十月十九日条には、「太政官符来<sup>二</sup>大宰府<sup>一</sup>。円仁五人速令<sup>二</sup>入京<sup>一</sup>、唐人金珍等卅四人仰<sup>二</sup>太宰府<sup>一</sup>、量加支給者。官符在<sup>レ</sup>別。」(小野四、三二五頁)とあり、円仁らに速やかなる帰京を促す太政官符が大宰府に届いている。しかし、『巡礼記』が同年十二月四日、比

叡山より円仁を迎えに來た弟子南忠の到來までを記して筆を置いていることから、円仁はこの後十二月まで太宰府に留まっております。円仁の帰朝は翌年の承和十五年（八四八）三月二十六日のことであつた。<sup>70</sup>

円仁が太政官符を受けながら、大宰府に留まっていたのはなぜであつたのであろうか。この間、大山寺の竈門大神（十一月二十八日条）、住吉大神（十一月二十九日条）、筑前名神（十二月一日条）、香春名神（十二月二日条）、八幡菩薩（十二月三日条）と、諸社神への奉謝の転読を行っており、そのかたわら将来物の整理を行い、『新求目錄』の作成に取り掛かっていたと考えられる。円仁にとつて、入唐求法の成果報告書としての『新求目錄』の完成、それに加えて入唐求法を達成し、無事日本に帰還できたことに対する感謝を込めての諸社神への転読を行うことが優先であり、それらを終えるまでは帰朝することはできなかったのであろう。

『新求目錄』の構成は、①長安求得 ②五台山求得 ③揚州求得 となつてゐるが、入唐求法の順に沿つて③↓②↓①の構成にならなかつたのは、「新たに求むる目錄」というその題名が記しているように、求得の年月が新しい長安・五台山求得分を先に記そうとしたと思われる。

そして、すでに将来物と目錄を延暦寺に送り届けて久しい揚州求得分は、手元に『承和五年目錄』か『在唐送進錄』の写しがあれば書けないはずであるが、『新求目錄』と『承和五年目錄』・『在唐送進錄』を比較すると、『新求目錄』の内容は『承和五年目錄』とほぼ一致している。円仁は、求法を終えるまで『承和五年目錄』の写しを自らも所持していたのではないであらうか。あるいはまた、大宰府滞在時の十一月七日、叡山より到來した三名の僧侶（上座仲暁、師僧慈叡、僧玄暁）に依頼して『承和五年目錄』を持参させた可能性も考えられるであらう。

## 結語

本章では、最澄による比叡山開創に遡って考察したが、青年時代の最澄は華嚴宗の典籍を通して天台の教えに出会い一乗止観院（根本中堂）を創建し、また入唐前には真言密教へ関心を抱いていたことが知られた。そして、還学僧として赴いた唐では天台山を中心地として天台法門を学び、越州にて密教受法も果たし、帰国後に止観・遮那両業の年分度者を設置し、天台宗の確立を図るが、空海が長安の密教を将来したことで遮那業は劣勢に置かれ、天台教学と真言密教の課題解決は円仁の入唐を待たねばならなかった。

遣唐使の派遣に伴い、円仁が入唐請益僧に選出された背景には、生前の最澄より請益僧の人選を託された座主円澄からの付嘱があり、円仁の入唐の目的は、天台教団より課せられた教学上の疑問を解決することが第一であったと考えられる。そして、止観業の学生として長年研鑽を積んだ円仁自身の入唐の目的は、最澄入唐の足跡である天台山にて天台法門を学ぶことであつたと考えられる。天台山国清寺行きを直指して揚州に滞在する間、揚州にて天台、密教典籍を中心に経論章疏の蒐集に励んでおり、揚州では約百四十部の経論章疏のうち半数近くが密教典籍であることから、円仁が天台密教の確立のために真言密教も求法の要点として考えていたことが明らかとなった。

しかし天台山行きの勅許は下りず、開成四年（八三九）二月二十一日、帰国が決定した遣唐使とともに揚州を後にした円仁は、二十四日楚州にて大使藤原常嗣より改めて台州行きの勅許が下されなかった件を知らされ、二十六日全雅より曼荼羅作画指導を受けて三月五日に完成させているが、この間再度留住を思案していたと考えられる。常嗣に「可ニ留住ニ状」を提出した同五日から乗船前夜の十六日の間、違勅の罪を蒙っても留住する決意を固めた円仁は、求得の法門類を調べて『承和目録』の草稿を作成した上で、将来物を積載に適した形に編成し、

十七日第二船に運び込んだ。二十二日第二船に乗り、劉慎言との残留工作がまとまった翌日の二十三日、栗田家継に台州へ赴くため留住する旨を記したと推測される延暦寺宛の消息を渡したが、四月二日、遣唐使船は急遽東海山から日本へ向けて渡海することが決定した。そこで、唐残留を決行するため荷物を第八船に残して自らは下船した。しかし、円仁一行の存在は現地人に発覚し、十日県役人の指示により第二船に乗船した円仁は、携行していたと想像される『承和目録』の草稿に基づき、山東半島を北上中の船上で『承和五年目録』を清書し、二十日に完成させたと考えられる。そして、赤山上陸後の七月十四日に至るまでの間、栗田録事に『承和五年目録』を託したが、十六日の朝第二船が昨夜出港したことを知った円仁は、遣唐使九隻が赤山浦に停泊した二十一日、赤山法華院を訪ねてきた第二船の栗田家継に対して『承和五年目録』が第二船栗田録事に託してあることや、開封を禁じた經典類の内訳と、経巻類は別便にあり、自らは大陸に留住することについての事情を記した「円仁書」を渡したと推測される。經典類と書簡は約一ヶ月後に日本へ届けられ、『承和五年目録』は翌年延暦寺に到着したのであった。しかし、『承和五年目録』の到着が遅れたため、延暦寺の僧らによって円仁将来物の内容が確認され『在唐送進録』が作成された。揚州求得の目録が二種存在しているのは、このような事情によると考えられる。

総目録である『新求目録』については、博多に滞在中の円仁によって承和十四年(八四七)九月から十二月の間に長安及び五台山将来物を整理して記され、揚州求得については『承和五年目録』を参照して記し、帰朝後速やかに朝廷へ報告すべく作成されたものと考えられる。

これら将来目録に記載の経論章疏などの詳細については、第二章で見えていくこととしたい。

1 遣唐使の派遣回数について、木宮泰彦『日華文化交流史』（富山房、一九五五年）、森克己『遣唐使』（至文堂、一九五五年）、東野治之『遣唐使船』（朝日出版社、一九九九年）などにおいて様々な回数が提示されているが、上田雄『遣唐使全航海』（草思社、二〇〇六年）で提唱されている十五回説が実際に入唐した回数として妥当であると考えられ、本稿では上田氏の説を採用し、承和の遣唐使を第十五次とした。

2 『入唐求法巡礼行記』は四巻四冊から成り、円仁の自署を有しており、その成立年代は不詳とされている。写本は、東寺観智院伝来の兼胤による写本が最も知られており、『続々群書類従』一二、『大日本仏教全書』遊方伝叢書として活字化され、大正十五年（一九二六）東洋文庫からの複製本が出ている。この兼胤の写本は、第四帖の奥書によると正応四年（一二九一）七十二歳の兼胤が、京都の長楽寺で書写したものであり、一九五二年国宝に指定された。さらに別筆で書かれた奥書によると、その題字は東寺観智院第二代賢宝（一三三三—一三九八）の自筆であることが知られ、国宝・重要文化財目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録 美術工芸品編』上巻（ぎょうせい、一九九九年）四九七頁によると、東寺観智院を経て、現在は安藤積産合資会社（栃木県）が所有している。校訂本は、兼胤写本を底本とした小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』全四巻（鈴木学術財団、一九六四—一九六九年）があり、足立喜六氏が東寺観智院所蔵の影印本に訳注を施し、小野氏の校訂を踏まえて塩入良道氏がさらに補訂・補注を加えた『入唐求法巡礼行記』全二巻（平凡社、一九七〇—一九八五年）も出版されている。本稿では、『巡礼記』の原文を小野氏の校訂本に依って記した。

3 佐藤哲英「仏典の蒐集整備に関する伝教・慈覚・智証三大師の態度について」（『仏教学報』二号、一九三九年）二五—四五頁。

4 福井康順編『慈覚大師研究』（天台学会、一九六四年）九一—九六頁。

- 5 福井康順編、前掲書4、六八九―七〇三頁。
- 6 石田尚豊「円仁の揚州求法について」（『空海の帰結―現象的史学―』中央公論美術出版社、二〇〇四年、一九一―二二五頁。
- 7 高橋聖「遣唐僧による請来目録作成の意義―円仁の三種の請来目録を中心に―」（『史学研究集録』第二六号、二〇〇一年、一一―一六頁。
- 8 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』（鈴木学術財団、一九六九年）。
- 9 『叡山大師伝』は、最澄の生誕から入滅後の戒壇建立などに至るまで記録された最澄の伝記史料であり、撰者である一乗忠は、従来最澄の高弟仁忠であるとされてきた。しかし、先学の間で様々な問題提起が行われ、近年の論考である桑谷祐顕「『叡山大師伝』撰者考」（『天台学报』第五二号、二〇一〇年）において、山口光円氏・福井康順氏・佐伯有清氏ら先行研究を整理した上で、最澄撰『内証仏法相承血脈譜』（『伝教大師全集』第一巻、二四七頁）などによって撰者を最澄の弟子真忠と推定している。
- 10 『天台小止観』一卷は、『摩訶止観』十巻と並ぶ天台智顗の代表著作であり、止観法門の要義が説かれている。最澄の『願文』に見える愚、狂の語は、以下のように『天台小止観』に現れており、その影響を深く受けていたと考えられる。  
偏修ニ禅定福德<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>学ニ智慧<sup>二</sup>、名<sup>レ</sup>之曰<sup>レ</sup>愚。偏学ニ智慧<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>修ニ禅定福德<sup>二</sup>、名<sup>レ</sup>之曰<sup>レ</sup>狂。（『大正蔵』四六、四二六頁b）。
- 11 園城寺編纂『智証大師全集』中巻（園城寺事務所、一九一八年）七〇一頁。
- 12 最澄がいつどこで密教と出会ったかについて、清田寂雲「伝教大師と密教―その出会い―」（『叡山学院研究紀要』第七号、一九八四年）によると、最澄が入唐前比叡山において得清大徳将来の『大日経義釈』を披見した時を密教との出会いであるとし、最澄の密教観である「円密教、其斉等」の骨子はすでに入唐前に成立していたと結

論づけている。

13 『叡山大師伝』（『伝全』五、附録一一頁）。

同年九月七日、主上見<sub>レ</sub>知<sub>下</sub>天台教迹特超<sub>二</sub>諸宗<sub>一</sub>、南岳後身聖德垂<sub>上レ</sub>迹。便思<sub>下</sub>欲興<sub>二</sub>隆靈山之高迹<sub>一</sub>建<sub>下</sub>立天台之妙悟<sub>上</sub>、詔<sub>二</sub>問和氣祭酒<sub>一</sub>。祭酒告<sub>二</sub>和上<sub>一</sub>、和上与<sub>二</sub>祭酒<sub>一</sub>、終日与<sub>二</sub>議弘法之道<sub>一</sub>。

14 桓武天皇は在位中、特に延暦年間多数の仏教に関する詔勅を出しており、出家者の統制については、『続日本紀』

延暦四年（七八五）五月二十五日条の

勅曰、出家之人本事<sub>二</sub>行道<sub>一</sub>。今見<sub>二</sub>衆僧<sub>一</sub>、多乖<sub>二</sub>法旨<sub>一</sub>、或私定<sub>二</sub>檀越<sub>一</sub>、出<sub>下</sub>入閭巷<sub>一</sub>、或誣<sub>下</sub>称仏験<sub>一</sub>、誑<sub>下</sub>誤愚民<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>唯比丘之不<sub>レ</sub>慎<sub>二</sub>教律<sub>一</sub>、抑是所司之不<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>捉溺<sub>一</sub>也。不<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>嚴禁<sub>一</sub>、何整<sub>二</sub>緇徒<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>今以後、如有<sub>二</sub>此類<sub>一</sub>、擯<sub>下</sub>出外国<sub>一</sub>、安<sub>下</sub>置定額寺<sub>一</sub>。（黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 続日本後紀』吉川弘文館、一九七七年、五〇八頁。）

が挙げられる。これら桓武天皇の仏教政策については、朝枝善照「桓武朝廷延暦年間の仏教政策について」（『龍谷史壇』第七〇号、一九七五年）に詳しい。

15 「入唐勅宣 尺書資治表」（『伝全』五、附録一〇七頁）。

勅曰、最澄闍梨、久居<sub>二</sub>東山<sub>一</sub>、既探<sub>二</sub>法華奥旨<sub>一</sub>。早踰<sub>二</sub>西海<sub>一</sub>、宜<sub>レ</sub>伝<sub>二</sub>天台教文<sub>一</sub>。唯其往還、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>期。

16 『伝全』五、附録一三一—一四頁には、次のように見えている。

当年得度沙弥義真、幼学<sub>二</sub>漢音<sub>一</sub>、略習<sub>二</sub>唐語<sub>一</sub>。少壮聡悟、頗涉<sub>二</sub>經論<sub>一</sub>。仰願殊蒙<sub>二</sub>天恩<sub>一</sub>、僣從之外、請<sub>二</sub>件義真<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>求法訳語<sub>一</sub>、兼復令<sub>レ</sub>学<sub>二</sub>義理<sub>一</sub>。

義真の得度の年については、『天台座主記』によると、「師主 伝教大師 大学衆出家入道青本生年二十六」（『座主記』五頁）とあり、没年が五十五歳の天長十年（八三三）であり（『座主記』八頁）、逆算すると延暦二十三年（八〇四）に得度したことが知られる。



17 『日本紀略』延暦二十二年四月二十三日(癸卯)条。

癸卯、遣唐大使葛野麿言、今月十四日、於三難波津頭一始乗船。十六日進発、云々。廿一日暴雨疾風、沈石不レ禁。未初、風変打レ破舟一、云々。(『新訂増補国史大系 日本紀略』二七九頁)

18 『日本後紀』卷十二、延暦二十三年九月十八日(己丑)条。

去七月初、四船入レ海。而両船遭レ風漂廻。二船未レ審二到处一。即量二風勢一、定着二新羅一。(『新訂増補国史大系 日本後紀』三五頁)

19 『叡山大師伝』(『伝全』五、附録一六頁)。

(延暦)二十三年秋七月、上二第二船一、直指二西方一。於二滄海中一、卒起二黒風一。侵レ船異レ常。諸人懷レ悲、無レ有レ恃レ生。於レ是和上発二種種願一、起二大悲心一、所持舍利、施二龍王一、忽息二悪風一、始扇二順風一、未レ久着岸。名為二明州鄮県一、此台州近境也。天感二人欲一、泊船有レ便。

20 『日本後紀』卷十二、延暦二十四年六月八日(乙巳)条

臣葛野麻呂等、(中略)八月十日到二福州長溪県赤岸鎮已南海口一。(中略)第二船判官菅原清公等二十七人、去九月一日從二明州一入京。十一月十五日到二長安城一。(『新訂増補国史大系 日本後紀』四二頁)。

21 『叡山大師伝』(『伝全』五、附録一六一一七頁)には、

大唐貞元二十年九月上旬、船頭判官等上京。但和尚別向二天台山一。即明州牒送二台州一其牒詞云、句当軍将劉承規状爾得二日本国僧最澄状一、欲下往二天台一巡礼上疾病。漸可二今月十五日発一。(中略)同月下旬到二台州一。

とあり、入唐時の出来事について日付は詳細に記されていないが、国宝『伝教大師入唐牒』(延暦寺藏)によれば、九月二十六日台州に到着していることが知られる。なお『天台法華宗伝法偈』(『伝全』五、二七頁)にも、「延暦二十三年遂乗二第二船一 得レ到二大唐国一同年秋九月二十六日中 到二台州廊下一謁二刺史陸淳一」とある。

22 『叡山大師伝』(『伝全』五、附録一七頁)。

時台州刺史陸淳、延<sup>二</sup>天台山修禪寺座主僧道邃<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>台州龍興寺<sup>一</sup>、闡<sup>レ</sup>揚天台法門摩訶止觀等<sup>一</sup>。即便刺史見<sup>二</sup>求法志<sup>一</sup>隨喜云、弘<sup>レ</sup>道在<sup>レ</sup>人。人能持<sup>レ</sup>道。我道興隆今當時矣。則令<sup>三</sup>邃座主勾当写<sup>二</sup>天台法門<sup>一</sup>。纔書写已。卷数如<sup>レ</sup>別。邃和上、親開<sup>二</sup>心要<sup>一</sup>、咸決<sup>二</sup>義理<sup>一</sup>。

23 『伝全』五、附録一八頁。

自手書云、比丘僧行滿稽<sup>レ</sup>首天台大師<sup>一</sup>。(中略)忽逢<sup>二</sup>日本国求法供奉大德最澄<sup>一</sup>。法師云、親辭<sup>二</sup>聖沢<sup>一</sup>、面奉<sup>二</sup>春宮<sup>一</sup>、求<sup>二</sup>妙法於天台<sup>一</sup>、学<sup>二</sup>一心於銀地<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>憚<sup>二</sup>勞苦<sup>一</sup>、遠涉<sup>二</sup>滄波<sup>一</sup>、忽<sup>レ</sup>夕朝聞、亡<sup>レ</sup>身為<sup>レ</sup>法。觀<sup>二</sup>茲盛事<sup>一</sup>、亦何異<sup>下</sup>求<sup>二</sup>半偈於雪山<sup>一</sup>、訪<sup>中</sup>道場於知識<sup>上</sup>。且滿傾以<sup>二</sup>法財<sup>一</sup>、捨以<sup>二</sup>法宝<sup>一</sup>。百金之寄、其在<sup>レ</sup>茲乎。願得<sup>下</sup>大師以<sup>二</sup>本念力<sup>一</sup>、慈光遠照、早達<sup>二</sup>鄉関<sup>一</sup>、弘<sup>二</sup>我教門<sup>一</sup>、報<sup>中</sup>我嚴訓<sup>上</sup>。生生世世、仏種不<sup>レ</sup>断、法門眷属、同一国土、成<sup>レ</sup>就菩提<sup>一</sup>、龍華三會、共登<sup>二</sup>初首<sup>一</sup>。

24 『叡山大師伝』(『伝全』五、附録二〇頁)には八月二十七日と記す。

25 『天台法華宗年分縁起』(『伝全』一、五頁)。

請<sup>下</sup>続<sup>二</sup>將<sup>レ</sup>絶諸宗<sup>一</sup>更加<sup>中</sup>法華宗<sup>上</sup>表一首

沙門最澄言、最澄聞、一目之羅、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>鳥。一両之宗、何足<sup>二</sup>普及<sup>一</sup>。徒有<sup>二</sup>諸宗名<sup>一</sup>。忽絶<sup>二</sup>伝業人<sup>一</sup>。誠願、準<sup>二</sup>十二律呂<sup>一</sup>、定<sup>二</sup>年分度者之数<sup>一</sup>、法<sup>二</sup>六波羅蜜<sup>一</sup>、分<sup>二</sup>授業諸宗之員<sup>一</sup>、則<sup>二</sup>両曜之明<sup>一</sup>、宗別度<sup>二</sup>二人<sup>一</sup>。華嚴宗二人、天台法華宗二人、律宗二人、三論宗三人加<sup>二</sup>小乘成実宗<sup>一</sup>、法相宗三人、加<sup>二</sup>小乘俱舍宗<sup>一</sup>。(中略)延暦二十五年正月三日 沙門最澄上表

26 『日本後紀』延暦二十四年九月十七日条。

令<sup>下</sup>僧最澄於<sup>二</sup>殿上<sup>一</sup>行<sup>中</sup>毗盧舍那法<sup>上</sup>。

27 甲田有咩氏は「御請来目録」の書誌学的研究」(『高野山大学密教文化研究所紀要』四号、一九九一年)において、現存する東寺所蔵最澄手写の『御請来目録』について、「大同四年の借用記載の經典名がほぼ請来目録によってい

ることを考えれば、これ以前に伝教大師が請来目録を借覧していたと推測されるのが自然であろう。(中略)決定すべき材料を欠くが、東本の書写は一応大同四年と考えるものである。」(七九―八〇頁)と述べており、最澄は大同四年(八〇九)以前に『御請来目録』を借写したと推測している。

28 弘仁三年六月二十九日、泰範は最澄への書状の中で次のように述べており、自らの破戒行為が教団内を乱すことを理由に暇を請うている。

員外弟子泰範稽首和南。泰範常破戒意行、徒穢<sub>ニ</sub>清浄衆<sub>一</sub>、如<sub>三</sub>伊蘭臭<sub>ニ</sub>香林<sub>一</sub>、似<sub>三</sub>魚目濫<sub>ニ</sub>清玉<sub>一</sub>。□□浅生<sub>一</sub>、野菟恥<sub>ニ</sub>非少<sub>一</sub>。誠願、慙制<sub>ニ</sub>心一处<sub>一</sub>、懺<sub>ニ</sub>悔罪業<sub>一</sub>、謹請<sub>レ</sub>暇。稽首和南。

弘仁三年六月二十九日

弟子泰範

(『伝全』五、附録一三六―一三七頁。)

29 『伝全』五、四四一―四七二頁。最澄と空海の交流に関しては、佐伯有清『最澄と空海 交友の軌跡』(吉川弘文館、一九九八年)に詳しい。最澄が大同四年(八〇九)八月二十四日、空海より『十一面儀軌』(『十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經』三卷)、『千手菩薩儀軌』(『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經』一卷)の借覧を要請したことをはじめとして、両者の交流が始まったことが、現存する最澄から空海宛の手紙によって知られる。しかし、弘仁五年(八一四)二月八日の空海宛の書状に「守護国界主經一部短帖 虚空藏經一部四卷 貞元目錄初帙十卷 右經疏等、随<sub>ニ</sub>書旨<sub>一</sub>奉上如<sub>レ</sub>件。弘仁五年二月八日 高雄大阿闍梨法右」(『伝全』五、四五四頁)とあり、空海から最澄への書籍返還要求があったことが窺え、また弘仁四年(八一三)六月十九日付の泰範宛の書状においては、最澄が空海に対して『止観弘決』(『摩訶止観輔行伝弘決』一卷)の返還要求を行ったものと見られ、徐々に二人の関係に翳りが生じたことが知られている。そして、弘仁七年(八一六)二月十日を最後に、最澄が空海へ宛てた手紙は途絶えている(『伝全』五、四五〇頁)。

30 『国書総目録』第四卷(岩波書店、一九六六年)一七頁。

31 佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）一七〇―一七二頁。

32 佐伯有清、前掲書31、一八頁。

33 正二位行権大納言民部卿の推定についての先行研究をまとめると、まず鷲尾順敬氏が「慈覚大師伝研究の価値及び其古写本」（天台宗顕揚会編『慈覚大師』天台宗顕揚会、一九一四年）において源昇説を提唱し、これを和田英松氏が『皇室御撰之研究』（明治諸院、一九三三年）において批判し、福井康順氏が「慈覚大師別伝の形成」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）において源昇説を否定し源能有説を提唱した。その後所氏は「伝教大師号の成立事情」（「伝教大師研究」編集会編『伝教大師研究』早稲田大学出版部、一九七三年）において菅原道真説を提唱し、多賀宗準氏が「平安時代の高僧伝―『慈覚大師伝』を中心として―」（森克己博士古稀記念会編『史学論集 対外関係と政治文化』第二、一九七四年）において延喜十二年（九一二）以前権大納言で民部卿を兼ねた人物は道真以外に存在しないことを明確にした。

34 佐伯有清、前掲書31、一〇頁。

35 佐伯有清、前掲書31、一四一頁。

36 円仁の生育環境について、従来円仁の生家が大慈寺の檀越であったことが知られる程度であったが、佐伯有清『円仁』（吉川弘文館、一九八九年）四頁によると、鈴木真年編『百家系図』（静嘉堂文庫蔵）所収の明治期の写本である「熊倉系図」において、父の名は首麻呂と称し、都賀郡の三鴨駅長であり、大慈寺の厳堂（金堂）を建立していることなどが記されていることから、円仁一族と大慈寺の関わりの深さが指摘されている。しかし、この「熊倉系図」について、平澤加奈子「いわゆる円仁の系図について―「熊倉系図」の基礎的考察―」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二四号、二〇一四年）において検討された結果、明治期に偽造されたものではないものの、円仁の系図としての信頼性の低さが指摘されており、検討の余地があるといえる。

37 弘仁八年三月六日に行われた下野大慈山寺での円頓戒については、円仁とともに最澄より受けた徳円の「最澄授徳

円戒牒」(国宝『園城寺文書』第一巻、園城寺編、一九九八年、二二〇頁―二二一頁)によって確認することができ  
るので、徳円戒牒の一節を掲げておきたい。

一乗仏子徳円稽首和南<sup>一</sup>。諸仏足下。夫以三金□□戒<sup>一</sup>、如来円□、仏性種子、凡夫性得、今仏子徳円、弊身多□、  
得<sup>レ</sup>遇三勝縁<sup>一</sup>。謹於三下野州都賀県大慈山寺遮那仏前<sup>一</sup>、受□来金剛宝戒<sup>一</sup>。伏願慈悲施与。謹疏。

弘仁八年三月六<sup>(日九)</sup>□一乗仏子徳円 謹疏

現在伝戒師前入唐求法沙門興福寺伝燈法師位最澄 「<sup>(円珍筆)</sup>印十五」

38 智顗『摩訶止観』巻二上に、「一常坐者、出三文殊説文殊問両般若<sup>一</sup>。名為二一行三昧<sup>一</sup>。」(『大正蔵』四六、一一  
a)とあり、一行三昧とは四種三昧のうちの常坐三昧、すなわち坐禅による止観行のことを指す。

39 田村晃祐「道忠とその教団」(田村晃祐編『徳一論叢』国書刊行会、一九八六年)。

40 園城寺編『園城寺文書』第一巻(講談社、一九九八年)二二五頁。

41 雄野千部院大和上とは広智のことであると考えられており、小野勝年「円珍文書と初期天台」(『仏教芸術』一四  
九号、一九八三年)七七頁に、円澄が雄野千部院大和上へ宛てた書状が紹介されている。これについて小野氏は、  
「この書状は円澄の示寂の前年、大慈寺千部和上宛で、しかも千部院和上とは広智その人にほかならない。」と述べ  
ており、これに対して、佐伯有清氏も『慈覚大師伝の研究』(吉川弘文館、一九八六年、三五四頁)において「小野  
勝年氏が指摘した通り広智と見なして間違いない。」と述べている。

42 徳円は、『天台法華宗年分得度学生名帳』によると、「僧徳円 住山 止観業 師主大安寺伝灯満位僧 円修、興福  
寺」(『伝全』一、二五一頁)と記され、弘仁三年の年分得度者として止観業の学生であったことが分かっている。

43 日本大蔵経編纂会編『日本大蔵経』第七八、天台宗顕教章疏四(鈴木学術財団、一九七七年)一六五頁。『唐決集』  
二巻の内容に関しては、仲尾俊博『日本初期天台の研究』(永田文昌堂、一九七三年)第十章「遮那業と唐決」に詳  
しい。近年の先行研究は、本間孝継「『唐決』研究の論点と展望」(『大正大学総合仏教研究所年報』第三一号、二

〇〇八年）、本間孝継「円澄の第十一問について―最澄の教相理解との対比から―」（『大正大学総合仏教研究所年報』第三三号、二〇一一年）、本間孝継「『唐決』決答の受容態度からみえること（1）―『愍諭辨惑章』の著者安慧の場合―」（『大正大学総合仏教研究所年報』第三四号、二〇一二年）、唐決研究会「『唐決』―日本における天台教学受容過程の研究―（1）」（『大正大学総合仏教研究所年報』第三一号、二〇〇九年）、『唐決』―日本における天台教学受容過程の研究―研究会「『唐決』―『広修決答』と『維蠲決答』の比較研究（1）」（『大正大学総合仏教研究所年報』第三六号、二〇一四年）がある。

44 千田孝明「円仁入唐求法の目的について」（鈴木靖民編『円仁とその時代』高志書院、二〇〇九年）一四七―一七二頁。

45 『巡礼記』に見える夢についての記事を整理すると次のようである。

『巡礼記』開成五年（八四〇）三月十二日、黄県にて民家に宿泊し、「夢見<sub>二</sub>円澄座主<sub>一</sub>」（小野二、二九一頁）とあり、座主円澄の夢を見ている。『天台座主記』によると、円澄は承和三年（八三六）十月二十六日六十六歳で入滅しているが、この時円仁は九州で遣唐使船の進発を待つており円澄の逝去は知らなかったことになる。

次に、翌日の三月十三日、莱州（山東省煙台市）除宋村の民家に宿泊し、「夢見<sub>二</sub>義真和尚<sub>一</sub>」（同、二九三頁）とあり、今度は義真の夢を見ている。同年十月十七日条には、「於<sub>二</sub>赤山寺<sub>一</sub>夢見<sub>三</sub>買<sub>レ</sub>得秤一具<sub>一</sub>。其売<sub>レ</sub>秤人云、此是秤<sub>二</sub>定三千大千世界輕重<sub>一</sub>之秤也云々。聞<sub>レ</sub>語奇歎云々。借<sub>レ</sub>得念誦法門<sub>一</sub>」（小野三、三〇四頁）とあり、長安資聖寺にて、かつて滞在した赤山法華院の夢を見ており、三千大千世界（小千世界、中千世界、大千世界の総称）の重さを量ることのできる秤を買うというものであった。次に、同年十月二十九日条には、「開成五年十二月廿九日夜見、画<sub>二</sub>金剛界曼陀羅<sub>一</sub>到<sub>二</sub>本国<sub>一</sub>、大師披<sub>二</sub>其曼陀羅<sub>一</sub>極太歡喜。擬<sub>レ</sub>礼<sub>二</sub>拜大師<sub>一</sub>。大師云、我不<sub>三</sub>敢受<sub>二</sub>汝礼<sub>一</sub>、我令<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>汝云々。慇懃歎<sub>二</sub>喜画<sub>二</sub>曼陀羅<sub>一</sub>来<sub>上</sub>。」（小野三、三〇八―三〇九頁）と見え、長安大興善寺において元政より灌頂を受けたその日の夜、金剛界曼茶羅を描いて日本に持ち帰ったところ、先師最澄が大変喜んだという夢を見ている。

また、会昌元年（八四一）四月十五日、「睡見当寺老僧送三冊疋絹」来云、有「施主」、知「導和尚擬」作「胎藏像」、故付「布施」来云々。房裏有「俗人十人許」、相共随喜云、和尚今早作「胎藏曼荼羅」。錢物満々。無「著处」。領「得其物」。又夢有「一僧」、將「書」来云、從「五臺山」来、從「北臺」頭陀付「書」、慰「問日本和尚」、便開「封看」書。初注云、生年未「相謁」、先在「五臺」一見云々。具「問詞」、付送「来白絹帶、小刀子」。並旧極好。領「得其物」、擎喜云々。」（小野三、三七九頁）とあり、斎の後円仁は午睡をしたと見え、俗人らが錢物一杯の布施を差し出し、円仁に胎藏曼荼羅を早く制作するよう促す夢を見ており、この後間もなく胎藏曼荼羅制作を開始している。これらの夢の記事から、円仁にとって曼荼羅を制作し日本へもたらすことがきわめて重要な出来事であったことが窺える。

なお、円仁が見た夢についての先行研究は、日下部公保「慈覚大師の見た夢について―『巡礼行記』に依拠して―」（『天台学報』四七号、二〇〇四年）がある。

46 黒板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 続日本後紀』（吉川弘文館、一九七二年）五二頁。

47 『続日本後紀』承和三年五月十四日（壬子）条「四船共解「纜」発去。」（『新訂増補国史大系 続日本後紀』五三頁）

48 『続日本後紀』承和三年五月十八日（丙辰）条「夜裏大風、暴雨交切。折「樹」發「屋」。城中人家不「壊」者希。斯時入唐使舶寄「宿撰津国輪田泊」。遣「看」督近衛一人於舶处」。河水氾溢不「得」通行」。更遣「左兵衛少志田辺吉備成」問「其安危」。」（同右、五三頁）

49 『続日本後紀』承和三年七月十五日（壬午）条「大宰府馳「レ」駢言、今月二日遣唐使四舶共進發畢。」（同右、五六頁）

50 『続日本後紀』承和三年七月十七日（甲申）条「又勅「符」大宰大貳藤原朝臣広敏等」、得「今月十日飛駢奏」、知下遣唐使第一第四舶廻「着肥前国」之状上。（中略）又第二第三兩舶、疑亦或廻着。」（同右、五六頁）

51 『続日本後紀』承和四年七月二十二日（癸未）条「大宰府馳伝言、遣唐三ヶ舶、共指「松浦郡旻楽埼」發行。第一第四舶、忽遇「逆風」、流「着壹伎嶋」。第二舶左右方便漂「着値賀嶋」。」（同右、六八頁）

52 『続日本後紀』承和五年七月五日（庚申）条「大宰府奏、遣唐使第一・四舶進發。」（同右、七七頁）

53 玄応『一切経音義』巻第一・船舶の条には、「音曰二埤倉一舶大船也。（中略）舶大者長二十丈。載二六七百人一者是也。」（『大日本校訂大藏経』第三五套第一冊、三頁）とあり、『倭名類聚抄』巻一一にも「舶（中略）海中大船也。」（正宗敦夫編『日本古典全集』八一―一四巻、日本古典全集刊行会、一九三一年）一頁とあり、大船のことを舶と称したようである。

54 寛平入道撰『慈覚大師伝』（『続大全』史伝部、六二頁）

（承和）五年六月十三日、上二第一舶一。

55 足立喜六訳注・塩入良道補注『入唐求法巡礼行記』一卷（平凡社、一九七〇年）一二五―一二六頁では、二月二十七日条のことになっている。

56 小南沙月（妙覚）「円仁将来目錄の研究―『日本国承和五年入唐求法目錄』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析―」の資料①「日本国承和五年入唐求法目錄」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第一五号、二〇一六年）三七頁。

57 小南沙月（妙覚）、前掲注 56、四六頁。

58 塩入良道氏によると、録事とは「遣唐使書記官または秘書官。記録を司り随員の善悪を査察する官。」（足立喜六訳注・塩入良道補注『入唐求法巡礼行記』一、一八頁）とされている。

59 『大日本統藏経』第一輯二編五套五冊、四二二頁所収。

60 遣唐使一行が新羅船に乗って帰国したことは、『続日本後紀』承和六年（八三九）八月二十日（己巳）条に「勅二大宰大貳從四位上南淵朝臣永河等一、得下今月十四日飛駅所レ奏遣唐録事大神宗雄送二大宰府一牒状上、知下入唐三箇船嫌二本舶之不レ完。倩三駕楚州新羅船九隻一、傍三新羅南一以帰朝上。」（『新訂増補国史大系 続日本後紀』九〇頁）と見える。

61 大坂腰帶とは、小野氏によると河内の大坂山より採取された大坂石を用いて装飾された腰帶かとされている（小野



一、四五八頁註一参照。

62 この第二船とは、小野篁(八〇二―八五二)を遣唐副使として出発するはずの船であり、『続日本後紀』承和五年六

月二十二日(戊申)条の奏文に、「副使小野朝臣篁依レ病不レ能ニ進発一。」(『新訂増補国史大系 続日本後紀』七七頁)と、小野篁が病氣により進発することができなかったことが記されている。同年十二月十五日(己亥)条には、

「勅曰、小野篁、内含ニ綸旨一、出使ニ外境一、空稱ニ病故一、不レ遂ニ国命一。准コ抛律条一、可レ処ニ絞刑一。宜下降ニ死一等一、処中之遠流上。仍配コ流隱岐国一。初造レ舶使造レ舶之日、先自定ニ其次第一名レ之。非ニ古例一也。使等任レ之。各駕而去。一漂廻後、大使上奏、更復卜定。喚ニ其次第一、第二舶改為ニ第一一。大使駕レ之。於レ是副使篁怨懟。

(後略)」(『新訂増補国史大系 続日本後紀』八一頁)との勅が出ているが、副使が乗船するはずであった遣唐第二舶を第一舶と改めて乗船した大使藤原常嗣に対して、篁が怨みを持つて病氣と称し入唐を拒んでおり、そのため第一・第三・第四船とともに出航することができなかったようである。『巡礼記』開成三年(八三八)九月十一日条に、「聞、副使不レ来、留コ住本国一。但判官藤原豊並為ニ船頭一。」(小野一、二〇八頁)と見え、副使不在の第二舶は藤原豊並を船頭として唐に向かっている。

63 石田尚豊、前掲注 6。

64 高橋聖、前掲注 7。

65 将来物は、開成四年(八三九)二月十七日第二船に積み込んでおり、この時円仁は下船と同時に将来物を第二船から第八船へ移動させたと考えられる。

66 小南沙月(妙覺)、前掲注 56、三七頁。

67 小野末嗣について、『続日本後紀』承和四年(八三七)九月二十一日(辛巳)条に、「筑前権守従五位下小野朝臣末嗣、遣唐判官従五位下長岑宿禰高名並為ニ次官一。」(『新訂増補国史大系 続日本後紀』六九頁)と見えており、承和四年当時筑前権守であり、円仁とともに入唐した長岑宿禰高名の次官であった。

『巡礼記』には、他に以下のような張宝高の記事が見られる。

開成四年六月二十七日条「聞張大使交関船二隻、到旦山浦。」（小野二、五九頁）

開成五年二月十七日条では、円仁が張宝高へ宛てた書状の内容が記されており、小野末嗣より預かった書状の件の前に、次のような文面が見られる。

兼以書一封、同贈張大使。其状如左。披展改歳、德音希聞、勤積増深。春景已暄。伏惟押衙尊体康裕。即此円仁蒙恩、隔以雲程、不獲覲謁。瞻瞩日深、欽詠何喻。円仁留住山院、多幸過年。厚蒙衆僧仁德、殊慰旅情。斯乃押衙慈造矣。庇蔭広遠、豈以微身能酬答乎。深銘心骨、但増感媿。先蒙芳旨、開春、從漣水、專使賜船、送達淮南者。近聞臺山靈跡、不任追慕。円仁本意、專尋尺教。幸聞聖境、何得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>赴。縁有<sub>二</sub>此願<sub>一</sub>、先向<sub>二</sub>臺岳<sub>一</sub>。既違誠約、言事不諧、深愧高情。還恐所遣使人、空致<sub>二</sub>勦勞<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>賜怪責。求法已後、却<sub>二</sub>歸赤山<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>清海鎮<sub>一</sub>、轉向<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>。伏望參張大使、具陳事情。円仁却迴、略計明年秋月。若有<sub>二</sub>彼方人船往來<sub>一</sub>、請垂高命、特令尋看。僧等歸郷、專憑鴻救。不任勤仰之至。謹留空狀代申。不宣。謹状。

開成五年二月十七日 日本国求法僧伝灯法師位円仁

（小野二、二〇一—二〇二頁）

これによると、円仁は五台山で求法した後赤山に戻り、来年の秋に清海鎮より帰国に向かうことを計画しており、帰国船などの援助を張宝高に依頼している。

また、会昌五年（八四五）九月二十二日条には、「新羅人還俗僧李信恵、弘仁未載、到日本国太宰府、住八年。須井宮為筑前国太守之時、哀恤斯人等。張大使、天長元年、到日本国、廻時付<sub>レ</sub>船、却<sub>二</sub>歸唐国<sub>一</sub>。今見居<sub>二</sub>在寺莊<sub>一</sub>、解<sub>二</sub>日本国語<sub>一</sub>、便為<sub>二</sub>通事<sub>一</sub>。」（小野四、二四〇頁）

とあり、張宝高が天長元年（八二四）太宰府に来ていたことが分かる。

次に、『続日本後紀』には、以下のような張宝高に関する記述が見られる。

『続日本後紀』承和七年（八四〇）十二月二十七日（己巳）条

大宰府言、藩外新羅臣張宝高、遣<sub>レ</sub>使献<sub>二</sub>方物<sub>一</sub>。即從<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>追却焉。為<sub>三</sub>人臣無<sub>二</sub>境外之交<sub>一</sub>也。（『新訂増補国史大系 続日本後紀』一一三頁）

『続日本後紀』承和九年（八四二）正月十日（乙巳）条

新羅人李少貞等四十人到<sub>二</sub>着筑紫大津<sub>一</sub>。大宰府遣<sub>レ</sub>使問<sub>二</sub>来由<sub>一</sub>。頭首少貞申云、張宝高死。（中略）宝高去年十一月中死去。（中略）宝高存日、為<sub>レ</sub>買<sub>二</sub>唐国貨物<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>絶付贈。可<sub>二</sub>報獲<sub>一</sub>物。其数不<sub>レ</sub>尠、正今宝高死。（『新訂増補国史大系 続日本後紀』一二八頁）

これによると、張宝高は承和七年十二月、大宰府に来て方物を献上したこと、承和九年正月十日筑紫大津にやって来た新羅人四十人が張宝高の死を伝えていることが窺える。

69 『前唐院第一御厨子宝物実録』については、佐藤哲英「前唐院見在書目録について」（福井康順編『慈覚大師研究』早稲田大学出版部、一九六四年）でその詳細を紹介されている。

70 『続日本後紀』承和十五年三月二十六日（乙酉）条

天台宗入唐請益僧円仁、将<sub>二</sub>弟子僧性海惟正等<sub>一</sub>、去年十月駕<sub>二</sub>新羅商船<sub>一</sub>、来<sub>二</sub>着鎮西府<sub>一</sub>。是日帰朝。」（『新訂増補国史大系 続日本後紀』二〇九頁）

## 第二章 円仁将来三目録の書誌学的考察と将来物の概要

### 序言

第一章では、円仁三目録の撰述背景について考察を行ったが、これら三目録にはいかなる将来物が記載されているのだろうか。三目録の内容は、周知のように『大正新脩大藏經』第五五巻及び『大日本仏教全書』第九五巻に収録されている活字本で窺うことができる。しかし、これら活字本が底本とした写本は近年のものであり、信頼できる古写本を確認する必要がある。そこで、筆者は三目録の現存諸本やその写真版を可能な限り閲覧あるいは収集し、現存最古の写本である天台宗門跡青蓮院（京都市東山区粟田口）に伝来の「青蓮院本」を底本として三目録の全文翻刻を行い、加えて他本との異同を調べる校勘の基礎的作業を行った。本章では青蓮院本を底本とする諸本校勘の成果を明らかにするとともに、将来目録に見られる書目など将来物の具体的な内容についても概説しておきたい。

### 第一節 『日本国承和五年入唐求法目録』の書誌学的考察と将来物の概要

#### (1) 『日本国承和五年入唐求法目録』の諸本の概要

円仁三目録の諸本の概要については、すでに石田尚豊氏<sup>1)</sup>によって取り上げられているので、石田氏の論考を踏まえつつ、筆者が新たに再確認及び再検討した内容も含めて諸本の概要について考察しまとめておきたい。

まず、唐開成四年（八三九・承和六年）四月二十日、中国山東半島を航海中の円仁によって作成された『承和五年目録』の現存諸本は次の通りである。

（イ）京都青蓮院門跡吉水藏旧藏の青蓮院本（現京都国立博物館蔵本）

現在は独立行政法人国立文化財機構が所有し、京都国立博物館に保管されており、一九七九年に「円仁入唐求法目録」の名称で重要文化財に指定された<sup>2</sup>。体裁は縦二七・二糎、横一〇八五・〇糎であり、一紙二十二行かなる経紙二十九枚をつないだ卷子本であると見られる。表紙には「求法目録在唐前唐院本南第十一」とあり、奥書に「嘉保二年七月十六日於二南陽御房一書了。前唐院之本之写得也云。」と記されていることから、嘉保二年（一〇九五）七月十六日に「前唐院」の写本を書写したものであることが分かる。比叡山東塔に現存する前唐院には、円仁がもたらした経論章疏のうち、最澄創建の一乗止観院根本経蔵に納められていた顕教文献及び法華総持院真言蔵に所蔵されていた密教文献が天元三年（九八〇）頃に移されたとされており、これら円仁蔵書の中に将来目録の写本も含まれていたことは当然のことであろう。

しかし、比叡山東塔南谷の南溪蔵に現存している、嘉保二年（一〇九五）六月に第三十七世天台座主一乗坊仁覚（一〇四五―一一〇二）によって調査された『勘定前唐院見在書目録』及び建暦二年（一一二二）に書写された『前唐院法文新目録』の二目録には円仁将来目録は記載されておらず、この頃には前唐院に所蔵されていなかったと考えられる。

青蓮院本はその奥書の記載から、嘉保二年（一〇九五）に「前唐院」の写本、すなわち円仁の在世中にその将来品を保管していた比叡山東塔の前唐院に安置されていた原本か、またはそれに近い写本を底本としたことが分かる。なお、本稿ではこの写本を便宜上元の收藏先の名称を用いて「旧青蓮院本」と称しておく。

(ロ) 旧個人蔵本(現京都国立博物館蔵本)

この写本は石田尚豊氏が個人蔵本として紹介したものであるが、現在独立行政法人国立文化財機構が所有し、京都国立博物館に保管され、重要文化財の附扱いになっている。体裁は縦二八・五糎、横五〇〇・〇糎で、十二紙の料紙に記されている。奥書には「嘉保二年七月十六日於三南陽御坊一書了。以三前唐院之本一写得也云。」「保安四年七月廿九日於三坊門殿南亭二写了。一乗房御本也。求法勤息目貝」とあり、一乗房(仁覚)の蔵書である、嘉保二年(一〇九五)に書写された前唐院本を、保安四年(一一二三)七月二十九日に沙門目貝が転写したものであることが窺える。また、『承和五年目録』に続けて『新求目録』の抜抄が記されているが、それは密教典籍で占められている。そして、この抜抄の奥書に、「保安四年八月一日於三坊門殿南亭一以三一乗房和尚御本一写得之一。今日辰時、蝕帶蝕日出。求法乞工目貝。右書本以三前唐院御本一之写得給了。明德三年九月日不レ慮感得之可レ喜々々。法印権大僧都賢宝」とあり、この抜抄は保安四年八月一日に『承和五年目録』と同じく、目貝が一乗房の写本を転写したものであり、原本は先の青蓮院本と同じであることが知られる。さらに、明德三年(一三九二)法印権大僧都であった東寺の賢宝(一三三三—一三九八)の感得記が記されており注目される。しかし、紙背に寛元三年(一一四五)から宝治二年(一一四八)の日付がある文書が確認されていることから、実際の書写年代は鎌倉時代であると見られる。<sup>10</sup> 本稿では、この写本を「旧個人蔵本」と称しておく。

(ハ) 四天王寺本

現在、大阪市天王寺区の和宗総本山四天王寺に、平安朝の書写として『承和五年目録』が伝来しており、筆者は閲覧の機会を得た。形状は卷子本で、体裁は縦二七糎、全長二八八・九糎、一紙四六糎から四八糎の料紙六枚からなる。表紙に「目録 在唐 陽州 前唐院本」とあり、前唐院本を筆写したと考えられる。中間に朱書で「此下五十二行不足」とあり、主に梵漢両字經典の箇所が写されていない。また、末尾が欠損しており、奥書が

なく、書写年代の詳細や筆者は不明である。

## (二) 活字本

本目録の活字本については、第一に『大正新脩大藏經』本（高楠順次郎編『大正新脩大藏經』第五五卷、目録部、大正新脩大藏經刊行会、一九七七年、一〇七四a〔以下『大正藏』〕）が挙げられるが、底本は「大谷大学蔵本」となっている。これは、現在大谷大学図書館に伝来している版本の『天台入唐招来目録』（余大・一七六四）に、『日本国求法僧最澄目録』、『智證大師請来目録』とともに収録されている。<sup>11</sup> 縦二六・七糎、横一八・一糎で、五十一丁のうち本紙は四十九丁であり、表紙見返に「高野山 最澄円仁円珍 天台入唐請来録 龍宝院蔵」と記されている。跋文に、「嘉永六年九月金剛峯寺阿闍梨亮瑞記之」とあり、嘉永六年（一八五三）の版本であることが分かる。

次に、『大日本仏教全書』本（第九五、二三六頁上―二三八頁中。「以下『日仏全』本」）があるが、これは奥書がなく、底本とした写本は不明である。この他、『平安遺文』（八巻、四四四五号、三三二〇頁）に収録の活字本もある。

## (2) 『日本国承和五年入唐求法目録』の翻刻と諸本の校勘

円仁将来目録に関する先行研究を見ると、上述したように小野勝年氏が『入唐求法巡礼行記』の巻末において、院政期の写本である高山寺本を底本とし、青蓮院本を対校本として『入唐新求聖教目録』の全文翻刻を行っている。しかし、高山寺本と青蓮院本を比較すると、高山寺本に欠けている書目が多数見られるため、校勘を行う際は最古の写本である青蓮院本を底本とするのが妥当であると考えられる。『承和五年目録』及び『在唐送進録』

の校訂は行われておらず、円仁将来目録を参照する際は『大正蔵』本などの活字本が用いられているのが現状である。そこで、本研究では現存最古の写本である青蓮院本を底本として三目録の全文翻刻を行い、可能な限り他本と校合し校勘記を下段に作成した。

第一節では、『日本国承和五年入唐求法目録』を取り上げていきたい。

## 「日本国承和五年入唐求法目録」

### 凡 例

一、本目録は旧青蓮院本（現京都国立博物館保管）を底本として円仁撰『日本国承和五年入唐求法目録』を翻刻したものである。

一、対校本として、写本は旧個人蔵本（現京都国立博物館所蔵）、及び四天王寺本（四天王寺蔵）、活字本は『大正新修大蔵経』本及び『大日本仏教全書』本を使用した。

一、本目録の下段に記載の校勘記においては、旧個人蔵本を「個」、四天王寺本を「四」、『大正新修大蔵経』本を「大」、『大日本仏教全書』本を「全」と省略した。また、異同のある箇所には中黒のルビを振り、校勘記と対照させた。

一、諸本に見られる旁註は省略した。また、二種の活字本は全て旧字体を使用しているが、その異同については省略した。旧個人蔵本において旧字が使用されている箇所については記した。なお、四天王寺本は30から84まで欠けている。また、117と118の間に「唐陽州龍興寺経院故慎律和上碑銘并序一卷 李華撰」があるが、校勘記では省略した。



- 一、全将来物に便宜上アラビア数字で通し番号を付した。
- 一、書目が一行に収まらない場合はⅡを用いて接続を示した。
- 一、翻刻に当たっては、原本使用の文字を重視して常用字体・正字体・異体字・略字体を適宜使用した。

「日本国承和五年入唐求法目錄」

(表紙見返)「青蓮藏本」(右下)

「慶安二年首夏上浣之候加

修復畢」(左下)

日本國承和五年入唐求法目錄

經疏章傳等壹佰參拾柒部貳佰壹卷茶羅并印契壇樣諸聖者影及舍利等

- 1 大吉・祥天女十二契一百八名無垢大乘經一卷
- 2 一切佛心中心經一卷
- 3 寶星經略述并八宿佐盧瑟吒仙人經一卷
- 4 陀羅尼集要經一卷
- 5 蘇摩呼童子請經一卷
- 6 新譯般若心經一卷 般若三藏譯

【校勘記】

- ・個「国」。
- ・個「一佰三十七部二百一」、大「一百三十漆部二百一」、全「一百參拾漆部貳百一」。
- ・個、大、全此上有「曼」。
- ・大、全「吉」。
- ・大「二十」。
- ・個、大、全「陀」。
- ・大、全「蘇」。
- ・個、此下有「問」。
- ・個「訳」。

- 7 阿利多軍荼利護國大自在拔折羅摩訶布陀羅金神力陀羅尼一卷  
   || 阿地多三藏日照三藏翻本
- 8 金剛頂蓮花部心念誦儀軌一卷
- 9 觀自在菩薩如意輪念誦儀軌一卷 大興善寺不空譯  
   已上九部一十卷同帙
- 10 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌一卷
- 11 普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌一卷 大興善寺沙門
- 12 金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌一卷
- 13 金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀一卷 大興善寺  
   觀自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷 金剛智譯
- 14 如意輪菩薩真言注義一卷
- 15 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法一卷
- 16 葉衣觀自在菩薩法一卷
- 17 大佛頂諸菩薩萬行品灌頂部錄出中印契別行法門一卷
- 18 阿閼如來念誦供養法一卷 不空金剛譯  
   已上十一部一十卷同帙
- 19 脩真言三昧四時禮懺供養儀要一卷
- 20 金剛頂經·瑜伽十八會指歸一卷 大興善寺沙門·不空譯
- 21 佛頂尊勝陀羅尼注義一卷 大興善寺沙門·不空譯
- 22 取上乘教授戒懺悔文一卷 大興善寺沙門·不空譯

- 
- 個、四、大、全「陀」。
  - 大、全無「三藏」。
  - 個、四、大、全「華」。
  - 個「訳」。
  - 全「千」。
  - 全「于」·個無「千」·個、大、全「修」。
  - 大、全此下有「不空譯」。
  - 個無「密」·個、大、全「修」。
  - 個、大、全此下有「軌」·大、全無「大」以下。
  - 個無「譯」。
  - 個無此本。
  - 個「訳」。
  - 個、四、大、全「二十」。
  - 個、大、全「修」。
  - 大、全無「經」·大、全無「沙門」·個「訳」。
  - 個、大、全「陀」·個「訳」。
  - 大、全「最」·個「訳」。

- 24 大元阿吒薄句無邊甘露降伏一切鬼神真言一卷
- 25 火壇供養及供養十天法一卷
- 26 施燄面一切餓鬼食施羅尼法一卷
- 27 大樂金剛不空真寶三昧耶經般若波羅密多理趣釋一卷  
已上八部八卷同帙
- 28 梵漢兩字大毗盧遮那經字輪品悉曇一卷
- 29 梵漢兩字金剛般若經二卷
- 30 梵漢兩字阿彌陀經一卷
- 31 梵漢兩字般若心經一卷
- 32 梵漢兩字取勝無垢清淨光明大施羅尼一卷
- 33 梵漢兩字不空羼索真言一卷
- 34 梵漢兩字青頸大悲真言一卷
- 35 梵漢兩字一切佛心真言一卷
- 36 梵漢兩字一切佛心中心真言一卷
- 37 梵漢兩字灌頂真言一卷
- 38 梵漢兩字灌頂真言中心中心真言一卷
- 39 梵漢兩字結界真言一卷
- 40 梵漢兩字秘密心真言一卷
- 41 梵漢兩字秘密心中心真言一卷
- 42 梵漢兩字普賢行願讚一卷

・大、全「太」・個「无」・個「呂」。

・個「大」。

・個、大、全「陀」。

・個、大、全「蜜」・個「釈」。

・大、全「毘」・大、全「舍」。

・個、大、全「陀」。

・大、全「最」・個「无」・個、大、全「陀」。

・大、全「口」。

大、全無此本。

・・大、全無「真言」。

- 43 梵漢兩字大佛頂根本讀一卷
- 44 梵漢兩字大佛頂結讀一卷
- 45 梵漢兩字大隨求大結讀一卷
- 46 梵漢兩字大隨求結讀一卷
- 47 梵漢兩字天龍八部讀一卷
- 48 梵漢兩字百字讀一卷
- 49 梵漢兩字送本尊歸本土讀一卷
- 50 梵漢兩字弥勒菩薩讀一卷
- 51 梵漢兩字慈氏菩薩讀一卷
- 52 梵漢兩字觀自在菩薩讀一卷
- 53 梵漢兩字虛空藏菩薩讀一卷
- 54 梵漢兩字金剛藏菩薩讀一卷
- 55 梵漢兩字文殊師利菩薩讀一卷
- 56 梵漢兩字普賢菩薩讀一卷
- 57 梵漢兩字除蓋障菩薩讀一卷
- 58 梵漢兩字地藏菩薩讀一卷
- 59 梵漢兩字滿願讀一卷
- 60 梵漢兩字毗盧遮那佛神變加持經吉慶伽陀讀一卷
- 61 梵漢兩字釋迦如來涅槃後弥勒菩薩悲願讀一卷
- 62 梵漢兩字金剛經論頌一卷

大、全無此本。

·大、全、此下有「在」。

·個無「師」。大、全「室利」。

·大、全「蓋」。

·大、全「毘」。·大、全「舍」。·大、全「結吉」。·個、大、全「陀」。  
·個「釈」。

- 63 梵漢兩字法華廿八品題目兼諸羅漢名一卷  
已上三十六部三十七卷同帙
- 64 淨名經記五卷 一帙 無量義寺文襲述
- 65 淨名集解開中疏四卷 資聖寺道液集
- 66 淨名經開中疏釈微二卷 中條山沙門契真述  
已上二部六卷同帙
- 67 法華經銷文略疏三卷 一帙 天長寺釋迦延秀集解
- 68 肇論略疏一卷 東山矩作
- 69 肇論抄三卷 牛頭山幽西寺惠澄撰
- 70 肇論文句圖一卷 惠澄撰
- 71 肇論略出要義兼注附焉并序一卷 沙門雲興撰  
已上四部六卷同帙
- 72 因明揅抄三卷 章敬寺擇隣述
- 73 因明義斷一卷 大雲苾芻沼述
- 74 因明入正理義纂要一卷 大神龍寺沼集  
已上三部五卷同帙
- 75 劫章頌一卷
- 76 劫章頌疏一卷 岑山沙門遍知集
- 77 劫章頌記一卷 沙門道詮述
- 78 劫章科文一卷

・大作「二十」。  
・個「卅」。  
・個「无」・大、全「襲」。  
・大、全「關」・大、全「正」。  
・大、全「關」。  
・大、全「帖」。  
・個「尺」・大、全無「迦」。  
・大、全「慧」・大、全「證」。  
・大、全「慧」・個「證」。  
・大、全「并」・大、全「靈」。  
・個、大、全「糅」・個「教」。  
・大、全「□」。

已上四部四卷同帙

- 79 智者大師修三昧常行法一卷  
80 五方便念佛門一卷 智者大師述  
81 觀心遊心口決記一卷 智顗述  
82 四十二字門義一卷 南岳思大師作  
83 釋門自鏡錄五卷 僧惠詳集  
84 觀心十二部經義一卷 天台頂述  
85 形神不滅論一卷 靈溪沙門海靈撰  
86 法花三昧修證決一卷  
87 天台智者大師所著經論章疏科目一卷  
已上九部一十三卷同帙  
88 鳩摩羅法師隨順修多羅四悉檀義不墮負門一卷  
89 大般若開兼廿九位法門一卷  
90 量處重輕儀一卷 道宣絹叙  
91 羯磨文一卷  
92 略羯磨一卷 西大原寺懷素撰  
93 說罪要行法一卷 義淨三藏撰  
94 諸天地獄壽量分限一卷 終南山宗叡撰  
95 受苦薩戒文一卷  
96 取上乘佛性歌一卷 沙門真覺述

・大、全「□」。

・大「訣」。・大、全「者」。

・大、全「開」。・大、全「□」。

・大、全「慧」。

・個「漢」。

・個、大、全「華」。・大、全「訣」。

・大、全「負墮」。

・大、全「關」。四有此下「經」。・大「二十」。

・大、全「輕重」。・大、全「緝」。・大、全「集」。

・個無「懷」。

・大、全「最」。・個「寒」。

- 97 大乘楞伽正宗決一卷
- 98 隋廬山遺愛寺慧琛禪師念佛三昧指歸一卷
- 99 梵語雜名一卷
- 100 四條式并大小乘戒決一卷
- 已上一十三部一十三卷同帙
- 101 南岳思禪師法門傳二卷 衛尉承杜拙撰
- 102 天台大師答陳宣帝書一卷
- 103 天台略錄一卷
- 104 智者~~之~~松讚一卷 頂禪師撰
- 105 天台智者大師十二所道場記一卷 灌頂述
- 106 法花靈驗傳二卷
- 107 感通傳一卷
- 108 清涼山略傳一卷
- 已上八部一十卷同帙
- 109 大唐韶州雙峯山曹溪寶林傳十卷 一帙 會稽沙門雲微字明沐
- 110 上都清禪寺至演禪師鍾傳一卷 大理牛肅与僧至演同叙
- 111 南荊州沙門無行在天竺國致於唐國書一卷
- 112 內供奉談筵法師敷齊格并文一卷
- 113 集新舊齊文五卷 上都雲花寺泳字太

- 大、全無「決」。
- 個「惠」。• 大、全「珍」。• 大、全無「禪師」。
- 大「并」。• 大、全「訣」。
- 大、全「丞」。
- 大、全「宜」。
- 全「畧」。
- 個「極」。大「琢」、全「~~場~~」。• 大、全「口」。• 大、全「述」。
- 大、全「場」。• 大、全「汀」。
- 個、大、全「華」。• 大、全「二」。
- 全「畧」。
- 大、全「部」。• 四「洲」。大、全「峯」。• 大、全「靈」。• 大、全
- 此下有「序」。四「冰」。
- 四「部」。• 大、全「師」。
- 個、四「洲」。大、全無「州」。• 個「无」。• 個「畫」。大、全無「書」。
- 大、全「并」。
- 大、全「上都雲華寺泳字大觀法師奉答皇太子所問諸經了義並牋一卷」。

114	觀法師奉答皇太子所問諸經了義并錢一卷	
115	歎道俗德文三卷	
	已上八部一十二卷同帙	
116	楊州東大雲寺演和上碑并序一卷 李邕撰	
117	唐故大廣禪師大和楞伽峯塔碑銘并序一卷 陸巨撰	
118	唐故大律師釋道圓山龜碑并序一卷 李邕撰	
119	大唐大慈恩寺翻經大德基法墓誌銘并序一卷	
120	大慈恩寺大律師基公塔銘并序一卷	
121	唐故終南山靈感寺大律師道宣行記一卷	
122	大唐西明寺故大德道宣律師讚一卷	
123	天台大師答陳宣帝書一卷	
	已上九部九卷同帙	
124	大唐新修定公卿士庶內族吉凶書儀卅卷 鄭餘慶重修定	
125	開元詩格一卷 徐隱·秦·字蕭然撰	
126	祇對義一卷	
127	判一百條一卷 駱賓王撰	
128	祝元膺詩集一卷	
129	杭越寄和詩集并序一卷	
130	詩集五卷	
131	法華·廿八品七言詩一卷	

・個「洲」。  
・大、全「并」。

・大、全此下有「上」。  
・大、全「岑」。  
・大、全無「銘」。  
・大、全「并」。

・全「□」。  
・個「円」。  
・大、全「龔」。  
・大、全「并」。

・個「德」。  
・個、此下有「墓法」。  
・大、全此下有「師」。  
・四「基」。  
・大、全「并」。

・大、全「并」。

・個「德」。

・大、全「吉」。  
・大、全「一」。

・個「隱」。  
・大、全「秦」。

・大、全「并」。

・大、全「華」。  
・大「二十」。  
・大、全此下有「集」。



已上二十二部四十一卷同帙

132	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪 五幅白畫
133	金剛界大曼荼羅一鋪 七幅
134	供養賢聖等七種壇樣一卷
135	十七壇樣一卷
136	金剛界三十七尊種子曼荼羅樣一張
137	金剛界八十一尊種子曼荼羅樣一張
138	法花曼荼羅樣一張
139	胎藏曼荼羅手印樣一卷
140	南岳思大師示先生骨影一鋪三幅
141	天台大師感得聖僧影一鋪 三幅
142	阿闍若比丘見空中普賢影一張
143	法惠和上闍王前誦法花影一張
144	山登禪師誦法花感金銀殿影一張
145	惠斌禪師誦法花神人來拜影一張
146	映禪師誦法花善神來聽經影一張
147	定禪師誦法花天童給事影一張
148	惠向禪師誦法花滅後臺上生蓮花及臺裏常有誦經聲影一卷
149	秦郡老僧教弟子感夢示宿因影一張
150	道超禪師誦法花感二世弟子生處影一張

・大、全「毘」。
・個「福」。大、全「帙」。
・・個「世」。
・四、大、全「華」。
・個「」。
大、全無此本。
・大、全「慧」。大、全「尚」。大、全「華」。
・大、全「華」。
・四、大、全「慧」。個、大、全「華」。
・大、全「華」。個「聽」。
・大、全「華」。四「重」。
・大、全「慧」。大、全「華」。大、全「誦有」。
・個無「師」。大、全「華」。

151 法惠・禪師誦法花口放光照室字影一張  
 152 大聖僧伽和尚影一張  
 153 舍利五粒

三粒・菩薩舍利 盛瑠璃小瓶

二粒・支佛舍利盛白蠟小合子並納白石蜜子

前件法門等、圓仁、去承和五年八月到大唐揚州大都督府、巡歷城內諸寺、寫取如前、爰有終南山宗叡和尚學遠先達、悟究幽致、能解梵漢之語、妙閑悉曇之音、為向西天辭舊到府、圓仁幸得偶謁、受學梵天悉曇、兼習梵漢之語、又逢大唐內供奉弁弘阿闍梨付法弟子全雅阿闍梨、諮稟秘法、和尚感乎遠誠、付以秘要、遂乃囑授念誦法門、并胎藏金剛兩部曼荼羅諸壇樣等、其後擬向天台、為行路遠遠往還失時、有勅不許發赴、慨恨難及、所求法門雖未備足、且錄卷秩勘定如件、

大唐開成四年歲次己四月廿日天台宗請益傳燈法師位円仁錄

(奥書)「嘉保二年七月十六日於南陽御房書了、以前唐院之本寫得也」

・四、大、全「慧」。・大、全「華」。・個「張」。  
 ・大、全「卷」。

・大、全無「粒」。・個「玉玉」。・大、全此下有「子」。

・大、全無「粒」。・個無「支」。・個「并」。・大、全「竝」。

・大、全「右」。・個、四「円」。・個「洲」。・四「取」以下欠。・大、全無「有」。

・大、全「邁」。・大、全無「之語」。・大、全無「府」。・個、四「円」。

・個「和」。

・大、全「并」。・個「台」。

・大、全「間」。・個、此下有「之」。

・大、全「帙」。

・大「二十」。・個此上有「大」。・個無「位」。

個「嘉保二年七月十六日於南陽御房書了、以前唐院之本寫得也云、保安四年七月廿九日於防門殿南亭寫了、一乘房御本也、求法勤息目

頁」

### (3) 『日本国承和五年入唐求法目録』に見られる将来物の概要

本項では、これら三目録の校訂作業に基づき、諸本の間で文字の異同がある書目を取り上げ、仏典については『大正蔵』などに収録の場合は巻数、頁数、番号を記載し、主に小野玄妙、丸山孝雄編『仏書解説大辞典』(大

東出版社、一九九九年）と鎌田茂雄編『大藏經全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八年）を参考としながらその内容を窺っていききたい。青蓮院本に基づき常用字体に改め、青蓮院本に誤りがある場合は他の現存諸本及び『大正藏』に依って改めた。なお、本項で使用する語句の凡例は以下の通りである。

### 凡 例

- ・「青本」 〓 旧青蓮院本を指す。
- ・「写本」 〓 旧青蓮院本、旧個人蔵本、四天王寺本を指す。
- ・『大正藏』本 〓 『大正新脩大藏經』本を指す。
- ・『日仏全』本 〓 『大日本仏教全書』本を指す。
- ・「活字本」 〓 『大正藏』本、『日仏全』本の両本を指す。
- ・『大正』 〓 『大正新脩大藏經』の巻数、頁数、No.を指す。
- ・『大藏』 〓 『大藏經全解説大事典』の頁数を指す。
- ・『仏書』 〓 『仏書解説大辞典』の巻数・頁数を指す。
- ・（ ） 〓 青本に欠けている字を、その他の諸本に依って補った。
- ・「承和五年目録」及びアラビア数字の番号 〓 前掲の「日本国承和五年入唐求法目録」及び最上段に記載の番号を指す。
- ・「在唐送進録」及びアラビア数字の番号 〓 後掲の「慈覚大師在唐送進録」及び最上段に記載の番号を指す。
- ・「新求目録」及びアラビア数字の番号 〓 後掲の「入唐新求聖教目録」及び最上段に記載の番号を指す。

『日本国承和五年入唐求法目錄』に見られる将来物の概要

- 1 『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經』一卷 (『大正』第二一卷・二五三頁b・No.一二五三収録) 唐の不空(七〇五—七七四)訳であり、雜密に属する吉祥天女法の經典で吉祥天女の百八名、真言とその功德が説かれる。(『仏書』七・二二七頁、『大藏』三四六頁)
- 3 『宝星經略述二十八宿伽盧瑟吒仙人經』一卷 青本は「二十」を「廿」の俗字である「卅」とする。この記載の特徴は本目錄の63「梵漢両字法華二十八品題目兼諸羅漢名一卷」などにも見られる。
- 4 『陀羅尼集要經』一卷 正字の「陀」を青本は俗字の「随」とする。この記載の特徴は、32「梵漢両字最勝無垢清淨光明大陀羅尼一卷」など他の箇所でも見られる。類似の書目として『大正』一八・七八五b・No.九〇一に阿地瞿多(一六五—二一)訳『陀羅尼集經』十二卷(あるいは十三卷)があり、諸種の密教經典・儀軌を集成したものである。(『仏書』七・一二〇—一二二頁、『大藏』二六六—二六七頁)
- 5 『蘇摩呼童子請(問)經』一卷 (『大正』一八・七一九a・No.〇八九五) 正字の「蘇」を青本は俗字の「蘇」とし、個人蔵本は「請」の下に「問」を補う。『大正』に収録の『蘇摩呼童子請問經』上中下三卷十二章と同一と考えられる。唐の善無畏(六三七—七三五)による訳で、別本、同本も存在する。蘇婆呼すなわち妙臂童身が請問し、執金剛菩薩夜叉將が教示するという形で説かれ、諸々の真言行に関する軌則が説かれた經典である。(『仏書』七・一九頁、『大藏』二六三—二六四頁)
- 6 『新訳般若心經』一卷、般若三藏訳 本經典は玄奘訳(『大正』八・八四九b・No.二五一)をはじめとするいくつかの翻訳が存在する。般若(生没年未詳)は北インド出身で唐代の訳經僧である。(『仏書』七・一九—二〇頁、『大藏』七二—七三頁)
- 8 『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』二卷 (『大正』一八・二九九b・No.八七三)「華」を青本は「花」とし、これは

青本の特徴である。『大正』に不空訳が一卷あり、円仁は二巻と記している。金剛界の五部の中の蓮華部に基づき四会（成身会・羯磨会・三昧耶会・供養会）の念誦法を説く（『仏書』三・四九七頁、『大藏』二五七頁）。  
9 『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』一卷、大興善寺不空訳（『大正』二〇・二〇三・c・No. 一〇八五）本儀軌の内容は四度加行の如意輪法次第の原本であり、密教修行作法の規範となっている。（『仏書』二・一五六頁、『大藏』三一三頁）

この書目の後に「已上九部一十巻同帙」とあることについて、『日仏全』本は「一十」を「一千」とするが、青本の記載が正しい。

10 『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌』一卷（『大正』二〇・七二a・No. 一〇五六）「千手」の「千」を『日仏全』本は「于」とし、「千眼」の「千」を個人蔵本は欠くが誤りである。『大正』に不空訳の『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌経』上下二巻が見え、これを一卷と記したと考えられる。実際には不空の著作であるとされる。千手千眼観自在菩薩像の壇法と修行次第、四種成就法（息災・増益・敬愛・降伏）が説かれている。（『大藏』三〇六頁、『仏書』三・四九二頁）

11 『普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌』一卷、大興善寺沙門（『大正』二〇・五三一a・No. 一一二四）『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』活字本は大興善寺沙門の後に「不空譯」の字を補う。金剛薩埵法六種儀軌の一つで普賢金剛薩埵の身成就の法を説く。（『仏書』九・二二五頁、『大藏』三二二頁）

12 『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』一卷（『大正』二〇・五三五b・No. 一一二五・不空訳）「密」の字を個人蔵本は欠く。「修」を青本は「脩」とする。金剛界儀軌中の金剛薩埵の法で、金剛薩埵五秘密法の本軌である（『仏書』三・四九〇頁、『大藏』三二二頁）。

13 『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀』一卷 大興善寺（『大正』二〇・五一三c・No. 一一二〇）個人蔵本と活字本は「儀」の下に「軌」の字を補うが、『大正』は青本と同じ記載である。No. 一一一九『大樂

金剛薩埵修行成就儀軌』と同本とされる。金剛界中の金剛薩埵の儀軌である。（『仏書』三・四八五頁、『大藏』三一九—三二〇頁）

14 『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要』一卷 金剛智訳（『大正』二〇・二二一b・No. 一〇八七） 「訳」を個人蔵

本は欠く。『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』の説明を補った『大正』二〇・No. 一〇八六の不空訳『觀自在菩薩如意輪瑜伽』とほとんど同様の内容とされる。（『仏書』二・一五三、『大藏』三一三頁）

17 『葉衣觀自在菩薩法』一卷 『大正』二〇・四四七a・No. 一一〇〇に不空訳『葉衣觀自在菩薩經』一卷が存在する。同じ仏典かは不明であるが、深い関連があるものと見られる。この仏典は觀自在菩薩が葉衣觀音の陀羅尼や心真言とその功德などを説くとされる。（『仏書』一一・一五七頁、『大藏』三一五—三一六頁）

19 『阿闍如来念誦供養法』一卷、不空金剛訳（『大正』一九・一五b・No. 九二一）阿闍如来の供養念誦の行法を示した模範的なものである。（『仏書』一・一四頁、『大藏』二七四頁）

この書目の後の「已上十一部一十卷同帙」の「十一」を青本以外の諸本は「一十」とするが、青本の誤りである。

21 『金剛頂經瑜伽十八会指帰』一卷、大興善寺沙門不空訳（『大正』一八・二八四c・No. 八六九）活字本は「沙門」の二字を欠く。金剛頂經十万頌十八会及び各界所説の内容を概説した梵本大本『金剛頂經』の解題書である。（『仏書』三・四八一頁、『大藏』二五六頁）

22 『仏頂尊勝陀羅尼注義』一卷、大興善寺沙門不空訳（『大正』一九・三八八b・No. 九七四D）尊勝陀羅尼を対訳漢字に記した注釈書である。（『仏書』九・三二六頁、『大藏』二八五頁）

23 『最上乘教授戒懺悔文』一卷、大興善寺沙門不空訳（『大正』一八・九四b・No. 九一五『受菩提心戒儀』『最』を青本、個人蔵本は異体字の「最」とする。真言密教の受法の僧が菩提心戒を授かる際の戒儀の文である。（『仏書』五・一〇三頁、『大藏』二七二頁）

- 24 『大元阿吒薄句無辺甘露降伏一切鬼神真言』一卷 「大」を活字本は「太」とする。正字の「無」を個人蔵本は異体字の「无」とするが、この記載の特徴は32「梵漢両字最勝無垢清浄光明大陀羅尼一卷」、64「浄名経記五巻 一帙 無量義寺文襲述」など他の箇所でも見られる。「露」を個人蔵本は「呂」とする。『八家秘録』巻下(『大正』五五・一一二八b・No.二二七六)にも活字本と同様の書名が記載されている。
- 25 『火壇供養及供養十天法』一卷 「火」を個人蔵本は「大」とし、『八家秘録』巻下(『大正』五五・一一二九a・No.二二七六)も同様であるが、この他にこの仏典を記載する文献は見当たらず、考察を要する。
- 27 『大楽金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』一卷(『大正』一九・六〇七a・No.一〇〇三) 「蜜」を青本は「密」とするが、「蜜」が正しい。『大正』に不空訳の上下二巻があり、円仁はこれを一卷として将来したのであろう。不空訳『大楽金剛不空真実三昧耶経』(『大正』第八巻・七八四a・No.二四三)の注釈書である。(『仏書』七・五〇六頁、『大蔵』二九三―二九四頁)
- 28 『梵漢両字大毗盧遮那経字輪品悉曇』一卷 正字の「毗」を活字本は異体字の「毘」とする。次に、「遮」を活字本は「舍」とする。この異同は60「梵漢両字毗盧遮那仏神変加持経吉慶伽陀讚一卷」などにも見られる。
- 29 『梵漢両字金剛般若経』二巻 『大正』八・七四八c・No.二三五に鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜経』、七五二c・No.二三六菩提流支訳、七六二a・No.二三七真諦訳があるが、いずれの訳を将来したかは不明である。般若経典の一つであり、あらゆるものに執着してはならないという「空」の教えが説かれている。(『仏書』三・五〇六―五〇七頁、『大蔵』六九頁)
- 30 『梵漢両字阿弥陀経』一卷 『大正』一二・三四六b・No.三六六『仏説阿弥陀経』の梵漢対訳版である。浄土三部経の一つであり、阿弥陀仏の名号の執持により極楽世界に往生できる利益があることなどを説く。(『仏書』一、三九―四〇頁、『大蔵』一〇二―一〇三頁)
- 34 『梵漢両字青頸大悲真言』一卷 「頸」を活字本は「□、頸力」とするが、青本の記載で確定できる。

次に、37『梵漢両字灌頂真言』一卷、45『梵漢両字大随求大結讚』一卷の二点の書目が活字本に見られないが、脱漏であると考えられる。

42『梵漢両字普賢行願讚』一卷 『大正』一〇・八八〇a・No.二九七の不空訳『普賢菩薩行願讚』一卷の梵漢対訳版であろう。『大方広仏華嚴經』第四〇卷（『大正』一〇・六六一a・No.二九三）の普賢菩薩が説く部分が別行されたものであり、普賢菩薩の十大願を説いた頌文である。（『仏書』九・二二七頁、『大蔵』八四頁）

52『梵漢両字觀自在菩薩讚』一卷 写本は「在」の字を欠く。

55『梵漢両字文殊師利菩薩讚』一卷 「文殊師利」を個人蔵本は「文殊菩薩」、活字本は「文殊室利」とする。青本の記載は「利」を欠いている。

64『浄名経記』五巻一帙、無量義寺文襲述 「襲」を活字本は「襲」とする。後掲の「在唐送進録」51にも同様の異同が見られる。『東域伝灯目錄』巻上（『大正』五五・一五一c・No.二一八三）によると、正式名は『浄名経関中疏記』である。次行に見える65『浄名集解関中疏』道液集と関連する書物であろう。

65『浄名集解関中疏』四巻、資聖寺道液集（『大正』八五・四四〇a・No.二七七七『浄名経集解関中釈抄』『関』を青本は「開」、活字本は「聖」を「正」とするが誤りである。長安資聖寺の僧道液による『注維摩詰経』に対する解釈書である。道液が唐上元元年（七六〇）に著し、永泰元年（七六五）に再度著述したものである。（『仏書』六・一三七―一三八頁、『大蔵』八一七頁）

66の後に見える「已上二部六卷同帙」の「帙」を活字本は「帖」とする。

67『法華経銷文略疏』三巻一帙、天長寺釈迦延秀集解 「釈」を個人蔵本は「尺」とし、活字本は「迦」を欠く。

「在唐送進録」48は『法花経略疏』とする。竺道生（一四三四）述『法華経疏』（『続蔵経』二乙・二三・四）を始めとして同名の書物が多く現存しており、本書もそれらと同様『妙法蓮華経』の注疏であると見られる。

69『肇論抄』三巻 牛頭山幽西寺恵澄撰 「恵澄」を活字本は「慧澄」とする。『神会語録』に見える唐代の禪



師惠澄と同一人物であると考えられる。この異同は次行の70『肇論文句図』などでも見られる。僧肇(三八四—四一四)による『肇論』一卷(『大正』四五・一五〇a・No.一八五八)に関する注釈書が多く存在しているが、本書もこのうちの一つであろう。

70『肇論文句図』一卷 惠澄撰 『智証大師請来目錄』(『大正』五五・一一〇六b・No.二一七三)に「肇論文句一卷、惠澄」があり、円仁将来本と同じ書物であると考えられる。

71『肇論略出要義兼注附焉并序』一卷、沙門雲興撰 「雲興」の「雲」を活字本は「靈」とする。「在唐送進録」56、後掲の「新求目錄」の617においても異同が見られるが、この僧侶については未詳である。

72『因明採抄』三卷、章敬寺擇隣述 「採」を個人蔵本と活字本は「糅」とする。「在唐送進録」(「慈覚大師在唐送進録」59の次行)では池田本、活字本に記載があるが、こちらも「糅」とし、「新求目錄」618の諸本の記載も同じである。『智証大師請来目錄』に『因明疏糅抄』三卷(『大正』五五・一一〇六a)が見え、同様の書物であると思われる。「敬」を個人蔵本は「教」とするが、大暦元年(七六六)長安の東門に建立された「章敬寺」と確定できる<sup>13)</sup>。

73『因明義断』一卷、大雲苾芻沼述 (『大正』四四・一四三a・No.一八四一、慧沼(六五〇—七一四)撰『因明入正理論義断』) 他師による因明学説を批判した慈恩大師基(六三二—六八二)の『因明入正理論疏』に次いで尊重される因明学の祖書である(『仏書』一・一八三頁、『大蔵』五三五頁)。

74『因明入正理論義纂要』一卷、大神龍寺沼集(『大正』四四・一五八b・No.一八四二、慧沼述『因明入正理論義纂要』)「大神龍寺沼集」の「沼」を活字本は「□、沼力」とする。73『因明義断』の撰者を指しており、「沼」と確定できる。本目錄の諸本は全て「論」の字を欠くが、「在唐送進録」60(青本)も『大正』と同様の書名である。『因明義断』一卷の姉妹編として基の因明の要義を集めた因明研究の指南書として重視される。(『仏書』一・一九三頁、『大蔵』五三五頁)

80 『五方便念仏門』一卷、智者大師述（『大正』四七・八一c・No.一九六二『五方便念仏觀門』）「智者大師述」の「師」を活字本では「□、師力」とする。智顗（五三八―五九七）の別称である智者大師であることは明らかである。（『仏書』三・二七九頁、『大藏』五八〇―五八一頁）

82 『四十二字門義』一卷、南岳思大師作 「門」を活字本は「開」とするが、「新求目録」<sup>628</sup>の諸本においても「門」としており、この字で確定できる。また、「南岳思大師作」の「師」を活字本は欠き、「師力」と記すが、南岳大師慧思（五八八―六四二）の尊称として南岳思大師とするのが正解である。梵字悉曇の四十二字の一々の義門を論じたものと見られる。

83 『釈門自鏡録』五卷、僧惠詳集 同名の書目として、『大正』五一・八〇二a・No.二〇八三に懷信の著述による成立年代不明の同名の仏典が二卷ある。懷信が六十代の頃の作で、因果応報などの十科からなる南北朝から唐代の仏教説話集である（『仏書』五・三二頁、『大藏』六一五頁）。

85 『形神不滅論』一卷、靈溪沙門海雲撰 個人蔵本は「溪」を「漢」とするが、「新求目録」<sup>631</sup>では諸本ともに青本と同様の記載である。

86 『法華三昧修証決』一卷 「決」を活字本は仮借字の「訣」とする。天台大師智顗（五三八―五九七）の半行半坐の止観行である「法華三昧」の修証に関する書であろう。

88 『鳩摩羅法師隨順修多羅四悉檀義不墮負門』一卷 「墮負」を活字本は「負墮」、「新求目録」<sup>634</sup>の高山寺本は「隨員」とする。他の文献にもこの書目は見当たらず考察を要する。鳩摩羅什によって示された四悉檀義についての書であろう。

90 『量処輕重儀』一卷、道宣緝叙（『大正』四五・八三九b・No.一八九五『量処輕重儀』一卷）「輕重」を青本は「重輕」とし、「緝叙」を青本は「絹叙」とするが誤りである。唐の貞觀十一年（六三七）に道宣（五九六―六六七）が編集し、乾封二年（六六七）に訂正を行い、律によって亡僧の遺品の輕重を定めた内容とされる。（『仏書』

一一・二五二、『大藏』五五三—五五四頁)

92 『略羯磨』一卷、西大原寺懷素撰 「西大原寺懷素」の「懷」を個人蔵本は欠く。「在唐送進録」64、「新求目錄」638の青蓮院本も「懷」の字を記す。『東域伝灯目錄』卷下は青本と同様の記載である。懷素は『宋高僧伝』卷第十四(『大正』五〇・七九二b・No.二〇六一)に「釈懷素、姓范氏、其先南陽人也。」と見える律師である。

93 『説罪要行法』一卷、義浄三蔵撰 (『大正』四五・九〇三c・No.一九〇三) 義浄(六三五—七二三)によって唐天冊万歳元年(六九五)—先天二年(七一三)の間に成立し、比丘が犯罪を發露(告白)する作法などを述べた書物である。(『仏書』六・三一五頁、『大藏』五五五頁)

94 『諸天地獄寿量分限』一卷、終南山宗叡撰 「在唐送進録」91では「一卷」を「一帖」とする。

96 『最上乘仏性歌』一卷、沙門真覺述 「覺」を個人蔵本は「実」とし、「在唐送進録」68の諸本は「最上乘」の三字を欠く。禅門に関する『最上乘論』(『大正』四八・三七七a・No.二〇一一)などの典籍が現存しており、本書も『最上乘論』に関連する内容であると考えられる。

97 『大乘楞伽正宗決』一卷 「決」を活字本は脱しており、「在唐送進録」59、「新求目錄」643の諸本も「決」を記しているが、未詳の書物である。

98 『隋廬山遺愛寺慧珙禅师念仏三昧指帰』一卷 「慧珙」を個人蔵本は「恵珙」、活字本は「慧珍」とする。禅師の名前については「在唐送進録」72、「新求目錄」644にも異同が見られるが、この僧侶については詳らかではない。

99 『梵語雜名』一卷 (『大正』五四・一二二三a・No.二二三五)『大正』に、成立年代不明の唐の礼言による同名の書物がある。漢語と梵語を対訳させ注釈を施した、初学者のための悉曇字引である。(『仏書』一〇・二一八頁、『大藏』六二八頁)

100 『四条式并大小乗戒決』一卷 「新求目錄」646の諸本は「式」を「戒」としており、考察を要する。

101 『南岳思禪師法門伝』二巻、衛尉承杜拙撰 「丞」の仮借字である「承」を活字本は「丞」と記す。「在唐送進録」79にも同じ異同が見られる。

102 『天台大師答陳宣帝書』一巻 「宣」を活字本は「宜」とするが、南朝陳の宣帝(五三〇—五八二)のことであり、青本の記載が正しい。『国清百録』第一に見られる「陳宣帝勅留不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>。」(『大正』四六・七九九a・No.一九三四)の勅文と同一か。

103 『天台略録』一巻 正字の「略」を『日仏全』本は異体字の「畧」としている。この異同は他の箇所でも見られる。

104 『智者遂松讃』一巻、頂禪師撰 「遂」を個人蔵本は「極」、『大正』本は「琢」、『日仏全』本は「琢」とするが、この書目も未詳である。

105 『天台智者大師十二所道場記』一巻、灌頂述 「灌頂」を活字本は異体字の「汀」とする。隋の章安灌頂(五六—六三二)による智顗に関する書物であろう。

108 『清涼山略伝』一巻 山西省五台山、一名清涼山に関する書であろう。類似する書目に、『大正』第五一巻・一〇九二c・No.二〇九八に唐代の慧祥(生没年不詳)撰『古清涼伝』二巻がある。

109 『大唐韶州双岑山曹溪宝林伝』十巻一帙 会稽沙門靈徹字明泳 活字本は「韶」を「部」とする。青本は「靈」を「雲」とするが、「新求目録」655の諸本も「靈」とし、この字で確定できよう。本書は『大唐双峰山曹候溪宝林伝』十巻、通称『宝林伝』である。『釈氏稽古略』によると、朱陵の沙門智(慧)炬によって貞元十七年(八〇一)に成立し、六祖慧能の南宗禪の由来を明らかにした書物であり、『金版大蔵経』中に七巻が現存する。「在唐送進録」89の青本は『佛史寶林傳』一巻二帖、活字本は『曹溪宝林伝』十帖二帖とし、それぞれ巻数に相違がある。(『仏書』一〇・一五七—一五八頁、禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』大修館書店、一九八五年、一四六頁)。

- 110 『上都清禪寺至演禪師鍾伝』一卷 大理牛肅与僧至演同叙 「寺」を活字本は「師」とする。「在唐送進録」74も青本と同じ記載である。この書物も未詳である。
- 111 『南荊州沙門無行在天竺国致於唐国書』一卷 個人蔵本、四天王寺本は「州」を「洲」とし、活字本はこの字を欠く。「書」を個人蔵本は「画」の旧字である「畫」とし、活字本は「書」の字を欠く。円仁が唐より帰国後の斉衡三年(八五五)に著した『蘇悉地羯羅經略疏』(『大正』六一・四三二a・No.二二二七)にも「南荊州沙門無行在天竺国」致於唐国諸大德書云、中国安居、正当漢地後安居。」と見え、「書」と確定できる。
- 114 『觀法師奉答皇太子所問諸經了義并錢』一卷 活字本は題名を『上都雲華寺泳字大觀法師奉答皇太子所問諸經了義竝錢』とし、113『集新旧齊文』五卷の「上都雲花寺泳字太」を冒頭に記している。「在唐送進録」73は、『觀大師諸經了義』一卷とする。この書目は『新求目録』660の諸本においても異同が見られる。
- 117 「唐故大広禪師大和楞伽峯塔碑并序」一卷、陸亘撰 活字本は「大和」の下に「上」を補う。「新求目録」663では池田本、『日仏全』本が「上」の字を記す。また、「峰」の同字である「峯」を活字本は「岑」とする。撰者は『宋高僧伝』(『大正』五〇・七七四a・No.二〇六一)に「越州刺史陸亘」と見える人物であろうか。
- 118 『唐故大律師釈道円山龕碑并序』一卷、李邕撰 『日仏全』本は「唐」を「□、唐力」とするが、「新求目録」665の諸本も青本と同様であり、「唐」と確定できる。「龕」を活字本は「龔」とする。唐代の文人、書家として名高い李邕(六七八―七四七)は、歐陽修・宋祁撰『新唐書』第一冊、卷五、玄宗皇帝、天寶六載(中華書局、一九七五年、一四五頁)に「北海郡太守李邕」とその名が見える。
- 119 『大唐大慈恩寺翻經大德基法(師)墓誌銘并序』一卷 「德」の下に個人蔵本は「墓法」を補い、「法」の下に「師」を青本は欠く。「新求目録」666にも同様の異同が見られる。74「因明入正理論義纂要」一卷、大神龍寺沼集」でも触れたが、唐代に法相宗を創始した基を指しており、活字本の記載で確定できる。
- 120 『大慈恩寺大法師基公塔銘并序』一卷 小野勝年氏の研究<sup>14</sup>において銘文の内容が紹介されており、それによる

と、唐永淳元年（六八二）に没した基が玄奘法師塔に埋葬されたことなど基の伝記が記された史料であると見られる。

124 から131は外典が占めており、そのうち129までは神田喜一郎氏<sup>15</sup>によって考証が行われており、内容が明らかにされた書目を取り上げる。

124 『大唐新修定公卿士庶内族吉凶書儀』三十卷、鄭餘慶重修定 冊数を活字本は「一」とする。「新求目録」の671の高本以外の諸本も三十卷であるが、神田氏の考証では、三十卷は三十章あるいは三十篇の誤りであり、『新唐書』第五冊、卷五十八、芸文志、史部儀注類（中華書局、一九六六年、一四九三頁）に「鄭氏書儀二卷鄭餘慶」と見えていることから、それに基づき何人かが作った吉凶書儀三十章ではないかとされる。

125 『開元詩格』一卷、徐隱泰字蕭然撰 「泰」を活字本は「秦」とする。「新求目録」672の諸本も「泰」としており、この字で確定できると考えられる。開元年間（七一三—七四一）の詩人である王昌齡の詩格すなわち詩の作り方の規則ではないかとされる。

127 『判一百条』一卷、駱賓王撰 『新唐書』第五冊、卷六〇・芸文志・別集類に見える「駱賓王百道判集一卷」（同、一六一八頁）と同じ書物であり、一種の文学作品であると見られる。

128 『祝元膺詩集』一卷 『唐詩紀事』卷五六（四部叢刊正編九十九冊、台灣商務印書館、一九七九年、四七六頁）に晩唐の詩人祝元膺の名が見えており、当時流行の詩集であったとされる。

129 『杭越寄和詩集并序』一卷 脱脱等撰『宋史』卷二〇九、芸文志（台北、藝文印書館、二五〇四頁）に「元稹、白居易、李諒杭越寄和詩集一卷」が見える。

131 『法華二十八品七言詩』一卷 「詩」の下に活字本は「集」の字を補う。「在唐送進録」92の写本は書名を『七言法花經詩』五十七首一帖としている。「新求目録」681の青本・高山寺本は『法華經廿八品七言詩』としている。

132 「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」一鋪五幅白畫 個人蔵本は「胎」を「台」とする。『大日経』具縁品に基づく胎藏曼荼羅で、本曼荼羅は「白面」とあるため彩色されていないものと見られる。

133 「金剛界大曼荼羅」一鋪、七幅 「幅」を個人蔵本は「福」、活字本は「帙」とする。「新求目録」683には「綵色」の二字があり、着色された金剛界曼荼羅であつたことが窺える。

140 「南岳思大師示先生骨影」一鋪三幅 「三」を個人蔵本は「一」とする。「在唐送進録」102の青本は「三副」とする。「新求目録」689の諸本は「三」としており、「三」と確定できよう。「新求目録」では「綵色」の字を補っており、着色が施されていた慧思に関する影像である。

141 「天台大師感得聖僧影」一鋪三幅 活字本はこの影像を欠く。「新求目録」690によると「綵色」とあり、これも着色されていた智顗の真影である。

143 「法恵和上闍王前誦法華影」一張 活字本は「恵」を「慧」とする。この異同は144以降の高僧真影においても同様に見られる。「在唐送進録」109には「梁法恵禪師影一張」、114に「陳曲水寺法恵禪師影一張」があるが、「承和五年目録」には他に151「法恵禪師誦法花口放光照室宇影一張」があり、法恵の影像を二点将来している。『新求目録』692の諸本の記載は『承和五年目録』の青本と同様である。

146 「映禪師誦法華善神來聴経影」一張 「在唐送進録」107の青本は、「映」の俗字である「暎」とし、「新求目録」695の高本においても同様である。円仁目録以外に見えず、未詳の影像である。

148 「恵向禪師誦法華滅後墓上生蓮華及墓裏常有誦経声影」一卷 「有誦」を活字本は「誦有」とするが、「在唐送進録」108は「恵向禪師影一張」のみとし、「新求目録」697の記載は本目録の青本と同様である。「恵向禪師法花を誦え滅後墓上に蓮花を生じ、及び墓裏常に経を誦うる声有るの影」と読むと考えられ、青本の記載が正しいであろう。

151 「法恵禪師誦法華口放光照室宇影」一張 「放」を個人蔵本は「張」とするが、「新求目録」700の諸本も青本

と同様である。「法惠禪師法華を誦え口より光を放ち室宇を照らすの影」と読むと考えられ、「放」と確定できるであろう。

152 「大聖僧伽和尚影」一張 「張」を活字本は「巻」とするが、「在唐送進録」<sup>104</sup>も「張」とし、「新求目錄」<sup>701</sup>の諸本も青本の記載と同様である。描かれている泗州大聖・僧伽和尚（一七一〇）は、十一面観音の化身及び航路安全神として唐代に民間信仰の対象とされていたようである。<sup>16</sup>

153 「舍利五粒 三粒菩薩舍利盛瑠璃小瓶二粒佛舍利盛白蠟小合子 並納白石壺子」 「三粒、二粒」の「粒」を活字本は欠く。「瑠璃」を個人蔵本は「玉玉」とする。また、「瓶」の下に活字本は「子」を補う。「並」を個人蔵本は「并」、活字本は「並」の異体字である「竝」とする。この仏舍利は「在唐送進録」には記載が見られない。

以上、『承和五年目錄』に記載されている将来物の内容を考察したが、本目錄は次のように締めくくられている。

前件法門等、円仁、去承和五年八月到二大都督府一、巡二歴城内諸寺一、写取如レ前。爰有二終南山宗叡和尚一。学速二先達一、悟二究幽致一。能解二梵漢之語一、妙閑二悉曇之音一。為レ向二西天一辞レ旧到レ府。仁幸得二遇謁一、受二学梵天悉曇一、兼二習梵漢之語一。又逢二大唐内供奉弁弘阿闍梨付法弟子全雅阿闍梨一、諮二稟秘法一。和尚感二乎遠誠一、付以二秘要一。遂乃囑二授念誦法門一、并胎藏金剛两部曼荼羅。諸壇様等一。其後擬レ向二天台一、為二行路遠遠一往還失レ時。有レ勅不レ許二発赴一、慨恨難レ及。所レ求法門雖二未備足一、且録二卷帙一勘定如レ件。

大唐開成四年歲次己未四月廿日天台宗請益傳燈法師位円仁録

一行目、「前件法門等」の「前」を活字本は「右」と記す。「有」、二行目の「之語」、「府」を活字本は欠く。



三行目「弘」を活字本は「和」とする。五行目、「向」を活字本は「間」とするが、「天台に向かうを擬り」、すなわち円仁が天台山へ赴くことを計画した意であると考えられるため、青本の記載が正しいと考えられる。五行目、「有」の下に個人蔵本は「之」を補う。七行目の「傳燈法師位」を個人蔵本は「傳燈大法師」とする。円仁に大法師位を授けられたのは嘉祥元年(八四八)六月二十七日のことであり、<sup>17</sup>青本の記載で確定できる。

## 第二節 『慈覚大師在唐送進録』の書誌学的考察と将来物の概要

### (1) 『慈覚大師在唐送進録』の諸本の概要

本目録は、その末尾に「右得<sub>二</sub>請益伝灯法師位円仁書<sub>一</sub>、且所<sub>二</sub>求得<sub>一</sub>新訳撰集法門、并両部大曼荼羅等、送<sub>二</sub>延暦寺<sub>一</sub>。凡真言儀軌等、唐国和上等、尤有<sub>レ</sub>深<sub>二</sub>誠<sub>一</sub>之。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>妄散<sub>一</sub>。但其目録先附<sub>二</sub>第二舶粟田録事<sub>一</sub>者。仍且記録如<sub>レ</sub>件。承和七年正月十九日都維那伝灯住位僧仁全、寺主伝灯住位僧治哲、上座伝灯住位僧道叡」(青蓮院本)とある。本目録の成立事情は第一章ですでに述べたが、在唐中の円仁から送られてきた将来物に基づき、承和七年(八四〇)正月十九日に比叡山延暦寺で作成されたものである。現存諸本は以下の通りである。

#### (イ) 青蓮院本

現在青蓮院門跡吉水蔵の別途指定分(旧第三十二箱)に「円仁在唐送本目録」の名称で収録されており、一九八九年、「円仁入唐請来書目録(承和七年正月十九日)」の名称で重要文化財に指定されている。<sup>18</sup>巻子本で楮交じり斐紙に記され、内題は「天台法花宗請益円仁法師且求<sub>レ</sub>送法門并外書等目録」となっている。料紙は縦二七・六糎、横三四八・八糎<sup>19</sup>であり、七紙を接いで墨書されている。<sup>20</sup>表紙には「目録 慈大師」と外題があり、見返に

は「青蓮藏本」とあり、「慶安第二初夏上旬之候加<sub>二</sub>修復<sub>一</sub>了。」と記され、慶安二年（一六四九）に修復を加えられた写本である。内題の「天台法花宗請益円仁法師且求所<sub>レ</sub>送法門曼荼羅外書等目錄」が本目錄の当初の題名であったと考えられる。奥書に「<sub>二</sub>校畢<sub>一</sub>。嘉祥三年七月一日以<sub>三</sub>光房律師御本<sub>一</sub>書写功既畢。院昭<sub>21</sub>」とあることから、嘉祥三年（一一〇八）に、院昭<sub>21</sub>が三光房律師本を写したものであることが分かる。

#### （ロ）比叡山南溪藏本

これは現在比叡山東塔南谷の南溪藏に『勘定前唐院見在書目錄』をはじめとする円仁に関する十一種の目錄とともに「承和七年慈覚大師送<sub>二</sub>延曆寺<sub>一</sub>聖教目錄」の名で収録されている。体裁は袋綴の明朝綴で、縦二七・四糧、横二二・〇糧の八十五丁からなり、渋引きの原表紙に以下の外題が記されている。

注進 勘定前唐院見在書目錄

前唐院法文新目錄 入唐新求聖教目錄 二通

御経藏宝物聖教等目錄

承和七年慈覚大師送延曆寺聖教目錄

内題は「天台法華宗請益円仁法師且求所<sub>レ</sub>送法門曼荼羅并外書等目錄」とあり、奥書に「天明三癸卯七月晦日、以<sub>二</sub>横川鶏頭院本<sub>一</sub>写。請<sub>二</sub>生々所<sub>レ</sub>録書翫索云尔<sub>一</sub>。叡山東塔南谷吉祥院大僧都遍照金剛実霊」の文が見られ、天明三年（一七八三）、南谷吉祥院の大僧都遍照金剛実霊が書写したものであることが分かる。

#### （ハ）叡山文庫池田史宗藏本

この写本は、叡山文庫池田史宗藏に伝来しており、『前唐院経藏目錄』一帖（池田内典一―五十）の中に収録

され、薄墨色の原表紙に『承和七年慈覚大師送延暦寺聖教目録』の外題がある。中扉には、上述の南溪藏本と同様、五点の目録名が記載されている。体裁は袋綴明朝綴の冊子本で、縦二七・三糎、横一九・八糎の八十七丁からなり、このうち『承和七年慈覚大師送延暦寺聖教目録』は十七丁である。奥書の末尾に、「寛政九丁巳年九月以三大阿闍梨実靈之本<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>書<sub>コ</sub>写之<sub>一</sub>畢。比叡南山什善沙門護法真超<sub>22</sub>」とあり、寛政九年（一七九七）九月に比叡山無動寺谷什善坊の真超が実靈の写本、すなわち前述の南溪藏本を写したものであることが窺える。

## （二）活字本

活字本は、周知のように『大正蔵』本（五五卷、一〇七六b）があるが、その底本とするところは『日仏全』所収本（第九五、二三九上―二四一頁上）である。しかし、その『日仏全』本は奥書がなく、先の『承和五年目録』と同様、どの写本に基づいたものかは不明である。なお、『平安遺文』（八卷、四四四八号、三三三六頁）にも収録されている。

(2) 『慈覚大師在唐送進録』の翻刻と諸本の校勘

「慈覚大師在唐送進録」

凡例

- 一、本目録は青蓮院本(現京都国立博物館保管)『慈覚大師在唐送進録』を翻刻したものである。
- 一、対校本として、写本は叡山文庫池田史宗藏本、活字本は『大正新修大藏經』本及び『大日本仏教全書』本を使用した。本目録の下面に記載の校勘記においては、叡山文庫池田史宗藏本を「池」、『大正新修大藏經』本を「大」、『大日本仏教全書』本を「全」と省略した。異同のある箇所には中黒のルビを振り、校勘記と対照させた。
- 一、諸本の旁註は省略し、「校勘記」では旧字と常用字の異同については省略した。
- 一、全将来物に便宜上アラビア数字で通し番号を付したが、青蓮院本に記載されていない書目は丸括弧で示し、通し番号には含まないこととした。
- 一、書目が一行に収まらない場合は、Ⅱを用いて接続部分を示した。
- 一、翻刻に当たっては、原本使用の文字を重視して常用字体・正字体・異体字・略字体を適宜使用した。

「慈覺大師在唐送進錄」

慈覺大師在唐送進錄

(表紙見返)「青蓮藏本」(右下)

「慶安第二初夏上旬上旬之候加修復了」(左下)

天台法花宗請益圓仁法師且求所送法門曼荼羅并外書等目錄

大乘經律論梵漢字真言儀軌讚抄三十一部三十一卷  
章疏傳記抄四十九部六十三卷  
曼荼羅壇樣并傳法和上等影抄二十二鋪  
外書抄一十四部一十四卷

大乘經律論抄一十二部一十二卷

梵漢字真言儀軌讚抄三十一部三十一卷

章疏傳記抄四十九部六十三卷

曼荼羅壇樣并傳法和上等影抄二十二鋪

外書抄一十四部一十四卷

大乘經律論

合一十二部一十二卷

1 法華經一部八卷 複一卷

2 新譯般若心經 一卷 般若三藏譯

3 梵漢對譯阿彌陀經 一卷

【校勘記】

・池、大、全「華」。・大、全「并」。

・大、全「并」。・池、大、全「尚」。・池、大、全「總」。

・池、大、全「總」。

・池、大、全「總」。

・池、大、全「總」。

・大、全「并」。・池、大、全「總」。・池、大、全「部」。

・池、大、全「總」。

・池、大、全無「心」。

・大、全「陀」。

- 4 一切佛心中心經一卷
- 5 梵漢陀羅尼集要經一卷
- 6 大吉·祥天女經一卷
- 7 寶星經略述廿八宿依盧瑟吒仙人經一卷
- 8 藕婆呼童子經一卷
- 9 金剛般若波羅密經一卷
- 10 金剛般若波羅密經一卷
- 11 說罪要行法一卷
- 12 梵漢對譯金剛經論頌一卷  
已上一十二部一十二卷同帙雜第一
- 梵漢兩字真言儀軌讚
- 合三十一部三十一卷
- 13 梵漢兩字法花儀軌一卷
- 14 梵漢兩字青頸大悲真言一卷
- 15 梵漢兩字無垢淨光真言一卷
- 16 梵漢兩字不空網索真言一卷
- 17 梵漢兩字阿闍如來念誦供養法一卷 不空三藏譯
- 18 梵漢兩字觀自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷
- 19 梵漢兩字金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵儀軌一卷
- 20 梵漢兩字千手千眼觀自在菩薩脩行儀軌一卷

- 
- 池、大、全無「心」。
  - 池、大、全「陀」。
  - 大、全、池「吉」。
  - 池、大、全「二十」。池「盧」。
  - 大、全「蘇」。全「重」。
  - 池、大、全「蜜」。
  - 池、大、全「蜜」。
  - 池「對」。
  - 池、大、全「華」。
  - 池「觀」。
  - 大、全「菩」。池無「金剛」。
  - 池「觀」。大、全「修」。

- 21 梵漢兩字普賢金剛薩埵念誦儀軌一卷
- 22 梵漢兩字火壇供養及供養十天法一卷
- 23 梵漢兩字如意輪菩薩真言注義一卷
- 24 梵漢兩字佛頂尊勝陀羅尼注義一卷 不空三藏譯
- 25 梵漢兩字大佛頂根本讚等諸雜讚一卷
- 26 梵漢兩字釋迦如來涅槃後弥勒菩薩悲願讚一卷 複十二讚
- 27 梵漢兩字法花經品題梵語兼諸羅漢名一卷
- 已上一十五部一十五卷同帙雜第二
- 28 梵漢對譯普賢行願讚一卷
- 29 梵漢兩字蓮花讚一卷
- 30 梵漢兩字除壇上粉念此緣生偈讚一卷
- 31 梵漢兩字最上乘教授戒懺悔文一卷
- 32 梵漢兩字隨求提目一卷 複八真言
- 33 梵漢兩字阿密利多軍荼利大神力陀羅尼一卷 阿地多三藏与日昭三藏同譯
- 34 梵字一卷
- 35 梵漢兩字葉衣觀自在菩薩法一卷
- 36 梵漢兩字金剛界大曼荼羅秘密修行法門一卷
- 37 梵漢兩字大元阿吒薄句無邊甘露降伏一切鬼神真言一卷
- 38 (觀自在菩薩如意輪念誦儀軌一卷 不空三藏譯)
- 十八會指歸一卷

- 池「大」。
- 大、全「陀」。
- 大、全「華」。
- 池無「一」。
- 大、全「華」。
- 大、全無「懺」。
- 大、全「陀」。• 池、大、全「地」下有「瞿」。• 池「與」。
- 大、全無此本。
- 池「觀」。
- 大、全「拘」。
- 大、全有此本。• 池無「三藏」。
- 大、全此上有「金剛頂瑜伽」。• 池「皈」。

- 39 修真言三昧四時札·懺供養儀要一卷
- 40 大佛頂如來灌頂部錄中出印契別行法門一卷
- 41 金剛頂·千手千眼觀自在菩薩念誦法一卷
- 42 施燄面一切餓鬼食施·羅尼一卷
- 43 悉談·章一卷
- 已上一十六部一十六卷同帙雜第三
- 章疏傳記
- 合四十九部六十三卷
- 44 四十二字門義一卷 南岳思大師作
- 45 天台五時八教次第圖一卷
- 46 智者大師修三昧常行之法一卷
- 47 五方便念佛門一卷 天台大師記
- 48 法花·經略疏三卷 上中下 弘文館·大學士王縉撰
- 49 阿彌陀·經贊一卷 沙門淨遐撰
- 50 淨名疏四卷 沙門道液集
- 已上七部一十二卷同帙雜第四
- 51 淨名經記五卷 沙門文襲·集
- 52 淨名經關中疏釋微二卷 條·山沙門契真述
- 53 釋門自鏡錄五卷 複一卷 僧惠詳集
- 54 清涼山宋谷法師求法花三昧靈驗傳二卷 上下

- 池「禮」。
- 大、全無「頂」。
- 池、大、全「陀」。  
·大、全此下有「法」。
- 大、全「曇」。
- 大、全無「之」。
- 池、大、全「華」。  
·大、全「館」。
- 大、全「陀」。  
·大、全「讚」。
- 大、全「撰」。
- 大、全「龔」。
- 大、全此上有「中」。
- 池、大、全「法華三昧靈驗傳二卷上下清涼山宋谷法師述」。



已上四部一十卷同帙雜第五

55 肇論抄三卷 沙門惠澄撰

56 依肇論略出要義一卷 沙門靈興撰

57 肇論疏一卷 東山矩作

58 肇論文句圖一卷 沙門惠澄撰

59 大乘楞伽正宗決一卷

(因明釋鈔三卷 章敬寺擇隣撰)

60 因明入正理論義纂要一卷 沙門惠沼集

61 因明義斷一卷 沙門惠沼述

62 量處重輕儀一卷 沙門道宣述

已上八部一十卷同帙 雜第六

63 大般若經闕一卷

64 略羯磨一卷 沙門懷素撰

65 劫章科文一卷

66 聖者名一卷

67 廿九位法門一卷

68 佛性譚一卷 沙門真覺述

69 清涼山略傳一卷 大花嚴寺記

70 荊州沙門無行和尚書一卷

71 感通傳一卷 沙門道宣述

·大、全「鈔」。

·大、全無「依」。·池「署」。·大、全「靈」。

池、大、全有此本。

·大、全「現」。·大、全無「義」。

·大、全「集」。

·池、大、全「九」。·池、大、全此下有「三」。

·池、大、全「開」、此下有「題」。

·大、全「二十」。

·大、全「歌」。

·池、大、全「華」。

72	隋廬山遺愛寺慧瑠·禪師念佛三昧指歸一卷
73	觀大師諸經了義一卷
74	上都清禪寺至演禪師鍾傳一卷 大理牛簫與僧至演同叙
75	內供奉談薙·法師歎齊格并文一卷
76	歎齊文五卷 複一卷
	已上一十四部一十四卷同帙雜第七
77	天台大師觀心誦經一帖
78	羯磨文一帖
79	南岳思禪師法門傳一帖 上下 清信弟子衛尉承·杜·肱撰
80	釋迦如來賢劫記一帖
81	佛本內傳一帖
82	歸敬三寶并開題識詞一帖
83	持法花經三昧修證決一帖
84	受菩薩戒文一帖
85	歎德僧正等一帖
86	劫章頌一帖
87	劫章頌疏一帖 沙門遍知集
88	劫章頌記一帖 沙門道詮述
89	佛史·寶林傳一卷 二帖
90	揚州東大雲寺演和上碑一帖

·大、全「珍」。

·池「觀」。

·大、全「延」。  
·大、全「并」。

·大、全「丞」。  
·池「桓」。

·池「皈」。  
·大、全「并」。  
·大、全「華」。

·大、全「曹溪」。  
·池「宝」。  
·大、全「十帖」。  
·池「十卷」。

91	諸天地獄壽量分限一帖
92	七言法花經詩五十七首一帖
	已上六部十七卷雜第八
	曼荼羅壇樣并傳法和上等影
	合二十二鋪
93	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪 五副
94	金剛界大曼荼羅一鋪 七副
95	金剛界八十一尊種子曼荼羅一鋪
96	金剛界卅七尊種子曼荼羅一鋪
97	金剛界曼荼羅位樣一帖
98	法花曼荼羅位樣一張
99	觀音壇樣一張
100	金剛面猪頭菩薩像樣一張
101	金剛面菩薩像樣一張
102	南岳思大師影一鋪 三副
103	天台智者大師影一鋪 三副
104	僧伽和上影一張
105	梁達山登禪師影一張
106	阿蘭若比丘像一張
107	隋江陽永齊寺僧映禪師影一張

・大、全「華」。
・池、大、全此上有「十」。
・大、全「并」。
・大、全「毘」。
・大、全「大」。
・大、全「應」。
・大、全「三幅」。
・大、全「幅」。
・池、大、全「華」。
・大、全「幅」。
・大、全「幅」。
・大、全「映」。

108	惠向禪師影一張
109	梁法惠禪師影一張
110	隋惠斌禪師影一張
111	梁江陽禪衆寺僧定禪師影一張
112	齊郡道超禪師影一張
113	秦郡東寺老僧影一張
114	陳曲水寺法惠禪師影一張
	已上二十二鋪納柒泥皮箱一合
	外書
	合一十四部一十四卷
115	杭越寄和詩并序一帖
116	沙門清江新詩一帖
117	判一百條々別二道一帖
118	祇對儀一帖
119	任氏怨歌行一帖 白居易
120	寒菊一帖
121	攬樂天書一帖
122	歎德文一帖
123	雜詩一帖
124	祝元膺詩一卷

・大、全「帖」。

・大、全無「々」。  
・大無「二」。

・大、全「并」。

・池、大、全「漆」。

125 雜詩一帖

126 前進士弛肩吾詩一卷

127 漢語長言一卷

128 波斯國人形一卷

已上一十四部一十四卷同帙雜第九

別物

封皮箱一合

件箱、請益法師圓仁書僞、般若理趣釋經一卷、梵字金剛經、梵本般若心經、梵字金剛經論頌、梵語雜名、十七壇樣、護摩壇樣、胎藏手印樣、五秘密儀軌等、特盛一箱。全封不可開出。有一思故、不是惜法門者。

右得請益傳燈法師位圓仁書僞、且所求得新譯撰集法門、并兩部大曼荼羅等、送延曆寺。凡真言儀軌等、唐國和上等、尤有深誠之。不可妄散。但其目錄先附第二舶栗田錄事者。仍且記錄如件。

承和七年正月十九日都維那傳燈住位僧仁全

寺主傳燈住位僧治哲

上座傳燈住位僧道叡

別當

池「國」。

大、全「備」。

大、全「備」。大、全「并」。池、大、全無「大」。

大、全「叡道」。

池無「別當」。

〔奥書〕「二校畢」

「嘉承三年七月一日以三光房律師御本

書寫功既畢。院昭」

・池「朔」。

### （3）『慈覺大師在唐送進錄』に見られる将来物の概要

次に、「在唐送進錄」の青蓮院本及び青蓮院本以外の諸本（叡山文庫蔵本、『大正蔵』本、『日仏全』本との記載の相違を見ていく。なお、本目録に見える書目の大半は「承和五年目録」にも存在しており、前節で異同を確認した書目については省略する。

#### 凡 例

- ・「青本」 〓 青蓮院本を指す。
- ・「池田本」 〓 叡山文庫池田史宗蔵本を指す。
- ・「写本」 〓 青蓮院本、池田本を指す。
- ・『大正蔵』本 〓 『大正新脩大蔵經』本を指す。
- ・『日仏全』本 〓 『大日本仏教全書』本を指す。
- ・「活字本」 〓 『大正蔵』本、『日仏全』本の両本を指す。
- ・『大正』 〓 『大正新脩大蔵經』の巻数、頁数、No.を指す。
- ・『大蔵』 〓 『大蔵經全解説大事典』の頁数を指す。
- ・『仏書』 〓 『仏書解説大辞典』の巻数・頁数を指す。

- ・（一）青本に欠けている字を、その他の諸本に依って補った。
- ・「承和五年目録」及びアラビア数字の番号Ⅱ前掲の「日本国承和五年入唐求法目録」及び最上段に記載の番号を指す。
- ・「在唐送進録」及びアラビア数字の番号Ⅱ前掲の「慈覺大師在唐送進録」及び最上段に記載の番号を指す。
- ・「新求目録」及びアラビア数字の番号Ⅱ後掲の「入唐新求聖教目録」及び最上段に記載の番号を指す。

#### 『慈覺大師在唐送進録』に見られる将来物の概要

- 2 『新訳般若心経』一卷 般若三蔵訳 「心」を池田本と活字本は欠くが、誤りである。
- 3 『梵漢対訳阿弥陀経』一卷 正字の「陀」を青本は俗字の「陀」とする。この記載の相違は本目録の24「梵漢兩字仏頂尊勝陀羅尼注義」一卷 不空三蔵訳」など他の箇所でも見られる。
- 4 『一切仏心中心経』一卷 青本以外の諸本は「経」の上の「心」の字を欠く。「承和五年目録」2の諸本及び『八家秘録』巻上（『大正』五五、一一一七b、No.二一七六）も青本の記載と同じであり、「心」を補う必要があろう。
- 7 『宝星経略述二十八宿伽藍瑟吒仙人経』一卷 「二十」を青本は「廿」とする。
- 8 『蘇婆呼童子経』一卷 正字の「蘇」を写本は俗字の「蘇」とする。「童」を『日仏全』本は「重」と記すが誤りである。
- 9 『金剛般若波羅蜜経』一卷 「蜜」を青本は「密」とする。10 『金剛般若波羅蜜経』も同様である。「承和五年目録」29に記載の『梵漢兩字金剛般若経』二巻と異なり、本目録では一巻ずつ記している。
- 19 『梵漢兩字金剛頂勝初瑜伽経中略出大樂金剛薩埵儀軌』 「金剛」を活字本は「菩」とする。池田本は「金剛」

を欠く。「承和五年目録」13でも見たが、『金剛頂初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀』（『大正』二〇・五一三 c・No.一一二〇）の梵漢対訳版であり、「薩埵」と確定できる。

20 『梵漢両字千手千眼觀自在菩薩修行儀軌』一卷 「修」を青本は「脩」とする。

31 『梵漢両字最上乘教授戒懺悔文』一卷 「懺」を活字本は欠く。「承和五年目録」23で確認したが、『大正』第一八卷・No.九一五『最上乘教授戒懺悔文』に当たり、活字本の記載は誤りである。

33 『梵漢両字阿密利多軍荼利大神力陀羅尼』一卷、阿地多三藏与日昭三藏同訳 青本以外の諸本は人名の「地」の下に「瞿」を補う。「承和五年目録」7にも登場したが、阿地瞿多は中インド出身で慈恩寺に住した僧侶であり（望月信亨編『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会、一九五四年、一卷、三九頁）、活字本の記載で確定できる。

37 『梵漢両字大元阿吒薄句無辺甘露降伏一切鬼神真言』一卷 「句」を活字本は「拘」とする。「新求目録」572の諸本の記載も「句」とする。

37と38の間に青本以外の諸本は『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』一卷、不空三藏訳を記す。

38 『十八会指帰』一卷 活字本はこの上に「金剛頂瑜伽」の字を加える。『大正』第一八・二八四 c・No.八六九も活字本と同じ記載であり、これが正式名である。

46 『智者大師修三昧常行之法』一卷、条山沙門契真述 「之」を活字本は欠くが、「承和五年目録」79、「新求目録」625の青本も活字本と同じ記載である。

50 『浄名疏』四卷、沙門道液集 「集」を活字本は「撰」とするが、「承和五年目録」65、「新求目録」611の諸本も「集」としており、この字で確定できる。

52 『浄名経関中疏釈微』二卷、（中）条山沙門契真述「条」の上に活字本は「中」を加える。この字は「承和五年目録」66及び「新求目録」612の諸本も活字本の記載と同じであり、「中」の字を補うのが正確である。中条山



は、中国山西省南部の山脈である。

54 『清涼山宋谷法師求法華三昧靈驗傳』二卷上下 青本以外の諸本は「法華三昧靈驗傳二卷上下、清涼山宋谷法師述」とする。「承和五年目錄」<sup>106</sup>、「新求目錄」<sup>652</sup>の青本は『法華三昧靈驗傳』二卷と記す。

55 『肇論抄』三卷、沙門惠澄撰 俗字の「抄」を活字本は正字の「鈔」とする。

56 『依肇論略出要義』一卷、沙門雲興撰 「依」を活字本は欠く。「承和五年目錄」<sup>71</sup>の諸本及び「新求目錄」<sup>617</sup>の諸本は「依」の字を記さず、活字本の記載で確定できると考えられる。

青本以外の諸本は59と60の間に『因明糅鈔』三卷、章敬寺擇隣撰が存在する。

60 『因明入正理論義纂要』一卷 沙門惠沼集 「理」を活字本は「現」とし、「義」を活字本は欠く。

次行の「已上八部一十卷」を池田本、活字本は「九部一十三卷」と記すが、青本以外の書目では59と60の間に『因明糅鈔』三卷が記されているためであり、「八部一十卷」と確定できる。

63 『大般若經関』一卷 この書は現存していないが、永超集（嘉保元年・一〇九四撰）『東域伝灯目錄』に二種挙げられている。一つは、「大般若經関一卷 唐三藏、珍録出レ之。南都本理趣分慈恩疏、列二五種般若一已去開題中略顯示レ之」、他方は「大般若經関一卷 出二円仁録一（後略）」（『大正』五五・一一四八a）とあり、唐三藏の撰述とされ、円珍ならびに円仁の目錄に載せられていることを記載している。本目錄では、青本以外の諸本は「関」を「開」とし、その下に「題」の字を補っているが、「関」が正解であろう。「承和五年目錄」<sup>89</sup>でも異同が見られ、「新求目錄」<sup>635</sup>の諸本も「開」とする。（『仏書』七・四二九頁）

67 『二十九位法門』一卷 「承和五年目錄」<sup>89</sup>、「新求目錄」<sup>635</sup>は63の書目と合わせて『大般若經開兼廿九位法門』とする。

68 『仏性歌』一卷 沙門真覺述 正字の「歌」を青本は「歌」の同字である「謠」とする。いかなる書物であるかは未詳である。

72 『隋廬山遺愛寺慧殊禪師念仏三昧指帰』一卷 正字の「珍」を写本は俗字の「玠」とする。この書物も詳細は不明である。

75 『内供奉談筵法師歎斎格并文』一卷 「筵」を活字本は「延」とする。「承和五年目録」112の諸本は「筵」、「新求目録」658の青本・池田本・『日仏全』本は「延」とするが、「談筵法師」という僧侶については未詳である。

92と93の間、「已上六部十七卷」の「六部」を青本以外では「十六部」とするが、この記載が正しい。

93 「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」一鋪、五副 正字の「毗」を活字本は俗字の「毘」とする。「盧」を『大正』本は「慮」とするが誤りである。また、「五副」を活字本は「三幅」とするが、「承和五年目録」132の諸本、「新求目録」682の諸本も「五」とし、青本の記載で確定できる。

107 「隋江陽永齊寺僧暎禪師影」一張 「暎」を活字本は「映」とし、「承和五年目録」146の諸本は「映」、「新求目録」695では高山寺本が「映」としている。『弘贊法華伝』巻第七、藍谷沙門慧詳撰の「誦持第六之二」に、「隋江陽永齊寺釈僧映」(『大正』五一・三一b・No.二〇六七)と見えている人物とすれば、「映」と確定できよう。

117 『判一百條々別二道』一帖 「々」を活字本、「二」を『大正』本は欠く。「承和五年目録」127は「判一百條一卷 駱賓王撰」としている。

124 『祝元膺詩』一卷 「卷」を活字本は「帖」とする。「承和五年目録」128、「新求目録」678の諸本も「卷」としており、「卷」と確定できる。

本目録の末尾には、次のように「別物 封皮箱一合」について記されている。

件箱、請益法師円仁書偈、般若理趣釈經一卷、梵字金剛經、梵本般若心經、梵字金剛經論頌、梵語雜名、十七壇様、護摩壇様、胎藏手印様、五秘密儀軌等、特盛一箱。全封不可開出。有二思一故、不三惜三法門一者。右得三請益伝灯法師位円仁書一偈、且所三求得一新譯撰集法門、并兩部大曼荼羅等、送三延曆寺一。凡真

言儀軌等、唐国和上等、尤有<sub>レ</sub>深<sub>ニ</sub>誠<sub>一</sub>之。不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>妄散<sub>一</sub>。但其目錄先附<sub>ニ</sub>第二舶粟田録事<sub>一</sub>者。仍且記録如<sub>レ</sub>件。

承和七年正月十九日都維那伝灯住位僧仁全

寺主伝灯住位僧治哲

上座伝灯住位僧道叡

別当

一行目と三行目の「稱」を活字本は「爾」の異体字である「儺」と記す。「円仁の書に稱く」であり、青本の記載で確定できる。三行目の「大」を活字本は欠く。五行目以降に延暦寺三綱の署名が添えられているが、七行目の「上座伝灯住位僧」の「道叡」を活字本では「叡道」としている。この人物については詳らかではなく、考察を要する。<sup>23</sup>

### 第三節 『入唐新求聖教目錄』の書誌学的考察と将来物の概要

#### (1) 『入唐新求聖教目錄』の諸本の概要

本目錄は、その末尾に「承和十四年月日入唐天台宗請益伝灯法師位円仁上」とあり、承和十四年(八四七)長安での求法を終えた円仁が、九月十九日太宰府鴻臚館に到着し、十二月までの間に揚州・五台山・長安での蒐集物

を整理して記載した総目録である。冒頭に「長安五臺山及揚州等處、所レ求經論念誦法門、及章疏傳記等、都計伍佰捌拾肆部、捌佰貳卷」（青蓮院本）とあり、円仁自ら合計五百八十四部八百二卷をもたらしたと報告を行っている。

『入唐新求聖教目録』の伝存する写本は、青蓮院本、梅尾山高山寺本、比叡山南溪藏本、叡山文庫藏本があり、諸本の概要を見ていく。

### （イ）青蓮院本

第一に、青蓮院本は青蓮院門跡吉水藏聖教の別途指定分に『八家秘録及諸真言目録』として分類されている。入唐八家すなわち伝教大師最澄（七六六—八二二）、弘法大師空海（七七四—八三五）、慈覚大師円仁（七九四—八六四）、円行（七九九—八五二）、常曉（—八六六）、惠運（七九八—八六九）、智証大師円珍（八一四—八九一）、宗叡（八〇九—八八四）の将来目録、及び五大院安然（八四一—九〇二）が入唐八家の将来經典を分類してまとめた『諸阿闍梨真言密教部類総録』（通称『八家秘録』）の計十帖のうちの二帖として伝わっているものである。<sup>24</sup> 粘葉装の紙綴綴で楮交り斐紙に記され、縦二四・〇糎、横一五・三糎の冊子本であり、この体裁は十帖全てに共通している。円仁の目録は五十一丁からなり、一丁十四行で墨書されている。外題は「慈覚大師」、内題は「入唐新求聖教目録」と記され、その下に朱筆で「慈覚大師求法目録」とある。見返に朱筆で「双本云、此目録奥書有二兩本」。依一一本者在唐目録也、依一一本者進官目録也、以三多本可勘校之□。」と記されている。奥書には細字の朱筆で「後校ヨ合以三双蔵藏本入了。」、墨書で「寛治五年十月十六日一校了。勝豪」とあり、さらに別筆で「以三円融房藏本一校了。」と記されている。これにより、この目録は勝豪もしくは他の人物によって比叡山東塔南谷の円融坊（現大原三千院梶井門跡内）蔵本をもって校合した後に、寛治五年（一〇九一）十月十六日に勝豪<sup>25</sup>が東塔東谷の双蔵院（現滋賀県大津市坂本里坊）蔵本である「在唐送進録」（『慈覚大師在唐送進録』）と「進官

目録」(『入唐新求聖教目録』)をもって校合したであろうことが分かる。

#### (ロ) 高山寺本

第二に、京都市右京区梅尾山高山寺の経蔵に伝来している、重要文化財『入唐八家請来目録』二帖(Ⅱ部五三号)に収録された写本があり、閲覧の機会を得た。上巻は表紙及び最澄、空海の目録が欠けており、『入唐新求聖教目録』及び円行の『靈巖寺和尚請来法門等目録』が残存する。下巻に恵運の『恵運律師書目録』、常暁の『常暁和尚請来目録』、円珍の『智証大師請来目録』、宗叡の『禪林寺宗叡僧正目録』が収められている。粘葉装柈型の冊子本で、縦一七・一糎、横一五・五糎、楮紙打紙に一丁十四行、一行十一字前後で墨書されている。<sup>26</sup>上巻は計八十六丁で、そのうち円仁の目録は六十九丁である。上巻には奥書は記されていないが、書体から院政期の写本と見られる。<sup>27</sup>

#### (ハ) 比叡山南溪藏本

第三の比叡山南溪藏本は、かつて小野勝年氏によりその存在が明らかにされた写本であるが、<sup>28</sup>東塔南谷の南溪蔵に現存しており、閲覧の機会を得た。体裁は袋綴装の明朝綴で縦二七・四糎、横二二・〇糎、八十五丁からなり、上述した『在唐送進録』と同様、渋引きの原表紙に以下の外題が記されている。

注進 勘定前唐院見在書目録

前唐院法文新目録 入唐新求聖教目録 二通

御経藏宝物聖教等目録

承和七年慈覚大師送延暦寺聖教目録

『注進 勘定前唐院見在書目録』をはじめとする五点の目録が収録され、それには『入唐新求聖教目録』の抄写が『入唐新求聖教目録』及び『御経蔵宝物聖教等目録』との書名で収録されている。一点目の『入唐新求聖教目録』の内題は、「入唐新求聖教目録 慈覚大師求法目録」となっている。次に、二点目の『御経蔵宝物聖教等目録』の見返には、

- |   |            |    |           |
|---|------------|----|-----------|
| 一 | 覚大師求聖教目録   | 七  | 入唐新求聖教目録  |
| 二 | 書法目録       | 十一 | 慈覚智証撰述目録  |
| 三 | 御経蔵目録      | 九  | 上金剛頂蘇悉地疏表 |
| 四 | 御経蔵櫃目録     | 十  | 同智証       |
| 五 | 同宝物目録      |    |           |
| 七 | 前唐院御蔵資財等目録 |    |           |
| 六 | 同御厨子宝物実録   |    |           |

とあり、七に『入唐新求聖教目録』が収録されている。以下、一点目の『入唐新求聖教目録』を(A)、『御経蔵宝物聖教等目録』に収録された『入唐新求聖教目録』を(B)とすると、『入唐新求聖教目録』(A)の書写奥書には、「天明三癸卯七月晦日以横川鶏頭院本一写。請生々本録、悉翫索以与含識共開仏智見、云爾、遍照金剛実霊(花押)」とあり、天明三年(一七八三)七月晦日に実霊が横川兜率谷の鶏頭院蔵本をもって原本に対して忠実に写したことが窺える。また、『入唐新求聖教目録』(B)に書写奥書は見られないが、筆跡が同一のことから書写年代は(A)と同様であると考えられる。

(二) 叡山文庫池田史宗蔵本

第四に、『入唐新求聖教目錄』の全文書写と抄写の二種が叡山文庫の池田史宗蔵に收藏されている。前者は『慈覺大師請來目錄』一帖（池田内典一―五七）として伝わっている。体裁は袋綴明朝綴の冊子本で、縦二七・五糎、横一九・四糎であり、四十五丁からなり、茶地の原表紙に『慈覺大師請來目錄 八卷内』と外題が記され、表紙右下に「山門無動寺蔵」の印記がある。中扉に記された内題には、「円仁、慈覺大師請來目錄、果宝、八卷内」とある。書写奥書に「文政三年庚辰十一月仲旬以東寺觀智院本書寫之、台獄已講權僧正真超」とあり、文政三年（一八二〇）十一月中旬に東寺觀智院本をもって比叡山の僧侶真超が書写したものであることが分かる。後者は『在唐送進錄』の叡山文庫蔵本と同じく、『前唐院經蔵目錄』一帖（池田内典一―五〇）に収録されている。体裁は袋綴明朝綴の冊子本で、縦二七・三糎、横一九・八糎となっており、八十七丁のうち「入唐新求聖教目錄」は六丁である。薄墨色の原表紙に『前唐院經蔵目錄』と外題が記され、これも「山門無動寺蔵」の印記がある。中扉には南溪蔵本の外題と同様五点の目錄名が記載されている。奥書の末尾に、「寛政九丁巳年九月以大阿闍梨実靈之本令書寫之畢。比叡南山什善沙門護法真超」とあることから、寛政九年（一七九七）九月に比叡山無動寺谷什善坊の真超が実靈の写本、すなわち前述の南溪蔵本を写したものであることが窺える。

#### （ホ）活字本

次に、活字本のうち『大正蔵』本（第五五卷、一〇七八頁）が挙げられるが、この底本は高山寺本及び『日仏全』本となっている。『日仏全』本（第九五卷、二四二―二五一頁）の奥書に、「文政三年甲辰十一月中旬以東寺觀智院本令書寫之。台獄已講權僧正真超」とあり、文政三年（一八二〇）十一月に、真超が東寺觀智院本をもって書写したことが知られる。この他、『平安遺文』（八卷、四四五五号、三三四八頁）にも収録されている。

## (2) 『入唐新求聖教目録』の翻刻と諸本の校勘及び比叡山南溪藏本の翻刻

『入唐新求聖教目録』の校訂は、小野勝年氏の『入唐求法巡礼行記の研究』第四卷（鈴木学術財団、一九六九年）の巻末に附録として挙げられている。これは高山寺本を底本とし、対校本として青蓮院本を用いている。しかし、高山寺本には欠本が多数見られることから、本研究では青蓮院本を底本として高山寺本、叡山文庫藏本及び二種の活字本（『大正藏』本、『日仏全』本）と対校した。また、これとは別に本目録の抄写である比叡山南溪藏本（A）の全文翻刻を行い、比叡山南溪藏本（B）との比較を行った。



(イ)『入唐新求聖教目録』の翻刻と諸本の校勘

「入唐新求聖教目録」

凡 例

一、本目録は青蓮院本(青蓮院門跡吉水藏所藏)を底本として、円仁撰『入唐新求聖教目録』を翻刻したものである。

一、対校本として、写本は高山寺本(梅尾山高山寺所藏)、叡山文庫池田藏本、活字本は『大正新脩大藏經』本、『大日本仏教全書』本を使用した。

一、本目録の下段に記載の校勘記においては、高山寺本を「高」、叡山文庫池田藏本を「池」、『大正新脩大藏經』本を「大」、『大日本仏教全書』本を「全」と省略した。

一、全将来物にアラビア数字で通し番号を付したが、青蓮院本に存在しない書目は丸括弧( )で示し、通し番号に含まないこととした。

一、諸本に見られる傍注は省略した。また、二種の活字本は全て旧字体を使用しているが、「校勘記」ではその異同については省略した。

一、異同のある箇所には中黒のルビを振って示し、下段の「校勘記」と対照した。

一、書目が一行に収まらない場合はⅡを使って接続を示した。

一、翻刻に当たっては、原本使用の文字を重視して常用自体・正字体・異体字・略字体を適宜使用した。なお、以下の括弧内の異体字については正字を使用した。

様(樣) 醯(醢) 攝(攝) 發(發) 藐(藐) 胝(胝) 焰(焰) 禮(禮) 關(關) 鎖(鎖) 荼(荼) 猛(猛) 紐(紐) 幅(幅) 塙(塙) 鉗(鉗) 剛(剛) 經(經)  
頸(頸) 菩(菩) 井(井) 肇(肇) 糅(糅) 牒(牒) 承(承) 禪(禪) 變(變) 曼(曼) 張(張) 等(等) 帙(帙) 網(網) 迴(迴) 旨(旨) 柎(柎) 映(映) 肢(肢) 蠟(蠟) 蝟(蝟)

一、以下の括弧内の異体字については、字形の近い異体字を使用した。

陁(陁) 弥(旃)

一、以下の括弧内の正字については、青蓮院本に記載の漢字を使用した。

蔵(藏) 脉(脈) 舩(船)

〔表紙見返〕「雙本云」

「此目錄與書有兩本、依一本者在唐目錄也」

「依一本者進官目錄也、以多本可勘校之」

入唐新求聖教目錄

慈覺大師求法目錄（朱筆）

長安五臺山及揚州等處、所求經論  
念誦法門、及章疏傳記等、都計伍佰  
捌拾肆部、捌佰貳卷、胎藏金剛界  
兩部大曼荼羅及諸尊壇像、舍利  
并高僧真影等、都計伍拾種  
在長安城、所求經論章疏傳等、四  
百貳拾三部、伍佰五拾玖卷、胎藏金  
剛兩部大曼荼羅及諸尊曼荼羅  
壇像并道具等廿一種  
在五臺山、所求天台教迹、及諸章  
疏傳等、參拾肆部、參拾柒卷、并  
臺山土石等  
在揚州、所求經論章疏傳等、壹佰貳拾捌部、壹佰

〔校勘記〕

- ・大、全「臺」。池、大、全「州」。
- ・高、大「五百」。全「伍百」。
- ・高、大「八十四部八百二」。高無「界」。
- ・高、「兩」下有「界」。大、全「陀」。
- ・大、全「并」。大「五十」。全、「拾」下有「玖」。
- ・大、全「二十」。高、大「五百五十九」。全「伍百伍拾玖」。
- ・高、「兩」下有「界」。
- ・大、全「并」。高、大「二十」。
- ・高「臺」。
- ・高「三拾四」。大「三十四」。高、大「三十七」。全「參拾柒」。
- ・大、全「并」。
- ・大、全「臺」。高、大、全、「等」下有「三種」。
- ・池、大、全「州」。高、大「一百二十八部一百」。

玖拾捌卷、胎藏金剛兩部大曼荼羅及諸尊壇樣、高僧真影、及舍利等、貳拾壹種

- 1 聖迦拏忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經三卷 大興善寺三藏譯
- 2 金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品一卷 不空
- 3 大威怒烏芻澀麼儀軌一卷 不空譯
- 4 佛為優填王說王法政論經一卷 不空
- 5 速疾立驗魔醯首羅天說迦樓阿尾奢法一卷 不空三藏譯
- 6 觀自在菩薩如意輪瑜伽一卷 不空三藏譯
- 7 金輪王佛頂要略念誦法一卷 不空通諸佛頂
- 8 金剛壽命陀羅尼念誦法一卷 不空  
上七部九卷同帖一
- 9 聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌一卷 不空
- 10 金剛頂經多羅菩薩念誦法一卷 不空
- 11 甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌一卷 不空三藏譯
- 12 文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品一卷 不空三藏譯
- 13 不空網索毗盧遮那佛大灌頂光真言一卷 不空
- 14 金剛頂超勝三界經說文殊五字真言勝相一卷 不空三藏譯
- 15 五字陀羅尼頌一卷 不空
- 16 大日經略攝念誦隨行法一卷 不空 亦名五支畧念誦要行法一卷

- • • 高、大「九十八」。
- 高無「真」。
- • • 高、大「二十二」。
- 全「○」。
- 高、池、大、「空」下有「三藏譯」。
- 高、大「摩」。  
• 高無「譯」。
- 高「憂」。
- 高、池、大、全「樓」下有「羅」。  
• • • 高、池、大、全無「三藏譯」。
- • • 高、池、大、全無「三藏譯」。
- 池、全無「通」以下。高、次行有「已上七部九卷同帖」。
- 大、全「陀」。
- 高「上」上有「已」。  
• 高無「一」。
- • • 高、池、大、全無「三藏譯」。
- • • 高、池、大、全無「三藏譯」。
- 大「毘」。  
• 大、全「光」下有「明」。
- • • 高、池、大、全無「三藏譯」。
- 大、全「陀」。
- 全、「空」下有「三藏譯」。  
• 高、池、大、全無「亦」以下。

17	木槌經一卷	
18	大毗盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法一卷	不空
19	金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心真言一切如來蓮花大曼羅	
	品一卷	
20	大聖曼殊室利童子菩薩一字真言有二種亦名五字瑜伽法一卷	不空
21	金剛頂經觀自在王如來脩行法一卷	不空
22	金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論一卷	
23	金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢脩行念誦儀軌一卷	不空
24	金剛頂瑜伽降三世成就極深密門一卷	不空与遍智譯
25	仁王般若經·羅尼釋一卷	不空
26	金剛頂蓮花部心念誦儀軌一卷	亦有別本不空
27	佛說大輪金剛懃持陀羅尼印法一卷	不空
28	佛說一髻尊陀羅尼經一卷	不空
29	阿閼如來念誦供養法一卷	不空
30	金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經一卷	不空
31	金剛頂瑜伽護摩儀軌一卷	不空 更有別本一卷 阿目佉跋折羅
32	隨羅尼門法部要目一卷	不空
33	大聖文殊師利菩薩讚佛法身札一卷	不空
34	仁王般若念誦法經一卷	
35	成就妙法蓮花經·瑜伽觀智儀軌一卷	不空

·大、全「毘」。
·高、池、大、全「華」。
·高、大、「卷」下有「不空」。
·大、全「修」。
·大、全「修」。
·池「詠」。
·池、大、全「陀」。
·高、池、大、全無此本。
·高「捺」·大、全「陀」。
·大、全「陀」。
·高、大無「更」以下·全無「怯」·池、全無「折」。
·大、全「陀」·高、池、大、全、「法」下有「諸」。
·高、大、「卷」下有「不空」。
·大、全「華」·高本、「經」下有「王」字。

36	金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌一卷	不空
37	大樂金剛不空真實三昧經般若波羅密多理趣釋一卷	不空
38	略記護摩事法次第一卷	釋一卷 翻經沙門惠琳述
39	金剛界瑜伽略述世七尊心要一卷	大廣智
40	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌一卷	不空
41	大方廣佛花嚴經入法界品四十二字觀門一卷	戒本无上
	上六部六卷同帖五	
42	大方廣佛花嚴經入法界品頓證毗盧遮那法身字輪瑜伽儀軌一卷	
43	觀自在菩薩如意輪念誦法儀軌一卷	不空
44	佛頂尊勝陀羅尼念誦威軌經一卷	不空
45	如意輪菩薩真言注義一卷	
46	佛頂尊勝陀羅尼注義一卷	不空
47	聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法一卷	不空
48	金剛王菩薩秘密念誦儀軌一卷	不空
49	無量壽如來脩觀行供養儀軌一卷	不空
50	普賢金剛薩埵瑜伽念誦儀軌一卷	不空
51	佛說摩利支天經一卷	不空
52	金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌一卷	不空
53	仁王般若經陀羅尼念誦儀軌序一卷	題新譯
54	仁王護國般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌一卷	不空

• 高、全「署」。	
• 池、大、全「蜜」。	• 高無「不空」。
高、池、大、全無此本。	
• 高「署」。	• 高、全「卅」。
• 高、大、全「修」。	• 高、池、大、全、「軌」下有「經」。
• 高、池、大、全「華」。	• 高、大「不空」。
• 池、大、全「華」。	• 大「毘」。
• 高、全無「不空」。	
• 大、全「陀」。	• 高、池、大、全「儀」。
• 全「儀」。	• 池、大、全、「卷」下有「不空」。
• 大、全「陀」。	
• 高、大、全「修」。	
• 大、「仁」上有「新譯」、無「題」以下。	• 大「陀」。
• 高「密」。	• 大、全「陀」。
	• 高、池、全無此本。

55	瑜伽蓮花部念誦法經一卷	不空	池、大、全「華」。高無「經」。
56	瑜伽醫迦訖沙羅烏瑟尼沙斫訖羅真言安怛陀那儀則一字頂輪王瑜伽經	一卷 不空	大、全「陀」。高、池、大、全無「一字頂輪王瑜伽經」。
57	一字頂輪王瑜伽經一卷	不空	
58	一字頂輪王念誦儀軌一卷	不空	
59	(金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品一卷) 大虛空藏菩薩念誦法一卷	不空	大、全有此本。
60	上十五部十五卷同帖六 受菩提心戒儀一卷	不空	
61	略述金剛頂瑜伽分別聖位情證法門序一卷	不空	高「署」。高、大、全「修」。
62	般若波羅蜜多理趣大安樂不空三昧真實金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅 義述一卷 阿目佉金剛述		高、全「密」。高、大、「趣」下有「經」。高、大、「昧」下有「耶」。
63	金剛頂經金剛蜜大道場毗盧舍那如來自受用身內證智眷屬法身異名佛取 上乘秘蜜三摩地札纖文一卷	不空	高、大、全「界」。大、全「場」。高「遮」。池、大、全「最」。
64	文殊問經字母品第十四一卷	不空	高、大、全「密」。
65	瑜伽頂金剛頂經釋字母品一卷	不空	高、池、全無「頂」。
66	金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密脩行念誦儀軌一卷	不空	高、大、全「密」。高、大、全「修」。
67	十一面觀自在菩薩心蜜言儀軌經三卷	不空	高、大、全「密」。
68	菩提場莊嚴陀羅尼經一卷	不空	大、全「場」。大、全「莊」。大、全「陀」。
69	一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經一卷	不空	高、大、全「密」。大、全「陀」。

70	八大菩薩曼荼羅經一卷 不空
	上一十部十三卷同帖七
71	金剛頂瑜伽經十八會指歸一卷 不空
72	大吉祥天女十二名号經一卷 不空
73	佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經一卷 唐·院御本有之
74	大乘緣生論一卷 不空 鬱·楞迦造
75	大樂金剛薩埵脩·行成就儀軌一卷 不空
76	大藥叉女歡喜母并·愛子成就法一卷 不空
77	七俱智佛母所說准提陀羅尼經一卷 不空
78	七俱胝佛母准提陀羅尼念誦儀軌一卷 唐·院御本有之
79	觀自在大悲成就瑜伽蓮花部念誦法門一卷 不空
80	佛說大孔雀明王畫像壇儀軌一卷 不空
	上九部九卷同帖八
81	大聖文殊師利菩薩佛剎功德莊嚴經三卷 不空
82	大方廣如來藏經一卷 不空
83	末利支提婆花鬘經一卷 不空
84	佛說十力經一卷 勿提·犀·魚·譯
85	佛說迴向輪經一卷 尸羅達摩譯
86	花嚴長者問佛那羅延力經一卷
	(出生無邊門陀羅尼經一卷 不空)

·大、全無「經」。
·大、全「吉」。
·大、全「陀」。
·高、大、全無「鬱」以下。
·高、大、全「修」。
·池、大、全「刃」。
·大、全「陀」。
高、池、大、全無此本。
·大、全「華」。
·高無「不空」。
·大、全「莊」。
·高、池、大、全「華」。
·池、全「提」下有「匕」。
·全「摩」。
·大無「魚」。
·高、池、大、全「華」。
高本有此本。



87	般若波羅蜜·多心經一卷
88	出生无邊門·隨·羅尼經一卷 不空
89	葉衣觀自在菩薩經一卷 不空
	上十部一十二卷同帖九
90	大佛頂廣聚隨·羅尼經五卷
91	不動使者·隨·羅尼秘蜜法一卷 金剛菩薩譯
92	脩習般若波羅蜜·菩薩觀·念誦儀軌一卷 不空
93	金剛手光明灌頂經·寂·勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品一卷    不空共·遍智同譯
94	金剛峯樓閣一切瑜伽·瑜祇經一卷 南天竺三藏金剛智譯
95	金剛頂經·瑜伽·脩·習毗盧舍那三摩地法一卷 金剛智譯 上一部九卷一帖十二
96	佛說十地經九卷 尺羅達摩譯 上一部九卷一帖十二
97	金剛頂一切如來真實攝大乘現證大教王經三卷 不空
98	佛·頂·尊勝·隨·羅尼咒一卷
99	千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿无礙大悲心大·隨·羅尼神妙章句一卷
100	金剛恐怖集會方廣·儀·軌·觀自在菩薩三世·寂·勝·心明王經一卷 不空
101	大方廣曼殊室利經·觀自在菩薩授記品第卅四一卷 不空
102	金剛頂瑜伽念珠經一卷 不空

- 高「密」。
- 高、池、大、全「無」。· 大、全「陀」。
- 大、全「陀」。
- 大、全「陀」。· 高、大、全「密」。· 高、池、大、全「提」。
- 高、大、全「修」。· 高、全「密」。· 大、全、「觀」下有「行」。
- 大、全「最」。
- 池「与」。全「與」。· 池「訳」。
- 高、池、大、全無此本。
- 高、大、全「修」。· 大「毘」。· 池、大、全「舍」。
- 高、池、大、全有此本。
- 高「頂佛」。· 大、全「陀」。· 大、全「呪」。
- 高「無」。· 大、全「陀」。· 高無「羅」。
- 高「軌儀」。· 大、全「最」。
- 大「三十」。

103	大樂金剛不空真實三摩耶經般若波羅蜜蜜多理趣品一卷	不空	·高、大、全「摩」。·高、池「密」。大、全「蜜」。
104	金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品一卷	不空 亦名五字咒法青龍題	·池、全無「亦」以下。·大「呪」。
	云金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩真言經雖題目別意義同也	青龍已下文有	·高、大無「頂」。·高、大無「青」以下。
	本无之		
105	普賢菩薩行願讚一卷	不空	
106	百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚一卷	不空	·大、全「吉」。·高、「卷」下有「不空」。
107	佛說大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經一卷	上一部十三卷同帖十三	
108	阿喇多羅陀羅尼阿嚕力品第十四卷	不空	·大、全「陀」。·全、「力」下有「迦」。
109	一字奇特佛頂經三卷	不空	
110	底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法一卷	不空	·池、大、全「陀」。
111	能淨一切眼疾病陀羅尼經一卷	不空	·大、全「陀」。
112	除一切疾病陀羅尼經一卷	不空	·大、全「陀」。
113	佛說救拔焰口餓鬼陀羅尼經一卷		·大、全「陀」。
114	佛說三十五佛名禮懺文一卷	不空	·高、池「札」。
115	訶利帝母真言法一卷	不空	
116	觀自在菩薩說普賢陀羅尼經一卷	不空	·池、大、全「陀」。
117	毗沙門天王經一品一卷	不空	·大、全「毘」。
118	雨寶陀羅尼經一卷	不空	·大、全「陀」。
119	積慶梨童女經一卷	不空	·高無「不空」。

120	上十二部一十四卷同帖十五 菩提場所說一字頂輪王經五卷 不空 上一部五卷一帖十五	·大、全「場」。·高無「卷」以下。
121	金剛恐怖集會方廣儀軌觀自在菩薩三世最勝心明王經	·大、全「最」。
122	大威力烏樞瑟摩明王經二卷 北天竺三藏阿質達霰譯	·池、大、全「陀」。·高、大、全「要」。·高、大、全「霰」下有「譯」。池有「訳」。
123	穢跡金剛說神通大滿陀羅尼法術靈異門一卷 沙門阿質達霰	·池「変」。·池「訳」。
124	穢跡金剛法禁百變法經 沙門阿質達霰譯	·池「密」。·池、大、全「月」。
125	普遍智藏般若波羅蜜多心經一卷 摩竭提國三藏法日譯	·池「釈」。
126	千手千眼觀自在菩薩根本真言釋一卷	·高、大、全「無」。·大、全「陀」。·大、全「呪」。·高無「金」以下。
127	千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼咒一卷 金剛智新譯	·高、池、大、全無此本。
128	慈氏菩薩所說大乘經生稻髻喻經一卷 不空	·大、全「毘」。·高、池、大、「卷」下有「不空」。
129	內護摩十字佛頂梵本并布字法一卷	·高、池、大、全「隨」下有「心」。·大、全「陀」。
130	北方毗沙門天王真言法一卷	·高、池、大、全無此本。
131	佛說阿吒婆拘大元率將无邊神力隨陀羅尼經一卷	·高、池、大、全無此本。
132	金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣一卷	·高、池、大、全無此本。
133	攝大毗盧遮那成佛神變加持經入蓮花胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀	·高、全「華」。
134	金剛頂蓮花部心念誦儀軌梵本真言二卷 上三部五卷同帖十七	·高、池、大、全「密」。·大、全「陀」。
135	大寶廣博樓閣善住秘密陀羅尼經三卷 不空	

136	大雲輪請雨經二卷	不空	下卷經未有祈雨壇法者是也
137	大雲經祈雨壇法一卷		
138	佛母大孔雀明王經三卷	不空	上卷經初有啓請法者是也
	上諸經寫得大興善寺翻經院本		
139	上三部九卷同帖十八		
	佛說金剛頂瑜伽中畧出念誦法六卷		
	上一部六卷一帖	十九	
140	觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌一卷	不空	
141	施諸餓鬼飲食及水法并手印不空三藏口決一卷		
142	文殊師利瑜伽五字念誦經脩行教一卷		
143	轉法輪菩薩摧魔怨敵法一卷		
144	大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼脩行曼荼羅次第儀軌法一卷	淨智金	
	剛譯		
145	如意輪王摩尼跋陀別行法印一卷		
146	金剛吉祥大成就品一卷		
147	遍照佛頂等真言一卷	不空	
148	千轉陀羅尼觀世音菩薩咒一卷	智通法師譯	
149	聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法一卷	興善寺三藏譯	
150	建立曼荼羅及揀擇地法一卷	慧琳集	
151	大梵天經觀世音菩薩擇地法品一卷		
	高、池、大、全無「下」以下。池、大、全、「卷」下「注未有祈雨者是也」。		
	高、池、大、全無此本。		
	高無「上」以下。大、全、「空」下「上三部九卷同怪十八上三經寫得大興善寺翻經院本」。		
	高、池、大、全無此本。		
	• 高「軌儀」。		
	• 大、全「并」。		
	• 高、大、全「修」。		
	• 池「吉」。	高、池、全「密」。	大、全「陀」。
	有「○」。	大、全「陀」下有「羅敷」。	高、「卷」下有「不空」。
	• 高無「輪」。	大、全「陀」。	池、「陀」下有「羅敷」。
	• 大、全「吉」。		
	• 高無「不空」。		
	• 大、全「陀」。	大、全「呪」。	高、大、「智」上有「不空」。
	• 池、全、「譯」下有「不空」。		池「詛」。
	高、池、大、全無此本。		
	• 池、大、全、「天」下有「王」。		

152	無動使者法中畧出印契法次第一卷
153	金剛兒法一卷 一云蘇薄胡
154	大毗盧遮那略要速疾門五支念誦法一卷
155	觀自在菩薩如意輪陀羅尼一卷 不空註義
156	愍釋陀羅尼義讚一卷 不空
	上十一部十一卷同帖廿一
157	奇特畧勝金輪佛頂念誦儀軌法要一卷
158	摩利支天經一卷
159	金剛頂瑜伽蓮花部心念誦儀中畧集闕鑠要妙印一本
160	大隨求八印法一卷
161	金剛頂瑜伽三十七尊出生義一卷
162	金剛頂瑜伽要決一卷
163	拔添苦難陀羅尼經一卷
164	觀自在菩薩心真言一印念誦 不空
165	聖觀自在菩薩根本心真言觀布字輪觀門一卷
166	大聖天歡喜雙身毗那夜迦法一卷 不空
167	大自在天法則儀軌一卷
168	金剛頂經觀自在菩薩瑜伽脩習三摩地法一卷 清信士馬烈述
169	畧上乘受菩提心戒及心地秘決一卷 无畏流出一行記
170	畧上乘教授戒懺悔文一卷 不空

· 高、池、大、全「無」。	· 高、池、大、全「略」。
· 高、池、大、全無「一」以下。	
· 大、全「毘」。	
· 大、全「陀」。	· 高、池、大、全無「註義」。
· 高、池、大、全無此本。	
· 大、全「最」。	
· 高、大、全無此本。	
· 高、大、「卷」下有「惟謹」。	
· 高、池、大、全無此本。	
· 池、大「濟」。	· 大、全「陀」。
· 高、池、大、「誦」下有「法」。	全「○」。
· 大、全「毘」。	· 池、大、全「耶」。
· 大、全「修」。	· 高、池、大、全「列」。
· 大、全「最」。	· 高「訣」。
· 高、大「無」。	
· 大、全「最」。	

171	上十一部十四卷同帖廿一 大毗盧遮那成佛神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌二卷	高、池、大、全無此本。
	法全	
172	略叙金剛界大教王經師資相承傳法次第記一卷 沙門海雲記	• 高無「法」。
173	略叙傳大毗盧遮那成佛神變加持經大教相承傳法次第記二卷 沙門海雲集記	• 大、全「毘」。• 池、大、全「舍」。• 高無「法」。• 高、池、大、全「一」。
174	金剛頂瑜伽要略念誦儀軌法一卷	• 高、池、大、全無「亦」以下。
175	觀自在菩薩心真言念誦法一卷 不空 亦名一印法	• 池「訳」。
176	諸佛境界攝真實經三卷 三藏般若譯 上六部七卷同帖廿三	
177	不空羼索神變真言經二卷 第六第七	• 高「哆」。
178	玉咽怛多羅經三卷	高、池、大、全無此本。
179	慈氏菩薩略修愈識念誦法二卷	• 大、全「毘」。
180	毗耶律藏經一卷	• 大、全「陀」。• 池「訳」。
181	大菩提心隨求隨羅尼一切佛心真言法一卷 阿地瞿多譯	• • 高「軌儀」。• 池「訳」。
182	佛說無量壽佛化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法一卷 金剛智譯	• 高、大、全「修」。
183	大輪金剛脩行悉地成就及供養法一卷	• 大、全「最」。
184	電光熾盛可畏形羅刹斯金剛取勝明經一卷	高、池、大、全無此本。
185	熾盛光威德佛頂念誦儀軌一卷 上八部十一卷同帖廿五	

186	降三世大會中觀自在菩薩說自心陀羅尼經一卷 金剛智三藏譯	·大、全「陀」。池、大、全無「經」。
187	金剛頂一切如來真實攝大乘現證大教王經初品中六種曼荼羅尊像標幟	高、大、全無此本。
	契印等圖畧釋一卷	
188	金剛童子持念經一卷	
	上三部三卷同帖廿六	
189	毗盧遮那五字真言脩習儀軌一卷 不空	·大、全「毘」。·池、全「舍」。·大、全「修」。
190	蘊悉地羯羅供養法二卷 善无畏	高、池、大、全無此本。
191	大毗盧遮那胎藏經略解真言要義一卷	·大、全「毘」。·池、全「舍」。·池、大、全「儀」。
192	胎藏教法金剛名号一卷 義操	高、池、大、全無此本。
193	金剛頂大教王金剛名号一卷 義操	高、池、大、全無此本。
	上五部六卷同帖廿七	
194	佛說普遍焰鬘清淨熾盛思惟寶印心无勝惣持隨求大明陀羅尼自在陀羅尼功能一卷	·高、池、大、全「無」。高、大、全「無」下有「能」。·大「總」。·大、全「陀」。
	尼功能一卷	池、大、全無「自在陀羅尼」。
	上一部一卷一帖廿八	
195	金剛忿怒速疾成就真言一本	
196	唐·梵字佛頂尊勝陀羅尼一本	·高、池、大、全無「唐」。·大、全「陀」。
197	唐·梵字菩提莊嚴陀羅尼一本	·高、池、大、全無「唐」。·池「薩」。·大、全「莊」。·大、全「陀」。
198	唐·梵字心真言一本	·高、大、全無「唐」。
199	梵字心中心真言一本	
200	梵字馬頭觀自在菩薩心真言一本	

218	梵字三身讚一本
217	梵字降魔讚一本
216	梵字五方歌讚一本
215	梵字羯磨部一百八名讚一本
214	唐梵兩字語論一卷 不空
213	梵語千文一本 義淨
212	一切如來白傘蓋大佛頂陀羅尼一本
211	降三世五字真言一本
210	梵字文殊師利菩薩八字真言一本
209	梵字文殊師利菩薩真言一本
208	梵字青頸觀音小心真言一本
207	梵字七俱胝佛母真言一本
206	梵字佛眼真言一本
205	梵字三界无能勝真言一本
204	梵字馬頭觀世音心真言一本
203	梵字白傘蓋佛頂真言一本
	(梵字烏樞澁摩心中心真言一本)
202	梵字烏樞澁摩心真言一本
201	梵字軍荼利金剛心真言一本
	(梵字軍荼利根本真言一本)

高、大有此本。・大「利」下有「金剛」。

・・大無「金剛」。

高、池、大、全有此本。

・大、全「蓋」。

・高、池、大、全「無」。

・高、大、全「蓋」。・大、全「陀」。

高、池、大、全無此本。

池、大、全無此本。



219	梵字吉慶伽陀九首一本
220	梵字入壇場授杵与弟子真言一本
221	梵字普賢十六尊十七字真言并位樣一本
222	一切如來心真言一本
223	一切如來心印真言一本
224	一切如來金剛被甲真言一本
225	一切如來灌頂真言一本
226	一切如來結界真言一本
227	一切如來心中心真言一本
228	一切如來隨心真言一本
229	梵字法身緣偈生一本
	上三十七部十七本同帖
230	梵字金剛頂瑜伽經真言一本
231	梵字寶劫十六菩薩真言一本
232	梵字廿天真言一本
233	梵字十波羅蜜真言一本
234	梵字四无量真言一本
235	梵字金剛王中九尊真言一本
	(梵字觀自在聞持真言一本)
236	梵字觀自在聞持甘露真言一本

・大、全「吉」。
・大、全「陀」。
高、池、大、全無此本。
高、池、大、全無此本。
・高「經」。
・高、池、大、全「生偈」。
・池「尊」。
・大「二十」。
・高「密」。
・池、大、全「無」。
・池「三」。
高有此本。

237	三十七尊異名一本
238	焰口·隨·羅尼一本
239	二十天名并真言一本
240	梵字大毗盧遮那經真言一本
241	梵字懺悔滅一切罪真言一本
242	梵字菩提莊嚴心真言一本
243	梵字寶樓閣心真言一本
244	梵字文殊一字三字等并忿怒真言一本
245	梵字孔雀王真言一本
246	梵字觀自在心真言一本
247	梵字佛眼真言一本
248	梵字如來慈真言一本
249	梵字金剛延命真言一本
250	梵字金剛壽真言一本
251	梵字金剛王真言一本
252	梵字大忍真言一本
253	梵字歡喜母真言一本
254	梵字遏吒薄俱真言一本
255	梵字龍猛集六妙真言一本
256	梵字辨才真言一本

高、池、大、全無此本。

·大、全「陀」。

·大、全「并」。

·大、全「毘」。·池、全「舍」。

·池、全「薩」。·大、全「莊」。

·大、全「并」。

·高、「王」上有「明」。

高、大、全無此本。

·全「〇」。

·大、「壽」下有「命」。全「〇」。

276	梵字虛空藏真言一本
275	梵字電光心真言一本
274	梵字電光真言一本
273	梵字送天龍真言一本
272	梵字請天龍真言一本
271	梵字滅惡趣真言一本
270	梵字童子心真言一本
269	梵字金剛童子真言一本
268	梵字馬頭明王真言一本
267	梵字多羅真言一本
266	梵字七俱知真言一本
265	梵字不動尊心真言一本
264	梵字八大菩薩真言一本
263	梵字三部心真言一本
262	梵字吉祥心真言一本
261	梵字摩利支心真言一本
260	梵字藥衣心真言一本
259	梵字大三昧耶真言一本
258	梵字五佛頂真言一本 更有多種五頂
257	梵字大悲心真言一本

・池無「更」以下。

・大、全「吉」。

・池、全無「菩薩」。

・池、大、全「智」。

・高、大「女」。

277	施一切衆生·施·羅尼一本
278	文殊·剎·真言一本
279	甘露·施·羅尼一本
280	須彌·盧·王·真言一本
281	大興善寺·貞元經目一本
282	蓮花·部·瑜·伽·念·誦·法·梵·本·真言一本
283	梵字·持·世·施·羅尼一本
284	梵字·心·真言·并·小·心·真言一本
285	梵字·摩·利·支·心·并·根·本·真言一本
286	梵字·文·殊·師·利·根·本·真言一本
287	梵字·六·足·心·真言一本
288	梵字·尊·勝·真言一本
289	梵字·不·空·綱·索·真言一本
290	梵字·如·意·輪·真言一本
291	梵字·袈·裟·加·持·供·養·真言一本
292	梵字·佛·慈·護·真言一本
293	梵字·廣·大·寶·闍·金·剛·劫·真言一本
294	梵字·文·殊·贊·一本
295	如·意·輪·種·子·壇·樣·一本
296	金·輪·佛·頂·種·子·觀·一本

·大、全「陀」。
·大、全「陀」。
高、池、大、全無此本。
·高、大、全「華」。
·大、全「陀」。
·大、全「并」。
·大、全「并」。
·高、大、「足」下有「尊」。
·高、大、「寶」下有「樓」。全「○」。·高、大「剎」。·高無「言」以下。
·池、大、全「讚」。
高、池、大、全無此本。
高、池、大、全無此本。

315	314	313	312	311	310	309	308	307		306	305	304	303	302	301	300	299	298	297
九會曼荼羅讚一本	天龍八部讚一本	十六讚嘆一本	三世金剛一百八名讚一本 他本无	釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔讚二卷 兩本	降三世金剛一百八名讚一本	大方廣佛花嚴經普賢菩薩行願讚一卷	七佛讚歎一本	十六大菩薩一百八名讚一卷	上七十九部二十九本同帖卅	唐梵對譯千文一卷 義淨	青龍寺新譯經等入藏目錄一卷	心次第一卷	菩提心戒一本	毘· 叻· 上· 乘· 教· 受· 戒· 懺· 悔· 文· 一· 本	浴像燒香偈讚一本	梵字不動尊鎮宅真言一本	无邊門壇樣一本	五智觀門并賢劫十六菩薩名位一本	一切如來菩提心戒真言一本

---

高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

316	唐梵普賢讚一卷
317	五讚嘆二卷 兩本
318	唐梵兩字大聖文殊師利菩薩一百八名讚一卷
319	天龍八部讚一本
320	如來千輻輪相讚一本
321	毗盧遮那心畧讚一本
322	大吉慶讚二卷 兩本
323	毗盧遮那如來菩提心讚一本
324	佛頂尊勝真言根本讚一本
325	大尊讚一本
326	梵字无垢淨光陀羅尼一本
327	梵字相輪樣中陀羅尼一本
328	梵字脩造佛塔陀羅尼一本
329	梵字置相輪樣中及塔四周以咒王法置於塔內真言一本
330	梵字相輪真言一本
331	佛部曼荼羅讚嘆一本
332	觀自在法身讚嘆一本
333	普集天龍八部讚一本
334	上二十五卷同帙廿五部二十七本同帖 蘊·悉地并蘇摩呼經梵本一夾·兩部二卷

高、池、大、全無此本。
高、池、大、全無此本。
高、池、大、全無此本。
·大「毘」。·池、全「舍」。·高、池、大「略」。
·大、全「吉」。
高、池、大、全無此本。
·高「相」。
·高、大「無」。·全「天」。·大、全「陀」。
·大、全「陀」。
·大、全「修」。·大、全「陀」。
·大、全、池「呪」。
·大、全「陀」。
·大、全「蘇」。·大、全「并」。·高、大「卷」。全「篋」。

349	鬼神大將元帥阿吒薄拘上佛陀羅尼出普集經一卷	·高、大、全「拘」·大、全「陀」。
348	一字頂輪佛頂要法別行一卷	
347	烏鵲沙摩取明王經一卷	·大「鵲」·池、大、全「最」·高、大、全此下有「勝」。
346	佛頂尊勝陀羅尼別法一卷 龜茲國僧着那譯	·大、全「陀」·高、池「国」·池「訳」。
345	大聖歡喜雙身法一卷 廣本又別有雙身春法文一紙 龜茲國僧着那譯	·高、池、大、全無「廣」以下。
344	大聖甘露軍吒利念誦儀軌一卷	·高、池、大、全「茶」。
343	阿密哩多軍荼利法一卷	
342	普遍光明大隨求陀羅尼經二卷 不空	·大、全「陀」·高無「不空」·全無此本。
341	上二部五卷同帖卅五	
340	金剛頂蓮花部心念誦儀軌二卷 不空	高、池、大、全無此本。
339	廣大成就儀軌三卷 法全	·大「毘」·池、全「舍」·池、大、全「華」·大、「卷」下有「不空」。
338	大毗盧遮那成佛神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅真言集一卷	高、池、大、全無此本。
337	大隨求陀羅尼經二卷上下	高、池、大、全無此本。
336	一字奇特佛頂陀羅尼一卷 上卷不空	高、池、大、全無此本。
335	上三部四卷同帙卅四	
334	大慈大悲救苦觀世音自在菩薩廣大圓滿無礙自在青頸大悲心真言一卷 不空	·高「門」·高、大、「空」下有「三藏譯」。
333	大虛空藏菩薩所問經八卷 不空	·大「世」·高、池、大、全「無」。
332	上二部同一夾卅二	
331	大悲真言一卷 不空	全有此本。

350	摩醯首羅天王法一卷	
	上九部八卷同帙卅六了	
351	藕·悉地羯羅供養真言集一卷	·大、全「蘇」。
352	梵字悉曇字母一卷 安国寺偁尚本	高、池、大、全無此本。
353	梵字悉曇母一卷 青龍寺和尚本	高、池、大、全無此本。
354	梵字普賢行願讚一卷	
355	梵字藕·悉地羯羅供養真言集一卷	高、池、大、全無此本。
356	悉曇章一卷 題云梵本切韻是也 沙門元偁注音	·高、池、大、全無「題」以下。
357	梵本切韻十四音十二聲一卷 元偁述	高、池、大、全無此本。
358	大般涅槃經如來性品十四音義二本 並是同本然一卷着朱脈為別羅什譯	高、大、全「竝」·池「訳」。
	出	
359	十四音辨一卷 依·争·影·疏·沙門知·玄·述	· · · · 高、池、大、全無「依·争·影·疏」·池、大、全「智」。
	已上三卷複同卷	
360	大日經序并獻華樹樣狀一卷	高、池、大、全無此本。
361	阿字觀門一卷 沙門惟謹述	
362	百字生字論一張	高、池、大、全無此本。
363	阿闍梨要義 沙·門·惟·謹·述	·高、池、大、全無「沙」以下。
364	胎藏毗盧遮那分別聖一卷	高、池、大、全無此本。
365	九張尊勝并千手壇樣一卷	高、池、大、全無此本。
367	略釋毗盧遮那經中義一卷	·池「釈」·大「毘」·池、全「舍」。



368	建立護摩儀一卷	
369	大壇樣并護摩子樣一卷	
370	尊勝佛頂脩愈伽法二卷	複別行廿四張
371	大毗盧遮那成佛神變加持經七卷	牙畏又有二卷
	上升部廿二卷同帙卅六	
	上一部七卷一帙卅八	
372	大毗盧遮那經略識二卷	中下
373	大毗盧遮那經疏十四卷	一行阿闍梨述
	上一部十四卷一帙卅九	
374	梵網經盧舍那佛說指示門心地品卷上一卷	摩騰竺法蘭譯
375	梵網經盧舍那佛說菩薩十重卅八輕戒一卷	
376	梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品一卷	極畧本
377	曹溪山第六祖惠能大師說見性頓教直了成佛決定無疑法寶記檀經一卷	
	門人法海譯	
378	仁王般若經疏三卷	天台
	上一部三卷一帖卅三	
379	維摩經疏一卷	豫洲刺史揚敬之撰
380	翻梵語一卷	
381	法花經圓鏡七卷	欠第四六七

高、池、大、全無此本。	
高、池、大、全無此本。	
高、大、全無此本。	
大「毘」。池、全「舍」。高、大、「畏」下有「三藏譯」。高、大、全無「又」以下。	
大「毘」。池、全「舍」。池、全「上」。	
大「毘」。池、全「舍」。	
高「遮」。全「○」。全、「地」下有「○」。池「訳」。	
大「四十」。高、池、大、全、「卷」下有「略本」。	
高、大、全「略」。	
高、大「無」。	
高、大「沙門入法」。	
池、大「十」。高、池、大、全「州」。全、「撰」下有「禪」。	
高、大、全「華」。大、全、「七」下有「卷」。	

382	花嚴經疏廿卷 澄觀法師作 上四部四十七卷五帖
383	法花圓鏡樞決一卷 天長寺釋延秀集
384	仁王護國般若經疏二卷 沙門道液述
385	金剛辨宗二卷 沙門道液述
386	金剛辨宗科文一卷
387	阿彌陀經疏一卷 沙門懷感述
388	大佛頂疏隨文補闕鈔一卷
389	仁王般若經科文一卷
390	大佛頂隨疏科文一卷
391	父母恩重經疏一卷 西明寺沙門體清述
392	安樂集一卷 沙門道綽撰
393	五方便心地法門抄一卷
394	大方廣花嚴經普賢行願品疏一卷 沙門澄觀述
395	中觀論卅六門勢一卷 沙門元康撰
396	救謗方等經顯正一乘論一卷 沙門知悅述
397	淨土法事讚二卷 善道和尚撰 上十五部十九卷同帙
398	百法論顯幽抄十卷 沙門從方述
399	大乘百法明門論疏一卷 沙門忠撰

·高、池、大、全「華」。
·高、池、大、全「二十」。
·池「釈」。
·池「人」。
·大、全「陀」。
·全「遷」。
·池、全「沙」。
·高、大、「廣」下有「佛」。全、「廣」下「○」。·高「華」。
·高、池、全「卅」。大「三十」。
·高「弘說」。大「弘沈」。
·高「王」。·池、大、全「導」。
·池、全「依」。
·大、全、「忠」上有「義」。

417	略叙大小乘斷惑入道位次一卷 兼略明三界義
416	因明入正理論義衡二卷 上下沙門清素撰
415	因明義心一卷
414	大乘百法義門抄二卷 一帖 沙門金則述
413	因明義範一卷 沙門空相
412	因明正理門述記一卷 下卷沙門勝莊述
411	因明義選上下二卷 欠中卷沙門誓空錄
410	因明論義疏三卷 沙門利
409	因明論科文一卷
408	因明義纂要一卷 沙門惠沼述
407	十四過類記一卷
406	因明義斷一卷 沙門惠沼撰
405	因明入正理論疏一卷 沙門清邁撰
404	因明入正理論疏三卷 沙門基撰
403	十二有支義一卷
402	大乘百法玄樞決一卷
401	大乘百法論義選抄四卷 阿中全則述
400	百法疏抄二卷 上下章敬寺沙門擇隣

池、大、全「河」。大、全「金剛」。大無「述」。高無此本。  
高、「卷」下有「河中金剛述」。

高「靖」。

池、全「和」。

高「翼」。

池、「門」下有「論」字。大、全「莊」。

全「金剛」。

池、大、全「素」。

418	小乘入道位次一卷 依俱舍論	・高、大無「次」。・高「訟」。池、全「頌」。
419	大小乘入道位次一卷	
420	十二門論疏翼贊抄序一卷	
421	宗四分比丘隨門要行儀一卷	
422	大般若波羅蜜經開題一卷	・高「密多」。
423	法花廿八品序一卷	・大、全「華」。・大「二十」。
424	地勢論一卷	・大、全「蛇」。
425	念佛讚一卷 章敬寺沙門弘素述	・高「索」。
426	上九部九卷同帙 佳心觀一卷 菩提達磨撰	・高、大「唯」。全「唯住」。・高「薩」。
427	花嚴經法界觀門一卷 京南山沙門杜順撰	・高、大、全「華」。・池「林」。
428	大方廣佛花嚴經金師子章一卷	・高無「花」。大、全「華」。
429	法性一心圖一卷 上四部四卷同帖	
430	新譯經論入藏經錄中書門下牒一卷	・池「訳」。・全無「經」。
431	貞元新定入藏經錄新口藏青龍寺東塔院僧義真集錄記一卷	高、池、大、全無此本。
432	南陽和尚問答雜微義一卷 劉澄集 上二部二同帖	・池「雜」。・高、池、大、全「徵」。・大、全「劉」。・高「證」。
433	西國付法藏傳一卷	・高、池「国」。
434	行立禪師述佛性偈一卷	

435	大唐故弘景禪師石記一卷 秀邕撰
436	紫閣山大莫碑一卷 沙門飛錫撰
437	沙門无著入聖般若寺記一卷
438	五臺山金剛窟收五功德記一卷
439	大報无遷論一卷 講論沙門知玄述
	上八部八卷同帖
440	皇帝降誕日內道場論衡一卷
441	傳大士還源詩
442	微心行路難一卷
443	讚西方淨土一卷
444	長安資聖寺粥利記一卷 內州道場談論沙門知玄述
445	長安資聖寺翻譯講論大德貞慧師記并碑一卷
446	供奉大德義通法師銘一卷
447	長安資聖寺寶應觀音院壁上南岳天台等真影讚一卷
	(天台等真影讚一卷)
448	九睥十紐圖一張
449	國忌表歎文一卷
450	嗣安集一卷
451	百司舉要一卷 進官了
452	兩京新記三卷 進官了

• 高「李」。	• 高、大「邑」。
• 高、池、大、全「無」。	
• 大、全「臺」。	• 高「德」。
• 高、大、全「無」。	
• 大、全「場」。	
• 高、「詩」下有「一卷」。	
• 高、大、全「微」。	
• 高「洲」。	池、全無「州」。
• 大、全「場」。	• 高、池、大、全「撰」。
• 全「真」。	• 高、池、全、「慧」下有「法」。
• 池「惠」。	全「惠」。
• 大、全「并」。	
高、大有此本。	
• 池、高「国」。	
• 大「副」。	
高、池、大、全無「進官了」。	
高、池、大、全無「進官了」。	高有「依藏人所宣付太宰野小貳進上已了」。

453	加五百字千字文一卷	進官了
454	皇帝拜南郊儀注一卷	
455	丹鳳樓賦一卷	
	上十六部十八卷同帙	
456	曹溪禪師證道歌一卷	貞覺述
457	甘泉和尚語本并大誓和尚以心傳心要旨一卷	
458	心鏡弄珠々耀篇并禪性般若吟一卷	
	上三卷同帖	
459	長安左街大薦福寺讚佛牙偈一卷	內供奉三教講論大德知玄述
460	會昌皇帝降誕日內道場論衡一卷	
461	利涉法師与韋珽論一卷	
462	唐潤州江寧縣瓦官寺維摩詰碑	
	上五卷同帖	
463	詩賦格一卷	
464	碎金一卷	
465	麟德殿宴百寮詩	上三卷同帖
466	京兆府百姓索隱微上表論釋教利害一卷	
467	建帝憶論一卷	東山泰法師作
468	杭越唱和詩一卷	
	上十卷同帙	

·大「如」。高、池、全無「進官了」。

·高、池、大、全「真」。

·大、全「并」。·高、大無「以心」。

·高「呀」。·大「珠」。·大、全「并」。

·大、全「衛」。·池「要」。全「供養」。·高「談」。

·大、全「場」。

·大「壽」。全「壽」。·高「誕」。

高、大、全無此本。

·池、全「二」。

高、大、全無此本。

·池、大、全有「素」。·大無「隱」。·高、大「徵」。

·大、全「幢」。

·全「私」。



507	金銅五鈇金剛鈴一口	
506	白銅印泥塔一合	
505	鍍鉛印佛一面一百佛	
504	壇龕僧伽誌公萬迴三聖像一合	
503	壇龕西方淨土一合	
502	壇龕涅槃淨土一合	
501	青龍寺真和尚真影一鋪一幅綵色	
500	無畏三藏真影一紙苗	
499	大廣智不空三藏真影一紙苗	
498	金剛智三藏真影一紙苗	
497	佛眼塔樣并記一卷	
496	佛跡并記一卷	
495	八大明王像一卷	
494	熾盛壇樣三紙	
493	金剛部諸尊圖像儀軌一卷	
492	大悲胎藏手契一卷	
491	大悲胎藏畫像圖位一卷	
490	大悲胎藏諸尊標記印一卷	
489	水自在天像一鋪一幅苗	
488	佛頂尊勝壇像一鋪二幅苗	

・池、大、全「幅」。

・池、大、全「幅」。

高、池、大、全無此本。

高、池、大、全無此本。

・高、池「一紙」。大、全「一卷」。

・高、池、大、全、「卷」下有「碑本」。

・大、全「并」。

・大、全「并」。

・高、池、大、「真」上有「義」。全「○」。池、大、全「幅」。

・大、全「遺」。



525	達磨碑文一卷	524	墓山記一卷	523	天台大師手書一紙	522	大乘顯正破疑決一卷 釋道瞻述	521	勝鬘經疏義和抄一卷 維揚法雲明空述	520	法花助記輔略抄二卷	519	六妙門文句一卷 釋上官疏	518	涅槃經玄義文句一卷	517	淨名經疏科目一卷	516	行方等懺悔法一卷 天台	515	小止觀一卷 下卷 天台大師撰	514	三觀義二卷 天台大師撰	513	無諍三昧法門二卷 南岳大師撰	512	文殊所說寶藏陀羅尼經一卷	511	右件法門佛像道具等於長安城興善青龍及諸寺求得者謹具錄如前 金銀五鈷小金剛杵一口 裏盛佛舍利	510	金銅三鈷金剛鈴一口	509	金銅獨鈷金剛杵一口	508	金銅五鈷金剛杵一口
-----	--------	-----	-------	-----	----------	-----	-------------------	-----	----------------------	-----	-----------	-----	-----------------	-----	-----------	-----	----------	-----	----------------	-----	----------------------	-----	----------------	-----	-------------------	-----	--------------	-----	---	-----	-----------	-----	-----------	-----	-----------

高、池、大、全無此本。	高、大、全「臺」。池、大、全、「卷」下有「南岳大師撰」。	大、「雜」以下「雜陽法雲寺明空述釋上官疏」。	池、全「偈」。	池「釈」。	高「雲」下有「寺」。	池「釈」。	高、「卷」下有「尺上官疏」。	高、「私」。	高「華」。	高無「釋」。池「釈」。	全「法」。	池「觀」。	池、大「淨」。	大、全「陀」。	高「件」。	高、池、大、全「銅」。	大、全「舍」。
-------------	------------------------------	------------------------	---------	-------	------------	-------	----------------	--------	-------	-------------	-------	-------	---------	---------	-------	-------------	---------

526	上十一部 四十二字門二卷 墓山構波南岳大師撰
527	文殊所說寶藏陀羅尼經一卷
528	隨自意三昧一卷 墓山構波
529	圓教六即義一卷 南岳大師撰
530	皇帝降誕日於麟德殿講大方廣佛花嚴經玄義一卷
531	請賢聖儀文并諸雜讚一卷
532	淨土五會念佛略法事儀讚一卷 南岳沙門法照述
533	大唐代洲五墓山大花嚴寺般若院比丘貞素所習天台智者大師教迹等目
	錄一卷
534	天台智者大師遺旨并与晉王書一卷
535	荆溪和上在仙隴无常遺旨一卷
536	諫三禪和乘車子歌一卷 惠化寺超律和尚作
537	思大師歌餞智者墓山并智者酬思大師歌一卷
538	思大師酬鵲山覺禪師讚老詩一卷
539	南岳思大和尚德行歌一卷
540	達摩和尚五更轉一卷 玄奘三藏
541	法寶義論一卷 北齊稠禪師
542	羅什法師十四利元行一卷

全「○」。大、全「臺」。高「樺皮」。池「構皮」。大「樺皮」。全「構皮」、  
 無「南」以下。  
 高、池、大、全無此本。  
 大、全「臺」。高「樺皮」。大「樺皮」。全「構皮」。  
 高、大無「南」以下。  
 池、全「誦」。池、大、全「華」。  
 大、全「并」。  
 池「州」。大、全「臺」。池、大、全「華」。  
 大、全「并」。  
 高、大「尚」。高、大「佛隴」。池「山仏瀧」。全「山○龍」。大、全「無」。  
 高「禪」。池、全「東」。  
 池、大、全「臺」。大、全「并」。高「訓」。  
 池「覺」。高「禪」。高、大「訴」。池、全「諸」。  
 高、「岳」下有「大」。  
 高無「玄」以下。  
 高、大、「法」上有「玄奘三藏」。高「禪」。  
 高、池、大、全「無」。

543	大師弘教誌一卷	池、全無此本。
544	五臺山大聖竹林寺釋法照得見臺山境界記一卷	·高、大、全「臺」。·池「釈」。·高、大、全「臺」。
545	沙門道超久處臺山得生弥勒內宮記一卷	·高「父」。·高、池、大、全「臺」。
546	五臺山大曆靈境寺碑文一卷	·大、全「臺」。
547	五臺山土石廿丸 土石各十九	·大、全「臺」。·大「立」。
548	柴木一條	·高、大、全無。
	右件教迹等於大唐代州五臺山大花嚴寺經復寫得謹具錄如前然土石等者是大聖文殊師利菩薩往處之物圓仁等因巡礼五頂取得緣是聖地之物列之於經教之後願令見聞隨喜者同結緣皆為大聖文殊師利眷屬也	·大、全「臺」。·池、大、全「華」。
549	大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經一卷	·高、大、全「夏」。·大「立」。
550	一切佛心中心經一卷	·全「囑」。
551	寶星經略述廿八宿佐盧瑟吒仙人經一卷	·大、全「吉」。
552	隨羅尼集要經一卷	·池「女」。
553	蘓摩呼童子請經一卷	·大、全「陀」。
554	新譯般若心經一卷 般若三藏譯	·大、全「蘇」。·全「○」。
555	佛說阿利多軍荼利護國大自在拔折羅摩訶布陀羅金剛大神力隨羅尼一	·池「訳」。
	卷 阿地多三藏日照三藏譯	·全、「阿」下有「○」。高「国」。·大、全「陀」。
		·池「地」下有「疊」。全有「○」。·大、全、「譯」上有「翻」。池「翻訳」。

556	金剛頂蓮花部心念誦儀軌二卷
557	觀自在菩薩如意輪念誦儀軌一卷 大興善寺不空 已上九部一十卷同帙
558	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩脩行儀軌一卷
559	普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌一卷 大興善寺沙門不空譯
560	金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密脩行念誦儀軌一卷
561	金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌一卷 不空
562	觀自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷 金剛智譯
563	如意輪菩薩真言注義一卷
564	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法一卷
565	葉衣觀自在菩薩法一卷
566	大佛頂如來密因脩證了義諸菩薩萬行品灌頂部錄出中印契別行法門一
Ⅱ 卷	
567	阿閼如來念誦供養法一卷 不空金剛譯 已上一十部一十卷同帙
568	脩真言三昧四時禮懺供養儀要一卷
569	金剛頂經瑜伽十八會指歸一卷 大興善寺沙門不空譯
570	佛頂尊勝陀羅尼注義一卷
571	取上教乘授戒懺悔文一卷
572	太元阿吒薄句无邊甘露降伏一切鬼神真言一卷

・大、全「華」。
・池「觀」。・高、池、大、全無「大」以下。
・高、大、全「修」。
・高、大、全「修」。
・池「觀」。・池「訳」。
・池「觀」。
・高、池、大、全「修」。
・池「訳」。
・高、池、大、全「修」。・高、大、全無「養」。
・高、池、大、全無「大」以下。
・大、全「陀」。
・池、大、全「最」。・高、大、全「乘教」。
・高「大」。・池「吃」。・高、池、大、全「無」。

573	(火壇供養十六法一卷)	施雄·面一切餓鬼·食念·陀羅尼法一卷
574	大樂·金剛不空真實三昧耶經·般若波羅密·多理趣釋一卷	已上八部八卷同帙
	梵漢兩字	
575	唐梵對譯·金剛般若經二卷	
576	唐梵對譯·阿彌陀經一卷	
577	唐梵對譯·般若心經一卷	
578	唐梵兩字·般若勝無垢清淨光明大陀羅尼一卷	
579	唐梵兩字·不空羼索真言一本	
580	唐梵兩字·青頸大悲真言一本	
581	唐梵兩字·一切佛心真言一本	
582	唐梵兩字·一切佛心中真言一本	
583	唐梵兩字·灌頂心真言一本	
584	唐梵兩字·灌頂心中真言一本	
585	唐梵兩字·結界真言一本	
586	唐梵兩字·秘密心真言一本	
587	唐梵兩字·秘密心中真言一本	
588	唐梵對譯·普賢行印讚一本	

全有此本。

·高、大、全「燄」。·高、池、大、全無「食」。·高、池、大、全、「念」下有

「誦」。·池、大、全「陀」。

·池「樂」。·池、大、全「蜜」。·池「聚」。

·池「訳」。

·池「訳」。池、大、全「陀」。

·池「訳」。

·大、全「最」。·池、大、全「陀」。

·高、「中」下有「心」。全有「○」。

·全無「心」。

589	唐梵兩字大佛頂根本讚一卷
590	唐梵兩字大佛頂結護一本
591	唐梵兩字大隨求大結護一本
592	唐梵兩字大隨求結護一本
593	唐梵兩字天龍八部讚一本
594	唐梵兩字百字讚一本
595	唐梵兩字送本尊歸本土讚一本
	上七本複一卷
596	唐梵兩字彌勒菩薩讚一本
597	唐梵兩字觀自在菩薩讚一本
598	唐梵兩字虛空藏菩薩讚一本
599	唐梵兩字金剛藏菩薩讚一本
600	唐梵兩字文殊師利菩薩讚一本
601	唐梵兩字普賢菩薩讚一本
602	唐梵兩字除蓋障菩薩讚一本
603	唐梵兩字地藏菩薩讚一本
604	唐梵兩字滿願讚一本
605	唐梵兩字毗盧遮那成佛神變加持經吉慶伽陀讚一本
606	唐梵兩字釋迦如來涅槃後彌勒菩薩悲願讚一卷
	上十二本複一卷

• 全「讚」下有「等諸雜讚」。
• 全「讚」。
• 高、「護」下有「讚」。池「讚」。大無此本。
• 高「卷」。
• 大、全「蓋」。
• 池「滿」。
• 大「毘」。• 全「舍」。• 池「變」。• 大、全「吉」。• 大、全「陀」。• 高「卷」。
• 池「釈」。

607	唐梵對譯金剛般若經論頌一卷
608	梵漢兩字蓮花部讀一卷
609	唐梵對譯法花廿八品題目兼諸羅漢名一卷 已上三十六部三十七卷同帙
610	淨名經記五卷 无量義寺文襲述 上一部五卷同帙
611	淨名經集解關中疏四卷 賢聖寺道液集
612	淨名經關中疏釋微二卷 中條山沙門契甚述 已上二部六卷同帙
613	法花經銷文略疏三卷 天長寺釋延秀集解 上一部三卷
614	肇論略疏一卷 東山雄作
615	肇論抄三卷 牛頭山幽西寺惠澄撰
616	肇論文句圖一文 惠澄撰
617	肇論略出要義兼注附焉并辱一卷 沙門雲興撰 已上四部六卷同秩
618	因明釋抄三卷 章敬寺擇隣述
619	因明義斷一卷 大雲寺苾芻沼述
620	因明入正理義纂要一卷 大神龍寺沼集 已上三部五卷同帙

---

池「訳」。
高、池、大、全無此本。
高、大「華」。池「女」。大「二十」、此下有「經」。
高、池「無」。
高、大「資」。
池「釈」。高、大、全「修」。高無「山」。大「真」。
池、大、全「華」。高「尺」、池「釈」。
高「矩」。
池無「惠」。全無「澄」。
大、全「卷」。
大、全「并」。高、大「序」。池、全「得」。高「靈」。大、全「零」。
池「釈」。

621	劫章頌一卷
622	劫章頌疏一卷 岑山沙門遍知集
623	劫章頌記一卷 沙門道詮述
624	劫章科文一卷 已上四部四卷同帙
625	智者大師脩三昧常行法一卷
626	五方便念佛門一卷 智者大師作
627	觀心遊口決記一卷 智顗大師述
628	四十二字門義一卷 南岳思大師作
629	尺門自鏡錄五卷 僧惠行集
630	觀心十二部經義一卷 天台頂述
631	形神不滅論一卷 雲溪沙門海雲撰
632	法花三昧脩證決一卷
633	天台智者大師所著經論章疏科目一卷 已上九部十三卷同帙
634	鳩摩羅什法師隨順脩多羅四悉壇義不墮負門一卷
635	大般若經開兼廿九位法門一卷
636	量處重經義一卷 道宣綱緒叙
637	羯磨文
638	略羯磨一卷 西大原寺懷素撰
639	說罪要行法一卷 義淨三藏撰

- 
- ・高、池、大、全「修」。
  - ・高、大「述」。
  - ・池「觀」。
  - ・高、全「述」。
  - ・高、大「釋」。池「釈」。池「述」。高、大「詳」。
  - ・全「〇」。
  - ・大、全「華」。池、大、全「修」。高、大「論」。
  - ・高、池、大、全「修」。高、池、大、全「檀」。高「隨員」。全「墮負」。
  - ・大「二十」。
  - ・高、大、「道」下「宣綱叙」。池「室綱叙」。全「室綱叙」。
  - ・大、全、「文」下有「西大寺懷素撰」。
  - ・大、全無「西」以下。池無此本。



640	諸·天·地·獄·壽·量·分·限·一·卷	終·南·山·宗·觀
641	受·菩·薩·戒·文·一·卷	
642	寂·上·乘·佛·性·歌·一·卷	沙·門·真·覺·述
643	大·乘·楞·伽·正·宗·決·一·卷	
644	濟·廬·山·遺·愛·寺·慧·珎·禪·師·念·佛·三·昧·指·歸·一·卷	
645	梵·語·雜·名·一·卷	
646	四·條·戒·并·大·小·乘·戒·決·一·卷	
	已·上·一·十·三·部·一·十·三·卷·同·帙	
647	南·岳·思·禪·師·法·門·傳·二·卷	衛·尉·丞·村·拙·撰
648	天·台·大·師·答·陳·宣·帝·書·一·卷	
649	天·台·略·錄·一·卷	
650	智·者·惕·松·讚·頂·禪·師·撰	
651	天·台·智·者·大·師·十·二·所·道·場·記·一·卷	灌·頂·述
652	法·花·靈·驗·傳·二·卷	
653	感·通·傳·一·卷	道·宣
654	清·涼·山·略·傳·一·卷	
	已·上·八·部·十·卷·同·帙	一·帙·上·一·部·十·卷·二·帖·ノ·本
655	大·唐·韶·州·雙·岑·山·曹·溪·寶·林·傳·一·卷	會·稽·沙·門·靈·徹
656	上·都·清·禪·寺·至·演·寺·至·演·禪·師·鐘·傳·一·卷	大·理·牛·肅·与·至·演·同·叙
657	南·荆·洲·沙·門·无·行·在·天·竺·國·致·於·唐·國·書·一·卷	

·池「壽」。	·高、大、全無「終」以下。
·全「提○」。	
·大、全「最」。	·高「撰」。
·高、大「隋」。	池「濟」。
·大、全「珍」。	·高、池「禪」。
·大、全「并」。	
·高、池「禪」。	·高「杜」。
·大「粒」。	·全「腦」。
·高、大「極」。	池「據」。
·全「逐」。	·高、池「禪」。
·池、全「主」。	·大、全「場」。
·高「華」。	
·全「傳」。	
·高、池、大、全「峯」。	池、全「荷」。
·高、池「禪」。	·高、池、大、全無「至演寺」。
·高、池「禪」。	
·高、池、大、全「州」。	·高、池、大、全「無」。
·高「国」。	·高、池「国」。

658	內供奉·談延·法師難·齋格·并·文一卷
659	集新·舊齋文五卷 上都雲光寺詠字太
660	觀法師奉答皇太子所問諸經與義并錢一卷
661	歎·道俗德文三卷
	已上六部一十二卷同帙
662	揚洲·東大雲寺演和上碑并序一卷 李邕
663	唐故大廣禪師大和·楞伽峯塔碑銘并序一卷 陸亘·撰
664	唐揚洲·龍興寺翻·經院故填·律和上碑銘并序一卷 李花·撰
665	唐故大律師釋道圓山·龕碑并序一卷 李邕
666	大唐大慈恩寺翻經大德基法·墓誌銘并序一卷
667	大慈恩寺大法師基公塔銘并序一卷
668	唐故終南山靈感寺大律師道宣行記一卷
669	大唐西明寺故大德道宣律師讚一卷
	上十二卷同帖
670	天台大師答陳宣帝書一卷
	已上九部九卷同帙
671	大唐新脩·宣·公卿士庶內族吉凶書儀卅卷 鄭餘慶重脩·定
672	開元詩格一卷 徐·隱泰字肅然撰
673	祇對義一卷

- 池「養」。
- 高、大「筵」。
- 高、大「歎」。
- 大、全「并」。
- 全「雜」。
- 高、大「花」。
- 高「大」。
- 大、全「并」。
- 高「牋」。
- 池、全「牋」。
- 池、全「難」。
- 高、池、大、全「州」。
- 大、全「并」。
- 池、全「和」下有「上」。
- 大、全「并」。
- 池、全「宣」。
- 池、大、全「州」。
- 大「訳」。
- 高、大、全「慎」。
- 大、全「并」。
- 高「華」。
- 大、全「并」。
- 池、大、全「法」下有「師」。
- 大、全「并」。
- 大、全「并」。
- 高、「大」下有「德」。
- 高、池、全「修」。
- 大「定」。
- 大、全「吉」。
- 高「一」。
- 大「三十」。
- 全「卅」。
- 大、全「修」。
- 高、池、大、全無「徐」以下。

692	691	690	689	688	687	686	685	684	683	682		681	680	679	678	677	676	675	674
法惠和上闍王前誦法花影一張苗	阿蘭若比丘見空中普賢影一張苗	天台大師感得聖像·僧影一鋪 三幅·綵色	南岳思大和尚示先生骨影一鋪 三幅·綵色	胎藏曼荼羅手印樣一卷	法花·曼荼羅樣一張	金剛界八十一尊種子曼荼羅樣一張	金剛界卅七尊種子曼荼羅樣一卷	供養賢聖等七種壇樣一卷	金剛界大曼荼羅一鋪 七幅·綵色	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪 五幅·苗	已上一十二部四十一卷同帙	法花·經廿八品七言詩一卷	詩集五卷	杭越寄和詩集一卷	祝元·膺詩集一卷	雜言一帖	判一百條一卷 駱賓王撰	道情一帖	歎德文一帖

·池、大、全「無」。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	高、池、大、全無此本。	·池、全「無」。	·池、大、全「華」。	·大、全「毘」。	·池、全「舍」。	·大、全「幅」。	·池、大、全「幅」。	·池「採」。	·池、大、全「三十」。	·高、大「張」。	·池、大、全「華」。	·池「千」。	·池、大、全「幅」。	·高「菜」。	·高無「像」。	·大、全無「僧」。	·池、大、全「幅」。
------------	-------------	-------------	-------------	----------	------------	----------	----------	----------	------------	--------	-------------	----------	------------	--------	------------	--------	---------	-----------	------------

693	山登禪·師誦法花·感金銀殿影一張 苗	·高、池「禪」。·高、池、大、全「華」。
694	惠斌禪·師誦法花·神人來拜影一張 苗	·高、池「禪」。·高、池、大、全「華」。
695	映禪·師誦法花·善神來聽經影一張 苗	·高「映」。池「映」。全「皎」。·高、池「禪」。
696	定禪·師誦法花·天童給事影一張 苗	·高、池「禪」。·高、全「華」。
697	惠向禪·師誦法花·滅後墓上生蓮花·及墓裏常有誦經聲影一張 苗	·高「惠」。池、全「定」。·高、池「禪」。·高、大、全「華」。
698	秦郡·老僧教弟子·感夢示宿·因影一張 苗	·池「群」。
699	道超禪·師誦法花·感二世弟子·生處影一張 苗	·高「禪」。·池、大、全「華」。
700	法惠禪·師誦法花·口放光照室·宇影一張 苗	·高「禪」。·池、大、全「華」。
701	大聖僧伽和尚影一張 苗	·大「蟻」。池、全「錯」。·高「並」。大、全「并」。
702	舍利五粒·菩薩舍利三粒·辟支佛舍利二粒·盛白蠟·小合子并安置白石壺    子一口	·高、池、大、全「州」。
右件法門等大唐開成三年八月初到揚		
洲·大都督府巡諸寺·尋訪抄寫畢先寄		
付使下准判官伴·宿祢·管雄船·已送		
延曆寺訖然都未具目·申官今謹具錄		
數申上		
以前件經論教法章疏傳記及諸曼荼羅壇		
像等伏蒙國恩·隨使到唐·遂於揚洲·五		
墓·及長安等處·尋師學法·九年之間·隨		
分訪求得者·謹具·色目如前謹錄·申上謹言		

承和十四年月日入唐天台宗請益

傳燈法師位圓仁上

(奧書)「後校合以雙巖藏本入了」(朱筆)

「寛治五年十月十六日一校了、勝豪」

「以円融房藏本校了」

---

・高「燈」下有「大」。

(ロ) 比叡山南溪藏本『入唐新求聖教目錄』の翻刻

〔凡 例〕

- 一、本目錄は、比叡山南溪藏本『入唐新求聖教目錄』の全文翻刻である。
- 一、上段に『入唐新求聖教目錄』(A)の全文を掲載した。また、『御経藏宝物聖教等目錄』に収録された『入唐新求聖教目錄』を(B)とし、異同のある箇所は上段の本文に中黒のルビを振って示し、下段と対照させた。
- 一、傍注や貼紙に記載の事項は省略した。
- 一、奥書の返り点については、写本の記載に従って記載した。
- 一、翻刻に当たっては、原本使用の文字を重視して、常用字体・正字体・異体字・略字体を適宜使用した。
- 一、なお、括弧内の異体字については以下の文字を使用した。

所(取) 曼(曼) 漆(漆) 州(列) 様(様) 經(經) 菩薩(井) 嚴(嚴) 傘(傘) 灌(灌) 觀(觀) 施(施) 修(修)

比叡山南溪藏本 (A)

入唐新求聖教目錄 慈覺大師求法目錄

長安五臺山及揚州等處所求經論念誦法門及章  
疏傳記等都計伍佰捌拾肆部捌佰貳卷胎藏金剛  
兩界部大曼荼羅及諸尊壇像舍利并高僧真影等  
都計伍拾種在長安城所求經論章疏傳等肆佰貳  
拾參部伍佰伍拾玖卷胎藏金剛兩部大曼荼羅及  
諸尊曼荼羅壇像并道具等貳拾壹種在五臺山所  
求天台教述及諸章疏傳等參拾漆卷并五臺山土  
石等石參種在揚州所求經論章疏傳等壹佰貳拾  
捌部壹佰玖拾捌卷胎藏金剛兩部大曼荼羅及諸  
尊壇像高僧真影及舍利等貳拾壹種  
金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品一卷 不空三藏訳 中間題云 金剛頂文殊  
師利菩薩儀軌供養法  
佛爲優填王說王法政論經一卷 不空  
大方廣如來藏經一卷 不空  
佛說十力經一卷 三藏沙門勿提摩魚於安西蓮花寺譯畢 進上  
花嚴長者門佛那羅延力經一卷

比叡山南溪藏本 (B)

「錄」下、有印記「實靈藏」。

・「討」。・無「貳」。

・「請」。・「柒」。

・「樣」。

・「譯」。

・「為」。

・「冥」。

・「華」。・「問」。

佛說十地經九卷 尸羅達摩

金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品一卷 不空

亦名五字咒法 青龍題云金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩真言經雖題目別意義同也

玉咽坦·~~迦~~羅經三卷

金剛忿怒速疾成就真言一本

梵字佛頂尊勝陀羅尼一本

梵字菩提莊嚴陀羅尼一本

梵字心真言一本

梵字中心真言一本

梵字馬頭觀自在菩薩心真言一本

梵字軍荼利根本真言一本

梵字烏樞洩摩心真言一本

梵字軍荼利金剛心真言一本

梵字烏樞洩摩心中心真言一本

梵字白傘蓋佛頂真言一本

梵字馬頭觀世音心真言一本

梵字三界無能勝真言一本

梵字佛眼真言三本

梵字七俱胝佛母菩薩真言一本

梵字文殊師利菩薩真言一本

·「」·

·「恒」·

·「陀」·

·「莊」·「陀」·



梵字文殊師利菩薩八字真言一本  
降三世五字真言一本  
一切如來白傘蓋大佛頂陀羅尼一本  
梵字羯磨部一百八名讚一本  
梵字五方歌讚一本  
梵字降魔讚一本  
梵字三身讚一本  
梵字吉慶伽陀九首一本  
一切如來心真言一本  
一切如來心印真言一本  
一切如來金剛被甲真言一本  
一切如來灌頂真言一本  
一切如來結界真言一本  
一切如來心中心真言一本  
一切如來隨心真言一本  
梵字法身緣生偈一本  
梵字金剛頂瑜伽經真言本  
梵字賢劫十六菩薩真言一本  
梵字二十天真言一本  
梵字十波羅蜜真言一本

梵字四无量真言一本

梵字金剛王中九尊真言一本

梵字觀自在聞持真言一本

梵字觀自在聞持甘露真言一本

焰口陀羅尼一本

二十天名菩薩真言一本

梵字大毗盧遮那經真言一本

梵字懺悔滅一切罪真言一本

梵字菩提莊嚴心真言一本

梵字寶樓閣心真言一本

梵字文殊一字三字等并忿怒真言一本

梵字孔雀王真言一本

梵字觀自在心真言一本

梵字如來慈護真言一本

梵字金剛延命真言一本

梵字金剛壽命真言一本

梵字金剛王真言一本

梵字大悲真言一本

梵字歡喜母真言一本

梵字過七薄俱真言一本

・「無」。

・・「菩薩」。

・「寶」。

・「忍」。

梵字龍猛集六妙真言一本

梵字辨才真言一本

梵字大悲心真言一本

梵字五佛頂真言一本

梵字大三昧耶真言一本

梵字藥衣心真言一本

梵字摩利支心真言一本

梵字吉祥心真言一本

梵字三部心真言一本

梵字八大真言一本

梵字不動尊心真言一本

梵字七俱知真言一本

梵字多羅真言一本

梵字馬頭明王真言一本

梵字金剛童子真言一本

梵字童子心真言一本

梵字滅惡趣真言一本

梵字請天龍真言一本

梵字送天龍真言一本

梵字電光真言一本

無此本。

・「諸」。

梵字電光心真言一本  
 梵字虛空藏真言二本  
 施一切衆生施羅尼一本  
 文殊劔真言一本  
 甘露隨羅尼一本  
 須彌盧王真言一本  
 蓮花部瑜伽念誦法梵本真言一本  
 梵字持世陀羅尼一本  
 梵字心真言菩薩小心真言一本  
 梵字摩利支心并根本真言一本  
 梵字文殊師利根本真言一本  
 梵字六足心真言一本  
 梵字尊勝真言一本  
 梵字如意輪真言一本  
 梵字娑婆加持供養真言一本  
 梵字佛慈護真言一本  
 梵字廣大寶樓閣金剛劫真言一本  
 梵字文殊贊一本  
 一切如來菩提心戒真言一本  
 梵字不動尊鎮宅真言一本

・「陀」。

・「宝」。

・・「菩薩」。

浴像燒香偈讀一本  
 取上乘教授戒懺悔文一本  
 菩提心戒一本  
 用心次第一卷  
 青龍寺新譯經等入藏目錄一卷  
 十六大菩薩一百八名讚  
 七佛讚歎一本  
 降三世金剛一百八名讚一本  
 十六讚歎一本  
 天龍八部讚二本  
 五讚嘆二卷 兩本  
 如來千輻輪相讚一本  
 毗盧遮那心略讚一本  
 大吉慶讚二卷 兩卷  
 佛頂尊勝真言根本讚一本  
 大尊讚一本（有「大」本作本」。）  
 梵字无垢淨光陀羅尼一本  
 梵字相輪幢中陀羅尼一本  
 梵字修造佛塔陀羅尼一本  
 梵字置相輪幢中及塔四周以咒王法置拾塔內真言一本（「拾」有「於イ」。）

---

・「乘」。  
 ・「讀」下有「一卷」。  
 ・「来」。  
 ・「吉」・「本」。  
 ・「無」。  
 ・「陀」。  
 ・無「置」。

梵字相輪真言一本

佛部曼荼羅讚一本

觀自在法身讚一本

普集天龍八部讚一本

蘊悉地并蘊摩呼經梵本一夾 兩部二卷

大慈大悲救苦觀世音自在菩薩廣大圓滿無礙自在青頸大悲心真言一卷 不空

大毗盧遮那成佛神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅真言集一卷

佛頂尊勝陀羅尼別法一卷 龜茲國僧着那譯

蘊悉地羯羅供養真言集一卷

梵字普賢行願讚一卷

悉曇章一卷

大般若涅槃經如來性品十四音義二卷 並是同本然一卷 若來後為別之（「若來後」、傍注有「着

朱脉。」）

羅什譯出十四音辨一卷 沙門智述

（奥書）

「建曆二年十二月廿三日於大曆聖教院以他筆書寫了（「大」、傍注有「延」。）

同三年正月二日於同院以御本 全宴

仁治元年十二月十七日於陶化之禪窓賜權僧正大和尚

御本書寫了

清淨金剛權律師尊真

・「具」。

・・無「世音」・「圓」・「無」。

・「本」・・・・・「來後為別也」。

・「廿」・「写」。

・「本」下、有「一交了」・・・無「全宴」。

・「寫」下、有「之」。

一交丁

嘉吉三年癸亥十二月廿一日於三山門東塔東谷佛頂尾林玉泉坊

拭三老眼一以三帝釈寺本一ノ天台無障金剛前探題法印權大僧都村成

右勘定前唐院書目録一卷借三洛東青蓮院宮御藏本一寫時

正徳六年夏 禪定院藏本

享保二年丁酉夏六月八日於兜率谷繕寫探題僧正嚴寛

天明三癸卯七月晦日以横川鶏頭院本写請生々本録悉既索以与含識共開佛智見云余

通照金剛 實靈（花押）

（印記）「實靈藏」

・無「了」。「一交」以下、「御本端書云仁元一十二月廿六日始之」

『入唐新求聖教目録』の諸本を対校した結果、諸本に記載の書目の数に相違が見られることが判明した。

すなわち、青蓮院本に記載されているが高山寺本、叡山文庫藏本、『大正藏』本、『日仏全』本に共通して記載されていない書目が五十六点存在している。つまり、青蓮院本と高山寺本をはじめとするその他諸本とは写本系統が異なっており、叡山文庫池田藏本及び二種の活字本の底本は、高山寺本に近いと考えられる。また、青蓮院本のみ記載されていない書目の総数はわずか六点であり、青蓮院本における欠落はきわめて少ないといえる。以上述べたように、現存最古かつ未記載書目の少なさという点から青蓮院本の史料的价值は最も高いといえる。

二種の比叡山南溪藏本については、『新求目録』のうち梵字經典を抄写したものであることが明らかになった。また、南溪藏本（A）と南溪藏本（B）に多少の異同が見られるものの、大きな差異は見られなかった。

### （3）『入唐新求聖教目録』に見られる将来物の概要

本項では『新求目録』に記載の順に従い、長安から五台山、揚州における求得による書物を中心とする将来物を見ていく。なお、『承和五年目録』、『在唐送進録』にも同様に見られた文字の異同については、本項では省略した。

本項中で使用する語句の凡例は以下の通りである。

### 凡例

- ・「青本」 〓 青蓮院本を指す。
- ・「高本」 〓 高山寺本を指す。
- ・「池田本」 〓 叡山文庫池田史宗藏本を指す。
- ・「写本」 〓 青蓮院本、高山寺本、池田本を指す。
- ・『大正藏』本 〓 『大正新脩大藏經』本を指す。
- ・『日仏全』本 〓 『大日本仏教全書』本を指す。
- ・「活字本」 〓 『大正藏』本、『日仏全』本の両本を指す。
- ・『大正』 〓 『大正新脩大藏經』の巻数、頁数、No.を指す。
- ・『大藏』 〓 『大藏經全解説大事典』の頁数を指す。
- ・『仏書』 〓 『仏書解説大辞典』の巻数・頁数を指す。
- ・（ ） 〓 青本に欠けている字を、その他の諸本に依って補った。
- ・「承和五年目録」及びアラビア数字の番号 〓 前掲の「日本国承和五年入唐求法目録」及び最上段に記載の番号を指す。
- ・「在唐送進録」及びアラビア数字の番号 〓 前掲の「慈覚大師在唐送進録」及び最上段に記載の番号を指す。



- ・「新求目録」及びアラビア数字の番号Ⅱ前掲の「入唐新求聖教目録」及び最上段に記載の番号を指す。
- ・「小野」Ⅱ小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』（鈴木学術財団、一九六四—一九六九年）の巻数・頁数を指す。

### （イ）長安求得

- 2 『金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法』一品一卷 不空（『大正』第二〇卷・一三五 a・No. 一一七一） 金剛界軌五字文殊菩薩を念誦する方法を説く。（『仏書』三・四八三頁、『大藏』三三〇頁）
- 3 『大威怒烏芻洩麼儀軌』一卷 不空訳（『大正』一一・一三五 c・No. 一二二五『大威怒烏芻洩麼儀軌經』）胎金合軌の仏典で烏芻洩麼明王を本尊とする十八道立（十八種類の印契から構成される供養法の結構）の念誦法などを説く。（『仏書』七・二〇九—二一〇頁、『大藏』三四一頁）
- 4 『仏為優填王説王法政論經』一卷 不空（『大正』一四・七九七 b・No. 五二四） 仏が優填王の問いに答えて王法を説いたものである。（『仏書』九・二五六頁、『大藏』一五六頁）
- 5 『速疾立駿魔醯首羅天説迦楼（羅）阿尾奢法』一卷 不空三藏訳（『大正』一一・三二九 b・No. 一二七七） 青本は「迦楼」の下「羅」の字を欠く。魔醯首羅天（大自在天）が那羅延天に阿尾奢法（子供に迦楼羅天を下ろして未来を占ったり、人の病気を治したりする法）を説く。（『仏書』七・八四頁、『大藏』三五一頁）
- 6 『觀自在菩薩如意輪瑜伽』一卷 不空三藏訳（『大正』二〇・二〇六 c・No. 一〇八六） 『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』（『大正』二〇・二〇三 c・No. 一〇八五）の説明を補うもので併せて用いられる。（『仏書』二・一五六頁、『大藏』三二三頁）
- 7 『金輪王仏頂要略念誦法』一卷 不空 通諸仏頂（『大正』一九・一八九 a・No. 九四八） 大日金輪の法を修行するための要略念誦の儀軌であり、『一字頂輪王念誦儀軌』一卷（『大正』一九・三〇七 c・No. 九五四）の要点をまとめたものである。（『仏書』三・五二九頁、『大藏』二七九—二八〇頁）

- 8 『金剛壽命陀羅尼念誦法』一卷 不空(『大正』二〇・五七五a・No.一一三三) 金剛界軌の延命法に属し、『金剛頂經』(『大正』一八・一一〇七a・No.八六五、不空訳)の広本に依って記されている。毘盧遮那報身仏が須弥山頂金剛宝楼阁にて一切如来の求めに応じて金剛壽命陀羅尼、除災延命の護摩法の功德などを説く。(『仏書』三・四七五頁、『大藏』三二三頁)
- 9 『聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・六b・No.一〇三一) 金胎合軌で聖觀音法に属する儀軌である。修行者が曼荼羅を作り、道場に入り懺悔・三帰・三竟から始まり捨身供養などを行ずる次第が記され、觀自在菩薩の四字を如法に觀ずる者への功德が説かれている。(『仏書』五・三七四頁、『大藏』三〇一頁)
- 10 『金剛頂經多羅菩薩念誦法』一卷 不空(『大正』二〇・四五四a・No.一一〇二) 多羅菩薩を本尊とする、『金剛頂經』に属する金剛界立の念誦法が明らかにされている。(『仏書』三・四八三頁、『大藏』三一六頁)
- 11 『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』一卷 不空三藏訳(『大正』二一・四二a・No.一二二一) 甘露軍荼利明王を本尊とする供養法を説く。後世の十八道(四度加行の最初に行われる行法)修法次第の典型をなし、純密系統の主要な儀軌とされる。(『仏書』二・八六頁、『大藏』三三八頁)
- 12 『文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品』一卷 不空三藏訳(『大正』二一・三二五c・No.一二七六) 釈尊が淨居天にあつた時に、文殊菩薩に対して説いた金翅鳥王に関する在家法である。(『仏書』一一・三二頁、『大藏』三五一頁)
- 13 『不空羼索毗盧遮那仏大灌頂光真言』一卷 不空(『大正』一九・六〇七a・No.一〇〇二) 光明真言及びその功德と念誦法を説く。『不空羼索神變真言經』第二十八(『大正』二〇・三八四a・No.一〇九二)の別出である。(『仏書』九・一八八頁、『大藏』二九三頁)
- 14 『金剛頂超勝三界經說文殊五字真言勝相』一卷 不空三藏訳(『大正』二〇・七〇九c・No.一一七二) 金剛

界儀軌、菩薩部に属し、文殊菩薩の五字真言（アラパチャナ、Arapacana）の字義とその功德を説く。（『仏書』三・四八七頁、『大蔵』三三〇—三三二頁）

15 『五字陀羅尼頌』一卷 不空（『大正』二〇・七一三b・No. 一一七四） 金剛界儀軌中の菩薩部に属する文殊五字法（アラパチャナ）の念誦法とその功德を明らかにしたものである。（『仏書』三・二五七頁、『大蔵』三三一頁）

16 『大日経略撰念誦随行法』一卷 不空（『大正』一八・一七六a・No. 八五七） 『大日経』（『大正』一八・四五a・No. 八四八）に基づく胎藏法の念誦法や観行を簡略に示した儀軌である。『大日経』の第七卷、供養次第法を簡略化したもので、断片的なものである。『五支略念誦要行法』とも称される。（『仏書』七・四〇九頁、『大蔵』二五三頁）

17 『木槵經』一卷（『大正』一七・七二六a・No. 七八六）『仏説木槵子經』・失訳） 仏陀が王舍城の鷲峰山<sup>じゆほうせん</sup>にて木槵子の数珠を渡し、常にこれを所持して仏法僧三宝の名を唱えることによって得られる功德などを説く。不空訳の説がある。（『仏書』一一・一二頁、『大蔵』二三四頁）

18 『大毗盧遮那成仏神変加持経略示七支念誦随行法』一卷 不空（『大正』一八・一七四c・No. 八五六） 『大日経』に基づく胎藏法の念誦法や観行を略示する儀軌であり、前掲16の書と同様、『大日経』第七卷供養法を簡略化したものである。（『仏書』七・四四八頁、『大蔵』二五三頁）

19 『金剛頂降三世大儀軌法王教中観自在菩薩心真言一切如来蓮華大曼荼羅品』一卷（『大正』二〇・三〇c・No. 一〇四〇） 観自在菩薩が降三世儀軌法王の会中において心真言とその曼荼羅、三摩地及び供養儀式の次第を説く。（『仏書』三・四八四頁、『大蔵』三〇三頁）

21 『金剛頂経観自在王如来修行法』一卷 不空（『大正』一九・七二c・No. 九三一） 金剛界立の弥陀供養法の儀軌である。『金剛頂経』により金剛蓮花部達摩法要を演<sup>の</sup>べたもので、観自在王如来（阿弥陀如来の別名）を

- 本尊とし、供養・観想をする方法を説いた供養儀軌である。（『仏書』三・四七九頁、『大蔵』二七六頁）
- 22 『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』一卷（『大正』三二・五七二b・No.一六六五、龍樹著か）阿耨多羅三藐三菩提心（無上の悟りを求める心）の行相を行願・勝義・三摩地に分けて説明したものであり、このうち三摩地菩提心（真言行者の菩提心）が強調されている。（『仏書』三・四九三頁、『大蔵』四六七頁）
- 23 『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・五二三c・No.一一二二）金剛界毘盧舍那如来が、他化自在天にて説いた理趣会の十七尊についての念誦法が説かれている。（『仏書』三・四九三頁、『大蔵』三二〇頁）
- 24 『金剛頂瑜伽降三世成就極深密門』一卷 不空与遍智訳（『大正』二一・三九b・No.一二〇九）降三世明王を本尊とする念誦儀軌を説く。（『仏書』三・四八九頁、『大蔵』三三八頁）
- 25 『仁王般若陀羅尼釈』一卷 不空（『大正』一九・五二二a・No.九九六）『仁王護国般若波羅蜜多經』（『大正』八・八三四a・No.二四六）巻下、奉持品所説の五大菩薩（金剛手・金剛利・金剛葉叉・金剛波羅蜜多）及び陀羅尼を注釈したものである。（『仏書』八・三九七頁、『大蔵』二九一―二九二頁）
- 26 『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』一卷 亦有別本不空（『大正』一八・二九九b・No.八七三）高本、池田本、活字本はこの書目を欠く。金剛界の五部（仏部、金剛部、蓮華部、宝部、羯磨部）中蓮華部について五相成身の観法及び諸尊の念誦法が示されている。（『仏書』三・四九六―四九七頁、『大蔵』二五七頁）本目録には他に同名の梵本真言二巻（「新求目録」134）が見られる。
- 28 『仏説一髻尊陀羅尼經』一卷 不空（『大正』二〇・四八四c・No.一一一〇）観自在菩薩が一髻羅刹法を修法する者は果報を受けることを説き、三種の陀羅尼を明かし、七日作壇法や灌頂、護摩法などの儀則が説かれている。（『仏書』一・一一六頁、『大蔵』三二七頁）
- 30 『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經』一卷 不空（『大正』二〇・五二八a・No.一一二三）『金剛頂勝初瑜伽

普賢菩薩念誦法』 金剛界儀軌中の金剛薩埵法で、この儀軌は『金剛頂勝初瑜伽經中略出大衆金剛薩埵念誦儀軌』（『大正』二〇・五一三c・No.一一二〇A）と同様、五秘密瑜伽の妙法が主に説かれている。（『仏書』三・四八五頁、『大藏』三三二〇—三三二二頁）

31 『金剛頂瑜伽護摩儀軌』一卷 不空 更有別本一卷 阿目佉跋折羅（『大正』一八・九一六a・No.九〇八）不空金剛の別名、「阿目佉跋折羅」訳を高本は「阿目跋羅説」と記す。大本の『金剛頂經』から護摩法を略説した儀軌である。（『仏書』三・四八九頁、『大藏』二七〇頁）

32 『陀羅尼門諸部要目』一卷 不空（『大正』一八・八九八c・No.九〇三）『都部陀羅尼目』 『金剛頂經』、『大日經』、『瞿薩經』（別名『玉呬耶經』、『大正』一八・七六〇c・No.八九七）、『蘇悉地羯羅經』（『大正』一八・六〇三a・No.八九三）、『底哩三昧經』（『大正』二一・七a・No.一二〇〇）、『蘇婆呼童子請問經』（『大正』一八・七一九a・No.八九五）などの諸部の中から必要事項を取り上げてまとめたものである。（『仏書』七・一二二、『大藏』二六八頁）

33 『大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼』一卷 不空（『大正』二〇・九三六c・No.一一九五） 仏が王舍城の鷲峯山に住していた時に、文殊師利菩薩が八不中道の徳を讃嘆したことを説き明かしたものである。（『仏書』七・二七五頁、『大藏』三三五頁）

34 『仁王般若念誦法經』一卷（『大正』一九・五二〇a・九九五、不空訳） 高本、『大正藏』本は「不空」を補う。『大正藏』によると不空訳と確定できる。『仁王護国般若波羅蜜多經』の修法次第を明かしたものとされる。（『仏書』八・三九七頁、『大藏』二九一頁）

35 『成就妙法蓮華經瑜伽觀智儀軌』一卷 不空（『大正』一九・五九四a・No.一〇〇〇） 『大正藏』には不空訳として収録されているが、大暦八年（七七三）不空が『大日經』や『金剛頂經』に基づき『妙法蓮華經』（『大正』九・一a・No.二六二）を儀軌化したものとされる。『法華經』二十七品の要旨をまとめた帰命頌『法華經』

の供養の作法が説かれる。、『仏書』六・八―九頁、『大蔵』二九三頁)

36 『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・五一三c・No.一一二〇) 金剛界儀軌中の金剛薩埵の儀軌であり、『大樂金剛薩埵修行成就儀軌』(『大正』二〇・五〇九a・No.一一一九)と同本である。金剛界五仏の印真言を始め、一百八名讃の功德などが説かれる。、『仏書』三・四八五頁、『大蔵』三一九―三二〇頁)

37 『大樂金剛不空真実三昧經般若波羅蜜多理趣釈』一卷 不空(『大正』一九・六〇七a・No.一〇〇三)『大樂金剛不空真実三昧經般若波羅蜜多理趣釈』二卷) 「蜜」を青本、高本は「密」とする。本書は、『大樂金剛不空真実三昧經般若波羅蜜多理趣品』(『大正』八・七八四a・No.二四三)の注釈であり、密教史上において『大日經疏』と相対して『理趣經』の重要な注釈であるとされる。、『仏書』七・五〇四―五〇六頁、『大蔵』二九三―二九四頁)

40 『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌(經)』一卷 不空(『大正』二〇・七二a・No.一〇五六、二卷) 青本は「經」の字を欠く。実際には不空訳ではなく、不空が『金剛頂經』によって本經を作ったとされる。修行次第と四種成就法(息災・増益・敬愛・降伏)が説かれる。、『仏書』三・四九二頁、『大蔵』三〇六頁)

41 『大方広仏華嚴經入法界品四十二字觀門』一卷(『大正』一九・七〇七c・No.一〇一九) 不空によって『華嚴經』卷第七十六入法界品(『大正』九・三九五a・No.〇二七八)の『四十二字觀門』を別出して新たに訳されたものである。善財童子が迦毘羅城の善知衆芸童子より四十二字門を教わる内容である。、『仏書』七・四七〇頁、『大蔵』二九七頁)

42 『大方広仏華嚴經入法界品頓証毗盧遮那法身字輪瑜伽儀軌』一卷(『大正』一九・七〇九b・No.一〇二〇) 字輪觀の瑜伽行法を内容としている。不空訳とされるが、その成立年代は疑問が持たれている。四十二字の字門を字輪として觀想する方法が説かれている。、『仏書』七・四七〇頁、『大蔵』二九七頁)前掲の41の書物と

セットで将来したのである。

43 『観自在菩薩如意輪念誦法儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・二〇三c・No. 一〇八五『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』）四度加行の如意輪念誦法次第の原本であり、その次第は密教修行作法の模範とされる。（『仏書』二・一五六頁、『大蔵』三・三三頁）

44 『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌經』一卷 不空（『大正』一九・三六四b・No. 〇九七二『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』）「儀」を青本は「威」とするが誤りである。胎金合行の尊勝法であり、尊勝仏頂の供養儀軌作法などが説かれる。（『仏書』九・三二六頁、『大蔵』二八五頁）

47 『聖閻曼德迦威怒王立しやうえんまんとつぎや成大神驗念誦法りゆうじようじんげん』一卷 不空（『大正』二一・七三a・No. 一二一四）  
釈迦牟尼仏が淨居天宮にて閻曼德迦（大威德明王）を本尊とする大威德法の念誦儀軌を説く。（『仏書』五・三六八頁、『大蔵』三・三九頁）

48 『金剛王菩薩秘密念誦儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・五七〇c・No. 一一三二）  
金剛界儀軌中の金剛薩埵法で、金剛王菩薩（金剛薩埵）の秘密念誦法が明らかにされている。（『仏書』三・四三九頁、『大蔵』三・三二二—三・三三頁）

49 『無量寿如来修観行供養儀軌』一卷 不空（『大正』一九・六七b・No. 九三〇『無量寿如来観行供養儀軌』）  
『無量寿經』と『阿弥陀經』を所依として、無量寿如来（阿弥陀如来）の供養法を説いた儀軌であり、十八道念誦次第の典拠とされ、金剛手菩薩が無量寿仏陀羅尼を説く。（『仏書』一〇・四四七—四四八頁、『大蔵』二・七五—二・七六頁）

52 『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時处念誦成仏儀軌』一卷 不空（『大正』一九・九五七b・No. 九五七）  
大日金輪の儀軌に属し、即身成仏の深旨が示されている。（『仏書』三・四七八頁、『大蔵』二八二頁）

54 『仁王護国般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌』一卷 不空（『大正』一九・五一三c・No. 九九四）  
『仁王護国

般若波羅蜜多經』（『大正』八・八三四c・No.二四六）奉持品の語句の注釈と、仁王經法の曼荼羅を建立するための儀軌や修法の次第が説かれている。（『仏書』八・三九三頁、『大藏』二九一頁）

55 『瑜伽蓮華部念誦法經』一卷 不空（『大正』二〇・六c・No.一〇三二）『瑜伽蓮華部念誦法』 『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』（『大正』一八・二九九b・No.八七三）の略法念誦と見られるもので、蓮華部（胎藏界曼荼羅の

觀音院・地藏院）の念誦の次第を述べている。（『仏書』一一・八〇―八一頁、『大藏』三〇一頁）

57 『一字頂輪王瑜伽經』一卷 不空（『大正』一九・三一三b・No.九五五）『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』 安怛陀娜（Antarāna）の秘法を成就する修行作法を明らかにしたものである。（『仏書』一・一四〇頁、『大藏』二八一頁）

58 『一字頂輪王念誦儀軌』一卷 不空（『大正』一九・三〇七c・No.九五四） 仏陀が忉利天にて説いた、『一字頂輪王經』（『大正』一九・一九三a・No.九五〇）の本旨を修行する順次法則を示した儀軌である。（『仏書』一・一三九頁、『大藏』二八一頁）

59 『大虚空藏菩薩念誦法』一卷 不空（『大正』二一・六〇三a・No.一一四六） 虚空藏菩薩の念誦法であり、この教法を修行することによって得られる、業障を除くなどのいくつかの功德が説かれる。（『仏書』七・二四一頁、『大藏』三二五頁）

60 『受菩提心戒儀』一卷 不空（『大正』一八・九四〇b・No.九一五） 真言密教の受法の弟子が菩提心戒を授かる際の戒儀の文であり、衆生無辺誓願度を初めとする五大願が示されている点が注目される。（『仏書』五・一〇三頁、『大藏』二七二頁）『新求目録』に『最上乘教授戒懺悔文』の名で同名の書目が見られ、重複して持ち帰ったものであろう（『新求目録』170）。

61 『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門序』一卷 不空（『大正』一八・二八七c・No.八七〇） 金剛界毘盧遮那の成仏と四仏などの出生、金剛界三十七尊の形成、三十七尊の加持の功德が説かれている。（『仏書』一一・二一五頁、『大藏』二五六―二五七頁）



62 『般若波羅蜜多理趣(經) 大安樂不空三昧真実金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅義述』一卷 阿目佉金剛述(『大正』一九・六一七b・No. 一〇〇四)『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述』 高本、『大正藏』本以外の諸本は「經」の字を欠く。十七菩薩の功德が説かれ、理趣經曼荼羅の重要な根拠とされる。(『仏書』九・八五頁、『大藏』二九四頁)

63 『金剛頂經金剛界大道場毗盧舍那如來自受用身内証智眷属法身異名仏最上乘秘密三摩地礼懺文』一卷 不空(『大正』一八・三三五c・No. 八七八) 「界」を青本は「蜜」とするが誤りである。金剛界三十七尊に対して礼拝、懺悔する供養法が説かれている。(『仏書』三・四七九頁、『大藏』二五八頁)

64 『文殊問經字母品』第十四 一卷 不空(『大正』一四・五〇九b・No. 四六九) 梁の僧伽婆羅訳『文殊師利問經』(『大正』一四・四九二b・No. 四六八)の字母品第十四の別訳であり、仏が文殊に悉曇五十字門を示したものである。(『仏書』一一・三九頁、『大藏』一三九頁)

66 『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・五三五b・No. 一二二五) 青本は「密」を「蜜」とし、後述する67、69の書物も同様である。金剛薩埵五秘密法の本軌であり、五秘密(金剛薩埵・欲金剛・触金剛・愛金剛・慢金剛)曼荼羅を本尊として滅罪の目的のために修する法である。(『仏書』三・四九〇頁、『大藏』三二二頁)

67 『十一面觀自在菩薩心密言儀軌經』三卷 不空(『大正』二〇・一三九c・No. 一〇六九) 十一面觀自在菩薩の真言の功德、修行儀軌、成就處、護摩儀軌が説かれる。(『仏書』五・一五一頁、『大藏』三〇九頁)

68 『菩提場莊嚴陀羅尼經』一本 不空(『大正』一九・六六八b・No. 一〇〇八) 菩提場莊嚴陀羅尼の功德を物語形式で宣揚する。『新求目録』には『梵字菩提莊嚴陀羅尼』一本も存在している(『新求目録』197)。(『仏書』九・四二二頁、『大藏』二九五頁)

69 『一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經』一卷 不空(『大正』一九・七一〇a・No. 一〇二二) 仏陀が一

切如来無量俱胝心陀羅尼とその功德を説く。天台宗においては、仏頂尊勝陀羅尼・阿弥陀如来根本陀羅尼と並んで日常的に唱える三陀羅尼の一つである。（『仏書』一・一三一頁、『大蔵』二九八頁）

70 『八大菩薩曼荼羅經』一卷 不空（『大正』二〇・六七五a・No.一一六七） 世尊が補怛落伽山にて八大菩薩（如来・觀自在菩薩・慈氏菩薩・虚空藏菩薩・普賢菩薩・金剛手菩薩・曼殊師利菩薩・除盖障菩薩・地藏菩薩）の曼荼羅を建立し供養することによって得られる功德を説く。（『仏書』九・三九頁、『大蔵』三二九頁）

72 『大吉祥天女十二名号經』一卷 不空（『大正』二二・二五二b・No.一二五二） 大吉祥天女の十二名号（吉慶・吉祥・蓮華・嚴飾・具財・白色・大名称・大光曜・施食者・施飲者・宝光・大吉）の功德を説く。（『仏書』七・二二六頁、『大蔵』三四六頁）

74 『大乘縁生論』一卷 不空 鬱楞迦造（『大正』三二・四八六b・No.一六五三） 十二有支（無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死）の解説と十二因縁による無自性空、斷・常を離れた中道などが説かれる。（『仏書』七・二八〇頁、『大蔵』四六四頁）

75 『大樂金剛薩埵修行成就儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・五〇九a・No.一一一九） 『理趣經初段大樂不空金剛薩埵初集會品』の修行儀軌法を詳述したものである。（『仏書』七・五〇三―五〇四頁、『大蔵』三一九頁）

76 『大藥叉女歡喜母并愛子成就法』一卷 不空（『大正』二一・二八六a・No.一二六〇） 池田本と活字本は「叉」を「刃」とするが、『大正蔵』の記載から「叉」と確定できる。大藥叉女歡喜母（訶哩底母）の婦仏の因縁、供養儀則、陀羅尼法、愛子成就法が説かれる。（『仏書』七・五〇二頁、『大蔵』三四八頁）

77 『七俱智仏母所説准提陀羅尼經』一卷 不空（『大正』二〇・一七八c・No.一〇七六） 雜部仏教に属し、准提仏母法の本軌であり、『仏説七俱胝仏母准提大明陀羅尼經』（『大正』二〇・一七三a・No.一〇七五）と同本異訳である。本經では不空の考えが打ち出されており、両本に相違が見られる。（『仏書』四・三二八頁、『大蔵』三一頁）

78 『七俱胝仏母准提陀羅尼念誦儀軌』一卷（『大正』二〇・一八〇b・No. 一〇七六） 青本以外の諸本はこの書を欠く。『七俱胝仏母准提陀羅尼經』所収の儀軌で、十八道立ての次第となっている。（『仏書』四・三二七頁、『大藏』三二一頁）

79 『觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門』一卷 不空（『大正』二〇・四c・No. 一〇三〇） 金剛頂部に属し、密教の修習者のための修行道場における実践について約二十四項目にわたる必読条項が記されている。（『仏書』二・一五三頁、『大藏』三〇一頁）

81 『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經』三卷 不空（『大正』一一・九〇二b・No. 三一九） 仏陀が文殊師利菩薩の仏土の莊嚴功德を説いたものであり、『大宝積經』（『大正』一一・一a・No. 三二〇）文殊師利授記会、『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經』（『大正』一一・九〇二b・No. 三一九）の異本であり略説とされている。（『仏書』七・二七四頁、『大藏』八九頁）

84 『仏説十力經』一卷 勿提々犀魚訳（『大正』一七・七一五c・No. 七八〇『十力經』） 『日仏全』本は訳者名を「勿提七魚」とするが誤りである。仏が諸比丘のために、如来が十種大智力を具していることを説く内容であり、施護等訳『仏十力經』と同本である。（『仏書』五・二〇九頁、『大藏』二二二頁）

85 『仏説迴向輪經』一卷 戸羅達摩訳（『大正』一九・五七七a・No. 九九八） 仏陀が大摩尼金剛宝山峰中にて金剛摩尼菩薩に対して菩薩律儀戒を受ける功德とその功德を菩提に廻向することなどを説く。（『仏書』一・二三八頁、『大藏』二九二頁）

87 『般若波羅蜜多心經』一卷（『大正』八卷・八四八a・No. 二五一など） 『大般若經』などの諸般若經の根本思想である空觀や空觀によって諸仏が生じ、その功德が大なることを簡潔明瞭に説く。（『仏書』九・八二頁、『大藏』七二頁）

88 『出生無辺門陀羅尼經』一卷 不空（『大正』一九・六七五c・No. 一〇〇九） 仏世尊によって諸菩薩等に陀

羅尼法要が説かれ、四法を成就して得られる陀羅尼の功德も説かれる。（『仏書』五・二三二頁、『大蔵』二九五頁）

90 『大仏頂広聚陀羅尼經』五卷（『大正』一九・一五五b・No.九四六、失訳） 密教の諸々の条件が雑多に収録された仏頂系の重要な儀軌の一つとされる。（『仏書』七・四五三―四五四頁、『大蔵』二七九頁）

91 『不動使者陀羅尼秘密法』一卷 金剛菩提訳（『大正』二一・二三a・No.一二〇二） 青本は訳者名を「金剛菩薩」とする。『大正蔵』によると金剛智訳であり、金剛智の梵名は「跋日羅菩提」（vajra-bodhi）であることから、金剛菩提が正しいであろう。不動明王を本尊とする不動法の儀軌が説かれる。（『仏書』九・一九七頁、『大蔵』三三六頁）

92 『修習般若波羅蜜菩薩觀（行）念誦儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・六一〇c・No.一一五一）写本は「行」を欠く。般若波羅蜜菩薩の觀行念誦を修習する次第法則を説く。（『仏書』五・八一頁、『大蔵』三二六頁）

93 『金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』一卷 不空共遍智同訳（『大正』二一・七a・No.一一九九） 金剛手菩薩が文殊師利菩薩のために不動明王を本尊とする不動法の儀軌を説く。（『仏書』三・四七一頁、『大蔵』三三六頁）

94 『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』一卷 金剛智訳（『大正』一八・二五三c・No.八六七） 『大正蔵』は上下の二巻を収録しており、円仁はそのうち一巻を将来したか。空海、恵運も一巻のみ将来している。世尊金剛界遍照如来が自性所成の眷属とともに三十七尊の心真言などを説き、宗派により愛染明王（真言宗）、仏眼（山門）、大勝金剛（寺門）の三昧を説いた經典とされる。（『仏書』三・五一四頁、『大蔵』二五六頁）

95 『金剛頂經瑜伽修習毗盧舍那三摩地法』一卷 金剛智訳（『大正』一八・三二七a・No.八七六） 十八会ある金剛界毘盧遮那如来の三摩地を修習する念誦法が説かれる。（『仏書』三・四八一頁、『大蔵』二五八頁）

97 『金剛頂一切如来真實攝大乘現証大教王經』三卷 不空（『大正』一八・二〇七a・No.八六五） 大本『金剛

頂經』の初会の經典の部分訳である。(『仏書』三・四七六頁、『大藏』二五五頁)『新求目録』には、同名の書目が別に一卷存在している(『新求目録』187)。

100 『金剛恐怖集會方広軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經』一卷 不空(『大正』二〇・九a・No.一〇三三) 高本以外の諸本は「軌儀」を「儀軌」とするが誤りである。觀自在菩薩が仏の教旨を承けて弥陀を中心とする曼荼羅を建立し、除病災厄、福德成就の法を説き、全九品より成る。(『仏書』三・四六五頁、『大藏』三〇一頁)これも『新求目録』には他に同名の書目が存在している(『新求目録』121)。

102 『金剛頂瑜伽念珠經』一卷 不空(『大正』一七・七二七c・No.七八九) 毘盧遮那仏が金剛薩埵に念誦の功德を説かせ、金剛薩埵偈をもつてその功德勝利を説く。(『仏書』三・四九四頁、『大藏』二三四―二三五頁)

103 『大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』一卷 不空(『国訳密教』經軌部第四) 青本は「蜜」を「蜜蜜」とするが誤りである。

104 『金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法』一品一卷 不空(『大正』二〇・七〇五a・No.一一七一) 文殊菩薩の五字陀羅尼(アラパチャナ)の念誦法とその字義、供養法やその功德などが説かれる。(『仏書』三・四八三頁、『大藏』三三〇頁)

105 『普賢菩薩行願讚』一卷 不空(『大正』一〇・八八〇a・No.二九七) 『四十華嚴』(『大方広仏華嚴經』、『大正』一〇・六六一a・No.二九三)の第四十卷に当たり、普賢菩薩が説く部分を読誦のため別行したものである。(『仏書』九・一二六頁、『大藏』八四頁)

106 『百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚』一卷 不空(『大正』一三・七九〇a・No.四一三) 地藏菩薩の大悲摂化の功德を讃歎しているが、本文に地藏菩薩の名はなく法身を讃じたものと考えられる。(『仏書』九・一六一、『大藏』一一九頁)

108 『阿唎多羅陀羅尼阿嚕力品』第十四 一卷(『大正』二〇・二三b・No.一〇三九) 悉羅跋城ぎつこくおんの給孤独園ぎつこくおん(祇

園精舎)で、観自在菩薩が世尊の許しを得て行った説法、すなわち蓮花部心真言や造塔の功德、観世音の画像法、刻雕像法、捏塑像法などが説かれる。(『仏書』一・六一―六二頁、『大蔵』三〇三頁)

109 『一字奇特仏頂経』三卷 不空(『大正』一九・二八五c・No.九五三) 在家法であり、特に王族の修する一字奇特仏頂明王の法の威力が明らかにされている。(『仏書』一・一三八―一三九頁、『大蔵』二八一頁)

111 『能淨一切眼疾病陀羅尼経』一卷 不空(『大正』二一・四九〇a・No.一三二四) 仏が迦毘羅衛国において阿難に眼垢・疾病を除く淨眼陀羅尼とその功德を説く。(『仏書』八・四二九頁、『大蔵』三六二頁)

112 『除一切疾病陀羅尼経』一卷 不空(『大正』二一・四八九c・No.一三二三) 仏が給孤独園において阿難に世間の一切の疾病を治す智炬陀羅尼とその功德を説く。(『仏書』八・四二九頁、『大蔵』三六二頁)

113 『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼経』一卷(『大正』二一・四六四b・No.一三二三、不空訳) 世尊が阿難に焰口餓鬼を救援する陀羅尼(無量威徳自在光明殊勝妙力)とその施食法を説く。(『仏書』二・三五〇頁、『大蔵』三六〇頁)

114 『仏説三十五仏名礼懺文』一卷 不空(『大正』二一・四二c・No.三二六) 三十五仏への帰命を述べ、今生及び他の生涯でなした罪を懺悔するものである。(『仏書』四・八三頁、『大蔵』九一頁)

115 『訶利帝母真言法』一卷 不空(『大正』二一・二八九b・No.一二六一『訶利帝母真言経』) 訶利帝母叉女の実言とその形像の詳説、十種の功德法と訶利帝母念誦法などがその内容である。(『仏書』二・一一頁、『大蔵』三四八頁)

116 『観自在菩薩説普賢陀羅尼経』一卷 不空(『大正』二〇・一九c・No.一〇三七) 維密経、聖観音法に属し、靈鷲山で世尊に許しを得た観自在菩薩摩訶薩が普賢陀羅尼を説く。(『仏書』二・一五四―一五五頁、『大蔵』三〇二頁)

117 『毗沙門天王経』一品一卷 不空(『大正』二一・二一五a・No.一二四四) 毘沙門天が仏前において心真言

- を説き、真言の念誦の功德などを説く。、『仏書』九・一三五頁、『大藏』三四四頁)
- 118 『雨宝陀羅尼經』一卷 不空(『大正』二〇・六六七c・No.一一六三) 世尊が憍曇弥国きょうたんみの建吒伽林たたくがにて長者妙月に雨宝陀羅尼の因縁とその功德を説く。、『仏書』一・二二四頁、『大藏』三二九頁)
- 119 『穢魔梨童女經』一卷 不空(『大正』二一・二九三c・No.一二六四)『觀自在菩薩化身褻瞿哩曳童女銷伏毒害陀羅尼經』雜密部、常瞿利法に属し、世尊が舍衛国祇陀国にて穢魔梨童女より聞いた世間の一切の三種の毒を除く真言が説かれる。、『仏書』二・一五四頁、『大藏』三四八頁)
- 120 『菩提場所説一字頂輪王經』五卷 不空(『大正』一九・一九三a・No.九五〇) 雜密に属し、仏頂系儀軌の中で最も形態の整ったものであり、菩提樹下で五仏頂に通じて説かれている。、『仏書』九・四二〇頁、『大藏』二八〇頁)
- 122 『大威力烏枢瑟摩明王經』二卷 北天竺三藏阿質達霰訳(『大正』二一・一四二b・No.一二二七) 金剛手菩薩が仏部・蓮華部・金剛部のうち金剛部における烏枢瑟摩法を説くが、邪道の呪詛法も説かれている。、『仏書』七・二一〇頁、『大藏』三四一頁)
- 123 『穢跡金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門』一卷 沙門阿質達霰(『大正』二一・一五八a・No.一二二八) 青本・池田本は「要」を「異」とするが誤りである。釈尊入滅に際して穢跡金剛(烏枢瑟摩明王)を化現して梵王を招く因縁を作り、仏が大円滿陀羅尼神呪穢跡真言を明かし、諸々の呪詛法などを説く。、『仏書』一・二四七―二四八頁、『大藏』三四二頁)
- 125 『普遍智藏般若波羅蜜多心經』一卷 摩竭提国三藏法月訳(『大正』八・八四九a・No.二五二) 玄奘訳『般若心經』(『大正』八卷・八四八c・No.二五一)の異本として重視され、序文と結末とを有し、大本の系統に属する。、『仏書』九・二三五頁、『大藏』七三頁) 青本、高本は訳者名を「三藏法日」とする。『入唐求法巡礼行記』(以下『巡礼記』と省略) 会昌二年(八四二) 五月二十五日条に、「五月十六日起首、於青龍寺天竺三藏

宝月所「重学ニ悉曇」、親口ヲ受正音。」とあり、円仁は長安青龍寺のインド僧三藏宝月（一八四二）より悉曇を重ねて学んだことが窺え、「宝月」と確定できる。

128 『慈氏菩薩所説大乘縁生稻籔喻經』一卷 不空（『大正』一六・八一九a・No.七一〇） 諸本は「縁」を「經」とするが誤りであろう。慈氏菩薩が舍利弗に縁生の原理を稻の生長に譬えて説く。（『仏書』四・三一四頁、『大藏』二一五頁）

131 『仏説阿吒婆拘大元率將無辺神力随陀羅尼經』（『大正』二一・一七八a・No.一二三七）『阿吒婆拘鬼神大将上仏陀羅尼神呪經』一卷 阿吒婆拘鬼神大将（太元帥明王）が賊・蛇・鬼のために苦悩する比丘（阿難）に慈悲心を起こし、太元帥明王の三種の陀羅尼を説く。（『仏書』一・一六頁、『大藏』三四三頁）

132 『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』一卷（『大正』三九・八〇八a・No.一七九八） 龍樹（一五〇頃—二五〇頃）が南天竺の鉄塔より『金剛頂經』を誦出した由来などが説かれている。『金剛頂瑜伽中略出念誦經』（『大正』一八・二二三b・No.八六六）の注疏であり、『金剛頂經』の末疏として重要視される。（『仏書』三・四八〇頁、『大藏』五一五頁）

133 『撰大毗盧遮那成仏神變加持經入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅广大念誦儀軌』三卷（輪婆迦羅（善無畏）訳『大正』一八・六五a・No.〇八五〇、『撰大毗盧遮那成仏神變加持經入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅广大念誦儀軌供養方便會』）『大日經』系の供養儀軌で、胎藏法四部儀軌の一つであり、胎藏法次第の基本である。（『仏書』五・四一五頁、『大藏』二五一頁）

135 『大宝広博楼閣善住秘密陀羅尼經』三卷 不空（『大正』一九・六一九a・No.一〇〇五） 青本は「密」を「蜜」とする。大摩尼広博楼閣善住秘密陀羅尼の威徳力と功德、成就法、修行儀軌、曼荼羅建立法、護摩法などが説かれる。（『仏書』七・四九一頁、『大藏』二九四頁）

136 『大雲輪請雨經』二卷 不空（『大正』一九・四八四c・No.九八九） 雜密に属し、仏が難陀塢波難陀竜王宮



- にて大比丘・菩薩・諸竜王などに請雨法とその功德を説く。、『仏書』七・二二四頁、『大藏』二九〇頁)
- 137 『大雲經祈雨壇法』一卷(『大正』一九・四九二c・No.九九〇) これも請雨法が説かれ、壇中の描き方と『大雲經』の読誦によって甘露の降ることが説かれている。、『仏書』七・二二二頁、『大藏』二九〇頁)
- 138 『仏母大孔雀明王經』三卷 不空(『大正』一九・四一五a・No.九八二)『仏母大金曜孔雀明王經』 釈尊が舍衛城のジェータ林にて阿難に大孔雀明王陀羅尼を授けた話を中心に、孔雀明王陀羅尼の功德を敷衍する内容である。、『仏書』九・三四一頁、『大藏』二八七頁)
- 139 『仏説金剛頂瑜伽中略出念誦法』六卷(『大正』一八・二二三b・No.八六六)『金剛頂瑜伽中略出念誦經』四卷(『大正藏』に唐開元十一年(七二三)の金剛智訳が収録されているが、本書と同一の書かは不詳である。十万頌の『金剛頂經』から瑜伽の秘要を抄出し、灌頂などの作法を詳細に説いており、日本真言宗では灌頂の本拠として重視されている。、『仏書』三・四九四頁、『大藏』二五五頁)
- 141 『施諸餓鬼飲食及水法并手印』不空三藏口決一卷(『大正』二一・四六六c・No.一三一五) 施餓鬼法の本軌であり、普施一切餓鬼印真言、五如来の真言、三昧耶戒陀羅尼、發遣解脫真言とその功德などが説かれている。、『仏書』六・二八七―二八八頁、『大藏』三六〇―三六一頁)
- 143 『転法輪菩薩摧魔怨敵法』一卷(『大正』二〇・六〇九b・No.一一五〇) 摧魔怨菩薩が隣国の侵入や内乱から国王と国民を守護する摧魔怨敵の修法の次第を説く。、『仏書』八・一五八―一五九頁、『大藏』三二六頁)
- 144 『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』一卷 淨智金剛訳(『大正』二〇・七八四b・No.一八四、菩提仙那訳) 青本・『大正藏』本は「密」を「蜜」とする。文殊菩薩の八字陀羅尼とその功德を説き、次に八字曼荼羅の造壇法と念誦儀軌が説かれ、十八道立の次第になっている。、『仏書』七・二七四頁、『大藏』三三三頁)
- 148 『千轉陀羅尼觀世音菩薩呪』一卷 智通法師訳(『大正』二〇・一七b・No.一〇三五) 雜密の聖觀音法に属

する。最初に千転呪を説き、次に千転印と観世音心印を示し、終わりに成就壇法と焼火法とが明らかにされている。(『仏書』六・三二七頁、『大蔵』三〇二頁)

149 『聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法』一卷 (大) 興善寺三蔵訳 (『大正』二一・七三a・No. 一二一四)

雜密に属し、釈迦牟尼仏が淨居天宮にて閻曼德迦(大威德明王)を本尊とする大威德法の念誦儀軌を説き、大威德明王の根本真言と呪詛法、二十三種供養の真言などを説く。(『仏書』五・三六八頁、『大蔵』三三九頁)

150 『建立曼荼羅及揀擇地法』一卷 慧琳集 (『大正』一八・九二六a・No. 九一一) 『蘇婆呼童子請問經』、『蘇悉地羯羅經』、『玉咽耶經』、『大日經』などの諸經典より七日作壇法の択地法・造壇法などの記述を抄録したものであり、造壇の重要な書とされている。(『仏書』三・五三〇頁、『大蔵』二七一頁)

160 『大随求八印法』一卷 (『大正』二〇・六四九b・No. 一五六A、惟勤『大随求即得大陀羅尼明王懺悔法』)

高本、『大正蔵』本は「惟謹」を補う。惟謹(一八三六)については、『巡礼記』にその名は見られないが、三千院本『慈覺大師伝』(『続天全』史伝二、五一頁)に、「向ニ於街西淨影寺一、奉レ見ニ惟謹阿闍梨一、各不レ惜ニ玄秘一而為ニ指授一。」とあり、円仁が秘法を受けた長安・淨影寺の僧侶であることが知られる。随求八印法(懺悔印・菩提根本契・如来平等契・如来消一切毒惡契・一切盡得仏記契・秘密契・解脫契・如来心契)を結び懺悔することによりあらゆる罪障が消除すると説き、この印を受持する功德が説かれる。(『仏書』七・三六一頁、『大蔵』三二七頁)

161 『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』一卷 (『大正』一八・二九七c・No. 八七二) 青本以外の諸本はこの書目を欠

く。金剛界根本成身会の三十七尊出生の儀相が明らかにされ、最後に密教の付法相承が説かれる。不空訳とされるが、実際には別の人物による唐代の訳出と見られる。(『仏書』三・四九〇—四九一頁、『大蔵』二五七頁) 「新求目錄」<sup>361</sup>にも惟謹述の『阿字觀門』がある。

163 『拔濟苦難陀羅尼經』一卷 (『大正』二一・九一二b・No. 一三九五、玄奘訳) 池田本、『大正蔵』本以外の諸

本は「済」を「添」とするが誤りである。仏が給孤独園（祇園精舎）にて不可説功德莊嚴菩薩のために、不動如来と滅惡趣王如来所説の陀羅尼とその功德を説く。（『仏書』九・四六―四七頁、『大藏』三七七頁）

164 『觀自在菩薩心真言一印念誦（法）』（『大正』二〇・三二a・No. 一〇四一） 青本、『日仏全』本は「法」の字を欠く。金剛界の儀軌に属し、事供養を用いず、蓮華部心の印真言をもって修する聖觀音供養法である。（『仏書』二・一五四頁、『大藏』三〇三頁）

166 『大聖天歡喜双身毗那夜迦法』一卷 不空（『大正』二一・二九六a・No. 一二六六）雜密軌で聖天法の本軌であり、大聖歡喜自在天の供養法と浴油法を説く。（『仏書』七・二七一頁、『大藏』三四九頁）

167 『大自在天法則儀軌』一卷（『秘密儀軌集』二卷） 毘那夜迦天が鷄羅山において諸天衆、大梵天などに対して稽首作礼して呪法を説く法則を述べたものである。（『仏書』七・二五〇頁）

171 『大毗盧遮那成仏神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌』二卷 法全（『大正』一八・一〇八c・No. 八五二）『大毗盧遮那成仏神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會』三卷 青本以外の諸本はこの書目を欠く。『大日經』に基づく系統で胎藏法四部儀軌の一つとされる供養法である。（『仏書』七・四四八頁、『大藏』二五二頁）

法全（一八四三）は、『巡礼記』の開成五年（八四〇）九月六日条に、「玄法寺法全和尚深解三部大法」と見えるのが初見であり、玄法寺（長安左街安邑坊）の阿闍梨である。また、海雲（一八三四）撰『金胎阿闍梨資相承』<sup>31</sup>によると、惠果（七四六―八〇五）の法孫である。会昌三年（八四三）二月二十九日には、「於玄法寺法全阿闍梨所」、始受二胎藏大法」とあり、円仁は法全より胎藏界大法を受法している。

173 『略叙伝大毗盧遮那成仏神變加持經大教相承伝法次第記』二卷（『兩部大法相承師資付法記』、『大正』五一・七八三c・No. 二〇八一）高本、池田本、『大正』本、『日仏全』本は「一卷」と記す。海雲による唐大和八年（八三四）の著作であり、インドから中国の金剛界胎藏界兩部の師資相承、特に不空の系統について詳細に述

べられている。『仏書』一一・二一九頁、『大蔵』六一四頁)

- 175 『觀自在菩薩心真言念誦法』一卷 青本は「亦名一印法」を加える。先述の『觀自在菩薩心真言一印念誦』(164)と同じ仏典であり、重複して将来したと思われる。

- 176 『諸仏境界撰真実經』三卷 三藏般若訳(『大正』一八・二七〇a・No.八六八) 大毘盧遮那如来が十六大菩薩などに囲まれ、須弥山頂の大宝楼閣にて金剛界三十七尊の印言、供養法、護摩や灌頂の次第とその功德を説く。(『仏書』五・二七四—二七五頁、『大蔵』二五六頁)

- 177 『不空羼索神変真言經』二卷 (菩提流支訳『大正』二〇・二二七a・No.一〇九二) 『大正蔵』は三十卷七十八章となっており、円仁はそのうちの二卷を持ち帰ったのであろうか。不空羼索觀音の真言陀羅尼、念誦法、曼荼羅、功德などを説き、七十八品より成り密教經典としては浩瀚なものとされている。第六十八章では、光明真言が説かれることで知られる。(『仏書』九・一八六頁、『大蔵』三二四頁)

- 179 『慈氏菩薩略修愈識念誦法』二卷 (『大正』二〇・五九〇a・No.一一四一、善無畏訳) 青本以外の諸本はこの書目を欠く。弥勒菩薩の念誦法を説く儀軌で、弥勒法の本軌であり、十品から構成されている。(『仏書』四・三一五頁、『大蔵』三二四頁)

- 180 『毗那耶律藏經』一卷 (『大正』一八・七七三a・No.八九八『仏説毘那夜經』、唐代失訳) 仏と執しやう金剛(金剛手菩薩)、觀自在菩薩、梵天、堅牢地神との対話形式で、密教の修法の要件と作法が説かれている。(『仏書』九・一三九頁、『大蔵』二六五頁)

- 181 『大菩提心随求陀羅尼一切仏心真言法』一卷 阿地瞿多訳(『秘密儀軌集』七) 如来がその内証本誓を標幟する手印の法を示して大衆に真言を説いたものである。(『仏書』七・四六〇頁、『大蔵』)

- 182 『仏説無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法』一卷 金剛智訳(『大正』二一・一三〇a・No.一二二三) 無量寿仏の化身である金剛童子の秘法のうち黄金剛童子について述べたもので、不空訳『聖迦柅に忿怒金

剛童子菩薩成就儀軌經』三卷（『大正』二一・一〇二・No. 一二二二）を、修行次第の形式にまとめたものである。（『仏書』一〇・四四九頁、『大藏』三四一頁）

183 『大輪金剛修行悉地成就及供養法』一卷（『大正』二一・一六六b・No. 一二三一、失訳）一説に金剛智訳ともされる。『金剛頂經』によつて大輪金剛法を説くが、この修法は毎日三時に行い、大輪金剛の真言を一千八十遍唱えることにより全ての悉地を獲得することが説かれており、十八道立になつてゐる。（『仏書』七・五〇七―五〇八頁、『大藏』三四二頁）

188 『金剛童子持念經』一卷（『大正』二一・一三三b・No. 一二二四、失訳）金剛童子法すなわち金剛童子に供養する修法を説く。（『仏書』三・四九八頁、『大藏』三四一頁）

192 『胎藏教法金剛名号』一卷 義操（『大正』一八・二〇三b・No. 八六四『両部金剛名号』）『大正藏』には二卷が収録されている。青本以外の諸本はこの書目を欠く。『大日經』の胎藏界と『金剛頂經』の金剛界の両部諸尊の名号を羅列したもので、全体で二二九尊の尊名が挙げられており、灌頂を行う大阿闍梨にとって必要な書である。（『仏書』一一・二四六頁、『大藏』二五五頁）

213 『梵語千（字）文』一本 義浄（『大正』五四・一一九〇a・No. 二一三三）青本は「字」を欠くが誤りである。また、青本以外の諸本はこの書目を欠く。漢字千語と対応する梵語とを対比したもので、梵字初学者のための書物である。（『仏書』一〇・二一八頁、『大藏』六二八頁）

283 『梵字持世陀羅尼』一本（『大正』二〇・六六六c・No. 一一六二、玄奘訳『持世陀羅尼經』）世尊が憍餉弥国の建磔迦林にて、貧困や疾病から離れる手段を問うた長者の妙月に持世陀羅尼を教示する内容である。（『仏書』四・二九八頁、『大藏』三二八頁）

336 『大慈大悲救苦觀世音自在菩薩廣大円満無礙自在青頸大悲心真言一卷』（『大正』二〇・四九八c・No. 一一一三B『大慈大悲救苦觀世音自在王菩薩廣大円満無礙自在青頸大悲心陀羅尼』）雜密に属する青頸法の仏典で、

冒頭に梵字・音訳の順で陀羅尼を挙げて解説し、最後に青頸大悲心印を挙げている。『仏書』七・二五一頁、  
『大蔵』三一八頁)

337 『大随求陀羅尼經』二卷上下 (『大正』二〇・六一六 a・No. 一一五三) 『普遍光明清淨熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼經』義操訳、海雲筆受) 青本以外の諸本はこの書目を欠く。世尊が須弥山頂の樓閣にて大

随求陀羅尼などの陀羅尼とその聴聞の効能、受持読誦の利益、書写携帯の功德を説く。『仏書』九・二三四頁、  
『大蔵』三二六頁) 同名の書目として、『普遍光明大随求陀羅尼經』二卷 (『新求目録』<sup>342</sup>) が見られる。

343 『阿密哩多軍荼利法』一卷 (『大正』二一・四九 b・No. 一二二二) 『西方陀羅尼藏中金剛族阿密哩多軍吒利法』  
甘露軍荼利明王を本尊とする諸の成就法が主として説かれ、一卷二十二章より成る。『仏書』四・二〇頁、  
『大蔵』三三八頁)

346 『仏頂尊勝陀羅尼別法』一卷 龜茲国僧着那訳 (『大正』一九・三九六 b・No. 九七四 F) 訳者名は『大正蔵』  
によると、「若那」である。訳者若那が崇福寺僧普能のために口述したもので、画像法、造壇法、三十八種類  
の成就法が明らかにされている胎金合行の尊勝法である。『仏書』九・三二六頁、『大蔵』二八六頁)

350 『摩醯首羅天王法』一卷 (『大正』二一・三三九 c・No. 一二七九) 『摩醯首羅天王法要』 摩醯首羅天 (大自在  
天) の鬚より伎芸天女が現れ、真言、画像法や印契、功德などを説く。『仏書』一〇・二七八頁、『大蔵』三  
五二頁)

361 『阿字観門』一卷 沙門惟謹述 (『大正』一八・一九三 a・No. 八六三) 『大毘盧遮那經阿闍梨真實智品中阿闍梨  
住阿字観門』 『大日經』阿闍梨真實智品第十六に説かれる阿字観門の實踐と功德について、『大日經疏』 (『大  
毘盧遮那成仏經疏』、『大正』三九・五七九 a・No. 一七九六) に基づき詳述している。『仏書』七・四四二頁、  
『大蔵』二五五頁)

371 『大毗盧遮那成仏神變加持經』七卷無畏又有二卷 (『大正』一八・一 a・No. 八四八、善無畏口説、一行筆記)

本書は全体で七卷三十六章よりなる。教主大日如来が広大金剛法界宮を説法の座として、真言密教の諸の実践行などについて説く。胎藏界の根本經典である。天台宗・真言宗において重要な經典である。『仏書』七・四四六―四四七頁、『大藏』二二五〇頁)

376 『梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品』一卷 極略本 『大正』(二四・九九七a・No.一四八四)には鳩摩羅什訳が二巻収録されている。大乘菩薩戒の根本經典である。教主盧舍那報身が、上巻において菩薩の階位(四十八法門品)、下巻で十重四十八輕戒相を細かに説明している。『仏書』一〇・二二八頁、『大藏』四〇一頁)本書はその極略本である。

377 『曹溪山第六祖惠能大師説見性頓教直了成仏決定無疑法宝記檀經』一卷 門人法海訳(『大正』四八・三四五b・No.二〇〇八、法海集『南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經六祖慧能大師於韶州大梵寺施法寶壇經』)「門人法海」を高本、『大正藏』本は「沙門入法」とする。『大正藏』によると法海が正しい。六祖慧能(六三八―七一三)が韶州(現広東省韶關市)大梵寺において行つた説法を門人の法海が編集したもので、『大正藏』には現存最古の『六祖壇經』が収録されている。『仏書』八・二八七―二八八頁、『大藏』五九七頁)

379 『維摩經疏』一卷 豫洲刺史楊敬之撰 本書は鳩摩羅什訳『維摩經』(『大正』一四・五三七a・No.四七五)の注釈であり、本書は多数存在する注疏のうちの一つである。撰者である豫洲(現河南省汝南県)刺史楊敬之(―八三五―)は、『巡礼記』会昌五年(八四五)五月十五日条に、「大理卿中散大夫賜紫金魚袋楊敬之、曾任二御史中丞。令二專使來問一何日出城、取三何路去。兼賜三团茶。」(小野四、一四三頁)とあり、円仁が長安を去るに際して使者を派遣しており、円仁との交流が見られる。『新唐書』卷一六〇に官僚としてその名が見える。また、『宋高僧伝』卷六、知玄伝(『大正』五〇・七四三c・No.二〇六一)に、「有二三楊茂孝一者、鴻儒也。就<sub>レ</sub>玄尋究二内典一。」と見え、同じく長安にて円仁と親交があった僧侶知玄(八〇九?―八八二)から經典を学んでいたことが窺え、『維摩經』にも造詣があったものと見られる<sup>33</sup>。

- 380 『翻梵語』一卷（『大正』五四・九八一a・No.二一三〇、十卷） 著者は梁代の宝唱（生没年不詳）である。七十三篇からなり、諸仏典から梵語音写語句を抜き出し、項目別に分類して略解した梵語字書である。（『仏書』一〇・二一三頁、『大蔵』六二七―六二八頁）
- 382 『華嚴經疏』二十卷（澄觀撰、『大正』三五・五〇三a・No.一七三五『大方広仏華嚴經疏』）本書は複数の撰者が存在する。澄觀（七三八―八三九）撰は『大方広仏華嚴經』（『大正』一〇・一a・No.〇二七九）を随文解釈したものである。（『仏書』三・二二頁、『大蔵』四九二頁）
- 392 『安樂集』一卷 沙門道綽撰（『大正』四七・四a・No.一九五八）『大正蔵』によると二卷からなる。中国浄土教第二祖の道綽（五六二―六四五）が自らの信仰を告白し、一代仏教を聖道門と浄土門に二分したもので、構成は十二大門三十八番の章節からなっている。末法時代において念仏の教えを宣揚しており、この聖浄二門判は、法然に引用され注疏が多く後世への影響が大きい書物である。（『仏書』一・八二頁、『大蔵』五七九―五八〇頁）
- 397 『浄土法事讃』二卷 善導和尚撰（『大正』四七・四二四b・No.一九七九） 高本は「土」を「王」とし、青本、高本は「導」を「道」とする。上巻の巻名は『転経行道願往生浄土法事讃』、下巻は『安樂行道転経願往生浄土法事讃』である。『阿弥陀経』（『大正』一一・三四六b・No.三六六）を転経し散華供養と旋繞行道をもつて、願生浄土を成就すること趣旨として記されている。（『仏書』一〇・九七―九八頁、『大蔵』五八五頁）
- 398 『百法論顕幽抄』十卷 沙門従方述（『続蔵経』一・八七・二『大乘百法明門論顕幽抄』） 本書は断片的に現存しており、『百法論』の注釈書として知られる中で最大のものである。『百法論』の注釈書というより、複註というべきものとされる。（『仏書』七・三三二頁）
- 399 『大乘百法明門論疏』一卷 沙門忠撰 「忠」を活字本は「義忠」とする。義忠は潞府襄垣（現山西省长治市）の人、『百法』など諸經に通じていた唐代の僧侶であることが知られる。（『仏書』七・三三二頁） 398の書物と



類いの『百法論』の注釈書であろうか。

- 404 『因明入正理論疏』三卷 沙門基撰（『大正』四四・九一b・No.一八四〇） 基（六三二―六八二）が勝羯羅  
主著『因明入正理論』（『大正』三二・一一a・No.一六三〇）を注釈したものである。中国・日本における因  
明研究の祖典とされ、『因明大疏』ともいわれる。（『仏書』一・一九六頁、『大藏』四五八頁）

- 406 『因明義断』一卷 沙門慧沼撰（『大正』四四・一四三a・No.一八四一） 本書は慧沼（六五〇―七一四）に  
よって著された他の因明学説批判の論である。因明説確立の書とされ、404の『因明入正理論疏』に次いで尊重  
される。（『仏書』一・一八三頁、『大藏』五三五頁）

- 412 『因明正理門述記』一卷 沙門勝莊述 池田本は「門」の下に「論」を加える。類いの書目として『大正』四  
四・七七a、No.一八三九に神泰（―六六五―）述『因明正理門論述記』がある。

- 415 『因明義心』一卷 本書は現存していないが、唐代の道献述とされ、藏俊の『因明大疏抄』（『大正』六八・四  
三七a・No.二二七二）に援引されている。（『仏書』一・一八三）

- 421 『宗四分比丘随門要行儀』一卷（『大正』八五・六五四a・No.二七九一『宗四分比丘随門要略行儀』） 本書は  
敦煌出土本が現存している。『十誦律』（『大正』二三卷・一a・No.一四三五）、『五分律』（『大正』二二・一a  
・No.一四二一）、『摩訶僧祇律』（『大正』二二・二二七a・No.一四二五）と並ぶ四大広律の一つである、インド  
小乗二十派中曇無徳部（法蔵部）の『四分律』（『大正』二二・五六七a・No.一四二八）六十巻に基づき、比丘  
の行儀の要略が示されている。比丘二百五十戒、比丘尼三百四十八戒を数えている。（『仏書』五・一二六頁、  
『大藏』八二〇頁）

- 422 『大般若波羅蜜經開題』一卷 本書は、玄奘訳『大般若波羅蜜經』六百巻（『大正』五・一a・No.二二〇）の  
開題である。

- 427 『華嚴經法界觀門』一卷 京南山沙門杜順撰 『大正藏』には、宗密（七八〇―八四一）注『註華嚴法界觀門』

（『大正』四五・六八三b・No.一八八四）があり、『華嚴經法界觀門』に対する注釈か。宗密の注では、華嚴法界の觀法が述べられ、一に真空觀、二に理事無礙觀、三に周徧含容觀の三重二十八種が記されている。（『仏書』八・四五—四六頁、『大藏』五五〇—五五一頁）

432 『南陽和尚問答雜徵義』一卷 劉澄集 書名の「徵」を青本は「微」とし、人名を高本は「劉證」、活字本は「劉澄」とする。敦煌出土本（S六五五七）の卷首に「唐山主簿隆澄」の序があり、標題は『南陽和尚問答雜徵義』とある。荷沢神会撰『神会語録』の古型とされ、本書の写本は他に敦煌本P三〇四七、旧石井光雄所藏本が知られるが、S六五五七が最古とされる。（『禅学大辞典』九七四—九七五頁）

442 『徵心行路難』一卷 「徵」を青本は「微」とするが、本書は敦煌出土本（スタイン六〇四二）が存在しており、「徵」と確定できる。定格聯章の歌曲の一種である。作者については諸説ある。（『禅学大辞典』八六四頁）

451 『百司挙要』一卷 この書目から477「白家詩集六卷」まで外典が並ぶ。以下、外典については神田喜一郎氏<sup>34</sup>及び牧田諦亮氏の考証<sup>35</sup>に依って紹介したい。本書は、『新唐書』卷五十八、芸文二、史部職官類に「李吉甫元和百司挙要」（中華書局、一九六六年、一四七八頁）とあり、唐憲宗朝の宰相李吉甫（七五八—八一四）によって唐代の官制を簡略に記述したものであるとされている。王溥撰『唐会要』中・卷三十六にも、「（元和）八年二月、宰臣李吉甫撰、元和郡国三十卷、百司挙要一卷成。」（中華書局、一九五五年、六六一頁）とある。青本には「進官了」とあり、帰国後朝廷に献上された書であることが分かる。

452 『兩京新記』三卷 『新唐書』卷四十八、芸文二、校勘記、史部地理類に「韋述兩京新記五卷」（中華書局、一九七五年、一五〇七頁）とあり、撰者は唐の歴史家・韋述（—七五七）であり、五卷のうち三卷を将来したことが窺える。開元十年（七二二）に成立し、東西兩京すなわち長安城と洛陽城の地誌である。中国では明清時代に散逸したとされるが、日本では前田尊經閣に鎌倉初期の写本である金沢文庫本（残卷）が伝来しており、唐代の長安・洛陽研究における一次史料とされる。<sup>36</sup> 円仁が在唐生活において必要な書として購入したものと推測さ

れる。これも青本には「進官了」とあり、高本には「依三藏人所宣付三太宰野小貳進上已了。」とあり、太宰野小貳に進上されたことが窺える。

454 『皇帝拝南郊儀注』一卷 神田氏の指摘にあるが、その題名から窺えるように皇帝が長安城南門外の南郊壇を拝する際の儀式について記されたものであると考えられる。『巡礼記』開成六年（八四一）正月八日、新年を迎えるに際して武宗が行幸したことが記録されている（小野三、三三八頁）。

455 『丹鳳樓賦』一卷 神田氏は、丹鳳樓すなわち長安東内大明宮の正門の門樓を詠じた詩としている。『巡礼記』開成六年（八四一）正月九日条には、武宗が丹鳳門の門樓にて年号を會昌元年に改めたという記述が見られる（小野三、三三八頁）。

456 『曹溪禪師証道歌』一卷 貞覺述 高本、池田本、活字本は「貞」を「真」とするが、この人名については未詳である。曹溪六祖大師慧能（六三八―七一三）に関する詩篇であると考えられる。

461 『利涉法師与韋珽論』一卷 牧田諦亮氏の考証<sup>37</sup>によると、長安大安国寺の利涉（一六四五―）と進士韋珽、道士葉靜能をめぐる三教論争において、利涉が韋珽を論破した際の書であり、韋珽は韋珽の誤写であると見られている。『宋高僧伝』卷十七・護法篇第五に唐京兆大安国寺利涉伝（『大正』五〇・八一五a・No.二〇六一）があり、護法の高僧の一人に数えられている。この伝記には、「利涉者、本西域人也。即大梵婆羅門之種姓。」とあり、利涉はインドのバラモン階級出身であった。<sup>38</sup>

466 『京兆府百姓索隱微上表論釈教利害』一卷 「索」の上に池田本、活字本は「素」を加える。「隱」を『大正藏』本は欠く。また、「微」を高本、『大正藏』本は「微」とする。この書目は他に見えず考察を要する。牧田氏の考証によると、中国社会における仏教の害を説いた書物であると見られる。

477 『白家詩集』六卷 神田氏の考証にある通り、白家すなわち白居易（七七二―八四六）の詩集であり、当時長安においても流布していたのであろう。

501 「青龍寺(義)真和尚真影」一鋪 一幅彩色 高本、池田本、『大正藏』本は「真」の上に「義」を補い「義真」とする。義真(七八一—八三三)は、『巡礼記』によると長安青龍寺の東塔院に住していた僧侶であり、円仁は会昌元年(八四一)五月三日、義真より灌頂を受け、胎藏毘盧遮那經大法と蘇悉地大法を受けている。『巡礼記』開成四年(八三九)二月二十五日の条に、「相見真言請益円行法師一、語云、(中略)於三義真座主所一、十五日受三胎藏法一。」(小野一、四二五頁)とあるのが初見であり、入唐真言僧円行(七九九—八五二)も義真より胎藏界を受法している。円行の『靈巖寺和尚請来法門道具目錄』に「其大德則惠果阿闍梨弟子、同門義操和尚付法之弟子也。」(『大正』五五・一〇七一c・No.二一六四)とあることから、惠果和尚(七四六—八〇五)の法孫であり、義操(一八二一)の弟子であることが分かる。円仁は長安滞在中の会昌元年(八四一)四月二十八日から三十日にかけて、胎藏・金剛兩部曼荼羅の描画に際して義真の助力を得ており、五月三日の条には青龍寺の勅置本命灌頂道場にて「受三灌頂一拋レ花、始受三胎藏毗盧遮那經大法、兼蘇悉地大法一。」(小野三、三九三—三九四頁)とあり、義真より胎藏界ならびに蘇悉地界大法を受けている。

502 「壇龕涅槃浄土」一合 本目錄には504まで三点の壇龕が並んでいるが、牧田氏の考証によると枕本尊の類であり、涅槃浄土の様子が刻まれた檀木であると見られる。<sup>39)</sup>

503 「壇龕西方浄土」一合 これも西方浄土の様子が刻まれた檀木であると考えられる。

504 「壇龕僧伽誌公万迴三聖像」一合 三聖像すなわち泗州大師僧伽和尚(六二九—七一〇)と宝誌和尚(四二五—五一四)、万廻和尚(六三二—七一)の姿を刻んだものであり、觀世音菩薩の応化として信仰されていたと見られる。

泗州(現安徽省盱眙県)大聖僧伽和尚(一七一〇)は十一面觀世音菩薩の応化身とされ、淮水における水路安全の守り神として民間に信仰されていたと見られる。この僧伽和尚は、『巡礼記』開成五年(八四〇)三月七日条に登州(現中国山東省煙台市)開元寺にて「寺仏殿西廊外僧伽和尚堂内北壁上、画三西方浄土及補陀落浄土

一。」(小野二、二七七頁)とあり、僧伽和尚堂の壁に阿弥陀仏の西方浄土、観音菩薩を中心とした補陀落浄土が描かれていることを記している。

### (ロ) 五台山求得

次に、五台山求得の仏典のうち、現存するものを中心に見ていく。

513 『無諍三昧法門』二卷(慧思述、『大正』四六・六二七c・No.一九二三) 四念処観(身は不浄、受は苦、心は無常、法は無我と観じる)を中心とした禅定観を述べたものである。(『仏書』五・二八一頁、『大蔵』五六三

頁)

515 『小止観』一卷 下巻 天台大師撰(『大正』四六・四六二a・No.一九一五『修習止観坐禅法要』) 天台大師

智顗(五三八―五九七)が俗兄の陳鍼のために坐禅止観実修の手引き書として著した書である。(『仏書』五・二九一頁、『大蔵』五六〇頁)

518 『涅槃經玄義文句』一卷(『卍統蔵経』一・五六・二) 二巻から成る。唐の道暹述とされ、隋の章安灌 頂(五六―一六三二)の『大般涅槃經玄義』(『大正』三八・一a・No.一七六五)に簡潔な解釈を加えたものである。(『仏書』七・四二七頁)

519 『六妙門文句』一卷 釈上官疏 天台智顗によって隋の光大元年(五六七)―太建七年(五七五)の間に『六妙法門』(『大正』四六・五四九a・No.一九一七)が著されているが、これは天台智顗が南岳慧思より伝えられた三種の止観(漸次止観・不定止観・円頓止観)のうち、不定止観について説いたものである。真人元開(淡海三船、七二二―七八五)が宝龜十年(七七九)に撰した『唐大和上東征伝』(慧超記『遊方記抄』往五天竺国伝、『大正』五一・九八八a・No.二〇八九)によると、鑑真和上将来品の中に「天台止観法門、玄義文句各十巻、四教儀十二巻、次第禅門十一巻、行法華懺法一卷、小止観一卷、六妙門一卷」(九九三a)とあり、『六

妙門』の日本への伝来は天平勝宝五年(七五三)の鑑真(六八八―七六三)によるものであり、「釈上官疏」はおそらく聖徳太子の疏を中国で釈したものではないであろうか。

521 『勝鬘經疏義私抄』一卷(『卍統藏經』一・三四・四、『大日本仏教全書』四・『勝鬘經疏義私鈔』) 高本、『大

正藏』本以外の諸本は「私」を「和」とするが誤りである。高本は「尺上官疏」を補う。推古十九年(六一一)に、聖徳太子(五七三―六二一)によって求那跋陀羅訳『勝鬘經』(『大正』一二・二一七a・No.三五三)の注釈として『勝鬘經義疏』(『大正』五六・一a・No.二一八五)が著されている。『勝鬘經疏義私鈔』の序文によると、「其疏唐大曆七年、日本国僧使誠明得清等八人、兼三法華疏四卷、将ヨ来揚州、与ニ龍興寺大律師梨靈祐一。」とあり、唐大曆七年(七七二)に誠明・得清らによって聖徳太子の撰述書が揚州にもたらされたことが分かる。これについて唐僧明空がさらに注釈を加えたものが本書であろう。明空は、中国天台宗第六祖荆溪大師湛然(七一―七八二)の弟子とされる(『仏書』五・三六〇頁)が、湛然門人説は疑問視されている。<sup>40</sup>

528 『随自意三昧』一卷 臺山構波(『卍統藏經』二・三・四所収) 「構波」の二字は諸本において異同が見ら

れる。本書は南岳慧思の述作であり、「随自意三昧」とは、『摩訶止観』に説かれる四種三昧の一つである非行非坐三昧を指す。初心の菩薩が六波羅蜜を修学する際禅定を根本とすべきであり、この禅を修するには行住坐臥の四威儀と食・語の威儀に禅定ならびに六度の行儀に工夫すべきことを述べている。(『仏書』六・二七八頁)

530 『皇帝降誕日於麟德殿講大方広仏華嚴經玄義』一卷(静居撰、『大正』三六・一〇六四c・No.一七四三) 唐

貞元八年(七九二年)、大安国寺の僧侶静居が徳宗皇帝(七四二―八〇五)の降誕日に麟德殿にて八十卷『華嚴經』の綱要を進講するに際して、それを書き留めたものである。八十卷『華嚴經』の概要を知るための手引き書とされる。(『仏書』三・二四五頁、『大藏』四九七頁)

532 『浄土五会念仏略法事儀讃』一卷 南岳沙門法照述(『大正』四七・四七四c・No.一九八三) 本書は、広法事讃とされている法照撰『浄土五会念仏誦經観行儀』三卷(『大正』八五・一二四二c・No.二八二七)に対して、

略式の五会念仏の行儀作法を記した書物であり、『五会法事讃』、『略法事讃』ともいわれる。序文と本文の二部に分かれ、序文で述作の意図が述べられ、本文では五会念仏の利益・由来・出典・実践法などが挙げられるとともに、三十七種の讃文が列記されている。（『仏書』六・六九頁、『大蔵』五八六頁）

法照禪師（一七六六―）は、『宋高僧伝』感通篇（『大正』五〇・八四四a・No.二〇六一）・唐五台山竹林寺法照伝、『広清涼伝』巻中・法照和尚入化竹林寺（『大正』五一・一一〇九b・No.二〇九九）などにその名が見える。円仁が求法した五台山大聖竹林寺を創建した僧侶であり、大暦末年（七七九）あるいは貞元時代に長安章敬寺の浄土院にて五会念仏を修し、この頃に本書が著されたと見られている（小野二、四三二頁）。法照が創始した五会念仏は円仁によって日本にもたらされ、五会の音曲は天台声明の源流となり、またその念仏は比叡山の浄土教にも大きな影響を及ぼした。

535 『荊溪和上在仏隴無常遺旨』一卷 「仏隴」を青本は「仙龍」とし、その他諸本にも異同が見られる。おそらく中国天台山の仏隴道場を指しており、高本、『大正蔵』本が正解であろう。荊溪大師湛然が仏隴道場にて遺言した書と見られる。

## （ハ）揚州求得

次に、揚州求得の一覧を見ていくが、書目の多くは「承和五年目録」と重複しており、前節で紹介した書目の内容については省略する。

582 『唐梵両字一切仏心中（心）真言』一本 高本以外の諸本は「中」の下「心」を欠くが、「承和五年目録」も『一切仏心中心経』としている（「承和五年目録」2）。

588 『唐梵対訳普賢行願讃』一本 青本は「願」を「印」とする。「新求目録」105『普賢菩薩行願讃』（『大正』一

○・八八〇a・No.二九七)の唐梵対訳版であろう。

590 『唐梵両字大仏頂結護』一本 『日仏全』本は「護」を「讚」とする。『八家秘録』(『大正蔵』五五卷・一一八b)も「護」とする。天台僧明覚(一〇五六―?)撰『悉曇要訣』(『大正』八四・五〇一a・No.二七〇六)にも「大仏頂結護」(五一〇c)と見えることから、「讚」は誤りであると思われる。

611 『浄名経集解関中疏』四卷 資聖寺道液集 長安資聖寺の「資」を高本、『大正蔵』本は「賢」とするが誤りである。「承和五年目録」65においても異同が見られる。

612 『浄名経関中疏釈微』二卷 中条山沙門契甚述 「条」を高本、活字本は「修」とし、『大正蔵』本、『在唐送進録』52は「甚」を「真」とする。「承和五年目録」66の諸本も青本と同様の記載であり、青本の記載で確定できるであろう。

617 『肇論略出要義兼注附焉并序』一卷 沙門靈興撰 青本は「序」を「辱」とし、池田本及び『日仏全』本は「得」とするが、「承和五年目録」71も「序」としており、「辱」は「序」の誤りであろう。『肇論』一卷(『大正』四五・一五〇a・No.一八五八)の要点をまとめたものか。

626 『五方便念仏門』一卷 智者大師作(智顗撰、『大正』四七・八一c・No.一九六二) 「作」を高本、『大正蔵』本は「述」とする。五種の念仏する方法、すなわち一称名念仏往生門、二観相滅罪門、三諸境唯心門、四心境俱離門、五性起円通門を説き、また五種の諦観禪なども示し、華嚴的色彩が強く八世紀以後の偽撰と見られている。(『仏書』三・二七九頁、『大蔵』五八〇頁)

629 『釈門自鏡録』五卷 僧恵行集(『大正』五一・八〇二a・No.二〇八三、懷信述『釈門自鏡録』) 「恵行」を高本、『大正蔵』本は「恵詳」とするが、この僧侶については未詳である。

636 『量処軽重義』一卷 道宣(『大正』四五・八三九b・No.一八九五、道宣緝『量処軽重儀』) 青本は「軽重」を「重軽」とするが、『大正蔵』によると「軽重」と確定できる。



653 『感通伝』一卷 道宣（『大正』四五・八七四a・No.一八九八『律相感通伝』）唐乾封二年（六六七）に道宣（五九六―六六七）が著したものであり、律に関することなどを天人との問答体によって記し、仏教文物に関する記述も見られる。（『仏書』一一・二二〇頁、『大蔵』五五四頁）道宣に関する書物は、『新求目録』に668『唐故終南山靈感寺大律師道宣行記』、669『大唐西明寺故大德道宣律師讚』一卷がある。

659 『集新旧斎文』五卷 上都雲花寺詠字太 「新」を『日仏全』本は「雑」とするが、「承和五年目録」113の諸本も青本と同様の記述であり、「新」と確定できる。「花」を高本、『大正蔵』本以外の諸本は「光」とする。

智証大師円珍（八一四―八九一）の『福州温州台州求得經律論疏記外書等目録』（『大正』五五・一〇九四c・No.二一七〇）、『日本比丘円珍入唐求法目録』（『大正』五五・一一〇一b・No.二一七二）に『上都雲華寺十大弟子讚』が見えている。『長安志』巻九に引用される『西陽雜俎』によると、隋代に大慈寺と称していたが大曆初（七六六）に雲花寺と改められたとあり、「雲花寺」と確定できる。<sup>41</sup>

701 「大聖僧伽和尚影」一張 苗 僧伽和尚信仰については504「壇龕僧伽誌公万迴三聖像一合」で触れたが、この真影は揚州においても信仰されていたことを伝えている。

702 「舍利五粒 菩薩舍利三粒辟支佛舍利二粒盛白蠟小合子并安置白石壺子一口」 「蠟」を池田本、『日仏全』本は「錯」とするが誤りである。

(4) 付表「円仁三目録揚州将来物対照表」

本章の最後に、『承和五年目録』、『在唐送進録』、『新求目録』の比較対照を行った表を掲載する。

凡例

- 一、この表は青蓮院本『日本国承和五年入唐求法目録』、『慈覚大師在唐送進録』、『入唐新求聖教目録』の翻刻に基づき、三目録に共通する揚州求得の将来物を対比したものである。
- 一、青蓮院本における異体字、旧字は常用漢字を用いて表し、誤字や欠字は原文通りに記載した。
- 一、三目録間で書目の順番が異なる箇所は、『承和五年目録』の記載順に従った。
- 一、巻数、訳者・撰者名などは省略し、将来物名のみ記した。

番号	1	2	3	4	5	6	7
『日本国承和五年入唐求法目録』	大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經 一切仏心中心經	宝星經略述二十八宿佐盧瑟吒仙人經 陀羅尼集要經	蘇摩呼童子請經 新訳般若心經	阿利多軍荼利護国自在拔折羅摩訶布陀羅金神 力陀羅尼			
『慈覚大師在唐送進録』	大吉祥天女經 一切仏心中心經	宝星經略述二十八宿佐盧瑟吒仙人經 梵漢陀羅尼集要經	蘇摩呼童子經 新訳般若心經	梵漢兩字阿密利多軍荼利大神力陀羅尼			
『入唐新求聖教目録』	大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經 一切仏心中心經	宝星經略述二十八宿佐盧瑟吒仙人經 陀羅尼集要經	蘇摩呼童子請經 新訳般若心經	仏説阿利多軍荼利護国自在拔折羅摩訶 布陀羅金剛大神力陀羅尼			

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
大元阿吒薄句無辺甘露降伏一切鬼神真言	最上乘教授戒懺悔文	仏頂尊勝陀羅尼注義	金剛頂經瑜伽十八会指帰	修真言三昧四時札懺供養儀要	阿闍如来念誦供養法	出中印契別行法門	大仏頂如来蜜因修証了義諸菩薩万行品灌頂部録	葉衣觀自在菩薩法	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法	如意輪菩薩真言注義	觀自在如意輪菩薩瑜伽法要	金剛頂勝初瑜伽經中略出大藥金剛薩埵念誦儀	普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌	觀自在菩薩如意輪念誦儀軌	金剛頂蓮花部心念誦儀軌
鬼神真言	梵漢兩字大元阿吒薄句無辺甘露降伏一切	梵漢兩字最上乘教授戒懺悔文	梵漢兩字仏頂尊勝陀羅尼注義	修真言三昧四時札懺供養儀要	梵漢兩字阿闍如来念誦供養法	十八会指帰	大仏頂如来灌頂部録中出印契別行法門	梵漢兩字葉衣觀自在菩薩法	金剛頂千手千眼觀自在菩薩念誦法	梵漢兩字如意輪菩薩真言注義	梵漢兩字觀自在如意輪菩薩瑜伽法要	梵漢兩字金剛頂勝初瑜伽經中略出大藥金剛薩埵儀軌	五秘密儀軌（別物）	梵漢兩字普賢金剛薩埵念誦儀軌	梵漢兩字千手千眼觀自在菩薩修行儀軌	（觀自在菩薩如意輪念誦儀軌）
太元阿吒薄句無辺甘露降伏一切鬼神真言	最上乘教授戒懺悔文	仏頂尊勝陀羅尼注義	金剛頂經瑜伽十八会指帰	修真言三昧四時札懺供養儀要	阿闍如来念誦供養法	頂部録出中印契別行法門	大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行品灌	葉衣觀自在菩薩法	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法	如意輪菩薩真言注義	觀自在如意輪菩薩瑜伽法要	金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌	普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌	觀自在菩薩如意輪念誦儀軌	金剛頂蓮花部心念誦儀軌

43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
梵漢兩字大仏頂根本讃	梵漢兩字普賢行願讃	梵漢兩字秘密心中心真言	梵漢兩字秘密心真言	梵漢兩字結界真言	梵漢兩字灌頂真言心中心真言	梵漢兩字灌頂真言	梵漢兩字一切仏心中心真言	梵漢兩字一切仏心真言	梵漢兩字青頸大悲真言	梵漢兩字不空羂索真言	梵漢兩字最勝無垢清淨光明大陀羅尼	梵漢兩字般若心經	梵漢兩字阿弥陀經	梵漢兩字金剛般若經	梵漢兩字大毗盧遮那經字輪品悉曇	大藥金剛不空真実三昧耶經般若波羅密多理趣積	施燄面一切餓鬼食陀羅尼法	火壇供養及供養十天法
梵漢兩字大仏頂根本讃等諸雜讃	梵漢対訳普賢行願讃	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	梵漢兩字青頸大悲真言	梵漢兩字不空羂索真言	梵漢兩字無垢淨光真言	梵本般若心經（別物）	梵漢対訳阿弥陀經	金剛般若波羅密經・金剛般若波羅密經	なし	般若理趣積經（別物）	施燄面一切餓鬼食陀羅尼	梵漢兩字火壇供養及供養十天法
唐梵兩字大仏頂根本讃	唐梵対訳普賢行印讃	唐梵兩字秘密心中心真言	唐梵兩字秘密心真言	唐梵兩字結界真言	唐梵兩字灌頂心中心真言	唐梵兩字灌頂心真言	唐梵兩字一切仏心中真言	唐梵兩字一切仏心真言	唐梵兩字青頸大悲真言	唐梵兩字不空羂索真言	唐梵兩字最勝無垢清淨光明大陀羅尼	唐梵対訳般若心經	唐梵対訳阿弥陀經	唐梵対訳金剛般若經	なし	理趣積	大藥金剛不空真実三昧耶經般若波羅密多	（火壇供養十六法） 施燄面一切餓鬼食念陀羅尼法

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44
梵漢兩字金剛經論頌	梵漢兩字釈迦如来涅槃後弥勒菩薩悲願讚	梵漢兩字毗盧遮那仏神変加持経吉慶伽陀讚	梵漢兩字満願讚	梵漢兩字地藏菩薩讚	梵漢兩字除蓋障菩薩讚卷	梵漢兩字普賢菩薩讚	梵漢兩字文殊師利菩薩讚	梵漢兩字金剛藏菩薩讚	梵漢兩字虚空藏菩薩讚	梵漢兩字観自在菩薩讚	梵漢兩字慈氏菩薩讚	梵漢兩字弥勒菩薩讚	梵漢兩字送本尊帰本土讚	梵漢兩字百字讚	梵漢兩字天龍八部讚	梵漢兩字大随求結讚	梵漢兩字大随求大結讚	梵漢兩字大仏頂結讚
梵漢対訳金剛經論頌	梵漢兩字釈迦如来涅槃後弥勒菩薩悲願讚	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
唐梵対訳金剛般若經論頌	唐梵兩字釈迦如来涅槃後弥勒菩薩悲願讚	陀讚	唐梵兩字満願讚	唐梵兩字地藏菩薩讚	唐梵兩字除蓋障菩薩讚	唐梵兩字普賢菩薩讚	唐梵兩字文殊師利菩薩讚	唐梵兩字金剛藏菩薩讚	唐梵兩字虚空藏菩薩讚	唐梵兩字観自在菩薩讚	なし	唐梵兩字弥勒菩薩讚	唐梵兩字送本尊帰本土讚	唐梵兩字百字讚	唐梵兩字天龍八部讚	唐梵兩字大随求結讚	唐梵兩字大随求大結讚	唐梵兩字大仏頂結讚

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63
観心遊心口決記	五方便念仏門	智者大師修三昧常行法	劫章科文	劫章煩記	劫章煩疏	劫章煩	因明入正理義纂要	因明義斷	因明採抄	肇論略出要義兼注附焉并序	肇論文句図	肇論抄	肇論略疏	法華經銷文略疏	浄名経関中疏釈微	浄名集解関中疏	浄名経記	梵漢両字法華二十八品題目兼諸羅漢名	なし
なし	五方便念仏門	智者大師修三昧常行之法	劫章科文	劫章煩記	劫章煩疏	劫章煩	因明入正理論義纂要	因明義斷	(因明採抄)	依肇論略出要義	肇論文句図	肇論抄三卷	肇論疏	なし	浄名経関中疏釈微	なし	浄名経記	梵漢両字法花経品題梵語兼諸羅漢名	梵漢両字蓮花讃
観心遊心口決記	五方便念仏門	智者大師修三昧常行法	劫章科文	劫章煩記	劫章煩疏	劫章煩	因明入正理義纂要	因明義斷	因明採抄	肇論略出要義兼注附焉并序	肇論文句図	肇論抄	肇論略疏	法花経銷文略疏	浄名経関中疏釈微	浄名集解関中疏	浄名経記	唐梵対訳法花二十八品題目兼諸羅漢名	(梵漢両字蓮花部讃)

101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90		89	88	87	86	85	84	83
四 条 式 并 大 小 乘 戒 決	梵 語 雜 名	隋 廬 山 遺 愛 寺 慧 珙 禪 師 念 仏 三 昧 指 帰	大 乘 楞 伽 正 宗 決	最 上 乘 仏 性 歌	受 菩 薩 戒 文	諸 天 地 獄 寿 量 分 限	説 罪 要 行 法	略 羯 磨	羯 磨 文	量 処 重 輕 儀	大 般 若 經 兼 二 十 九 位 法 門		鳩 摩 羅 法 師 隨 順 修 多 羅 四 悉 壇 義 不 墮 負 門	天 台 智 者 大 師 所 著 經 論 章 疏 科 目	法 花 三 昧 修 証 決	形 神 不 滅 論	觀 心 十 二 部 經 義	釈 門 自 鏡 録 五 卷	四 十 二 字 門 義
な し	梵 語 雜 名 (別 物)	隋 廬 山 遺 愛 寺 慧 珙 禪 師 念 仏 三 昧 指 帰	大 乘 楞 伽 正 宗 決	仏 性 歌	受 菩 薩 戒 文	諸 天 地 獄 寿 量 分 限	説 罪 要 行 法	略 羯 磨	羯 磨 文	量 処 重 輕 儀	大 般 若 經 開・二 十 九 位 法 門		な し	な し	持 法 花 經 三 昧 修 証 決	な し	な し	釈 門 自 鏡 録	四 十 二 字 門 義
四 条 戒 并 大 小 乘 戒 決	梵 語 雜 名	隋 廬 山 遺 愛 寺 慧 珙 禪 師 念 仏 三 昧 指 帰	大 乘 楞 伽 正 宗 決	最 上 乘 仏 性 歌	受 菩 薩 戒 文	諸 天 地 獄 寿 量 分 限	説 罪 要 行 法	略 羯 磨	羯 磨 文	量 処 重 輕 義	大 般 若 經 開 兼 二 十 九 位 法 門	門	鳩 摩 羅 什 法 師 隨 順 修 多 羅 四 悉 壇 義 不 墮 負	天 台 智 者 大 師 所 著 經 論 章 疏 科 目	法 花 三 昧 修 証 決	形 神 不 滅 論	觀 心 十 二 部 經 義	釈 門 自 鏡 録 五 卷	四 十 二 字 門 義

121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102
大唐大慈恩寺翻經大德基法墓誌銘并序	唐故大律師釈道円山龜碑并序	なし	唐故大広禪師大和楞伽峯塔碑銘并序	揚州東大雲寺演和上碑并序	歎道俗徳文	観法師奉答皇太子所問諸經了義并錢	集新旧斎文	内供奉談筵法師歎斎格并文	南荊州沙門無行在天竺國致於唐國書	上都清禪寺至演禪師鍾伝	大唐韶州双岑山曹溪宝林伝十卷	清涼山路伝	感通伝	法花靈驗伝	天台智者大師十二所道場記	智者暹松讃	天台略録	天台大師答陳宣帝書	南岳思禪師法門伝
なし	なし	なし	なし	揚州東大雲寺演和上碑	なし	観大師諸經了義	歎斎文	内供奉談筵法師歎斎格并文	荊州沙門無行和尚書	上都清禪寺至演禪師鍾伝	仏史宝林伝	清涼山路伝	感通伝	清涼山宋谷法師求法花三昧靈驗伝	なし	なし	なし	なし	南岳思禪師法門伝
大唐大慈恩寺翻經大德基法墓誌銘并序	唐故大律師釈道円山龜碑并序	唐揚州龍興寺翻經院故填律和上碑銘并序	唐故大広禪師大和楞伽峯塔碑銘并序	揚州東大雲寺演和上碑并序	歎道俗徳文	観法師奉答皇太子所問諸經与義并錢一	集新旧斎文	内供奉談筵法師難斎格并文	南荊州沙門無行在天竺國致於唐國書	上都清禪寺至演禪師鍾伝	大唐韶州双岑山曹溪宝林伝	清涼山路伝	感通伝	法花靈驗伝	天台智者大師十二所道場記	智者惕松讃	天台略録	天台大師答陳宣帝書	南岳思禪師法門伝



141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122
金剛界三十七尊種子曼荼羅樣	十七壇樣	供養賢聖等七種壇樣	金剛界大曼荼羅	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅	法華二十八品七言詩	詩集五卷	杭越寄和詩集并序	祝元膺詩集	なし	なし	なし	判一百条	祇對義	開元詩格	大唐新修定公卿士庶內族吉凶書儀	天台大師答陳宣帝書	大唐西明寺故大德道宣律師讚	唐故終南山靈感寺大律師道宣行記	大慈恩寺大法師基公塔銘并序
金剛界三十七尊種子曼荼羅	十七壇樣（別物）	護摩壇樣（別物）	金剛界大曼荼羅	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅	七言法花經詩五十七首	なし	杭越寄和詩并序	祝元膺詩	なし	なし	歎徳文	判一百条々別二道	祇對義	なし	なし	なし	なし	なし	なし
金剛界三十七尊種子曼荼羅樣	なし	供養賢聖等七種壇樣	金剛界大曼荼羅	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅	法花經二十八品七言詩	詩集五卷	杭越寄和詩集	祝元膺詩集	〔雜言〕	道情	歎徳文	判一百条	祇對義	開元詩格	大唐新修宣公卿士庶內族吉凶書儀	天台大師答陳宣帝書	大唐西明寺故大德道宣律師讚	唐故終南山靈感寺大律師道宣行記	大慈恩寺大法師基公塔銘并序

158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142
舍利五粒 三粒菩薩舍利盛瑠璃小瓶二粒支仏舎利盛白蠟小合子並納白石壺子	大聖僧伽和尚影	法惠禪師誦法花口放光照室宇影	道超禪師誦法花感二世弟子生処影	秦郡老僧教弟子感夢示宿因影	声影 惠向禪師誦法花滅後墓上生蓮花及墓裏常有誦經	定禪師誦法花天童給事影	映禪師誦法花善神來聽經影	惠斌禪師誦法花神人來拜影	山登禪師誦法花感金銀殿影	法惠和上闍王前誦法花影	阿蘭若比丘見空中普賢影	天台大師感得聖僧影	南岳思大師示先生骨影	胎藏曼荼羅手印樣	法花曼荼羅樣	金剛界八十一尊種子曼荼羅樣
	僧伽和上影	梁法惠禪師影	秦郡道超禪師影	秦郡東寺老僧影	惠向禪師影	梁江陽禪衆寺僧定禪師影	隋江陽永壽寺僧映禪師影	隋惠斌禪師影	梁注山登禪師影	梁法惠禪師影	阿蘭若比丘像	天台智者大師影	南岳思大師影	胎藏手印樣（別物）	法花曼荼羅位樣	金剛界八十一尊種子曼荼羅
白蠟小合子并安置白石瓶子一口	大聖僧伽和尚影	法惠禪師誦法花口放光照室宇影	道超禪師誦法花感二世弟子生処影	秦郡老僧教弟子感夢示宿因影	有誦經声影 惠向禪師誦法花滅後墓上生蓮花及墓裏常	定禪師誦法花天童給事影	映禪師誦法花善神來聽經影	惠斌禪師誦法花神人來拜影	山登禪師誦法花感金銀殿影	法惠和上闍王前誦法花影	阿蘭若比丘見空中普賢影	天台大師感得聖像僧影	南岳思大師和尚示先生骨影	胎藏曼荼羅手印樣	法花曼荼羅樣	金剛界八十一尊種子曼荼羅樣

(5) 『慈覚大師在唐送進録』のみ記載の将来物一覧表

凡 例

- 一、この表は青蓮院本『慈覚大師在唐送進録』に基づいて作成したものである。  
 一、青蓮院本における異体字、旧字は常用漢字に改めた。

番号	将来物の名称	数	撰者
1	法華經	一部八巻複一卷	
2	梵漢両字法花儀軌	一卷	
3	梵漢両字除壇上粉念比縁生偈讃	一卷	
4	梵漢両字随求提目	一卷 複八真言	
5	梵漢両字金剛界大曼荼羅秘密修行法門	一卷	
6	梵字	一卷	
7	悉談章	一卷	
8	天台五時八教次第図		
9	法花經略疏	三巻 上中下	弘文館大学士王緒撰
10	阿弥陀経賛	一卷	沙門浄遐撰
11	聖者名	一卷	
12	天台大師観心誦経	一帖	

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
梵字金剛經論頌（別物）	波斯国人形	漢語長言	前進士弛肩吾詩	雜詩	雜詩	欖葉天書	寒菊	任氏怨歌行	沙門清江新詩	金剛面菩薩像樣	金剛面猪頭菩薩像樣	觀音壇樣	金剛界曼荼羅位樣	金剛界曼荼羅位樣	歎德僧正等	婦敬三宝并開題識詞	仏本内伝	釈迦如来賢劫記
	一卷	一卷	一卷	一帖	一帖	一帖	一帖	一帖	一帖	一張	一張	一張		一帖	一帖	一帖	一帖	一帖
白居易																		

## 結語

本章では、『承和五年目録』、『在唐送進録』、『新求目録』の現存諸本の考察を行うとともに、主に『大正新脩大藏經』（『大正藏』）に収載の現存する仏典を中心に、『入唐新求聖教目録』に記載の書目についての概要を紹介した。

まず、『承和五年目録』の諸本の異同を考察した結果、現存最古の写本である旧青蓮院本は俗字を多く用いており、それに対して旧個人蔵本は正字を用いている箇所が多く見られた。また、旧青蓮院本が正字を用いているのに対して、旧個人蔵本が異体字を使用している例が見られ、文字の脱漏なども旧青蓮院本と一致せず、両者はともに前唐院本系統の写本であるが、その特徴は異なることが明らかになった。四天王寺本については、旧青蓮院本とほとんど同時代の書写であることから、両者の異同は比較的少ないといえる。

次に、二種の活字本（『大正藏』本、『日仏全』本）は、□を用いて判読不明としている箇所が若干あり、旧青蓮院本に見られる「遮」、「恵」、「花」、「密」を「舍」、「慧」、「華」、「蜜」とするなど、その記載の特徴は旧個人蔵本に類似しており、活字本の底本は旧個人蔵本に近いものと推測される。

次に、『在唐送進録』について述べると、青蓮院本及び活字本の特徴としては、上述した『承和五年目録』との違いはほとんど見られない。青蓮院本は、俗字や異体字の使用が多く、誤字と考えられる箇所も見られた。江戸時代の写本である叡山文庫池田蔵本については、その記載はほとんど『大正藏』本、『日仏全』本と共通しており、『大正藏』本の底本である大谷大学蔵本は、叡山文庫本の系統に連なるものではないかと思われる。また、『大正藏』本の記載は『日仏全』本と共通しており、青蓮院本には存在しない書目があるなど青蓮院本との相違があり、欠字や誤字についても多くの箇所です。『大正藏』本と『日仏全』本に一致が見られた。

次に、『承和五年目録』の概要をまとめると、その冒頭に記載の百三十七部二百一巻のうち、その半数近くが真言密教関係の經典・論疏・儀軌・梵漢両字の真言・讚などであることが知られた。これは、揚州における求法

の目的の一つが、最澄によって導入された天台密教(台密)の充実と確立にあったと考えられる。『承和五年目録』の末尾の文に見られたように、終南山宗叡より悉曇及び梵漢の語を習得しており、『承和五年目録』に見える梵漢両字經典及び『梵語雜名』一卷については、宗叡より求得した可能性が高いであろう。

全雅阿闍梨からは、密教の念誦法門ならびに胎藏金剛兩部曼荼羅などを囑授され、密教經典及び「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」をはじめ、曼荼羅壇様の多くを全雅より授かったと考えられる。

揚州では、この他にも『浄名經記』五卷など三部の『維摩經』の注疏や『肇論略疏』など四部の肇論關係の書物があり、『因明揉抄』三卷など三部の因明關係の書、『劫章頌』一卷など四部の劫章に關する書が見られ、さらに天台典籍では、慧思・智顗兩大師に關する書やその述作が見られるが、入唐の最大の目的である天台山行きが許可されるかどうか定まらない状況の中、少しでも天台典籍を蒐集しようとしたことが窺える。また、『大唐新脩公卿士庶内族吉凶書儀』三十卷をはじめとする外典や、慧思・智顗兩大師や民間信仰を集めていた僧伽和尚などの高僧真影を持ち帰っており、少数であるが菩薩の舍利三粒・辟支仏の舍利二粒をもたらし得たことは、円仁にとって大きな収穫であったと考えられる。

次に、『承和五年目録』と同じく揚州での将来物を記した『在唐送進録』の概要をまとめると、第一章でも指摘したようにその内容は『承和五年目録』と一致するはずであるが、多数の梵漢両字經典をはじめ天台關係の典籍や仏舍利など記載されていないものがあることが判明した。これについては、何らかの理由により遣唐使に託した将来物の中に含まれていなかったと考えられる。また、『在唐送進録』のみ記載の将来物が三十一点あること、『承和五年目録』と『新求目録』の記載に類似点が見られることから、『新求目録』の揚州一覽は『承和五年目録』に基づいて書かれたものと考えられる。

次に、『新求目録』の諸本を対校した結果、青蓮院本はその他の諸本(高山寺本・叡山文庫藏本・『大正新脩大藏經』本・『日仏全』本)と比較すると、未記載書目が最も少なく、史料価値は高いといえる。その他の諸本は異

同についても類似していた。『新求目録』の概要をまとめると、長安においては五百四点のうちその大半は真言密教関係の經典、論疏、儀軌、戒儀、梵字などの典籍であることが知られた。

これは、長安での円仁求法の大きな目的が伝教大師最澄（七六六—八二二）によって導入された天台密教（台密）の充実と確立にあったと考えられ、そのために胎藏界・金剛界・蘇悉地の三部の大法を長安の諸阿闍梨より受法している。例えば『巡礼記』によれば、開成五年（八四〇）十月二十九日には大興善寺にて元政より金剛界大法、会昌元年（八四一）五月三日には、青龍寺にて義真より胎藏毗盧舍那經大法と蘇悉地大法、会昌二年（八四二）二月二十九日には玄法寺法全より胎藏大法を受けている。この密教受法に際し、これら元政・義真・法全などの諸阿闍梨より目録記載の多数の密教典籍を授かり、求得したものであると考えられる。

さらにまた、長安では密教典籍以外にも浄土、華嚴、禪、戒律をはじめ、因明及び詩歌、地誌などの外典や聖像・高僧真影・檀木なども将来している。このうち、浄土念仏については、道綽の『安樂集』や、善導の『浄土法事儀讃』があり、円仁は極樂浄土願生の思想に注目している。華嚴については、澄観の『華嚴經疏』や杜順の『華嚴法界觀門』などが見られる。また、因明に関しては、基（窺基）や慧沼、勝莊の論疏七点があり、インド論理学である因明に関心が高かったことが知られる。さらに、大乘戒の根本聖典である『梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品』一卷や『四分律』に関する行儀『宗四分比丘隨門要行儀』一卷などもある。その他にも『白家詩集』などの漢詩や『兩京新記』などの歴史地理書もあり、円仁は幅広い関心を持って文献を蒐集したものと見られる。

五台山求得の仏典では、南岳慧思の『隨自意三昧』一卷や天台智顗の『小止観』をはじめ、天台関係の書が多数を占めている。これは、『巡礼記』の開成五年（八四〇）五月十七日の条に「実可謂三臺山大花嚴寺是天台之流一也」とあり、大華嚴寺の法賢・文鑑・志遠・玄亮の諸大徳が、『法華經』を中心とする天台の教えや実践法門である『摩訶止観』を講じたり、法華三昧を修したりしていることを述べているので、天台典籍の多くはこの大華嚴寺で求め得たものであると推測される。さらに、五台山で注目すべきは、法照の『浄土五会念仏略法事儀

讃』一卷であり、本文中に紹介したように、円仁が比叡山に初めて伝承した天台声明（仏教音楽）や、叡山浄土教の源流をなす重要な典籍である。

揚州での求得については『承和五年目録』とほぼ同様であり、唐梵両字の真言や讃、『浄名経』（『維摩経』）の注釈や『法華経』の疏、『肇論』の注書などがあり、仏舍利や和尚真影なども見られる。天台関係では、智顗の『方便念仏門』などが注目される。

円仁は、これから将来物を入唐中いかなる状況下で蒐集したのかという点について、第三章で考察していきたい。

1 石田尚豊「円仁の揚州求法について」（『空海の帰結―現象的史学―』中央公論美術出版、二〇〇四年）二〇五―二〇七頁。

2 国宝・重要文化財総合目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録 美術工芸品編』上巻（ぎょうせい、一九九八年）一二八頁。

3 「e 国宝 国立博物館所蔵国宝・重要文化財」<http://www.emuseum.jp/> 「円仁承和五年求法目録」。本稿では、資料①「日本国承和五年入唐求法目録」の底本とする青蓮院本もこのデータベースを参照した。

4 石田尚豊、前掲注1、二〇六頁。

5 「国指定文化財等データベース」<http://kumishitei.bunka.go.jp/> 「円仁入唐求法目録（開成四年四月二十日／＼）」前掲注3。

7 武覚超『比叡山仏教の研究』（法蔵館、二〇〇八年）「五 比叡山経蔵の歴史―とくに慈覚大師将来典籍の保存について―」五八頁及び一〇四―一〇五頁、注二五によれば、法華総持院は天慶四年（九四一）をはじめとして度重な



る火災が発生し、経蔵である真言蔵に納められていた円仁将来の密教經典及び一乗止観院根本経蔵に納められていた顯教經典は、第十八世座主慈恵大師良源（九一二—九八五）が経蔵整備の一環として天元三年（九八〇）に再興した前唐院へ移された可能性が指摘されている。

- 8 武覚超、前掲注7、「五 比叡山経蔵の歴史——とくに慈覚大師将来典籍の保存について——」五八—九九頁に、この二種の目録の概要と内容が紹介されているが、それによると、南溪蔵本は二種ともに天明三年（一七八三）実靈によつて書写されたものであり、『勘定前唐院見在書目録』は第一厨子二百八点及び第二厨子二百九十九点の計四百九十八点、『前唐院法文新目録』は第一厨子中階八十九点、下階二百八十一一点の計三百七十点の所蔵書目が記されている。

- 9 前掲注3。

- 10 石田尚豊、前掲注1、二〇六頁。

- 11 大谷大学図書館編『大谷大學圖書館和漢書分類目録』（一九二六年）五頁。

- 12 馬君武『神会和尚遺集——附胡先生晚年的研究——』（胡適紀年館、一九六八年）一一六—一一七頁によると、「和上問澄禪師、修何法而得見性？」から始まる神会和尚と澄禪師の問答が知られる。澄禪師について、「素性は知れないが、「北宋」の立場を代表する禪者」であるとされる（小川隆『神会——敦煌文献と初期の禪宗史——』臨川書店、二〇〇六年、一一七頁）。

- 13 小野勝年『隋唐長安寺院史料集成』史料篇（法蔵館、一九八九年）四〇五頁によると、『雍録』卷五、「德宗幸奉天入出漢中」の興元元年（七八四）五月己亥条に、「駱元光章敬寺、寺在二東城之外。」と記されており、その所在が明らかとなっている。

- 14 小野勝年、前掲注13、一一〇頁。

大慈恩寺大法師基公塔銘并序

(中略)法師以二皇唐永淳元年仲冬壬寅日一卒<sub>レ</sub>於二慈恩寺翻訳院一。有生五十一歳也。後十日、陪<sub>二</sub>葬於樊川玄奘法師塔<sub>一</sub>。亦塔焉、塔有<sub>レ</sub>院。

15 神田喜一郎「慈覚大師外典考証」(福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年)九一―九三頁。

16 牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」(福井康順『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年)六九五頁。

17 寛平入道撰『慈覚大師伝』(『続天台宗全書』史伝二)六七頁上。

嘉祥元年春、(中略)二十七日給<sub>二</sub>位記<sub>一</sub>。状云、伝灯法師位円仁、年五十、臘三十二、今授<sub>二</sub>伝灯大法師位<sub>一</sub>。勅、幽求<sub>二</sub>一紀<sub>一</sub>、深入<sub>二</sub>三藏<sub>一</sub>、観<sub>二</sub>聖跡於竹林<sub>一</sub>、聴<sub>二</sub>微言於宝月<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>唯止観之宗匠<sub>一</sub>、寔是白黒之津梁。宜崇<sub>二</sub>伝灯之名<sub>一</sub>、載答<sub>二</sub>遊方之効<sub>一</sub>。

18 前掲注2、七五八頁。

19 吉水蔵聖教調査団編『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』(汲古書院、一九九九年)五八八頁。

20 本研究では、青蓮院本『慈覚大師在唐送進録』の確認に当たって、東京大学資料編纂所の撮影による複写資料を用いた。

21 院昭については、『阿婆縛抄』「明匠等略伝日本下」(『日仏全』六〇巻、二五〇頁)に、「一、院昭阿闍梨者、六角堂別当院覚之子、双巖房之末弟也。」と見える。また、智泉流覚範の資として知られる(『望月仏教辞典』第四巻、三四四四頁)。

22 渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』(通称『渋谷目録』)上下増補版(法蔵館、一九七八年)によると、「真超記、無動寺」(九二頁)などある仏典が多数見られ、真超は無動寺伝来の仏典を多く書写している。

23 『叡山大師伝』(比叡山専修学院附属叡山学院編『伝教大師全集』第五巻、日本仏書刊行会、一九六八年)四一頁に、「院内之事、円成仏子、慈行仏子、一乗忠、一乗叡、円仁等、可<sub>二</sub>相莊行<sub>一</sub>。」とあり、死期の迫った最澄が院内の

事を執行すべき者として円仁らとともに「一乗叡」の名を挙げているが、この「一乗叡」が道叡と同一人物であるかどうかは検討を要する。

24 吉水藏聖教調査団編『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』（汲古書院、一九九九年）五九一頁―五九三頁。なお、本研究では東京大学史料編纂所の撮影による複写資料を用いて青蓮院本『入唐新求聖教目録』の確認を行った。

25 『渋谷目録』、前掲注22によると、勝豪は例えば諸本の奥書には「以三昧阿闍梨本」書了。勝豪（七二五頁、七三九頁など）とあり、三昧阿闍梨つまり、台密十三流の一つである三昧流の祖師良祐本を書写していること、また「於三井坊」伝授了。勝豪（七〇二頁）などもあり、東塔南谷の井坊において伝授していること、東塔南谷と同様三昧流を相伝している青蓮院の吉水藏を数多く書写していることから、勝豪は三昧流を相伝していたと見られる。

26 高山寺本の書誌情報は、高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経藏典籍文書目録』第一（東京大学出版会、一九七三年）一九七―一九八頁を参照。

27 高山寺本の書写年代については、小野勝年氏が「筆跡から平安末乃至鎌倉時代の寫本であると思われる」（『入唐求法巡礼行記の研究』第四卷、六〇八頁）と述べており、石田尚豊氏も「書体から鎌倉時代とみなされている。」（『円仁の揚州求法について』二〇七頁）と述べている。

28 小野勝年「前唐院見在書目録とその解説」（『大和文化研究』第一〇巻四号、一九六五年）二一―二二頁。

29 『渋谷目録』、前掲注22によると、実靈は南溪藏伝来の仏典を多く書写している。また、南溪藏に伝来している

『南溪藏目録』によると、実靈の書写本が「実靈箱」に納められており、合計八十五箱が現存している。

30 『渋谷目録』、前掲注22、九二頁などによると、真超は無動寺伝来の仏典を多く書写している。

31 前田慧雲編『大日本統藏經』第一輯第九十五套第五冊（藏經書院、一九一二年）四九六―四九八頁。

32 『新唐書』第一六冊・卷一五三至卷一七〇（傳）、四九七頁。

敬之字茂孝。元和初、擢<sup>二</sup>進士第一、平判入等、遷<sup>二</sup>右衛門曹參軍<sup>一</sup>、累遷<sup>二</sup>屯田・戸部二郎中<sup>一</sup>。坐<sup>二</sup>李宗閔黨<sup>一</sup>、貶<sup>二</sup>連州刺史<sup>一</sup>。文宗向<sup>二</sup>儒術<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>宰相鄭覃、兼<sup>二</sup>国子祭酒<sup>一</sup>。俄以<sup>二</sup>敬之代<sup>一</sup>、未幾兼<sup>二</sup>太常少卿<sup>一</sup>。是日<sup>二</sup>子戎・戴登科、時号<sup>二</sup>楊家三喜<sup>一</sup>。転<sup>二</sup>大理卿檢校工部尚書<sup>一</sup>、兼<sup>二</sup>祭酒<sup>一</sup>、卒。

33 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第四卷、一四九―一五〇頁に、楊敬之について詳細な注釈が記されている。

34 神田喜一郎、前掲論文15、九四頁。

35 牧田諦亮、前掲論文16、六八九―七〇三頁。

36 辛徳勇「唐長安城の基本的文献」(『都市文化研究』二号、二〇〇三年)一七八頁。

37 牧田諦亮、前掲論文16、七〇一頁。

38 利涉法師については、牧田諦亮「唐長安大安国寺利涉について」(『東方学報』第三一冊、一九六一年)に詳しい。

39 牧田諦亮、前掲論文16、六九七頁。

40 武覚超『中国天台史』(叡山学院、一九八六年)六六頁。

41 小野勝年『中国隋唐長安寺院史料集成』史料編(法蔵館、一九八九年)一五五頁―一五八頁に、雲花寺に関する史料がまとめられているが、一五五頁に見える『長安志』巻九には、「本隋大司馬宝毅宅。開皇六年、捨<sup>レ</sup>宅為<sup>レ</sup>寺。酉陽雜俎曰、本曰<sup>二</sup>大慈<sup>一</sup>。大曆初、僧儼講經、天雨<sup>レ</sup>花、至<sup>二</sup>地咫尺<sup>一</sup>而滅。夜有<sup>レ</sup>光、燭<sup>レ</sup>室。勅改為<sup>二</sup>靈花寺<sup>一</sup>。」とあり、開皇六年(五八一)に隋大司馬宝毅邸を寺となし、大慈寺と称していたが、大暦年間(七六六―七七九)の初めに、僧侶の講經の際に天から花の雨が降ったことを機に、寺名を「雲花寺」と改めるよう勅が下りたことが寺名の由来であった。

## 第三章 円仁の入唐求法と将来物蒐集の状況

### 序言

第二章では、将来目録三種の現存諸本に対する書誌学的観点からの検討により、底本の設定と諸本における文字の異同についての校勘を行うとともに、主に『大正蔵』に所収の書目を取り上げ、円仁が将来した書物の概要を考察してきた。

円仁は、これら将来物をいかなる状況の下で蒐集したのであるか。従来、円仁三目録や『巡礼記』についてのそれぞれ専門分野からの個別的な研究はなされている。しかしながら、目録と『巡礼記』との関連については小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』（鈴木学術財団、一九六四—一九六九年）の註記にて多少触れているところもあるが、これをテーマとして論究した研究は行われていないのが現状である。

そこで、本章では『入唐求法巡礼行記』（以下『巡礼記』）を用いて円仁の入唐巡礼の行程を追いながら、将来物を求得した状況や諸法門求法の内容を分析する。特に詳細な日記形式で記述されている『巡礼記』を中心としながら三目録に見られる書目をはじめとする円仁将来物求得の経過や事情、内容などを明らかにしていくという新たな視点からの考察に挑んでいきたいと考える。

なお、本章では『新求目録』を使用して将来物の求得状況を考察することとし、『新求目録』に記載されている将来物については傍線（―）を付し、その下の（ ）内に、第一節の付表「『入唐新求聖教目録』所掲の円仁揚州将来物一覧表」（二二六頁、「以下「揚州将来物一覧表」」、第二節の付表「『入唐新求聖教目録』所掲の円仁五台山将来物一覧表」（二六一頁、以下「五台山将来物一覧表」」、第三節の付表「『入唐新求聖教目録』所掲の

円仁長安将来物一覧表」(二七六頁、以下「長安将来物一覧表」)の番号を記した。また、将来物の名称及び訳者・撰者などについては、基本的に第二章第三節に掲載した『入唐新求聖教目録』の翻刻(二二八頁)に基づいた。

## 第一節 揚州における求法と将来物蒐集の状況

### (1) 宗叡・全雅からの受法

本節では、開成三年(八三八)七月二日に揚州海陵県に上陸した円仁が、翌開成四年(八三九)二月十八日まで揚州開元寺に滞在しながら行った求法のうち、円仁が師匠とした終南山宗叡及び嵩山院全雅からの受法を取り上げる。まず、『承和五年目録』(青蓮院本)の末尾には次のように記されている。

前件法門等、円仁、去承和五年八月到<sub>二</sub>大都督府<sub>一</sub>、巡<sub>二</sub>歴城内諸寺<sub>一</sub>、写取如<sub>レ</sub>前。爰有<sub>二</sub>終南山宗叡和尚<sub>一</sub>。学速<sub>二</sub>先達<sub>一</sub>、悟<sub>二</sub>究幽致<sub>一</sub>。能解<sub>二</sub>梵漢之語<sub>一</sub>、妙閑<sub>二</sub>悉曇之音<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>西天<sub>一</sub>辞<sub>レ</sub>旧到<sub>レ</sub>府。仁幸得<sub>二</sub>遇謁<sub>一</sub>、受<sub>二</sub>学梵天悉曇<sub>一</sub>、兼<sub>二</sub>習梵漢之語<sub>一</sub>。又逢<sub>二</sub>大唐内供奉弁弘阿闍梨付法弟子 全雅阿闍梨<sub>一</sub>、諮<sub>二</sub>稟秘法<sub>一</sub>。和尚感<sub>二</sub>乎遠誠<sub>一</sub>、付以<sub>二</sub>秘要<sub>一</sub>。遂乃囑<sub>二</sub>授念誦法門、并胎藏金剛兩部曼荼羅・諸壇樣等<sub>一</sub>。其後擬<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>行路遼遠<sub>一</sub>往還失<sub>レ</sub>時。有<sub>レ</sub>勅不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>發赴<sub>一</sub>、慨悵難<sub>レ</sub>及。所<sub>レ</sub>求法門雖<sub>二</sub>未備足<sub>一</sub>、且錄<sub>二</sub>卷秩<sub>一</sub>勘定如<sub>レ</sub>件。

この記述によると、円仁は揚州上陸後諸寺を巡り仏典を書写し、終南山(陝西省西安藍田県)から揚州を訪れていた宗叡和尚より梵天悉曇及び梵漢の語を習うとともに、内供奉弁弘阿闍梨の弟子であった全雅阿闍梨より念誦法門及び胎藏金剛兩部曼荼羅・諸壇樣などを授けられている。これらは具体的にいかなる状況での求法であった

のであろうか。『巡礼記』を用いて宗叡に関する記述と全雅からの将来物入手の背景とその状況を合わせて探っていききたい。なお、本章においても『巡礼記』の原文を小野勝年氏による『入唐求法巡礼行記の研究』に依拠し、原文引用の下には巻数と頁数を括弧内に「小野、巻数、頁数」として表示した。

# 付表①『入唐新求聖教目録』所掲の円仁揚州将来物一覧表

## 凡 例

- 一、本表は本稿の第二章第三節に掲載した『入唐新求聖教目録』の青蓮院本の翻刻に基づいて作成したものである。なお、この一覧表は第二章所載の翻刻の549～702（二六〇―一六九頁）に相当している。
- 二、異体字や旧字は常用漢字に改め、青蓮院本に誤りが見られる場合は修正を加え、（ ）で補足した。
- 三、表下段の「訳者・撰者等」の欄は、『新求目録』によつて記載し、（ ）は筆者が補足した。訳者、撰者等については人名のみとした。
- 四、現存する将来物については、『大正新脩大藏経』（『大正蔵』）の巻数、頁数を記した。
- 五、青蓮院本のみ記載の将来物は「―」を用いて表した。
- 六、『巡礼記』に記載の将来物については、番号を□で囲んだ。

番号	将来物の名称	巻数等	訳者・撰者等	『大正蔵』
1	大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經	一卷	（不空訳）	21 卷 253 b
2	一切仏心中心經一卷	一卷		

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
仏頂尊勝陀羅尼注義	金剛頂經瑜伽十八会指帰	修真言三昧四時礼懺供養儀要	阿閼如来念誦供養法	大仏頂如来蜜因修証了義諸菩薩万行品灌頂部録出中印契別行法門	葉衣觀自在菩薩法	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法	如意輪菩薩真言注義	觀自在如意輪菩薩瑜伽法要	金剛頂勝初瑜伽經中略出大衆金剛薩埵念誦儀軌	金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘蜜修行念誦儀軌	普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌	觀自在菩薩如意輪念誦儀軌	金剛頂蓮花部心念誦儀軌	仏説阿利多軍荼利護国自在拔折羅摩訶布陀羅金剛大神力陀羅尼	新訳般若心經	蘇摩呼童子請(問)經	陀羅尼集要經	宝星經略述二十八宿佐盧瑟吒仙人經
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
不空訳	不空訳		不空					金剛智訳	不空訳	(不空訳)	不空訳	(不空訳)	不空訳	(不空訳)	阿地瞿多日照訳	般若三藏訳	(善無畏訳)		
19 卷 388 b	18 卷 284 c		19 卷 15 b					20 卷 211 b	20 卷 513 c	20 卷 535 b	20 卷 531 a	20 卷 72 a	20 卷 203 c	18 卷 299 b		8 卷 849 b等	18 卷 719 a		



42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
唐梵両字大仏頂結護	唐梵両字大仏頂根本讃	唐梵対訳普賢行願讃	唐梵両字秘密心中心真言	唐梵両字秘密心真言	唐梵両字結界真言	唐梵両字灌頂心中心真言	唐梵両字灌頂心真言	唐梵両字一切仏心中真言	唐梵両字一切仏心真言	唐梵両字青頸大悲真言	唐梵両字不空羼索真言	唐梵両字最勝無垢清浄光明大陀羅尼	唐梵対訳般若心經	唐梵対訳阿弥陀經	唐梵対訳金剛般若經	大樂金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈	施燄面一切餓鬼念誦陀羅尼法	太元阿吒薄句無辺甘露降伏一切鬼神真言	最上乘教授戒懺悔文
一本	一卷	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷	一卷	一卷
															(鳩摩羅什訳)	(不空訳)			不空訳
																8 卷 748 c 等	19 卷 607 a		18 卷 94 b

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43
淨名經記	唐梵對訳法華二十八品題目兼諸羅漢名	〔梵漢両字蓮華部讃〕	唐梵対訳金剛般若經論頌	唐梵両字釈迦如来涅槃後弥勒菩薩悲願讃	唐梵両字毗盧遮那成仏神変加持経吉慶伽陀讃	唐梵両字満願讃	唐梵両字地藏菩薩讃	唐梵両字除蓋障菩薩讃	唐梵両字普賢菩薩讃	唐梵両字文殊師利菩薩讃	唐梵両字金剛藏菩薩讃	唐梵両字金剛藏菩薩讃	唐梵両字虚空藏菩薩讃	唐梵両字觀自在菩薩讃	唐梵両字弥勒菩薩讃	唐梵両字送本尊帰本土讃	唐梵両字百字讃	唐梵両字天龍八部讃	唐梵両字大随求結護
五卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本
文襲述																			

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63
觀心十二部經義	釈門自鏡録	四十二字門義	觀心遊心口決記	五方便念仏門	智者大師修三昧常行法	劫章科文	劫章頌記	劫章頌疏	劫章頌	因明入正理(論)義纂要	因明義斷	因明糅抄	肇論略出要義兼注附焉并序	肇論文句図	肇論抄	肇論略疏	法華經銷文略疏	浄名經関中疏釈微	浄名經集解関中疏
一卷	五卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	三卷	一卷	一卷	三卷	一卷	三卷	二卷	四卷
灌頂述	恵詳集	慧思作	智顗述	智顗作		道詮述	遍知集	(基撰)	(慧)沼集	(慧)沼述	擇隣述	雲興撰	恵澄撰	恵澄撰	東山矩作	延秀集解	契甚述	道液集	
				47 卷 81 c					44 卷 158 b	44 卷 143 a								85 卷 440 a	

102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83
智者惕松讚	天台略錄	天台大師答陳宣帝書	南岳思禪師法門伝	四戒戒并大小乘戒決	梵語雜名	隋廬山遺愛寺慧珍禪師念仏三昧指帰	大乘楞伽正宗決	最上乘仏性歌	受菩薩戒文	諸天地獄寿命分限	説罪要行法	略羯磨	羯磨文	量処輕重義	大般若經開兼二十九位法門	鳩摩羅什法師随順修多羅四悉檀義不墮負門	天台智者大師所著經論章疏科目	法華三昧修証決	形神不滅論
一卷	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
灌頂撰			杜朮撰		(令言集)			真覺述	宗叡	義浄撰	懷素撰			道宣緝叙					海雲撰
					54 卷 1223 a					45 卷 903 c				45 卷 839 b					

122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103
天台大師答陳宣帝書	大唐西明寺故大德道宣律師讚一卷	唐故終南山靈感寺大律師道宣行記	大慈恩寺大法師基公塔銘并序	大唐大慈恩寺翻經大德基法師墓誌銘并序	唐故大律師釈道円山龜碑并序	唐揚州龍興寺翻經院故填律和上碑銘并序	唐故大広禅師大和楞伽峯塔碑銘并序	揚州東大雲寺演和上碑并序	歎道俗德文	觀法師奉答皇太子所問諸經了義并牋	集新旧齋文	内供奉談延法師歎齋格并文	南荊州沙門無行在天竺國致於唐國書	上都清禅寺至演禅師鐘伝	大唐韶州双岑山双溪宝林伝	清涼山略伝	感通伝	法華靈驗伝	天台智者大師十二所道場記
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	三卷	一卷	五卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷
					李邕	李華撰	陸亘撰	李邕		詠			牛肅・至演叙	靈徹			道宣（撰）		灌頂述
																	45 卷 874 a		

142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123

142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123
天台大師感得聖像僧影	南岳思和尚示先生骨影	胎藏曼荼羅手印樣	法華曼荼羅樣	金剛界八十一尊種子曼荼羅樣	金剛界三十七尊種子曼荼羅樣	供養賢聖等七種壇樣	金剛界大曼荼羅	大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅	法華經二十八品七言詩	詩集	杭越寄和詩集	祝元膺詩集	〔雜言〕	〔判一百條〕	〔道情〕	〔歎德文〕	祇對義	開元詩格	大唐新修宣公卿士庶內族吉凶書儀

一鋪三幅綵色	一鋪三幅綵色	一卷	一張	一張	一卷	一卷	一鋪七幅綵色	一鋪五幅苗	一卷	五卷	一卷	一卷	一帖	一卷	一帖	一帖	一卷	一卷	三十卷
										〔元稹・白居易・李諒〕	〔祝元膺〕	駱賓王撰					蕭然撰	鄭餘慶	

154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	
舍利五粒	菩薩舍利三粒辟支仏舍利二粒盛白蠟小合子并安置白石瓶子	大聖僧伽和尚影	法慧禪師誦法華口放光照室宇影	道超禪師誦法華感二世弟子生処影	秦郡老僧教弟子感夢示宿因影	慧向禪師誦法華滅後墓上生蓮華及墓裏常有誦經声影	定禪師誦法華天童給事影	映禪師誦法華善神來聴經影	惠斌禪師誦法華神人礼拝影	山登禪師誦法華感金銀殿影	法慧和上閻王前誦法華影	阿蘭若比丘見空中普賢影
一口	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗	一張苗

開成三年（八三八）八月二十二日、揚州都督李德裕（七八七―八四九）の牒により天台留学僧円載とともに揚州開元寺に止住を始めることになった円仁が、最初の受法である悉曇及び梵漢の語を学び得たのは、先述の通り『承和五年目録』の末尾によると終南山の宗叡和尚であったことが分かる。しかし、『巡礼記』ではこの受法に関する記述が見られない。宗叡に関する記述は、開成三年十一月十七日条に、「又大唐国今帝、諱昴即云<sup>レ</sup>名。先祖諱純淳・訟誦・括・譽豫預・隆基・恒・湛・淵・虎<sup>（<sub>アヤ</sub>）</sup>戒<sup>（<sub>アヤ</sub>）</sup>・世民。音同者尽諱。此国諱諸字、於<sup>二</sup>諸書狀中<sup>一</sup>惣不<sup>レ</sup>着也。是西明寺僧宗叡法師之所<sup>レ</sup>示也。」（小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一卷、二七〇頁）とあり、西明寺（長安右街延康坊）<sup>2</sup>の僧侶宗叡より現在の皇帝及びその先祖十名の諱字を書状において用いないようにとの忠告を受

けている記述が見られるのみである。受法の事実が記されていないことは、『巡礼記』の日記としての性質を考える上でも疑問であるが、『承和五年目録』の末尾に円仁自らの言葉で述べられている以上、その受法が行われたことは疑いないであろう。三千院本『慈覚大師伝』にも、「一箇大徳從<sub>レ</sub>上都<sub>一</sub>来、号為<sub>二</sub>宗叡<sub>一</sub>。其心質素、不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>塵物<sub>一</sub>。能解<sub>二</sub>悉曇<sub>一</sub>、口訳<sub>二</sub>梵語<sub>一</sub>。和尚礼拝、請以為<sub>レ</sub>師、習<sub>二</sub>学梵書<sub>一</sub>。」(天台宗典編纂所編『続天台宗全書』(以下『続天全』)史伝二、春秋社、一九八八年、四七頁下)とあり、宗叡より梵書を学んだことが記されている。小野氏によると、『承和五年目録』に登場する「終南山宗叡和尚」とこの「西明寺僧宗叡法師」は同一人物であり、宗叡は終南山及び西明寺に關係のある僧侶であつたと見られている(小野一、二七三頁)。『新求目録』に見える唐梵対訳仏典三十五部(前掲「揚州将来物一覧表」27-61)の大部分及び宗叡撰『諸天地獄寿命分限』一卷(92)は、宗叡から得たと考えられる。

次に、全雅からの受法を見ていこう。『巡礼記』開成四年(八三九)閏正月二十一日、「就<sub>二</sub>嵩山院持念和尚全雅<sub>一</sub>、借<sub>二</sub>写金剛界諸尊儀軌等数十卷<sub>一</sub>。此全和尚現有<sub>二</sub>胎藏金剛両部曼荼羅<sub>一</sub>、兼解<sub>二</sub>作壇法<sub>一</sub>。」(小野一、三九〇頁)とあり、『承和五年目録』の末尾にも記されていた嵩山院の全雅和尚より金剛界の諸尊儀軌など数十巻を借用し書写している。『新求目録』の『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』二卷(8)、『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌』一卷(10)、『普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌』一卷(11)、『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』一卷(12)、『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌』一卷(13)、『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法』一卷(16)、『金剛頂經瑜伽十八会指帰』一卷(21)、『大樂金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈』一卷(26)の八部九卷は、全雅を通して得た書物であろう。このうち、『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』は『在唐送進録』の末尾に「別物 封皮箱一合」(第二章一一四頁)として記された九点の仏典のうちの一つである。『在唐送進録』の末尾によると、開成四年(八三九)七月二十一日、円仁は帰国を目指し出港する遣唐使に託した延暦寺宛の「円仁書」に、「凡真言儀軌等、唐国和上等、尤有<sub>レ</sub>深<sub>二</sub>誠<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>妄散<sub>一</sub>。」(第二章一一四頁)と記し



ており、これらは「和上」すなわち宗叡、全雅より散逸を戒められ、三十部近く求め得た密教典籍の中でも最も重要なものであった。また、先述の閏正月二十一日条において、全雅が胎金両部曼荼羅を所持していると述べているが、『新求目録』に見える「金剛界大曼荼羅」一鋪七幅 綵色(135)、「金剛界三十七尊種子曼荼羅様」一卷(137)、「金剛界八十一尊種子曼荼羅様」一張(138)、「胎藏曼荼羅手印様」一卷(140)は、全雅より求得の可能性が高いと考えられる。「金剛界三十七尊種子曼荼羅様」については、後世比叡山で重んじられた成身一会の曼荼羅とされ、「金剛界八十一尊種子曼荼羅様」も台密において重用されたと見られる。

先の閏正月二十一日条には全雅が作壇法に通じていると述べられていたが、開成四年(八三九)二月五日には、「和尚全雅来<sub>ニ</sub>房裏<sub>一</sub>、作<sub>ニ</sub>如意輪壇<sub>一</sub>。」(小野一、三九五頁)とあり、全雅が円仁を訪ねて如意輪壇を作っている。如意輪観音は、富貴・資財・勢力・威徳を成就させるなどの靈驗を示すとされるが、如意輪については『新求目録』に『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』一卷(9)、『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要』一卷(14)、『如意輪菩薩真言注義』一卷(15)の三部が見えており、これらも全雅からの入手の可能性が高いといえる。

この後、二月二十四日に遣唐大使藤原常嗣より台州行きの勅許が下りなかった旨を聞かされ、入唐の最大の目的であった天台山行きは不可能となった。二十六日に、「早朝、全雅来。縁<sub>ニ</sub>惣管不<sub>レ</sub>交<sub>コ</sub>住寺<sub>一</sub>、移住<sub>ニ</sub>龍興寺<sub>一</sub>。」(小野一、四二七頁)とあり、全雅が開元寺より五里離れた龍興寺に移住し、三月五日条に「斎後、前画胎藏曼荼羅一鋪五副了。」(小野一、四五二頁)と記されていることから、この間全雅の指導により「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」一鋪五幅 苗(134)を写し得たと考えられる。この胎藏曼荼羅は、円仁門下である五大院安然(八四一―九〇二)の『諸阿闍梨真言密教部類総録』(通称『八家秘録』)に「大毘盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪、五副 苗 仁、海云<sub>ニ</sub>七副<sub>一</sub>、珍云<sub>ニ</sub>五副<sub>一</sub>。」(『大正藏』五五卷、一一三一b)として見えており、空海(七七四―八三五)及び円珍将来本とともに密教史上重視されている(小野三、四五二頁)。「苗」とあることから、この曼荼羅は白描のままであったが、それはこの三月五日以降、隨身物を遣唐使第二船に積み込む十七日まで記述が

見られないように、時間的な制約により彩色を施すことが叶わなかったと考えられる。

## (2) 『入唐求法巡礼行記』及び目録に記載の将来物

次に、『巡礼記』を用いて『新求目録』に記載されている将来物に関する記述を見ていく。開成三年九月一日条において、「從<sub>二</sub>開元寺西<sub>一</sub>涉<sub>レ</sub>河、有<sub>二</sub>無量義寺<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>老僧<sub>一</sub>、名<sub>二</sub>文襲<sub>一</sub>、春秋七十。新作<sub>二</sub>維摩經記五卷<sub>一</sub>。今現在<sub>二</sub>堂裏<sub>一</sub>、講<sub>二</sub>其疏記<sub>一</sub>。多用<sub>二</sub>肇・生・融・天台等義<sub>一</sub>。比寺諸僧來集聽<sub>レ</sub>之。聽衆都有<sub>二</sub>卅八人<sub>一</sub>、共敬<sub>二</sub>重彼文襲和尚<sub>一</sub>。」(小野一、二〇五頁)とあり、円仁はこの日開元寺の西にある無量義寺に赴き、そこで僧侶文襲が新たに『維摩經記』五巻を著し、堂内で講義を行っていたことを記している。この『維摩經記』は、『新求目録』に『浄名經記』五巻 無量義寺文襲述(62)として見えている。本書は、鳩摩羅什(三四四―四一三)が四〇六年に翻訳した『維摩詰所説經』三巻(『大正藏』一四巻、五三七a)の注釈書であり、円仁が記しているように羅什門下の僧肇(三八四―四一四)、道生(―四三四)、道融(生没年不詳)及び天台大師智顗(五三八―五九七)の注釈を依用して論述したと見られる<sup>3</sup>。

十一月二日条には「買<sub>二</sub>維摩関中疏四卷<sub>一</sub>。価四百五十文。」(小野一、二五五頁)とあり、『維摩經』の注疏をここでも求め得ている。これは、『新求目録』に『浄名經集解関中疏』四巻 資聖寺道液集(63)と記載があり、敦煌出土本の『浄名經集解関中釈抄』一巻(『大正藏』八五巻、四七三a)、道液撰『浄名經関中釈抄』(『大正藏』八五巻、五一八b)が現存している。道液の序文によると、唐の上元元年(七六〇)に著され、永泰元年(七六五)に再度著わされたものであることが知られる。『新求目録』には、他にも『浄名經関中疏釈微』二巻 中条沙門契甚述(64)があり、『維摩經』に関して合計三部十一巻を将来している。他の入唐僧の将来目録においては、『維摩經』の注疏は最澄の『伝教大師将来台州録』(『大正藏』五五巻、一〇五六a)に天台智顗の『維摩

經玄疏』を始めとする四部二十二卷があり、惠運将来の『維摩經記』一卷（『大正藏』五五卷・一〇八八c『惠運禪師将来教法目錄』、『大正藏』五五卷・一〇九一b『惠運律師書目錄』）、智証大師円珍の将来目錄にも『維摩經記』二卷（『大正藏』五五卷・一一〇〇a『日本比丘円珍入唐求法目錄』、『大正藏』五五卷・一一〇五b『智証大師請来目錄』）などが見えている。また、常曉（一八六六）は『維摩經』の注釈書を七部十七卷を将来しており、『常曉和尚請来目錄』に「今見<sup>三</sup>大唐真典近代興盛講<sup>二</sup>文学義之類<sup>一</sup>、総此疏（維摩疏）等以為<sup>二</sup>指南<sup>一</sup>。」（『大正藏』五五卷、一〇六九c）とあり、『維摩經』の注疏が当時の大陸で文学義の講述において指南とされていたと伝えている。

以上のように、羅什の『維摩經』訳出以来、維摩經の注疏や研究が盛んに行われていたが、円仁は師の最澄と同様にことに智顗の『維摩經』述作に注目し、その関連書物を将来したものと思われる。

さて、開成三年十一月二十四日条に「堂頭設<sup>レ</sup>齋、衆僧六十有余。幻群法師作<sup>二</sup>齋歎文・食儀式<sup>一</sup>。」（小野一、二八二頁）とあり、揚州開元寺の食堂にて行われた十一月二十四日の天台大師忌の設齋における齋歎文や食儀式を幻群法師が作成したこと、そしてその後にはその儀式実施の詳細が記されている。幻群法師については不詳であるが、供養文の内容には智顗の功德を讃嘆し、「設齋者の一家眷属の繁栄や国家安泰・亡者の冥福などを祈願」（小野一、二八七頁）したものであるとされている。『新求目錄』にはこの時求め得た齋歎文として『内供奉談延法師歎齋格并文』一卷（110）及び『集新旧齋文』五卷（111）の書目が見られる。これに類似の書物として、『傳教大師将来越州録』に『齋文式』一卷が記されている（『大正藏』五五卷、一〇五九b）。

十二月九日条には、「亦以<sup>二</sup>此日<sup>一</sup>、令<sup>レ</sup>写<sup>二</sup>龍興寺法花院壁南岳・天台両大師像<sup>一</sup>。」（小野一、三一八頁）とあり、揚州龍興寺内の法華院の壁上に描かれていた南岳慧思、天台智顗の影像を写し取らせている。この寺院は、小野氏によると、唐代「開元寺と同じく天下の各州に設置された勅建寺であった」とされる（小野一、三〇五頁）。入宋僧成尋（一〇一一—一〇八一）の『参天台五臺山記』卷三、熙寧五年（一〇七二）九月十三日条に「龍興寺釈

レ之、昔鑑真和尚住寺也。」(『大日本仏教全書』七二卷、二五一a)とあり、鑑真の住寺でもあった。その所在は、北宋の熙寧六年(一〇七三)五月四日入宋僧成尋が開元寺参詣後に龍興寺に戻っていることから開元寺から若干離れていたとされるが、詳細は未詳である(小野三、三〇五頁)。

この南岳慧思の影像是、『新求目録』に「南岳思和尚示先生骨影」一鋪三幅 綵色(141)、智顗の影像是「天台大師感得聖像僧影」一鋪三幅 綵色(142)として載っており、これらは各々『承和五年目録』及び『在唐送進録』には「綵色」の字がないが、『新求目録』によると着色されていたことが分かる。なお、この真影については翌開成四年(八三九)一月三日条に「始画ニ南岳・天台両大師像両鋪各三副」。(中略)尋ニ南岳大師顔影、写コ着於揚州龍興寺。勅安コ置法花道場瑠璃殿南廊壁上。乃令ニ大使僉從栗田家継写取、無ニ一虧謬」。(小野一、三三一頁)と記されている。先述の十二月九日条の記事と重複して南岳・天台両大師の影像を写したことが記されているが、これにより遣唐大使藤原常嗣の従者兼絵師であった栗田家継に模写させたことが窺える。

また、この文に続き「又彼院門廊壁上、画コ写誦ニ法花経、将数致ニ異感和尚等影上。数及ニ廿来、不レ能ニ具写」。(小野一、三三一頁)とあり、同じく瑠璃殿南廊の壁画が二十ほどあり、写しきれなかったようである。

しかし、『新求目録』に十点の『法華経』を唱える伝法和上影すなわち、「阿蘭若比丘見空中普賢影」一張 苗(143)、「法慧和上閻王前誦法華影」一張 苗(144)、「山登禪師誦法華感金銀殿影」一張 苗(145)、「惠斌禪師誦法華神人礼拝影」一張 苗(146)、「映禪師誦法華善神來聴経影」一張 苗(147)、「定禪師誦法華天童給事影」一張 苗(148)、「慧向禪師誦法華滅後墓上生蓮華及墓裏常有誦経声影」一張 苗(149)、「秦郡老僧教弟子感夢示宿因影」一張 苗(150)、「道超禪師誦法華感二世弟子生処影」一張 苗(151)、「法慧禪師誦法華口放光照室宇影」一張 苗(152)が記されており、半分ほど写し得たことが窺える。いずれも「描」の字が記されていることから、白描(無彩色)であったことが分かる。ここに登場する和上については、長安僧慧詳撰『弘賛法華伝』に、「隋禅居道場釈慧斌」、「隋江陽永齊寺釈僧映」、「隋江都県釈慧向」、「陳寿春曲水寺釈法慧」(巻第七・誦持第六之二、「大正蔵」五一

卷・三一b)、「梁禅衆寺积僧定」(卷第六・誦持第六、『大正蔵』五一卷・二七a)、「外国蘭若比丘」(卷第九・転読第七、『大正蔵』五一卷、四〇b)の六名の名が挙げられている。龍興寺に関する将来物は、他に李華撰「唐揚州龍興寺翻經院故填律和上碑銘并序」一卷(116)が見られる。

一月二十五日には、「就<sup>二</sup>延光寺僧惠威<sup>一</sup>、覓<sup>三</sup>得法花円鏡三卷<sup>一</sup>。」(小野一、三七三頁)とあり、延光寺の僧侶惠威より『法華円鏡』三卷を求め得ている。しかし、『新求目録』に「法華経円鏡七卷、欠第四六七」があるものの、長安求得として記載されており(後掲付表「円仁長安将来物一覧表」<sup>381</sup>)、『承和五年目録』、『在唐送進録』には記されていないことから、揚州求得の書は将来できなかった可能性がある。

### (3) 『入唐求法巡礼行記』に記載のない目録所載の将来物

以上見てきたように、『巡礼記』に記載の揚州での記述を基に、『新求目録』記載の書目など円仁将来物の分析を進めたところ、その蒐集の経過や状況が概ね明らかとなってきた。次に、揚州で求め得た将来物の全貌を把握するため、『巡礼記』に載せられていない経論章疏及び外典の特色を探っていく。

まず、揚州求得の第一に挙げられている『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘経』一卷(1)をはじめとして、二十六部二十七卷(前掲「揚州将来物一覧表」1—26)の密教典籍が並んでいる。『諸阿闍梨真言密教部類総録』(『大正蔵』五五卷、一一一三b—一一三二c)によると、空海も同名の密教典籍を多く将来している。次に、唐梵対訳が三十五部あり(同27—61)、その内訳は經典三部四卷(27—29)、陀羅尼一卷(30)、真言九本(31—39)、讃二十点(青蓮院本に記載の『梵漢両字蓮花部讃』一卷を含む)など(40—61)となっている。唐梵対訳については、他の入唐僧の将来は少なく、円仁の揚州における求得の特色の一つであるといえる。先に述べたように、具体的な記述は見られないが、『承和五年目録』の末尾に宗叡より「受<sup>三</sup>学梵天悉曇<sup>一</sup>、兼<sup>三</sup>習梵漢之語<sup>一</sup>」とあることか

ら、宗叡の元で求め得たことは間違いないものと考えられる。これら密教經典については、『在唐送進録』の末尾に、「凡真言儀軌等、唐国和上等、尤有<sub>レ</sub>深<sub>ニ</sub>誠之<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>妄散<sub>一</sub>。」と述べており、宗顥・全雅より散佚を戒められた重要書であつたと考えられる。

次に、『法華經』の注疏一部三卷(65)、『肇論』の注疏など四部六卷(66―69)、因明三部五卷(70―72)、劫章四部四卷(73―76)、天台典籍など三十八部五十卷(77―113、122)、碑文など六部六卷(114―119)、律二部二卷(120―121)、外典など十一部(123―133)、曼荼羅・壇樣七部(134―140)、天台祖師影二鋪(141―142)、伝法和上影十一張(143―153)、舍利五粒(154)が並んでいる。

『肇論略疏』一卷 東山矩作(66)、『肇論抄』三卷 牛頭山幽西寺恵澄撰(67)、『肇論文句図』一卷 恵澄撰(68)は、僧肇(三七四―四一四)による『肇論』一卷(『大正藏』四五卷、一五〇c)の注釈書であろう。円仁将来本は、多数撰述された『肇論』の末疏の一つであると考えられるが、『大正藏經』には見られず、現存していないと見られる。『肇論文句図』については『智証大師請来目録』(『大正藏』五五卷、一一〇六b)にもあり、円珍が同名の書物を将来している。次に記されている『因明糅抄』三卷 章敬寺擇隣述(70)も上述の円珍目録に記載されている。現存する『因明義断』一卷 慧沼(六五〇―七一四)述(71)、『因明入正理論義断』、『大正藏』四四卷、一四三a)は、慈恩大師基(六三二―六八二)撰『因明入正理論疏』に次いで尊重される因明学の祖書とされる。次に、『劫章頌』一卷 基撰(73)、『大日本統藏經』一、七五、三、三〇三―三〇四頁)ならびにその注疏として『劫章頌疏』一卷 岑山沙門遍知集(74)、『劫章頌記』一卷 道詮述(75)、『劫章科文』一卷(76)が見えており、円仁の唯識への関心も窺われる。

次に注目すべきは天台典籍であり、以下の書目が記載されている。『智者大師修三昧常行法』一卷(77)、『方便念仏門』一卷 智者大師作(78)、『観心遊心口決記』一卷 智顥大師述(79)、『四十二字門義』一卷 南岳思大師作(80)、『観心十二部經義』一卷 天台頂述(82)、『法華三昧修証決』一卷(84)、『天台智者大師所著經論章疏

科目』一卷(85)、『南岳思禪師法門伝』二卷 衛尉丞杜拙撰(99)、『天台大師答陳宣帝書』一卷(100、122)、『天台略録』一卷(101)、『智者惕松讚』一卷 頂禪師撰(102)、『天台智者大師十二所道場記』一卷 灌頂述(103)、『在唐送進録』のみ記載の「天台五時八教次第図」一卷、『天台大師觀心誦經』一帖であり、他の分野に比べて多いことが知られる。

これら天台関係の典籍を円仁が求め得たのは、いかなる事情や背景があったのであろうか。上記天台典籍の入手の状況について『巡礼記』には具体的な記述は見られないが、前項で取り上げた南岳・天台兩大師像が奉祀されていた揚州龍興寺と密接な関係があるものと考えられる。なぜならこの龍興寺は、かつて玉泉天台の流れを汲む鑑真和尚(六八八―七六三)が住持していた寺院であるからである。

龍興寺と鑑真との関係については、『巡礼記』の開成四年(八三九)正月三日の龍興寺での描写に、「又於二東塔院一安<sub>レ</sub>置鑑真和尚素影」。開題云、過海和尚素影。更中門内東端、建二過海和尚碑銘<sub>一</sub>。其碑序(後略)。(小野一、三三一頁)とあり、龍興寺東塔院には鑑真影像が安置され、中門内の東端には過海和尚鑑真の碑銘があったことを記し、その序文を引用している。さらに龍興寺が鑑真の院房であったことは、『唐大和上東征伝』の末尾に、「其龍興寺、先是失<sub>レ</sub>火被<sub>レ</sub>焼。大和上(鑑真)昔院房独不<sub>二</sub>焼捐<sub>一</sub>。是亦戒徳之余慶也。」(『大正藏』五一卷、九九四b)とあり、龍興寺に火災があったが、鑑真の院房のみは彼の戒徳によって焼失しなかったと記していることから明らかである。

さらに、鑑真が玉泉天台の法系であることは次のような天台の系譜が示されていることによって知られる。



すなわち天台山を中心に継承されてきた天台山系天台の法脈とは別に、智顗が故郷荊州に創建した玉泉山玉泉寺を中心に相伝されてきた玉泉寺系天台の法脈が存在し、鑑真はこの法脈を弘景より伝承していたことが知られる。

鑑真については、南山道宣—文綱—弘景に連なる南山律宗の系譜に属することは周知のことであるが、同時にまた玉泉天台の法系を受けていることにも注目しなければならない。この点については東大寺凝然（一二四〇—一三二一）も『三国仏法伝通縁起』巻下の律宗の条に、「鑑真和尚是天台宗第四祖師」（『日仏全』六二巻、一八頁c）と記している。また鑑真の師僧である弘景（六三四—七一二）について『宋高僧伝』（『大正蔵』五〇巻、七三二b）を見ると、弘景は智者大師（智顗）の迹を慕い天台止観を修め、その法門を鑑真に授けたことが述べられている。<sup>8</sup>

さらに、宝龜十年（七七九）に真人元開（淡海三船、七二二—七八五）が記した『唐大和上東征伝』に、「天台止観法門、玄義文句各十巻、四教儀十二巻、次第禪門十一巻、行法華懺法一卷、小止観一卷、六妙門一卷」（『大正蔵』五一巻、九九〇a—九九三b）とあり、鑑真は唐天宝三年（七四四）には天台山国清寺を巡礼し、天平勝宝六年（七五四）には日本の太宰府に至っているが、天台関係の典籍である『天台止観法門』（智顗説『摩訶止観』、『大正』四六・一a）、『法華玄義』（智顗説『妙法蓮華經玄義』、『大正』三三・六八一a）、『法華文句』各十巻（智顗説『妙法蓮華經文句』、『大正』三四・一b）、智顗撰『四教義』十二巻（『大正』四六・七二一a）、智顗撰『釈禪波羅蜜次第禪門』十一巻（『大正』四六・四七五a）、『行法華懺法』一卷（智顗撰『法華三昧懺儀』、『大正』四六・九四九a）、『小止観』一卷（智顗述『修習止観坐禅法要』、『大正』四六・四六二a）、『六妙門』一卷（智顗説『六妙法門』、『大正』四六・五四九a）の計八部五十六巻を初めて日本へ将来したことも知られている。以上のように、龍興寺は天台の流れを汲む鑑真在住の寺院であったところから、法花道場には南岳・天台両



祖師の影像が祀られ、かつまた多数の天台典籍が所蔵されていたものと見られる。このような背景から勘案すれば、揚州求得の書目に天台関連の書物が特に数多いことが頷けるのである。

次に、揚州で得たその他の将来典籍のうち、特色ある物を取り上げていく。『量処輕重義』一卷(88)、『大正藏』四五卷、八三九bは、貞觀十一年(六三七)に道宣(五九六―六六七)によって編集され、さらに乾封二年(六六七)に訂正が加えられたものである。その内容は、亡僧の遺品の輕重を定めた律に関するものである。同じく道宣撰の乾封二年(六六七)に成立した『律相感通伝』一卷(105)、『大正藏』四五卷、八七四aは、天人との問答によって記された律に関することや中国各地の仏教文物についての記載が見られる。律に関しては、他に『羯磨文』一卷(89)、『略羯磨』一卷 西大原寺懷素撰(90)も将来している。さらに、戒に関する書物も持ち帰っており、『説罪要行法』一卷(91)がある。これは、義浄(六三五―七一三)によって唐天冊万歳元年(六九五)―先天二年(七一三)に成立した書物で、比丘が犯罪を告白する作法などが記されたものである。『受菩薩戒文』一卷(93)は現存していないが、慧思作と伝える『受菩薩戒儀』(『大日本統藏經』一―二―一〇、一、一頁上―五頁上)と関連するものではないかと見られる。この『受菩薩戒文』について、『広弘明集』卷二十七には「隋煬帝於天台山顓禪師所受菩薩戒文」(『大正藏』五二卷、三〇五c)なる文章が取り上げられているが、円仁にとっては日本天台における大乘菩薩戒に関する文献として注目したのであろう。

また、『隋廬山遺愛寺慧珍禪師念仏三昧指帰』一卷(96)のような念仏に関する書物も見られ、廬山慧遠(三三四―四一七)に始まる念仏三昧法門にも関心を寄せており、後の五台山での五会念仏受法につながるものであったと見られる。『法華靈驗伝』二卷(104)は、『在唐送進録』では『清涼山宋谷法師求法花三昧靈驗伝』と記されていることから、清涼山(五台山)に住していた宋谷法師の靈驗を記したものと見られる。この人物については、『巡礼記』の開成四年(八三九)七月二十三日条において「北臺在宋谷蘭若」。先修法花三昧、得道。近代有進禪師、楚州龍興寺僧也。持涅槃經一千部入三臺山、志遠禪師受法花三昧。入道場求普賢、

在<sub>レ</sub>院行道、得<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>大聖<sub>一</sub>。如今廿年来也。依<sub>二</sub>新羅僧聖林和尚口説<sub>一</sub>記<sub>レ</sub>之。此僧入<sub>二</sub>五臺及長安<sub>一</sub>遊行。得<sub>二</sub>三  
来<sub>二</sub>此山院<sub>一</sub>。」(小野二、七一―七二頁)とあり、円仁は赤山法華院の新羅僧聖林和尚より、五台山の北台に住  
していた宋谷法師(進禪師)が志遠禪師より法華三昧を受け、普賢菩薩を求めて行を修していたことを聞いている。  
将来した『法華靈驗伝』は、この宋谷法師が法華三昧の修行によって得た靈驗譚が記されていたと思われる。そ  
の書名から五台山誌と推定される『清涼山略伝』一卷(106)も揚州において将来しており、後に偶然向かうこと  
になる五台山への手引きになったものと思われる。

注目すべきは、『大唐韶州双岑山双溪宝林伝』一卷 会稽沙門靈徹(107)である。これは、『宝林伝』と称され唐  
貞元十七年(八〇一)智(慧)矩によって六祖慧能(六三八―七一三)の南宗禅の由来が明らかにされたものである  
が、他の入唐僧は持ち帰っていない書であり、円仁の禅宗への関心が窺われる。なぜなら、円仁の師最澄は入唐  
して天台山禅林寺翫然より達磨大師の付法相承を受け、天台宗に禅の法門を取り入れているからである。

また、円仁は長安諸寺の禅師・高僧に関する碑文や讃も写し取っており、『新求目録』には『大唐大慈恩寺翻  
經大德基法師墓誌銘并序』一卷(118)、『大慈恩寺大法师基公塔銘并序』一卷(119)、『唐故終南山靈感寺大律師道  
宣行記』一卷(120)、『大唐西明寺故大德道宣律師讃』一卷(121)が並んでいる。

そして、入唐八家における円仁将来の特色として外典が比較的多くみられることも挙げておきたい。「円仁揚  
州将来物一覽表」の123、132には、主に詩集などの将来物が載せられている。まず、『大唐新修宣公卿士庶内族吉  
凶書儀』鄭餘慶重修定三十卷(123)は手紙の挨拶の書き方に関する書物と見られる。『祇対義』一卷(125)は口  
頭の挨拶に関する書物とされ<sup>10</sup>(小野一、三〇〇頁)、唐滞在生活の必要に応じて得たと思われる。この他、青蓮  
院本『新求目録』の記載によると、『開元詩格』一卷 除隱泰字蕭然撰(124)、『判一百条』一卷 駱賓王撰(128)、  
『祝元膺詩集』一卷(130)、『杭越寄和詩集』一卷(131)などの詩集を中心とする外典が十部見られる。『杭越寄  
和詩集』一卷については、脱脱等撰『宋史』卷二〇九、芸志(台北、藝文印書館、二五〇四頁)に、「元稹白居易

李諒杭越寄和詩集一卷」とあり、白居易ら三名の詩人によつて書かれたものであることが知られる。<sup>11</sup>このような外典の蒐集から、円仁が当時の文学作品にも関心を寄せていたといえよう。伝法和上影においては、「大聖僧伽和尚影」一張 苗<sup>(153)</sup>が注目されるが、唐代民衆の間で十一面觀音及び航路安全神として信仰されていた泗州大聖僧伽和尚（一七一〇）の影像である。上述した揚州龍興寺の壁画の模写と合わせて他の入唐僧の目録に見られず、円仁の関心の広さが窺われるとともに、見聞したものは可能な限り記録に留めようとした姿勢が窺える。

揚州求得の最後には「舍利五粒」<sup>(154)</sup>が見られる。入唐八家では、空海が「仏舍利八十粒」（『御請来目録』、『大正藏』五五卷、一〇六四c）、同じく真言僧の円行（七九九―八五二）は三千余粒を持ち帰っている（『靈巖寺和尚請来法門道具等目録』、『大正藏』五五卷、一〇七三b）。これらは、当時仏舍利信仰が大陸で盛んであったことを伝えるものである。

なお、『在唐送進録』の「別物 封皮箱一合」に、『般若理趣經』一卷、『梵字金剛經』、『梵本般若心經』、『梵字金剛經論頌』、『梵語雜名』、『十七壇様』、『護摩壇様』、『胎藏手印様』、『五秘密儀軌』があり、『新求目録』ではこのうち「十七壇様」を欠いているが、『大樂金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣積』<sup>(26)</sup>、『唐梵対訳金剛般若經』<sup>(27)</sup>、『唐梵対訳金剛般若經論頌』<sup>(59)</sup>、『梵語雜名』<sup>(97)</sup>、『供養賢聖等七種壇様』<sup>(136)</sup>、『胎藏曼荼羅手印様』<sup>(140)</sup>、『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』<sup>(12)</sup>に相当している。個々の将来物の意義については石田氏が詳細に検討しているが、『在唐送進録』の末尾に「全封不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>開出<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>一思<sub>一</sub>故、不<sub>三</sub>是惜<sub>二</sub>法門<sub>一</sub>者。」とあり、延暦寺の僧らに対して開封を戒めたものであることから、揚州において最も重要な将来物であったといえる。

## 第二節 赤山・五台山における求法と将来物蒐集の状況

### (1) 赤山法華院での求法

揚州求法を終えた円仁は、『巡礼記』によると開成四年（八三九）二月二十一日、帰国を目指す遣唐使一行とともに新羅船に乗船し、運河を遡って楚州に向かった。この後の経緯は第一章においてすでに述べたが、再度その概略を振り返ってみると、円仁が当初入唐の目的としていた天台山での求法は、勅許がついに下りなかったため叶わず、遣唐使とともに帰国を余儀なくされる場所であった。数度の残留計画が失敗に終わるものの、求法の継続を諦めきれなかった円仁は、同年四月五日に求得の法門一籙及び両部曼荼羅、壇様などを皮の大箱一合に入れて第八船頭伴宿禰に託し、弟子僧惟正・惟曉及び水手の丁雄満とともに下船を決行した。しかし、同日中に宿城村に着き、留住が官家の知るところとなり、四月八日に対面した遣唐使第二船の一行とともに帰国せざるを得ない状況となった。六月七日、一行を乗せた船が文登県清寧郷赤山村に停泊したのを好機として、翌八日円仁は山裏に建つ赤山法華院に登った。

七月二十三日、赤山法華院にて「聞導、向レ北巡礼有ニ五臺山」。去レ此二千余里、計南遠北近。又聞有ニ天台宗和尚法号志遠・文鑑座主、兼天台玄素座主之弟子。今在ニ五臺山修ニ法花三昧、伝ニ天台教迹。（中略）語話之次、常聞ニ臺山聖跡、甚有ニ奇特、深喜レ近ニ於聖境。暫休下向ニ天台之議上、更發下入ニ五臺之意上。仍改ニ先意、便擬ニ山院過レ冬、到レ春遊行、巡ニ礼臺山。（小野二、七一―七二頁）とあり、赤山より北に向かつて二千里向かった地に五台山があり、志遠（七六八―八四四）・文鑑（生没年不詳）座主が法華三昧を修し天台教学を伝えている聖跡であることを聞かされ、そこで当初の天台山求法の計画を中断し、赤山で越冬した後、五台山を

巡礼することを計画したのであった。

七月二十八日条に見られる文登県公署から清寧郷への公文書には、七月二十日の日付が記された円仁の牒が引用されており、それには「縁<sup>ニ</sup>朝貢使早帰<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>相随帰国<sup>一</sup>。」（小野二、八一頁）とあり、遣唐使が早期に帰国したため、ともに帰国することができなかつたと述べられている。上述のように、七月三十一日にも遣唐使と面会しており、求法を続けるための残留工作が無事成功したことが分かる。赤山での求法に関する記述はわずかであるが、『巡礼記』から拾ってみると、将来物に関連する記述は、八月十六日条において「為<sup>ニ</sup>惟正・惟曉<sup>一</sup>、始読<sup>ニ</sup>因明論疏<sup>一</sup>。」（小野二、九六頁）とあり、弟子僧らのために『因明論疏』の講義を行っているが、これは『新求目録』の『因明入正理論疏』三巻 基撰（「長安将来物一覧表」<sup>404</sup>）、『因明入正理論疏』一卷 清邁撰（同、<sup>405</sup>）に相当するものである。本書は、『大正蔵』（四四巻、一一a）に収録されており、陳那著・義浄訳『因明正理論』（『大正蔵』三二巻、六a）を簡潔にまとめた商羯羅主（六世紀前半）著、玄奘（六〇二―六六四）訳『因明入正理論』一卷（『大正蔵』三二巻、一一a）を、玄奘の弟子基、靖邁が注釈を施したものであり、中国・日本において因明研究の祖典とされている。

この後、円仁は九月十二日条において長安の章敬寺から来ていた新羅僧法清を五台山巡礼の同行者とすべく、祠部に牒を提出し公驗の発行を請うている。この縁によるものか、章敬寺は後に長安にて訪ねることになる寺院である。十一月十六日には新羅式の礼懺（礼仏懺悔）、十一月二十二日には赤山講經儀式・新羅誦經の儀式が行われており、新羅風の寺院であることを伝えている。

開成五年（八四〇）二月二十日、円仁は押衙からの公驗の発給を待ちながら赤山法華院主法清らと辞別し、五台山を目指し北に向かって出発した。なお、二十二日条には、新天子（武宗、八一九―八四六）の即位を記している。二十四日、文登県から登州都督府へ宛てた公驗が発行された後、一日六十里前後を歩き村々の寺院や俗家に宿泊しているが、しばしば飯食の提供を受けられないこともあるなど、辛苦の旅の始まりであつた。二十八日には廬

山寺にて登州刺史の設けた齋に参加しているが、そこで「寺主僧一行表歎。」（小野二、二三〇頁）の語が見られ、寺主が「供養の言葉をのべ仏名や經典を曲調をつけて唱うる」表白歎仏の義（小野二、二三二頁）を行っている。将来目録には、長安求得の『国忌表歎文』一卷（「長安将来物一覧表」<sup>449</sup>）があり、後に長安にて国忌の際に同様の儀式が行われたのであろう。

三月七日、登州開元寺に到り、「仏殿西廊外僧伽和尚堂内北壁上、画西方浄土及補陀落浄土。」（小野二、二七七頁）とあり、僧伽和尚堂の壁に阿弥陀仏の西方浄土、観音菩薩を中心とした補陀落浄土が描かれていることを記録している。揚州でも僧伽和尚影を求得していたが、登州においても僧伽和尚の信仰が盛んに行われていたことを伝える記述である。三月二十一日には青州府の龍興寺に到って宿泊し、二十一日寺内にて「見幕府判官、姓簫名慶中。」（小野二、三二三頁）とあり、節度使簫慶中と面会している。彼について注意すべきことは、三千院本『慈覚大師伝』に「幕府判官亦同労問。然此判官姓簫名慶中、能解禪門、受三師師相伝法。」以三此相伝、付三嘱和尚。」（『続天台宗全書』史伝二、四九頁上）とあり、簫慶中が円仁に禅門を付嘱したと述べていることである。『巡礼記』の翌二十三日条に、「早朝、赴三簫判官請、到宅喫粥。（中略）判官解三仏法、有三道心。」愛三論義、見三遠僧、慇懃慰問。」（小野二、三一九頁）とあり、簫判官は仏法を理解し道心があり、論義を好むと記されているものの、禅門付嘱を受けたかどうかは明らかではない。

四月六日には、「到三醴泉寺一断中。齋後巡三礼寺院、礼三拝誌公和上影。」在三瑠璃殿内一安置。（中略）誌公和上一四の影像に礼拝している。宝誌和尚は六朝時代の奇行僧として知られるが、唐代に奇蹟が付加され、十一面観音化身説が加わったとされる（小野二、三五二頁）。上述の和尚信仰に関する将来物は、後述するが長安で求得している。

## (2) 五台山竹林寺での求法と将来物蒐集

開成五年(八四〇)四月二十三日、円仁は劉使普通院(巡礼者のために設置された宿泊施設)に到り、「便遇<sub>下</sub>五臺山金閣寺僧義深等往<sub>ニ</sub>深州<sub>一</sub>求<sub>レ</sub>油<sub>帰</sub>山<sub>上</sub>。五十頭驢、駄<sub>ニ</sub>油麻油<sub>一</sub>去。」(小野二、四〇二頁)とあり、五台山の金閣寺から油を求めて来た僧侶らと出会っているが、この金閣寺は後に円仁も向かうことになる寺院である。

険しい旅を経て円仁がようやく五台山を望み見ることができたのは四月二十八日のことであつた。この時の様子を、「巳時、到<sub>ニ</sub>停点普通院<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>院中<sub>一</sub>、向<sub>ニ</sub>西北<sub>一</sub>望<sub>コ</sub>見中台<sub>一</sub>、伏<sub>レ</sub>地礼拝。此即文殊師利境地。五頂之円高、不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>樹木<sub>一</sub>、状如<sub>レ</sub>覆<sub>ニ</sub>銅盆<sub>一</sub>。望<sub>レ</sub>遥之会、不<sub>レ</sub>覺流<sub>レ</sub>涙。」(小野二、四一九頁)と記し、中台に向かつて礼拝し思わず涙を流している。停点普通院に入つた後、「礼<sub>コ</sub>拝文殊師利菩薩像<sub>一</sub>。因見<sub>ニ</sub>西亭壁上<sub>一</sub>。題云、日本国内供奉翻經大德靈仙、元和十五年九月十五到<sub>ニ</sub>此蘭若<sub>一</sub>云々。」(小野二、四一九頁)とあり、日本僧靈仙も元和十五年(八二〇)にこの普通院に到つたことが分かるが、靈仙は後述するように五台山靈境寺に住していたことがあるなど、五台山と密接な関わりを持つ日本僧であつた。円仁はこの日の記述を以下のように結んでいる。「自<sub>ニ</sub>廿三日申時<sub>一</sub>、入山、至<sub>ニ</sub>于今日<sub>一</sub>。入<sub>ニ</sub>山谷<sub>一</sub>行、都經<sub>ニ</sub>六日<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>尽<sub>ニ</sub>山源<sub>一</sub>、得<sub>レ</sub>到<sub>ニ</sub>五臺<sub>一</sub>。自<sub>ニ</sub>去二月十九日離<sub>ニ</sub>赤山院<sub>一</sub>、直至<sub>ニ</sub>此間<sub>一</sub>。行<sub>ニ</sub>二千三百余里、除<sub>コ</sub>却虚日<sub>一</sub>、在<sub>レ</sub>路行、正得<sub>ニ</sub>三卅四日<sub>一</sub>也。慙愧、在<sub>レ</sub>路並無<sub>ニ</sub>病累<sub>一</sub>。」(小野二、四一九頁)と述べ、<sup>14</sup>二月十九日に赤山法華院を出発してから四月二十八日までの間、円仁の計算によると四十四日間で二千三百余里(約千二百八十八キロ)を歩き、その間幸いにも病氣患いをすることもなく、無事文殊菩薩の住まう聖地に辿り着いた喜びを綴っている。

円仁が五台山に到着したところで、『新求目録』と『巡礼記』を主な史料として五月一日から七月四日までの約二ヶ月間行つた円仁の五台山における求法と将来物蒐集の状況について考察してみよう。なお、円仁将来物について傍線(―)を付し、その下の(―)内に、「付表②『入唐新求聖教目録』所掲の円仁五台山将来物一覧表」

（以下「五台山将来物一覧表」）の番号を記した。

付表②『入唐新求聖教目録』所掲の円仁五台山将来物一覧表

凡 例

- 一、本表は第二章の『入唐新求聖教目録』の青蓮院本の翻刻に基づいて作成したものである。なお、この一覧表は第二章所載の512～548（一五八―一六〇頁）に相当している。
  - 二、異体字や旧字は常用字体に改め、青蓮院本に誤りが見られる場合は修正を加え、（ ）で補足した。
  - 三、表下段の「訳者・撰者等」の欄は、『新求目録』によって記載し、（ ）は筆者が補足した。訳者・撰者については人名のみとした。
  - 四、現存する将来物は『大正新脩大藏経』（「大正」）、『大日本統藏経』（「統藏」）の巻数と頁数を記した。
  - 五、青蓮院本のみ記載の将来物は「―」を用いて表した。
- 『巡礼記』に記載の将来物については、番号を□で囲んだ。

番号	将来物の名称			巻数	撰者等	『大正』・『統藏』
1	文殊所説宝蔵陀羅尼經			一卷	慧思撰	大正 46 卷 627 c
2	無諍三昧法門			二卷	智顗撰	統藏 2・4・1・37
3	三觀義			二卷		



23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
天台智者大師遺旨并与晋王書	大唐代洲五臺山大華嚴寺般若院比丘貞素所習天台智者大師教迹等目錄	淨土五会念仏略法事儀讚	請賢聖儀文并諸雜讚	皇帝降誕日於麟德殿講大方広仏華嚴經玄義	円教六即義	随意三昧	〔文殊所説宝藏陀羅尼經〕	四十二字門	〔達磨碑文〕	臺山記	天台大師手書	大乘顯正破疑決	勝鬘經疏義私抄	法華助記輔略抄	六妙門文句 釈上宮疏	涅槃經玄義文句	淨名經疏科目	行方等懺悔法	小止觀
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷	一紙	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷 下卷
智顗		法照述		（静居）	慧思撰	慧思撰	慧思撰	慧思撰				道瞻述	明空述			（灌頂撰）		智顗撰	智顗撰
大正 46 卷 809 c	大正 47 卷 474 c		大正 36 卷 1064 c		統藏 2 ・ 3 ・ 4 ・ 344							統藏 1 ・ 30 ・ 4 ・ 321	統藏 1 ・ 56 ・ 2 ・ 150						大正 46 卷 462 a

24	荊溪和上在仏隴無常遺旨	一卷		
25	諫三禪和乘車子歌	一卷	恵化寺超律	
26	思大師歌餞智者臺山并智者酬思大師歌	一卷		
27	思大禪師酬鵲山覺禪師讚老詩	一卷		
28	南岳思大和尚德行歌	一卷		
29	達摩和尚五更転	一卷	玄奘	
30	法宝義論	一卷	稠	
31	羅什法師十四利無行	一卷		
32	大師弘教誌	一卷		
33	五臺山大聖竹林寺釈法照得見臺山境界記	一卷		
34	沙門道超久処臺山得生弥勒内宮記	一卷		
35	五臺山大厯靈境寺碑文	一卷		
36	五臺山土石二十九 土石各十九	一卷		
37	〔柴木一条〕	一卷		

開成五年（八四〇）五月一日円仁は、「從ニ停点ニ西行十七里、向レ北過ニ高嶺ニ、十五里行、到ニ竹林寺ニ断中。齋後巡リ礼寺舎ニ、有ニ般舟道場ニ。曾有ニ法照和尚ニ、於ニ此堂ニ、念仏。有レ勅、諡為ニ大悟和上ニ、遷化来ニ二年。今造レ影安コ置堂裏ニ。」（小野二、四二八頁）と記している。すなわち、停点普通院を出発して竹林寺（五台山台懷鎮西方）に到着しているが、この竹林寺における求法は、後に訪ねる大華嚴寺と合わせて円仁の五台山

求法の中心となる。この日、斎の後に般舟道場を見聞し、二年前（開成三年）に遷化したと『巡礼記』に記す法照和尚（一七六―一七六六）がここで念仏を行っていたことについて述べている。「般舟道場」は、法照の師である承遠（七一―八〇二）の南岳（湖南省衡山）における創始を踏襲したものであり（『南嶽弥陀和尚碑并序』<sup>15</sup>）、般舟三昧を行うための道場であった。

法照和尚については、根本史料である彼の撰述『浄土五会念仏誦經觀行儀』（以下『觀行儀』と略す）巻中において、

永泰二年四月十五日、於<sub>二</sub>南岳弥陀臺<sub>一</sub>、広発<sub>二</sub>弘願<sub>一</sub>。（中略）毎夏九旬、常入<sub>二</sub>般舟念仏道場<sub>一</sub>。其夏以為<sub>二</sub>初首<sub>一</sub>、既發願竟。即入<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>、勇猛虔誠。至<sub>二</sub>第二七日夜<sub>一</sub>、（中略）正念仏時、有<sub>二</sub>一境界<sub>一</sub>。忽不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>道場屋舎<sub>一</sub>。唯見<sub>三</sub>五色光明雲臺<sub>一</sub>、弥<sub>二</sub>滿法界<sub>一</sub>、忽見下一道金橋、從<sub>二</sub>自二面前<sub>一</sub>、徹<sub>二</sub>至西方極樂世界<sub>一</sub>、須臾即至<sub>中</sub>弥陀仏所<sub>上</sub>。頭面作<sub>レ</sub>礼阿弥陀仏所<sub>一</sub>、頭面作礼、阿弥陀仏歡喜微笑。（中略）法照白<sub>レ</sub>仏言、有<sub>二</sub>何妙法<sub>一</sub>。唯願説<sub>レ</sub>之。唯願説<sub>レ</sub>之。仏言、有<sub>二</sub>一無価梵音五会念仏法門<sub>一</sub>。正興<sub>二</sub>彼濁惡世<sub>一</sub>。今時末法一切衆生、機感相応、聞<sub>二</sub>汝暫念<sub>一</sub>、皆悉發心。如<sub>レ</sub>是無量壽經説<sub>二</sub>宝樹五音声<sub>一</sub>。即斯五会仏声是。以<sub>二</sub>是因縁<sub>一</sub>、便能称<sub>二</sub>念仏名<sub>一</sub>、報<sub>二</sub>尽定<sub>一</sub>生我國<sub>一</sub>。汝等未来一切貧苦衆生、遇<sub>二</sub>斯五会念仏無価宝樹珠<sub>一</sub>、貧苦皆除。（『大正藏』八五卷、一二五三b―c）

とある。すなわち、法照自らの体験として、唐永泰二年（七六六）四月十五日に南岳弥陀台において広く弘願を起こし、毎夏九旬（九十日）の間、常に般舟念仏道場に入つて、念仏三昧を修していたところ、第二七日（十四日目）の夜、五色の光明雲臺が法界に満ち、たちまち一道金橋が面前より西方極樂世界に徹至するを見て、須臾に阿弥陀仏の御許に到り、『無量壽經』による「一無価梵音五会念仏法門」を親授されたことを述べているのである。

この法照と五台山竹林寺との関連については、延一撰『広清涼伝』巻中に、

釈法照者、本南梁人也。未<sup>レ</sup>詳<sup>二</sup>姓氏<sup>一</sup>。唐大曆二年二月十三日、南嶽雲峯寺食堂内食<sup>レ</sup>粥、照<sup>コ</sup>向鉢中<sup>一</sup>、見<sup>二</sup>五臺山<sup>一</sup>。仏光寺東北一里余、有<sup>レ</sup>山。山下有<sup>レ</sup>澗。澗北有<sup>二</sup>一石門<sup>一</sup>。自覺<sup>三</sup>身入<sup>二</sup>三石門<sup>一</sup>。行<sup>二</sup>五里許<sup>一</sup>、見<sup>二</sup>一寺<sup>一</sup>。題云<sup>二</sup>大聖竹林之寺<sup>一</sup>。久之方隱、心極駭異。廿七日辰時、還<sup>コ</sup>向鉢中<sup>一</sup>、尽見<sup>二</sup>五臺山華嚴寺<sup>一</sup>。（『大正藏』五一卷、一一一四a）。

とある。これによると、法照は大曆二年（七六七）に南岳雲峰寺の食堂にて鉢の中に五台山を見、さらに「大聖竹林之寺」と題する寺院を感得したことを記している。この勝相の感見と白光の導きによってこの地に到り、寺院を建立したのが、竹林寺創建の縁起として『広清涼伝』に伝えられている。

五月二日条には、「入<sup>二</sup>貞元戒律院<sup>一</sup>。（中略）竹林寺有<sup>二</sup>六院<sup>一</sup>。律院・庫院・花嚴院・法花院・閣院・仏殿院。一寺都有<sup>二</sup>三冊来僧<sup>一</sup>。此寺不<sup>レ</sup>属<sup>二</sup>五台山<sup>一</sup>。」（小野二、四三三―四三四頁）とあり、竹林寺は六院からなる寺院であった。この日はそのうちの貞元戒律院を見学しているが、この戒律院は五台山の戒壇であった。また、この竹林寺は五台山に属していないと記しているが、円仁の弟子僧惟正・惟曉が受戒を行った開成三年（八三八）十月十九日条に「大唐太和二年以来、為<sup>四</sup>諸州多有<sup>三</sup>密与<sup>二</sup>受戒<sup>一</sup>、下<sup>コ</sup>符諸州<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>許<sup>二</sup>百姓剃髮為<sup>一</sup>僧。唯有<sup>二</sup>五臺山戒壇一処、洛陽終<sup>（マヤ）</sup>山瑠璃壇一処<sup>一</sup>。」（小野一、二四一頁）とあり、唐代に戒壇が設置されたのは五台山及び嵩山の会善寺瑠璃殿のみであったことから、当時国家より公認された戒壇は洛陽嵩山（河南省登封市）及び五台山であり、竹林寺は戒壇を持つ勅建寺院であったことが知られる（小野二、四四〇頁）。

円仁は、竹林寺に止住後の五月五日に寺内に設けられた七百五十僧の齋に参加し、「竹林寺齋礼仏式」（無遮会）の後「七十二賢聖供養会」が行われたことを次のように記録している。

次奉<sup>コ</sup>請七十二賢聖<sup>一</sup>、一々稱名。每<sup>二</sup>三稱<sup>レ</sup>名竟<sup>一</sup>、皆唱<sup>下</sup>唯願慈<sup>コ</sup>悲哀<sup>コ</sup>愍我等<sup>一</sup>、降<sup>コ</sup>臨道場<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>我供養<sup>一</sup>之言<sup>上</sup>。立礼七十二遍、方始下<sup>レ</sup>座。更有<sup>二</sup>法師<sup>一</sup>、登<sup>レ</sup>座、表歎念仏、勸<sup>コ</sup>請諸仏菩薩<sup>一</sup>云、一心奉請大師尺迦牟尼仏・一心奉請当来下生弥勒尊仏、十二上願薬師瑠璃光仏・大聖文殊師利菩薩・大聖普賢菩薩・一万菩

薩。首皆云「一心奉請」。次同音唱「散花供養之文」。音曲数般。次有「尼法師」、又表歎等一如「僧法師」。次僧法師与「諸僧」同音唱讚了。便打「蠡鉞」、同音念「阿弥陀仏」、便休。次尼衆替「僧」且如「前」。如「是相替讚」歎仏、「直到二半夜」。事畢俱出「道場」帰散。其奉請及讚文、写取在「別」。(小野二、四四二頁)

ここで、「同音念「阿弥陀仏」と記されているのが法照流の五会念仏を示すものとして注目される。<sup>16</sup>この念仏については、円仁将来の『浄土五会念仏略法事儀讚』一卷 法照述(「五台山将来物一覽表」21)に、

問曰、五会念仏出「在二何文」。答曰、大無量寿経云、(中略)清風時発出「五会音声」。微妙宮商自然相和、皆悉念「レ」仏念「レ」法念「レ」僧。其聞「レ」音者得「二」深法忍、「住二」不退転「一」至「レ」成「二」仏道「一」。(中略)此五会念仏声、勢点「二」大尽「一」、長者即是緩念、点「二」小漸短「一」者、即是漸急念、須「レ」会「二」此意「一」。第一会平声緩念「二」南無阿弥陀仏「一」。第二会平上声緩念「二」南無阿弥陀仏「一」。第三会非緩非急念「二」南無阿弥陀仏「一」。第四会漸急念「二」南無阿弥陀仏「一」。第五会四字転「レ」急念「二」阿弥陀仏「一」。五会念仏竟即誦「二」宝鳥諸雜讚「一」。(『大正蔵』第四七卷、四七六a—c)

とあり、五会念仏とは先の『浄土五会念仏誦経観行儀』にも示されているように、『大無量寿経』に基づいたもので、第一回目は平声で緩やかに南無阿弥陀仏と唱え、第二回目は声を高くし緩やかな調子をつけ、第三回目は緩でもなく急でもなく唱え、第四回目は次第に速く唱え、第五回目は「阿弥陀仏」の四字を急速で唱えると記されている。この五会念仏は後世叡山の浄土教に大きな影響を与えたものとして注目される。五月五日条の記述は、「其奉請及讚文、写取在「別」。(小野二、四四二頁)と締めくくっているが、この写し取った奉請と讚文とは将来物の『請賢聖儀文并諸雜讚』一卷(20)及び上述の『浄土五会念仏略法事儀讚』(21)のことを指しているであろう。法照に関する典籍は、他に『五臺山大聖竹林寺釈法照得見臺山境界記』一卷(33)を将来しており、竹林寺で求得したものと見られる。

### (3) 大華嚴寺での求法と将来物蒐集

円仁は、開成五年（八四〇）五月十六日、竹林寺より二十里歩いた後大華嚴寺に到り、次のように述べている。齋後入二涅槃院一、見下賢座主於二高閣殿裏一、講中摩訶止観上。有二冊余僧一、列坐聴講。便見二天台座主志遠和上一、在二講筵一聴二止観一。堂内莊嚴精妙難レ名。座主云、講二第四卷一畢、待二下講一、到二志遠和上房一礼拝。和上慰問慇懃。法賢座主從二西京一新來。文鑑座主久住二此山一。（中略）志遠和上自説云、日本国最澄三藏貞元廿年入二天台一求法。台州刺史陸公自出二紙及書手一、写二数百卷一与二澄三藏一。三藏得レ疏却ニ帰本国一云々。便問二日本天台興隆之事一。粗陳三南岳大師生二日本之事一。大衆歎喜不レ少。遠座主聴レ説下南岳大師生二日本一弘レ法之事上歎喜。大花嚴寺十五院僧、皆以二遠座主一為二其主座一。不レ受二施利一、日唯一餐、六時礼懺不レ闕、常修二法花三昧一。一心三観、為二其心腑一。（小野二、四六〇頁）

高閣殿にて法賢座主が『摩訶止観』の講義を行う中、列席する僧侶の中に天台座主志遠和上（七六四―八四四）の姿もあった。法賢座主は西京（長安）より来た僧侶であること以外未詳であるが、志遠和上については、『宋高僧伝』卷七（『大正』五〇・七四五b）、『広清涼伝』卷下（『大正』五一・一一一九b）などに伝記が見えている。この日の記述には、長年五台山に住しているという文鑑座主の名も見られる。志遠と文鑑の年齢は、三千院本『慈覚大師伝』に「然彼五台山多伝二天台教法一。有下志遠和尚、玄鑑和尚各各年及二八十一、盛伝二摩訶止観并玄疏等一、学徒数百上矣。」（『続天台宗全書』史伝二、五〇頁上）とあり、ともに当時八十歳位であり、天台の『摩訶止観』ならびに『玄疏』などを伝え、学徒は数百人に及んでいたことが記されている。

この日、志遠座主は円仁に対して、「志遠和上自説云、日本国最澄三藏貞元廿年入二天台一求法。台州刺史陸公自出二紙及書手一、写二数百卷一与二澄三藏一。三藏得レ疏却ニ帰本国一云々。」（小野二、四六〇頁）と述べて、貞元二十年に入唐した最澄が台州刺史陸淳（一八〇五）より数百卷の義疏を与えられたことを語っている。この点については最澄伝の根本史料である『叡山大師伝』に、

時台州刺史陸淳延<sup>二</sup>天台山修禪寺座主僧道邃<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>台州龍興寺<sup>一</sup>、闡<sup>レ</sup>揚天台法門摩訶止觀等<sup>一</sup>。即便刺史見<sup>二</sup>求法志<sup>一</sup>、隨喜云、弘<sup>レ</sup>道在<sup>レ</sup>人、人能持<sup>レ</sup>道。我道興隆今當時矣。則令<sup>三</sup>邃座主句当<sup>二</sup>写<sup>一</sup>天台法門<sup>一</sup>。纔書写已、卷数如<sup>レ</sup>別。邃和上親開<sup>二</sup>心要<sup>一</sup>、咸決<sup>二</sup>義理<sup>一</sup>。（『傳教大師全集』五卷・付録一七頁）

とあり、最澄が陸淳の計らいにより、台州龍興寺において天台山修禪寺座主道邃を勾当として天台法門を写させ、さらに天台の心要を授かったと記されており、志遠の傳承は間違いないといえる。

また、この日の記述で注目すべきことは、円仁が志遠座主に南岳慧思の聖德太子後身説について語っている点である。この慧思後身説については、開成四年閏正月十九日に天台山禪林寺（修禪寺）の僧侶敬文が揚州開元寺を訪れ、幼年の頃天台山で入唐中の最澄を見たことを円仁に筆談で語っている。さらに、「最澄和尚、貞元廿一年、入<sup>二</sup>天台<sup>一</sup>、後歸<sup>二</sup>本國<sup>一</sup>。深喜<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>達。所<sup>レ</sup>將天台教法、彼土機縁多少。彼國當時儲君、云<sup>二</sup>是南岳示生<sup>一</sup>、令<sup>二</sup>後事宜不<sup>レ</sup>委<sup>一</sup>。」（小野一、三七九頁）と述べている。「儲君」すなわち聖德太子（五七四―六二二）が南岳慧思の轉生であることを語っており、当時天台山で傳承が行われていたことが窺える。

後身説に関する最古の史料は、思託の『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』とされている。その佚文が法空撰『聖德太子平氏伝雜勘文』に見えており、「和上便云、（中略）惠思禪師者乃降<sup>二</sup>生日本<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>聖德太子<sup>一</sup>也。」（『大日本仏教全書』七一、一八一a）とあり、鑑真和上が慧思の聖德太子轉生を語っている。真人元開（淡海三船、七二二―七八五）記『唐大和上東征伝』にも「大和上答曰、昔聞南岳惠思禪師遷化之後、託<sup>二</sup>生倭國王子<sup>一</sup>興<sup>二</sup>隆仏法<sup>一</sup>、濟<sup>二</sup>度衆生<sup>一</sup>。」（『大正藏』五一卷・九八八b）とあり、日本では飛鳥・奈良時代から伝説となっていたことが分かる。この傳承は、明空の『勝鬘經疏義私鈔』卷一に「其上宮王（中略）相伝云、是梁南嶽高僧思大禪師後身。」（『大日本統藏經』一、三〇、四、三二二頁上）とあり、古く中国でも行われていた。また、最澄門下である光定（七七九―八五八）撰『伝述一心戒文』に、最澄が弘仁七年（八一六）四天王寺の上宮廟に詣で、法華宗を伝え求めることを誓って詩文を呈し、「今我法華 聖德太子者、即是南嶽慧思大師後身也。」（『傳教大師全集』一卷、五九

一頁」と述べている。また、最澄の『顕戒論』巻上にも「南嶽大師、大唐得<sub>レ</sub>定、哀<sub>コ</sub>愍我国<sub>一</sub>、託<sub>コ</sub>生王家<sub>一</sub>、建<sub>コ</sub>立仏法<sub>一</sub>、利<sub>コ</sub>益有情<sub>一</sub>。」（『伝教大師全集』一卷、七八頁）と見え、最澄をはじめとする日本天台宗において慧思後身説を重視していたことが知られる。

志遠座主は布施を受けず戒行清潔で一日一食を守り、六時の礼懺を欠かさず、常に法華三昧を修し、一心三觀をその必要としていた。この法華三昧とは、『摩訶止觀』卷二修大行の項に「常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧」（『大正藏』四六、一一a）とあるうちの半行半坐三昧を指すが、それは智顗が修学時代に光州（河南省）大蘇山で南岳慧思禅師より法華三昧の行法を授かったことに起因する。これは、『法華經』安樂行品第十四、ならびに普賢菩薩勸発品第二十八及び『觀普賢菩薩行法經』に基づいて智顗が著した『法華三昧懺儀』（『大正藏』四六卷、九四九a―九五五c）に示された行法であり、二十一日間毎日晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時に十の行法を行う天台止觀の修行法である。比叡山には最澄が台州や天台山よりこの行法を相伝し、円仁が帰国後、『法華懺法』として改伝したと伝えている（寛平入道撰『慈覺大師伝』、『続天全』史伝二、六七頁上）。

開成五年（八四〇）五月十七日には、入唐時より携えていた「延曆寺未決三十条」（座主円澄の疑問）を志遠和上に呈上し決釈を請うているが、志遠和上は「見説天台山已決<sub>ニ</sub>此疑<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>合<sub>ニ</sub>更決<sub>一</sub>。」（小野三、三頁）と取り合わなかった。これは円仁とともに入唐し、開成四年二月二十七日楚州で円仁が留学僧円載に託した未決（「延曆寺未決三十条」及び「修禅院（第二世座主義真）未決」が天台山にてすでに決釈を得られたことを示している。その証拠に、五月十八日条で善住閣院にて「仍見<sub>下</sub>從<sub>ニ</sub>台州国清寺<sub>一</sub>将来書<sub>上</sub>、先於<sub>ニ</sub>楚州<sub>一</sub>付<sub>ニ</sub>留学僧円載上人<sub>一</sub>送<sub>ニ</sub>天台山<sub>一</sub>延曆寺未決卅条、国清寺修座主已通<sub>コ</sub>決之<sub>一</sub>。便請<sub>ニ</sub>台州印信<sub>一</sub>、刺史押印已了。修禅寺敬文座主具写送<sub>ニ</sub>臺山<sub>一</sub>、弘<sub>ニ</sub>天台諸徳<sub>一</sub>。兼日本国無行和上送<sub>ニ</sub>天台<sub>一</sub>書、及天台修座主通決已畢、請<sub>ニ</sub>州印信<sub>一</sub>之書、台州刺史批判与<sub>ニ</sub>印信<sub>一</sub>之詞、具写付来。」（小野三、二五頁）とあり、「延曆寺未決三十条」は開成四年正月十九日にも登場している禅



林寺の広修座主が通決し、さらに開成四年閏正月十九日、三月二日、三月四日に円仁と揚州にて面会していた敬文座主がこれを写し、諸大徳に広めるべく五台山に送ったものを円仁は直接見たということが分かる。これら二種の決答については、仲尾俊博氏の詳細な論考<sup>17</sup>があるので、それを踏まえて若干述べてみたい。広修については、『宋高僧伝』第三〇「唐天台山禪林寺広修伝」（『大正』五〇・八九五a）に、「開成三年日本国僧円載来レ躬請レ法。（中略）会昌三年癸亥歲二月十六日、終于禪林本寺一、俗寿七十三、法臘五十二、遷于神于金地道場一。」とあり、開成三年（八三八）に円載が天台山禪林寺の広修に教えを請うたことが伝記に見える。その後、広修は会昌三年（八四三）に七十三歳で没している。次に、「修禪院未決」について、小野氏は「義真の生前の疑問あるいは彼と関係あるもののごとく解釈される。（中略）修禪院未決というのは実は義真・光定・徳円その他無行などのものをふくめた雑問で数も十三ヶ条だけでなく、二十ヶ条に及んだことになる。円仁から円載に手交されたものはこれら諸疑問を一括したもので、その数は最低五十問已上だったとすべきであろう。」（小野一、四四四頁）と述べている。渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍総合目録』（通称『渋谷目録』一六五頁中段）によると、「日本天台録、義真問、維罽答」とあり維罽の決答となっている。このことについて、仲尾俊博氏は「現存のものが維罽の決答だとすると、広修のものは散逸してしまったが、或は広修・維罽の決答が類似していたために、整理の段階で一つに纏めたかも知れない。」<sup>18</sup>としている。

開成五年五月十七日条に戻ると、この日の夜円仁は菩薩堂院にて大聖文殊師利菩薩像を礼拝した後、「於菩薩堂前一、臨涯有三三間亭子」（中略）老宿曰、昔者日本国靈仙三蔵、於此亭子一、奉見一万菩薩一。（小野三、四四頁）と老宿からかつて唐僧靈仙が菩薩堂の前の亭子において一万菩薩（文殊菩薩の眷属）を見たことを聞いており、ここでも後述する靈仙の足跡を踏んでいる。さらに、この後閣院に到り玄亮座主に見えているが、彼は『法華経』と『天台疏』（『妙法蓮華經文句』）の講義を兼ねて行っていた。

これら大華嚴寺について、『巡礼記』には「朝座閣院講ニ法花經一、晚座涅槃院講ニ止観一。両院之衆互往來聴、

從二諸院一來聴者甚多。当寺上座僧洪基共二遠和上一同議、請二座主一、開二此二講一。実可レ謂二五臺山大花嚴寺是天台之流一也。」（小野三、五頁）と記しており、朝座は閼院にて『法華經』、晚座は涅槃院にて『止観』の二講座が二座主によつて開かれ、大華嚴寺は天台の法脈を受け継ぐ寺院であつたことが窺える。小野氏によると、「本来江南に栄えた天台宗が五臺でとくに重要な位置を占めるのは志遠の活動による」（小野三、一七頁）とされる。この日、円仁は善住閼院にあつた勅置の鎮国道場において天台宗の僧侶による『四分律』の講義にも参加しているが、上述の閼院の聴衆と合わせて皆志遠和上の門下であり、大華嚴寺において彼が中心的人物であつたことが窺える。

五月二十日、巡台を開始した円仁は、中台に向かつた後、西台頂に到り、台の西より五、六里の所に「文殊与維摩対談処」（小野三、一九頁）を見つけ、さらに巖前の六間の楼に安置されていた双獅子に乗つた文殊像及び維摩像の詳細な描写を行っている。文殊菩薩と在家居士の維摩詰（Vimalakirti、浄名）の対談は、代表的な漢訳である鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』（『大正藏』一四卷、五三七a）などによつて知られている。揚州でも円仁は『維摩經』に関する書物を数点将来しており、五台山では『浄名經疏科目』一卷（6）及び『浄名玄義』（十卷玄義）の別行本である『三観義』二卷（3）をもたらししている。また五台の諸処で天台の法華三昧が行われていたことについては、五月二十一日、北台頂の宋谷（北谷）において「曾有二僧一。依二天台智者法花三昧行法一礼懺、得レ見二普賢菩薩及多宝塔一之处。（小野三、四八頁）とあり、かつて一人の僧侶が法華三昧によつて礼懺を行つていたことを記している。『慈覚大師在唐送進録』によると、円仁は揚州にて『清涼山宋谷法師求法花三昧靈驗伝』二巻を得ている（「揚州将来物一覽表」<sup>104</sup>『法華靈驗伝』）が、この書物は五月二十一日条に見える宋谷の「一僧」が行法によつて得た靈驗が記録されているのであろう。また、開成四年七月二十三日条においても同様に法華三昧を修していた僧侶のことが記されている。

五月二十三日、東台を下りて鐘樓谷のほとりにある金剛窟に到り、ここで円仁は北インド僧仏陀波利（Buddha

「pat.」が文殊菩薩の化現によって入山を許されず、西国へ『仏頂尊勝陀羅尼經』（『大正藏』一九・三四九c）を取りに行った後、文殊菩薩の導きにより窟に籠もったという逸話を記録している。本經典は、唐代に杜行顥訳（『大正』一九・三五三a）、義浄訳（『大正』一九・三六一c）などの複数の異訳があり、当時幅広く信仰されていた。さらに、窟戸の楼上にあつた転輪藏（一切經を納める經藏）において「窟記」を開いており、それには文殊師利菩薩の逸話が記され、「摩利大仙の樂器」、「兜率天王の鐘」、「迦葉仏の銀篋篋」、「星宿劫第二仏の全身宝塔」、「振旦国の銀紙金書」の五功德が示されていた（小野三、六三―六四頁）。『新求目録』には『五臺山金剛窟收五功德記』一卷（「長安將來物一覽表」<sup>438</sup>）が見られるが、これは長安で求め得たものであり、窟記の内容を詳細に記したものであると考えられる。

次に、五台山における仏典蒐集の記録について見ていこう。五月二十三日の夜大華嚴寺に戻った円仁は、「遠和上及文鑑座主院、天台教述文書備足。廿三日、始写二天台文書日本国未<sub>レ</sub>有者。」（小野三、六四頁）とあり、この日天台典籍が備わっている志遠と文鑑の院で日本に未伝の典籍の書写を開始している。この後六月六日まで記述は見られず、六月二十九日条に「写二天台教述一畢。作二目錄一呈二遠和上一、令<sub>レ</sub>題二法諱一。」（小野三、八七頁）とあり、志遠に求得の天台典籍を記した目錄を呈上している。この三十七日間で『新求目録』に見える三十四部三十七巻のうち、天台関係の書物である『無諍三昧法門』二巻 南岳大師撰（「五台山將來物一覽表」<sup>2</sup>）、『三觀義』二巻 天台大師撰（同、3）、『小止觀』一卷下巻 天台大師撰（4）、『行方等懺悔法』一卷 天台（5）、『淨名經疏科目』一卷（6）、『涅槃經玄義文句』一卷（7）、『六妙門文句』一卷 釈上宮疏（8）、『法華助記輔略抄』二巻（9）、『勝鬘經疏義私抄』一卷 雜陽法雲寺明空述（10）、『天台大師手書』一紙（12）、『臺山記』一卷（13）、『四十二字門』二巻 南岳大師撰（15）、『隨自意三昧』一卷 臺山構波（17）、『円教六即義』一卷 南岳大師撰（18）、『大唐代洲五臺山大華嚴寺般若院比丘貞素所習天台智者大師教述等目錄』一卷（22）、『天台智者大師遺旨并与晋王書』一卷（23）、『荊溪和上在仏隴無常遺旨』一卷（24）、『思大師歌餞智者臺山并智者酬思大師歌』一卷（26）、『思

大禪師酬鵲山覺禪師讚老詩』一卷(27)、『南岳思大和尚德行歌』一卷(28)、『大師弘教誌』一卷(32)を大華嚴寺にて写したと考えられる。また、ここに見える「目録」とは『新求目録』中の五台山求得の一覽を指していると考えられ、後にこの日作成した目録を『新求目録』の一部としたのであろう。

六月七日、大華嚴寺に設けられた三日間の勅齋(勅使による勅額寺院における齋)において、『華嚴經』一部の転読が行われている(小野三、七八頁)が、寺名からも元来『華嚴經』を信仰する寺院であったと考えられる。古来五台山は北魏の頃より『華嚴經』との密接な繋がりがあったとされる(小野三、七九頁)が、すでにこの頃五台山における『華嚴經』の信仰は衰退しており、天台が盛行していたと見られる。

開成五年(八四〇)七月一日、長安へ向けて荷造りを行った円仁は、大華嚴寺の院僧らに別れを告げ金閣寺の堅固菩薩院に到っている。そこで、院僧より上述の靈仙がこの院に二年間滞在した後、七仏教誠院にて没し、自ら剥いで描いた手皮の仏画と造立された金銅塔が安置されていることを聞かされており、七月二日にこれらを見ている。また、この日数人の僧侶とともに金閣を開き、青色の獅子に乗った大聖文殊菩薩を礼拝し、普賢堂にて普賢菩薩像を礼拝している。普賢菩薩に関する将来物は五台山では見当たらないが、長安にて『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經』一卷 不空(「長安将来物一覽表」30)、『普賢金剛薩埵瑜伽念誦儀軌』一卷 不空(「長安将来物一覽表」50)、『普賢菩薩行願讚』一卷 不空(「長安将来物一覽表」105)、『普賢延命像』一鋪三幅苗(「長安将来物一覽表」483)などを持ち帰っており、普賢菩薩や普賢延命菩薩への関心が窺われる。特に普賢延命像は台密で信奉され、普賢延命大法として修されているが、この点については第四章で述べたい。

七月三日、南台頂より南に下り谷裏の七仏教誠院に赴き、渤海の僧侶貞素が記した「哭日本国内供奉大德靈仙和尚詩并序」を写し取っている。この詩文によると、靈仙は長慶二年(八二二)に五台に入室したとあるが、先述の『巡礼記』開成五年四月二十八日条によると、停点普通院の西亭の壁上の題には、元和十五年(八二〇)九月十五日にこの蘭若(五台山)に到ったと記されており、いずれが正しいかは定かではない。詩文には、「長慶五

年、日本大王遠賜<sup>二</sup>百金<sup>一</sup>、達至<sup>三</sup>長安<sup>一</sup>。」（小野三、一二四頁）とあり、靈仙は長慶五年（八二五）すなわち天長二年に日本大王（淳和天皇）より百金を下賜されたことが見える。この詩文及び靈境寺の老宿の話によると、靈仙は七仏教誠院に長らく滞在していたが、後に靈境寺浴室院において毒殺されており、この後円仁は南に三里歩いて大曆靈境寺に到っている。この靈境寺については、『巡礼記』に、

於<sup>二</sup>三寺三門西辺<sup>一</sup>、有<sup>二</sup>聖金剛菩薩像<sup>一</sup>。昔者於<sup>二</sup>太原・幽・鄭等三節度府<sup>一</sup>、皆現<sup>二</sup>金剛身<sup>一</sup>、自云我是樓至仏。身作<sup>レ</sup>神、護<sup>二</sup>仏法<sup>一</sup>、埋在地中<sup>一</sup>、積<sup>レ</sup>年成<sup>レ</sup>塵。再出現、今在<sup>二</sup>臺山靈境寺三門内<sup>一</sup>。三州節度使驚恠、具錄<sup>二</sup>相貌<sup>一</sup>、各遣<sup>レ</sup>使令<sup>レ</sup>訪。有<sup>二</sup>三金剛在三寺門左右<sup>一</sup>。其形貌体氣一似<sup>二</sup>本州所<sup>レ</sup>現体色<sup>一</sup>同。其使却到<sup>二</sup>本道<sup>一</sup>一報<sup>レ</sup>之。遂三州發<sup>レ</sup>使来、特修<sup>二</sup>旧像<sup>一</sup>、多有<sup>二</sup>靈驗<sup>一</sup>。具如<sup>二</sup>碑文<sup>一</sup>。写<sup>レ</sup>之在<sup>レ</sup>別。（小野三、一二五—一二六頁）

とあり、靈境寺三門の西辺にある聖金剛菩薩像について記し、その靈驗については碑文の如しと述べているが、ここに見える「碑文」は、『新求目録』の『五臺山大曆靈境寺碑文』一卷（「五台山将来物一覧表」35）に相当すると考えられる。

七月四日、大曆法花寺（仏光寺の東方二十五里、清涼嶺頸部の谿谷）に到った円仁は、神通和尚の影像を拝見して「依<sup>二</sup>天台法花三昧行法<sup>一</sup>修行、長念<sup>二</sup>法花經<sup>一</sup>。」（小野三、一四五頁）と記しており、この寺院においても神通によつて天台の法華三昧が行われていたことが窺える。この神通という僧侶について、小野氏は神会（六八四—七五八）の門に入つた神英（生没年不詳）との共通点を指摘しているが（小野三、一四八頁）、定かではない。

なお、『巡礼記』に記載があるものの、将来目録に記載がなく、将来できなかったと考えられる物についても述べておきたい。七月十三日、円仁は太原府に到り、「北門入、到<sup>二</sup>花嚴下寺<sup>一</sup>住。見<sup>二</sup>南天竺僧法達<sup>一</sup>、從<sup>二</sup>臺山<sup>一</sup>先在。自云、我是鳩摩羅什三藏第三代苗裔。（中略）彼供養主義円頭陀引到<sup>二</sup>此寺<sup>一</sup>。頭陀自從<sup>二</sup>臺山<sup>一</sup>為<sup>二</sup>同行<sup>一</sup>。」（小野三、一六六頁）とあり、頭陀僧義円の導きによつて到着した花嚴下寺にて、鳩摩羅什（三四四—四一三）の三

代目の苗裔というインド僧法達に出会っている。七月十八日には、「南天竺三藏法達辺、写<sub>レ</sub>取五臺山諸靈化伝碑等<sub>一</sub>。十八日、欲<sub>下</sub>向<sub>二</sub>長安<sub>一</sub>發去<sub>上</sub>、頭陀僧義円見雇<sub>二</sub>博士<sub>一</sub>、自出<sub>二</sub>帔襖子一領<sub>一</sub>、画<sub>二</sub>五臺山化現図<sub>一</sub>、擬<sub>三</sub>付伝<sub>二</sub>日本国<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>画畢<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>發去<sub>一</sub>。」（小野三、一七八頁）とあり、法達の元にて五臺山諸靈化伝碑を写し取り、また頭陀僧義円が博士を雇い、五臺山化現図を写し取らせたため、十八日に長安へ出發する予定であつたものの出發できないことが記されている。七月二十六日、「画<sub>二</sub>化現図<sub>一</sub>畢。頭陀云、喜<sub>下</sub>遇<sub>二</sub>日本国三藏<sub>一</sub>、同巡<sub>レ</sub>臺、同見中大聖化現<sub>上</sub>。今画<sub>二</sub>化現図一鋪<sub>一</sub>奉上。請將帰<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>供養、令<sub>二</sub>觀礼者發心<sub>一</sub>、有縁者同結縁、同生<sub>二</sub>文殊大会中<sub>一</sub>也。」（小野三、一八一—一八二頁）とあり、五臺山化現図が完成した後、義円が円仁に帰国後日本でこの図を供養するように頼んでいるが、これらの伝碑及び絵図は将来目録に見当たらない。この他五台山に関する将来典籍として、他に、『沙門道超久処臺山得生弥勒内宮記』一卷（34）が挙げられる。

最後に、比叡山で用いられた記録が残っている将来物について見てみると、円仁が持ち帰った「五臺山土石二十丸、土石各十丸」（36）は、寛平入道撰『慈覚大師伝』<sup>19</sup>によると、帰国後の貞観三年（八六一）比叡山の文殊楼院の壇の五方に埋めている。また、『新求目録』の青蓮院本に記載の「柴木一条」（37）は、『天台座主記』<sup>20</sup>の青蓮院本によると貞観三年（八六一）六月七日に制作された文殊像の胎内に納めたと伝えている。

### 第三節 長安における求法と将来物蒐集の状況

#### （1）開成五年（八四〇）の求法活動と将来物蒐集

七月二十六日、長安に向かつて五台山を出發した円仁は、八月二十日長安城の東の章敬寺前に到り、長安での求法を始めた。以下、円仁の長安における具体的な活動及び将来物について、『巡礼記』に基づき開成五年（八

四〇）から会昌五年（八四五）まで考察していきたい。円仁将来物については、（ ）内に「付表③『入唐新求聖教目録』所掲の円仁長安将来物一覧表」の番号を記した。

### 付表③『入唐新求聖教目録』所掲の円仁長安将来物一覧表

#### 凡 例

- 一、本表は第二章第三節に掲載した『入唐新求聖教目録』の青蓮院本の翻刻に基づいて作成したものである。なお、この一覧表は第二章所載の1511（二二九—一五八頁）に相当している。
- 二、異体字や旧字は常用字体に改め、青蓮院本に誤りが見られる場合は修正を加え、（ ）で補足した。
- 三、表下段の「訳者・撰者等」の欄は、『新求目録』によって記載し、（ ）は筆者が補足した。訳者、撰者等については人名のみとした。
- 四、現存する将来物の書目については、『大正新脩大藏経』（『大正藏』）、『大日本統藏経』（「統藏」）などの巻数と頁数を記した。
- 五、青蓮院本のみ記載の将来物は「」を用いて表した。
- 六、『巡礼記』に記載の将来物については、番号を□で囲んだ。

番号	将来物の名称
1	聖迦拏忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經
三卷	卷数等
不空	訳者・撰者等
	『大正藏』等

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
金剛頂經觀自在王如來修行法	大聖曼殊室利童子菩薩一字真言有二種	金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心真言一切如來蓮花大曼羅品	大毗盧遮那成仏神變加持經略示七支念誦隨行法	木槌經	大日經略撰念誦隨行法	五字陀羅尼頌	金剛頂超勝三界經說文殊五字真言勝相	不空羼索毗盧遮那仏大灌頂光真言	文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品	甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌	金剛頂經多羅菩薩念誦法	聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌	金剛壽命陀羅尼念誦法	金輪王仏頂要略念誦法	觀自在菩薩如意輪瑜伽	速疾立驗魔醯首羅天說迦樓(羅)阿尾奢法	仏為優填王說王法政論經	大威怒烏芻洪麼儀軌	金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一品一卷
不空	不空		不空	(失訳)	不空	不空	不空訳	不空	不空訳	不空訳	不空	不空	不空	不空	不空訳	不空訳	不空	不空訳	不空
19 卷 72 c		20 卷 30 c	18 卷 174 c	17 卷 726 a	18 卷 176 a	20 卷 713 b	20 卷 709 c	19 卷 607 a	21 卷 325 c	21 卷 42 a	20 卷 454 a	20 卷 6 b	20 卷 575 a	19 卷 189 a	20 卷 206 c	21 卷 329 b	14 卷 797 b	21 卷 135 c	20 卷 135 a



41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
大方廣花嚴經入法界品四十二字觀門	金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌(經)	金剛界瑜伽略述三十七尊心要	略記護摩事法次第	大樂金剛不空真実三昧經般若波羅蜜多理趣積	金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌	成就妙法蓮花經瑜伽觀智儀軌	仁王般若念誦法經	大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼	陀羅尼門諸部要目	金剛頂瑜伽護摩儀軌	金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經	阿閼如来念誦供養法	仏説一髻尊陀羅尼經	仏説大輪金剛總持陀羅尼印法	金剛頂蓮花部心念誦儀軌	仁王般若陀羅尼釈	金剛頂瑜伽降三世成就極深密門	金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌	金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
(不空訳)	不空	不空	惠琳述	不空	不空	不空	(不空訳)	不空	不空	不空訳	不空	不空	不空	不空	不空	不空	不空・遍智訳	不空	不空
19 卷 707 c	20 卷 72 a			19 卷 607 a	20 卷 513 c	19 卷 594 a	19 卷 520 a	20 卷 936 c	18 卷 898 c	18 卷 916 a	20 卷 528 a		20 卷 484 c		18 卷 299 b	19 卷 522 a	21 卷 39 b	20 卷 523 c	32 卷 572 b

60	59		58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42
受菩提心戒儀	大虛空藏菩薩念誦法	(金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法)	一字頂輪王念誦儀軌	一字頂輪王瑜伽經	瑜伽毘迦訖沙羅烏瑟尼沙斫訖羅真言安怛陀那儀則	瑜伽蓮花部念誦法經	仁王護國般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌	仁王般若經陀羅尼念誦儀軌序	金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成仏儀軌	仏説摩利支天經	普賢金剛薩埵瑜伽念誦儀軌	無量壽如來修觀行供養儀軌	金剛王菩薩秘密念誦儀軌	聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法	仏頂尊勝陀羅尼注義	如意輪菩薩真言注義	仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌經	觀自在菩薩如意輪念誦法儀軌	大方広仏花嚴經入法界品頓証毗盧遮那法身字輪瑜伽儀軌
一卷	一卷	一品一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
不空	不空		不空	不空	不空	不空	不空		不空	不空	不空	不空	不空	不空	不空		不空	不空	(不空訳)
18 卷 940 b	21 卷 603 a		19 卷 307 c	19 卷 313 b		20 卷 6 c	19 卷 513 c		19 卷 957 b			19 卷 67 b	20 卷 570 c	21 卷 73 a			19 卷 364 b	20 卷 203 c	19 卷 709 b

79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64		63	62	61
觀自在大悲成就瑜伽蓮花部念誦法門	七俱胝仏母准提陀羅尼念誦儀軌	七俱智仏母所説准提陀羅尼經	大藥叉女歡喜母并愛子成就法	大樂金剛薩埵修行成就儀軌	大乘緣生論	仏説一切如来金剛壽命陀羅尼經	大吉祥天女十二名号經	金剛頂瑜伽經十八会指帰	八大菩薩曼荼羅經	一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經	菩提場莊嚴陀羅尼經	十一面觀自在菩薩心密言儀軌經	金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌	瑜伽頂金剛頂經积字母品	文殊問經字母品	密三摩地礼懺文	金剛頂經金剛界大道場毗盧舍那如来自受用身内証智眷属法身異名仏最上乘秘	般若波羅蜜多理趣大安樂不空三昧真実金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅義述	略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門序
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	三卷	一卷	一卷	第十四一卷		一卷	一卷	一卷
不空	不空	不空	不空	不空	不空・ 鬱楞伽造	不空	不空	不空	不空	不空	不空	不空	不空	不空		不空		不空述	不空
20 卷 4 c	20 卷 180 b	20 卷 178 c	21 卷 286 a	20 卷 509 a	32 卷 486 b		21 卷 252 b		20 卷 675 a	19 卷 710 a	19 卷 668 b	20 卷 139 c	20 卷 535 b		14 卷 509 b		18 卷 335 c	19 卷 617 b	18 卷 287 c

98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87		86	85	84	83	82	81	80
仏頂尊勝陀羅尼呪	金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經	仏説十地經	金剛頂經瑜伽修習毗盧舍那三摩地法	金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經	金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品	修習般若波羅蜜菩薩觀(行)念誦儀軌	不動使者陀羅尼秘密法	大仏頂広聚陀羅尼經	葉衣觀自在菩薩經	出生無辺門陀羅尼經	般若波羅蜜多心經	(出生無辺門陀羅尼經)	花嚴長者問仏那羅延力經	仏説迴向輪經	仏説十力經	末利支提婆花鬘經	大方広如来藏經	大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經	仏説大孔雀明王画像壇儀軌
一卷	三卷	九卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	五卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	三卷	一卷
	不空	尺羅達摩訳	金剛智訳	金剛智訳	不空・遍智訳	不空	金剛智訳		不空	不空		不空		尸羅達摩訳	勿提提犀魚訳	不空	不空	不空	不空
	18 卷 207 a		18 卷 327 a	18 卷 253 c	21 卷 7 a	20 卷 610 c	21 卷 23 a	19 卷 155 b		19 卷 675 c	8 卷 848 a 等			19 卷 577 a	17 卷 715 c			11 卷 902 b	

118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99
雨宝陀羅尼經	毗沙門天王經一品	觀自在菩薩說普賢陀羅尼經	訶利帝母真言法	仏説三十五仏名礼懺文	仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經	除一切疾病陀羅尼經	能淨一切眼疾病陀羅尼經	底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法	一字奇特仏頂經	阿唎多羅陀羅尼阿嚕力品 第十四	仏説大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經	百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚	普賢菩薩行願讚	金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法 一品	大樂金剛不空真実三麼耶經般若波羅蜜多理趣品	金剛頂瑜伽念珠經	大方広曼殊室利經觀自在菩薩授記品 第三十四	金剛恐怖集会方広軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經	千手千眼觀世音菩薩広大円満無礙大悲心大陀羅尼神妙章句
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	三卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
不空	不空	不空	不空	不空		不空	不空	不空	不空	不空		不空	不空	不空	不空	不空	不空	不空	
20 卷 667 c	21 卷 215 a	20 卷 19 c	21 卷 289 b	12 卷 42 c	21 卷 464 b	21 卷 489 c	21 卷 490 a		19 卷 285 c	20 卷 23 b		13 卷 790 a	10 卷 880 a	20 卷 705 a	国 訳 密 教 經 軌 4	17 卷 727 c		20 卷 9 a	

138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119
仏母大孔雀明王經	大雲經祈雨壇法	大雲輪請雨經	大宝広博楼閣善住秘密陀羅尼經	金剛頂蓮花部心念誦儀軌梵本真言	撰大毗盧遮那成仏神変加持經入蓮花胎藏海会悲生曼荼羅広大念誦儀軌	金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣	仏説阿吒婆拘大元率将無辺神力随陀羅尼經	北方毗沙門天王真言法	内護摩十字仏頂梵本并布字法	慈氏菩薩所説大乘經生稻筭喻經	千手千眼觀自在菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼呪	千手千眼觀自在菩薩根本真言釈	普遍智藏般若波羅蜜多心經	穢跡金剛法禁百変法經	穢跡金剛説神通大満陀羅尼法術靈要門	大威力烏枢瑟摩明王經	金剛恐怖集会方広儀軌觀自在菩薩三世最勝心明王經	菩提場所説一字頂輪王經	穢麁梨童女經
三卷	一卷	二卷	三卷	二卷	三卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷		一卷	二卷		五卷	一卷
不空		不空	不空					不空		不空	金剛智訳		法月	阿質達霰訳	阿質達霰	阿質達霰訳		不空	不空
19 卷 415 a	19 卷 492 c	19 卷 484 c	19 卷 619 a	18 卷 65 a	39 卷 808 a	21 卷 178 a				16 卷 819 a			8 卷 849 a		21 卷 158 a	21 卷 142 b		19 卷 193 a	21 卷 293 c

158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139
摩利支天經	奇特最勝金輪 仏頂念誦儀軌法要	總釈陀羅尼義讚	觀自在菩薩如意輪陀羅尼	大毗盧遮那略要速疾門五支念誦法	金剛咒法	無動使者法中略出印契法次第	大梵天經觀世音菩薩呾地法品	建立曼荼羅及揀呾地法	聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法	千轉陀羅尼觀世音菩薩呪	遍照仏頂等真言	金剛吉祥大成就品	如意輪王摩尼跋陀別行法印	大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法	轉法輪菩薩摧魔怨敵法	文殊師利瑜伽五字念誦經修行教	施諸餓鬼飲食及水法并手印 不空三藏口決	觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌	仏説金剛頂瑜伽中略出念誦法
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	六卷
		不空	不空註義				不空	慧琳集	不空訳	智通訳	不空			淨智金剛訳			不空	不空	
								18卷 926a	21卷 73a	20卷 17b				20卷 784b	20卷 609b		21卷 466c		18卷 223b

178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159
玉呬怛多羅經	不空羼索神變真言經 第六第七	諸仏境界撰真実經	觀自在菩薩心真言念誦法	金剛頂瑜伽要略念誦儀軌法	略叙伝大毗盧遮那成仏神變加持經大教相承伝法次第記	略叙金剛界大教王經師資相承傳法次第記	大毗盧遮那成仏神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌	最上乘教授戒懺悔文	最上乘受菩提心戒及心地秘決	金剛頂經觀自在菩薩瑜伽修習三摩地法	大自在天法則儀軌	大聖天歡喜双身毗那夜迦法	聖觀自在菩薩根本心真言觀布字輪觀門	觀自在菩薩心真言一印念誦(法)	拔濟苦難陀羅尼經	金剛頂瑜伽要決	金剛頂瑜伽三十七尊出生義	大隨求八印法	金剛頂瑜伽蓮花部心念誦儀中略集閑鎖要妙印
三卷	二卷	三卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷		一卷	一卷	一卷	一卷	一本
		般若訳	不空		海雲集記	海雲記	法全	不空	善無畏訳・一行記	馬烈述		不空	不空						
	20 卷 227 a	18 卷 270 a	20 卷 32 a		51 卷 783 c		18 卷 108 c				秘密儀軌集 2	21 卷 296 a		20 卷 32 a	21 卷 912 b		18 卷 297 c	20 卷 649 b	



197	196	195	194	193	192	191	190	189	188		187	186	185	184	183	182	181	180	179
梵字菩提莊嚴陀羅尼	梵字仏頂尊勝陀羅尼	金剛忿怒速疾成就真言	仏説普遍焰鬘清淨熾盛思惟宝印心無勝総持随求大明陀羅尼自在陀羅尼功能	金剛頂大教王金剛名号	胎藏教法金剛名号	大毗盧遮那胎藏經略解真言要義	蘇悉地羯羅供養法	毗盧遮那五字真言修習儀軌	金剛童子持念經	略釈	金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經初品中六種曼荼羅尊像標熾契印等図	降三世大会中觀自在菩薩説自心陀羅尼經	熾盛光威徳仏頂念誦儀軌	電光熾盛可畏形羅刹斯金剛最勝明經	大輪金剛修行悉地成就及供養法	仏説無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法	大菩提心随求陀羅尼一切仏心真言法	毗那耶律藏經	慈氏菩薩略修誡念誦法
一本	一本	一本	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷	一卷		一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷
				義操	義操		善無畏	不空			金剛智訳				金剛智訳	阿地瞿多訳			
					18 卷 203 b				21 卷 133 b						21 卷 166 b	21 卷 130 a	秘密儀軌集 7	18 卷 773 a	20 卷 590 a

215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203		202	201		200	199	198
梵字羯磨部一百八名讚	唐梵兩字語論	〔梵語千(字)文〕	一切如來白傘蓋大仏頂陀羅尼	降三世五字真言	梵字文殊師利菩薩八字真言	梵字文殊師利菩薩真言	梵字青頸觀音小心真言	梵字七俱胝仏母真言	梵字仏眼真言	梵字三界無能勝真言	梵字馬頭觀世音心真言	梵字白傘蓋仏頂真言	(梵字烏枢洩摩心中心真言一本)	梵字烏枢洩摩心真言	梵字軍荼利金剛心真言	(梵字軍荼利根本真言一本)	梵字馬頭觀自在菩薩心真言	梵字心中心真言	梵字心真言
一本	一卷	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本		一本	一本		一本	一本	一本
	不 空	義 淨																	
		54 卷 1190 a																	

235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216
梵字金剛王中九尊真言	梵字四無量真言	梵字十波羅蜜真言	梵字二十天真言	梵字賢劫十六菩薩真言	梵字金剛頂瑜伽經真言	梵字法身緣偈生	一切如來隨心真言	一切如來心中心真言	一切如來結界真言	一切如來灌頂真言	一切如來金剛被甲真言	一切如來心印真言	一切如來心真言	梵字普賢十六尊十七字真言并位樣	梵字入壇場授杵与弟子真言	梵字吉慶伽陀九首	梵字三身讚	梵字降魔讚	梵字五方歌讚

一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236
梵字遏吒薄俱真言	梵字歡喜母真言	梵字大忍真言	梵字金剛王真言	梵字金剛壽真言	梵字金剛延命真言	梵字如來慈真言	梵字仏眼真言	梵字觀自在心真言	梵字孔雀王真言	梵字文殊一字三字等并忿怒真言	梵字宝樓閣心真言	梵字菩提莊嚴心真言	梵字懺悔滅一切罪真言	梵字大毗盧遮那經真言	二十天名并真言	焰口陀羅尼	三十七尊異名	梵字觀自在聞持甘露真言 (梵字觀自在聞持真言一本)

一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255
梵字電光真言	梵字送天龍真言	梵字請天龍真言	梵字滅惡趣真言	梵字童子心真言	梵字金剛童子真言	梵字馬頭明王真言	梵字多羅真言	梵字七俱知真言	梵字不動尊心真言	梵字八大菩薩真言	梵字三部心真言	梵字吉祥心真言	梵字摩利支心真言	梵字葉衣心真言	梵字大三昧耶真言	梵字五仏頂真言	梵字大悲心真言	梵字弁才真言	梵字龍猛集六妙真言

一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276	275
梵字文殊讚	梵字広大宝（楼） 闍金剛劫真言	梵字仏慈護真言	梵字袈裟加持供養真言	梵字如意輪真言	梵字不空羼索真言	梵字尊勝真言	梵字六足（尊）心真言	梵字文殊師利根本真言	梵字摩利支心并根本真言	梵字心真言并小心真言	梵字持世陀羅尼	蓮花部瑜伽念誦法梵本真言	大興善寺貞元經目	須弥盧王真言	甘露陀羅尼	文殊劔真言	施一切衆生陀羅尼	梵字虚空藏真言	梵字電光心真言

一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

314	313	312	311	310	309	308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295
天龍八部讚	十六讚嘆	三世金剛一百八名讚	釈迦牟尼仏成道在菩提樹降魔讚	降三世金剛一百八名讚	大方広仏花嚴経普賢菩薩行願讚	七仏讚歎	十六大菩薩一百八名讚	唐梵対訳千文	青龍寺新訳経等入蔵目錄	心次第	菩提心戒	最上乘教受戒懺悔文	浴像焼香偈讚	梵字不動尊鎮宅真言	無辺門壇様	五智觀門并賢劫十六菩薩名位	一切如来菩提心戒真言	金輪仏頂種子觀	如意輪種子壇様

一本	一本	一本	二卷 両本	一本	一卷	一本	一卷	一卷	一卷	一卷	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本
----	----	----	----------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

義淨

334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317	316	315
蘇悉地并蘇摩呼經 梵本一夾	普集天龍八部讚	觀自在法身讚嘆	仏部曼荼羅讚嘆	梵字相輪真言	梵字置相輪楨中及塔四周以呪王法置於塔内真言	梵字修造仏塔陀羅尼	梵字相輪楨中陀羅尼	梵字無垢浄光陀羅尼	大尊讚	仏頂尊勝真言根本讚	毗盧遮那如来菩提心讚	大吉慶讚	毗盧遮那心略讚	如来千輻輪相讚	天龍八部讚	唐梵両字大聖文殊師利菩薩一百八名讚	五讚嘆	唐梵普賢讚	九会曼荼羅讚
両部二卷	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	一本	二卷 両本	一本	一本	一本	一卷	二卷	一卷	一本



353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339		338	337	336	335
梵字悉曇母	梵字悉曇字母	蘇悉地羯羅供養真言集	摩醯首羅天王法	鬼神大將元帥阿吒薄拘上仏陀羅尼出普集經	一字頂輪仏頂要法別行	烏菟沙摩最（勝）明王經	仏頂尊勝陀羅尼別法	大聖歡喜双身法 広本（又別有双身春法文一紙）	大聖甘露軍吒利念誦儀軌	阿密哩多軍荼利法	普遍光明大随求陀羅尼經	金剛頂蓮花部心念誦儀軌	広大成就儀軌	大毗盧遮那成仏神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅真言集	（大悲真言一卷 不空）	一字奇特仏頂陀羅尼	大随求陀羅尼經	大慈大悲救苦觀世音自在菩薩広大円満無礙自在青頸大悲心真言	大虚空藏菩薩所問經
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	二卷	三卷	一卷		一卷上卷	二卷上下	一卷	八卷
（義真）和尚本	（元）簡和尚本						若那訳	若那訳			不空	不空	法全			不空	不空	不空	不空
			21 卷 339 c				19 卷 396 b	21 卷 49 b									20 卷 616 a	20 卷 498 c	

374	373	372	371	370	369	368	367	365	364	363	362	361	360	359	358	357	356	355	354
梵網經盧舍那仏説指示門心地品	大毗盧遮那經疏	大毗盧遮那經略識	大毗盧遮那成仏神變加持經	尊勝仏頂修愈伽法	大壇樣并護摩子樣	建立護摩儀	略釈毗盧遮那經中義	九張尊勝并千手壇樣	胎藏毗盧遮那分別聖	阿闍梨要義	百字生字論	阿字觀門	大日經序并献華樹樣狀	十四音弁 依淨影疏	大般涅槃經如来性品十四音義	梵本切韻十四音十二声	悉曇章 題云梵本切韻是也	梵字蘇悉地羯羅供養真言集	梵字普賢行願讚
卷上一卷	十四卷	二卷	七卷	二卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷		一張	一卷	一卷	一卷	二本	一卷	一卷	一卷	一卷
竺法蘭訳	一行		善無畏							惟謹述		惟謹述		知玄述	鳩摩羅什訳	元簡述	元簡注音		
			18 卷 1 a									18 卷 193 a							

394	393	392	391	390	389	388	387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375
大方広花嚴經普賢行願品疏	五方便心地法門抄	安樂集	父母恩重經疏	大仏頂随疏科文	仁王般若經科文	大仏頂疏随文補闕鈔	阿弥陀經疏	金剛弁宗科文	金剛弁宗	仁王護国般若經疏	法花円鏡枢決	花嚴經疏	法花經円鏡	翻梵語	維摩經疏	仁王般若經疏	曹溪山第六祖惠能大師説見性頓教直了成仏決定無疑法宝記檀經	梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品 極略本	梵網經盧舍那仏説菩薩十重四十八輕戒
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	二卷	一卷	二十卷	七卷	一卷	一卷	三卷	一卷	一卷	一卷
澄觀述		道綽撰	体清述				懷感述		道液述	道液述	延秀集	澄觀作		(宝唱撰)	揚敬之撰	智顗	法海訳		
		47 卷 4 a										35 卷 503 a		54 卷 981 a	14 卷 537 a		48 卷 345 b	24 卷 997 a	

414	413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397	396	395
大乘百法義門抄	因明義範	因明正理門述記	因明義選	因明論義疏	因明論科文	因明義纂要	十四過類記	因明義斷	因明入正理論疏	因明入正理論疏	十二有支義	大乘百法玄樞決	大乘百法論義選抄	百法疏抄	大乘百法明門論疏	百法論顯幽抄	淨土法事讚	救謗方等經顯正一乘論	中觀論三十六門勢
二卷	一卷	一卷	二卷上下	三卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	三卷	一卷	一卷	四卷	二卷	一卷	十卷	二卷	一卷	一卷
金則述	空相	勝莊述	弁空錄	利		慧沼述		慧沼撰	清邁撰	基撰			全則述	挾隣	(義)忠撰	從方述	善導撰	知悅述	元康撰
								44 卷 143 a		44 卷 91 b						統 藏 1 ・ 87 ・ 2	47 卷 424 b		

434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415
行立禪師述仏性偈	西国付法藏伝	南陽和尚問答雜徴義	貞元新定入藏經録新口歳青龍寺東塔院僧義真集録記	新訳經論入藏經録中書門下牒	法性一心図	大方広仏花嚴經金師子章	花嚴經法界觀門	唯心觀	念仏讃	蛇勢論	法花二十八品序	大般若波羅蜜經開題	宗四分比丘随門要行儀	十二門論疏翼賛抄序	大小乘入道位次	小乘入道位次 依俱舍論	略叙大小乘断惑入道位次	因明入正理論義衡	因明義心
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷	一卷
		劉澄集					杜順撰	菩提達磨撰	弘素述									清索撰	
85 卷 654 a																			

453	452	451	450	449	448		447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435
加五百字千字文	兩京新記	百司舉要	嗣安集	国忌表歎文	九睥十紐図	(天台等真影讃一卷)	長安資聖寺宝応觀音院壁上南岳天台等真影讃	供奉大德義通法師銘	長安資聖寺翻訳講論大德貞慧師記并碑	長安資聖寺粥利記	讃西方淨土	徵心行路難	伝大士還源詩	皇帝降誕日内道場論衡	大報無遷論	五墓山金剛窟収五功德記	沙門無著入聖般若寺記	紫閣山大莫碑	大唐故弘景禪師石記
一卷	三卷	一卷	一卷	一卷	一張		一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
									知玄述					知玄述			飛錫撰	秀邕撰	

473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462	461	460	459	458	457	456	455	454
李張集	莊翱集	濮郡集	進士章嶸集	王建集	杭越唱和詩	建帝懂論	京兆府百姓索隱徵上表論积教利害	麟德殿宴百寮詩	碎金	詩賦格	唐潤州江寧縣瓦官寺維摩詰碑	利涉法師与韋珽論	会昌皇帝降誕日内道場論衡	長安左街大薦福寺讚仏牙偈	心鏡弄珠々耀篇并禅性般若吟	甘泉和尚語本并大誓和尚以心伝心要旨	曹溪禪師証道歌	丹鳳樓賦	皇帝拝南郊儀注
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	上三卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
						東山泰作							知玄述			貞覺述			

493	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	478	477	476	475	474
金剛部諸尊圖像儀軌	大悲胎藏手契	大悲胎藏画像図位	大悲胎藏諸尊標記印	水自在天像	仏頂尊勝壇像	阿魯力壇像	大随求壇様	熾盛仏頂壇様像	釈迦牟尼仏菩提樹像	普賢延命像	金剛界大曼荼羅	金剛界九会曼荼羅	金剛界八十一尊種子曼荼羅	大悲胎藏三昧耶略曼荼羅	大悲胎藏法曼荼羅	白家詩集	雜詩	臺山集	杜員外集
一卷	一卷	一卷	一卷	一鋪一幅苗	一鋪二幅苗	一鋪	一鋪	一鋪	一鋪一幅綵色	一鋪三幅苗	一鋪五幅苗	一鋪五幅苗	一鋪	一鋪一幅苗	一鋪三幅苗	六卷	一卷	一卷	二卷
(白居易)																			



円仁が最初に到った章敬寺は長安居指の大寺院とされ、寺内の浄土院においては、かつて法照が『浄土五会念

511	510	509	508	507	506	505	504	503	502	501	500	499	498	497	496	495	494
金銅五鈷小金剛杵 裏盛仏舍利	金銅三鈷金剛鈴	金銅独鈷金剛杵	金銅五鈷金剛杵	金銅五鈷金剛鈴	白銅印泥塔	鍮鈹印仏一面一百仏	壇龕僧伽誌公万廻三聖像	壇龕西方浄土	壇龕涅槃浄土	青龍寺(義)真和尚真影	無畏三蔵真影	大広智不空三蔵真影	金剛智三蔵真影	仏眼塔様并記	仏跡并記	八大明王像	熾盛壇様
一口	一口	一口	一口	一口	一合		一合	一合	一合	一鋪一幅綵色	一紙苗	一紙苗	一紙苗	一卷	一卷	一卷	三紙

仏略法事儀讃』一卷を著わしたことがその撰号「南岳沙門法照於上都章敬寺浄土院一述」(『大正蔵』四七、四七四c)によって知られ、長安における円仁と五会念仏との関係についても注目される。この点は、次の開成六年の項で取り上げる。

円仁が長安に赴いた目的は、開成五年(八四〇)八月二十三日、長安左街の功德巡院(僧尼を統括する功德使出張所)にて提出した状文によると、「伏請下寄住城中寺舎、尋レ師聴学上。」(小野三、二六四頁)とあり、長安城内の寺舎に滞在して師匠を尋ねることであった。円仁の要請により、この日より在唐中最も長期間過ごすことになる資聖寺(左街崇仁坊)に滞在する生活が始まった。『新求目録』には、資聖寺に関する将来物として、『長安資聖寺粥利記』一卷 内州道場談論沙門知玄述(「長安将来物一覽表」<sup>444</sup>)がある。知玄(八〇九―八八一)は円仁が長安を去るまで親交を深めることになる僧侶である。「長安資聖寺翻訳講論大徳貞慧法師記并碑」一卷<sup>(445)</sup>、「長安資聖寺宝応観音院壁上南岳天台等真影讃」一卷<sup>(447)</sup>が見られ、慧思と智顗の真影に書かれた讃を写し取っている。

八月二十四日、使衙の南門(左街功德使の衙門の正門)にて滞在の理由を問われた円仁は、巡礼の経過を記した上で再度「今請下権寄住城中寺舎、尋レ師聴学、劫帰本国上。」(小野三、二六八頁)、すなわち長安城の寺院に住み師を尋ねて学問することを請い、この結果、八月二十六日には「綱維安排房院、於浄土院安置。(中略)每向二諸僧一尋問持念知法人一、未得二の実。」(小野三、二七八頁)とあり、資聖寺内の浄土院に居住することが決まった。円仁は良き師匠からの伝授を求め、諸僧に対して正法を伝持し真言密教に通じた人はいないかと尋ねたが、的確な回答は得られなかったようである。

九月五日、「夜、繫念毘沙門、誓願乞示二知法人。」(小野三、二八〇頁)とあり、毘沙門天王(多聞天)に法を知る師匠を示すように誓願しており、毘沙門天への厚い信仰を持っていたことが窺える。これに関して、『新求目録』には長安での求得として『毗沙門天王経一品』一卷 不空<sup>(117)</sup>、『北方毗沙門天真言法』一卷 不空

(130)が見られ、毘沙門天関係の書を将来している。さらに、比叡山における円仁の毘沙門天信仰の伝承として、『阿婆縛抄』「諸寺縁起」下には、

首楞嚴院、在二大寺北<sup>一</sup>、相去八九里、根本觀音堂、俗曰二横川中堂<sup>一</sup>。在二砂碓堂ノ西<sup>一</sup>、葺檜皮七間堂一字、前有二孫庇<sup>一</sup>、安<sup>レ</sup>置聖觀音像一体、不動毗沙門像一体<sup>一</sup>。右慈覺大師入唐求法之後、解<sup>レ</sup>纜浮舶<sup>二</sup>之間、忽遇二大風<sup>一</sup>、欲没<sup>二</sup>南海<sup>一</sup>。念<sup>二</sup>彼觀音力<sup>一</sup>、現<sup>二</sup>毗沙門身<sup>一</sup>。大師即使<sup>レ</sup>図<sup>二</sup>画彼像<sup>一</sup>、風晴波平、須臾著岸。帰山之後、建<sup>二</sup>立一堂<sup>一</sup>、安<sup>レ</sup>置觀音像・毗沙門像<sup>一</sup>。依<sup>二</sup>彼海上願<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>果遂<sup>一</sup>也。嘉祥元年九月、建<sup>二</sup>立一堂<sup>一</sup>、図<sup>二</sup>繪天像<sup>一</sup>、更造<sup>二</sup>移木像<sup>一</sup>、与<sup>二</sup>聖觀音<sup>一</sup>共安置矣、云々。(『大日本仏教全書』六〇卷、二八〇頁c)

とあり、円仁が入唐求法の折大風に遇い南海に没しようとした時、觀音力を念じたところ毘沙門が現れ、その姿を描いたところ無事着岸した。そして、この靈驗により円仁帰国後、比叡山横川に根本觀音堂(横川中堂)を創建して、聖觀音像と毘沙門像を安置したと伝えている。

九月十六日、浄土院に住していた密教僧懷慶より長安城にて「大法」すなわち金剛界と胎藏界の大法を解している和尚に関する情報を得ている。これは九月五日の毘沙門天への繫念による成果の表れともいえるであろう。その内容は以下の通りである。

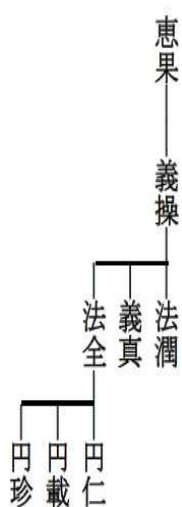
語曰、如要<sup>レ</sup>持<sup>二</sup>秘法<sup>一</sup>、余能知下一城内解<sup>二</sup>大法一人上<sup>一</sup>。青龍寺潤和尚但解<sup>二</sup>胎藏<sup>一</sup>、深得<sup>二</sup>一業<sup>一</sup>。城中皆許<sup>二</sup>好手<sup>一</sup>。彼寺雖下有<sup>二</sup>西国僧<sup>一</sup>、未中多解<sup>上</sup>語、持念之業、不<sup>レ</sup>多<sup>二</sup>苦解<sup>一</sup>。大興善寺文悟闍梨、解<sup>二</sup>金剛界<sup>一</sup>、城中好手。青龍寺義真和尚兼<sup>二</sup>兩部<sup>一</sup>。大興善寺有<sup>二</sup>元政和尚<sup>一</sup>、深解<sup>二</sup>金剛界<sup>一</sup>、事理相解。彼寺雖有<sup>二</sup>西国難陀三藏<sup>一</sup>、不<sup>三</sup>多解<sup>二</sup>唐語<sup>一</sup>。大安国寺有<sup>二</sup>元簡阿闍梨<sup>一</sup>、解<sup>二</sup>金剛界<sup>一</sup>好手、兼解<sup>二</sup>悉曇<sup>一</sup>、解<sup>レ</sup>画、解<sup>レ</sup>書<sup>二</sup>梵字<sup>一</sup>。玄法寺法全和尚深解<sup>二</sup>三部大法<sup>一</sup>。(小野三、二八三頁)

懷慶の話によると、青龍寺に胎藏界大法のみを解している潤(法潤)和尚、会昌元年六月十一日条(小野三、三九九頁)によって宝月三藏と知られる西国僧、大興善寺には金剛界大法を解している文悟阿闍梨、青龍寺には胎

金剛部を兼ねている義真和尚がおり、深く金剛界を解し事（行法）と理（教理）に達している大興善寺の元政阿闍梨、唐語を解さないインド人難陀三蔵がいたとある。また、金剛界ならびに悉曇を解しており、曼荼羅・図像類を描き梵字を書くことにも通じている大安国寺の元簡阿闍梨、深く「三部大法」すなわち胎藏・金剛・蘇悉地を解している玄法寺の法全和尚についても述べられている。

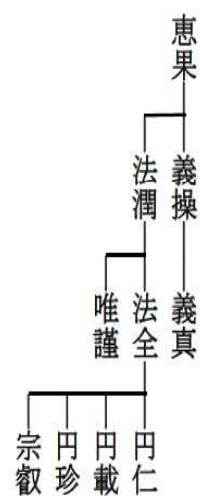
この密教の大法は師匠から弟子へと伝えられるものであり、その相承の系譜を示したものは「血脈譜」と呼ばれている。長安淨住寺の僧侶海雲が唐太和八年（八三四）に撰した『金胎両界師相承』（『大日本統藏經』第一輯、九五套、五冊、四九六―四九七頁）によって、金剛界の系譜から九月十六日条の記述に見える和尚と入唐天台僧を抜き出すと以下のようなになる。ただし、法全より受法の円仁、円載、智証大師円珍（八一四―八九一）、宗叡（八〇九―八八四）の日本僧への相承系譜については、日本伝来の永暦元年（一一六〇）写の僧範果の本の裏書に基づく海雲以後の加筆と見られる。<sup>21</sup>（『大日本統藏經』一、九五、五、四九四頁）。

図（１）海雲の金剛界系譜図



次に、胎藏界の系譜については『金胎両界師相承』（『大日本統藏經』一、九五、五、四九六―四九七頁）によると、次の通りである。

図(2) 海雲の胎藏界系譜図



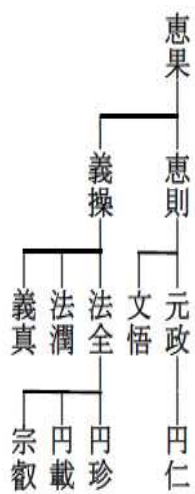
また、咸通六年(八六五)に示された造玄の『胎金両界血脈』では、胎藏界の系譜は下のようになっている(前掲書、四九七―四九八頁)。

図(3) 造玄の胎藏界系譜図



この法全は、以下の金剛界の系譜にもその名があり、円仁とともに入唐した留学僧円載ならびに後に入唐した円珍にも大法を授けていることが分かる。

図(4) 造玄の金剛界系譜図



以上の海雲ならびに造玄の胎藏界金剛界両部に示された系譜には、法全と元政から円仁への相承のみが記されているが、実際の受法は後に取り上げるように義真からもあり、また悉曇については宝月、元簡から受けることになる。

十月十三日条には、

差ニ惟正<sup>一</sup>、共ニ懷慶闍梨<sup>一</sup>、遣ニ青龍寺<sup>一</sup>、令<sup>レ</sup>見ニ知法人<sup>一</sup>。於ニ東塔院<sup>一</sup>有ニ義真和尚<sup>一</sup>、解ニ胎藏<sup>一</sup>。日本国行闍梨於<sup>レ</sup>此学<sup>レ</sup>法。更有ニ法潤和尚<sup>一</sup>、解ニ金剛界<sup>一</sup>、年七十三、風疾老耄。」（小野三、三〇二頁）

とあり、弟子僧惟正を懷慶とともに青龍寺に遣わしている。その結果、東塔院にて義真の元で入唐真言僧の円行が胎藏界大法を学んでいたこと、法潤和尚が七十三歳の高齢で病体であることを聞いている。また、十月十六日条には、

遣ニ大興善寺<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>簡<sup>二</sup>折知法人<sup>一</sup>。翻經院有ニ元政阿闍梨<sup>一</sup>、解ニ金剛界<sup>一</sup>。持念文書備足。天竺難陀三藏不三多解<sup>二</sup>唐語<sup>一</sup>。文悟阿闍梨不<sup>レ</sup>及ニ於政阿闍梨<sup>一</sup>。（小野三、三〇三頁）

とあり、大興善寺翻經院の元政阿闍梨は金剛界を解し、持念の文書は備わっていること、先述の通りインド僧難陀三藏は中国語を理解しておらず、また文悟阿闍梨は元政に及ばないことを聞いている。以上の情報により、法潤及び文悟、難陀の元での受法は選ばなかったことが窺える。文悟は、先述の造玄の血脈譜によると、金剛界における恵果の法孫であるとともに恵則の弟子であり、元政の兄弟弟子であった。難陀三藏は、会昌五年（八四五）五月十一日条によると北インド出身の僧侶であったことが知られ、円行の『靈巖寺和尚請来法門道具等目錄』には、難陀より授かった「仏舍利二百余粒」、「梵夾一具」（『大正藏』五五、一〇七三b）が記されている。

上記の情報を踏まえ、翌日の十月十七日、「遣<sup>レ</sup>状起<sup>二</sup>居政阿闍梨<sup>一</sup>、兼借<sup>二</sup>請念誦法門<sup>一</sup>。」（小野三、三〇四頁）とあり、元政の元に書状を送り念誦の法門を借りることを請うた後、十月十八日、元政から借りた念誦法門の書

写を開始している。十月二十九日は、円仁が大興善寺の勅置翻経院において初めて元政和尚に見え、彼より金剛界大法を受けた重要な日として注目すべきである。『巡礼記』同目録には次のように記されている。

往二大興善寺一、入二勅翻経院一。参二見元政和尚一、始受二金剛界大法一。入二勅置灌頂道場一、礼二諸大曼荼羅一。設二供養一、受二灌頂一。又翻経堂壁上画二金剛智和尚及不空三蔵影一。於二翻経堂南一、有二大弁正広智不空和尚舍利塔一。金剛智・不空二三蔵、曾於二此院一翻レ経也。（小野三、三〇八―三〇九頁）

円仁が金剛界大法を受けた大興善寺翻経院は、乾元元年（七五八）頃に設置された長安三大訳経場（他に慈恩寺、薦福寺）の一つであり、かつて不空三蔵（七〇五―七七四）が住していた訳経場であった。円仁は勅置灌頂道場にて諸曼荼羅を礼拝し、元政より金剛界灌頂を受けているが、この勅置灌頂道場は、円照（七一八―八〇〇）集『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻一（『大正蔵』五二卷、八二九b―八三〇a）によると、乾元三年（七六〇）に史元琮、広徳元年（七六三）に不空三蔵によって設置が請われた密教灌頂の道場であった。<sup>22</sup>灌頂とは、元来古代インドで国王即位及び立太子に当たり、その頂に四大海の水を灌ぐ儀式であったが、この帝王灌頂の厳儀の意義が仏教に取り入れられたものである。すなわち、灌頂道場の灌頂壇の前で阿闍梨が如来の五智を表す五瓶の水を弟子の頭頂に注いで、密教の奥義を伝授し、仏の大覚位を継承せしめる重要な儀式とされている。

この後、翻経堂にて壁上の金剛智（六七一―七四一）、不空の影像、堂の南にて大弁正広智（不空の賜号）不空の舍利塔を拝見している。上記の影像は、『新求目録』には「金剛智三蔵真影」一紙苗<sup>498</sup>、「大広智不空三蔵真影」一紙苗<sup>499</sup>として載っているものであると考えられる。

十二月八日、大暦玄宗皇帝（六八五―七六二）の忌日（敬宗、「八〇九―八二六」の間違いか）のため、勅が出され諸寺が齋を設け、大興善寺の内道場（内裏に設けられた仏事を行う堂宇）三教講論大徳の知玄が表讃している（小野三、三一八頁）。三教（儒教・仏教・道教）講論とは、三教の代表者が皇帝の前で各々の宗教の優劣に

ついで議論する儀式である。この時、仏教の代表者を務めた知玄は、『宋高僧伝』巻六、唐彭州丹景山知玄伝（『大正蔵』五〇、七四三a―七四五a）によると、俗姓陳氏、眉州洪雅の人で後に三峡を下って荆襄を経て長安の資聖寺に到り、ここで経論を敷衍して僧俗に仰がれたことや、文宗皇帝（八〇九―八四〇）に顧問として重んぜられ、また唯識などを学び外典など百家の言を極めていたことなどが記されている。<sup>23</sup> 知玄が著わした書物は、『新求目錄』に『十四音弁』一卷 知玄述（359）、『大報無遷論』一卷 知玄述（439）、前述した『長安資聖寺粥利記』一卷 知玄述（444）に加えて、『長安左街大薦福寺讚仏牙偈』一卷 内供奉三教講論大徳知玄述（459）の四点の書目が見られる。

十二月二十二日、「令三永昌坊王恵始画ニ金剛界大曼荼羅四幅一。」（小野三、三二五頁）とあり、永昌坊（朱雀街東第三街）の画工王恵に金剛界曼荼羅四幅を描かせている。『新求目錄』には、「金剛界大曼荼羅」一鋪五幅苗（482）があるが、幅数が異なること、苗（無彩色）であることから、王恵の金剛界曼荼羅は、会昌廃仏によつて将来でできなかったと推測される。

## （2）会昌元年（八四一）の求法活動と将来物蒐集

開成六年（八四一）、正月八日に天子（武宗、八一四―八四六、在位八四〇―八四六）が長安城南門外の南郊壇（長安城南城壁中央・明德門の外にあった天を祀る祭壇）に行幸し、翌日の九日に丹鳳樓（長安大明宮丹鳳門の門楼）にて年号を会昌元年に改めている（小野三、三三八頁）。この出来事に関する将来物として、『皇帝拝南郊儀注』一卷（454）、『丹鳳樓賦』一卷（455）がある。南郊壇は、小野氏によると「天子の即位改元あるいは冬至などには親臨して天をまつり、五穀の豊饒をいのり、あるいは天に報告を行った」（小野三、三三九頁）場所であると見られる。その題名から、前者は皇帝が南郊を拝する際の儀式の次第について、後者は丹鳳樓について詠まれた



詩文であると思われるが、円仁はこのような即位改元の儀式にも関心を寄せていたことが窺える。

続いて、「又勅於左右街七寺<sup>一</sup>、開俗講<sup>二</sup>。左街四处、此資聖寺令三雲花寺賜紫大德海岸法師講三花嚴經<sup>一</sup>。」（小野三、三四〇頁）とあり、左右両街の七寺に勅が下されて俗講（俗人への経文の講義）が行われ、円仁が滞在する資聖寺においては、雲花寺（左街常楽坊）賜紫大徳の海岸が『華嚴経』を講じている。『新求目録』には、揚州求得として『集新旧斎文』五卷 上都雲花寺詠字太（「揚州将来物一覧表」<sup>111</sup>）があり、雲花寺における別の僧侶が著わした書物も見られる。

会昌元年（八四一）二月八日の条には、

金剛界曼荼羅幀画了。又勅令下章敬寺鏡霜法師、於三諸寺<sup>一</sup>、伝阿弥陀浄土念仏教<sup>上</sup>。廿三日起首至廿五日とあり、先述の金剛界曼荼羅が完成している。また、この日勅が下され章敬寺の鏡霜法師が諸寺院において阿弥陀浄土念仏教を伝えることが命じられている。鏡霜は法照の弟子であることから、法照創始の五会念仏であることは間違いない、五台山のみならず、長安においても円仁は五会念仏を見聞し、あるいは伝承したものと思われる。第二章で見たように、この五会念仏は『浄土五会念仏誦経観行儀』三卷（『大正蔵』八五卷、一二五三b―一二五四a）によれば、法照が永泰二年（七六六）に南岳弥陀台で般舟三昧を修していた折、『無量寿経』に基づく極楽浄土の水鳥樹林の五会の音曲の念仏を阿弥陀如来より親授されたものと伝えている。また五会念仏は、善導系の口称念仏の流れを汲みながらも、天台の中道実相観を得るための止観念仏と往生極楽のための念仏を融合したものであったと伝えられている。<sup>24</sup>

なお、長安より将来の浄土教に関する典籍として、『新求目録』には『安楽集』一卷 沙門道綽撰（392）、『浄土法事讃』二卷 善導和尚撰（397）、『念仏讃』一卷 章敬寺弘素述（425）がある。

そして、同日薦福寺翻経院にて義浄三蔵（六三五―七一三）の真影を拝見しているが、この真影については、円

照撰『貞元新定釈教目録』卷十三によると、「太極元年門人比丘崇勗摹三藏和上真。和上時年七十八也。」（『大正藏』五五卷、八七〇a）とあり、太極元年（七一二）二月二十二日、義浄の門人崇勗が描いた七十八歳の時のものであると伝えている。義浄に関する書として、長安にて義浄訳の『梵語千字文』一本（306）を将来している。文』一本（213）、『唐梵対訳千字

二月十三日は、円仁が元政より金剛界大法を受け終えた重要な日である。『巡礼記』には「受<sub>二</sub>金剛界大法<sub>一</sub>畢。供<sub>三</sub>養金剛界曼荼羅<sub>一</sub>、及受<sub>二</sub>伝法灌頂<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>五瓶水<sub>一</sub>、灌<sub>二</sub>於頂上<sub>一</sub>。至<sub>レ</sub>夜、供<sub>三</sub>養十二天<sub>一</sub>。毎事吉祥。兼登<sub>二</sub>慈恩寺塔<sub>一</sub>。」（小野三、三六四頁）とあり、前述の完成した金剛界曼荼羅を供養し、元政より伝法灌頂を受け、五個の水瓶に入れた香水を頭頂に灌ぐ作法が行われている。夜に十二天（地天・水天・火天・風天・伊奈耶天・帝釈天・焰魔天・梵天・毘沙門天・羅刹天・日天・月天）を供養する儀式も行われたが、これは伝法灌頂に関する行法と見られる。十二天供に関する仏典として、五大院安然（八四一—八〇二）撰『諸阿闍梨真言密教部類総録』巻下には『供養十二天法』一卷、『施八方天儀則』一卷が載っており、それぞれ「仁」（円仁）将来となっている（『大正藏』五五、一一二八c）が、これらは『新求目録』に見られないものであり、将来したものの目録に載せなかったものであるのか、考察を要するであろう。

二月十五日、「興唐寺奉<sub>三</sub>為国開<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>。從二十五日<sub>一</sub>至四月八日<sub>一</sub>、有縁赴來結縁灌頂。」（小野三、三七〇頁）とあり、興唐寺（街東第四街の大寧坊の東南端）において灌頂道場が開かれ、二月十五日より四月八日の長期にわたり、有縁の在俗の信者に結縁灌頂が行われている。四月一日条には、「大興善寺翻經院為<sub>レ</sub>国開<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>。直到<sub>二</sub>廿三日<sub>一</sub>罷。」（小野三、三七三頁）とあり、四月一日から四月二十三日にかけて大興善寺翻經院においても結縁灌頂が行われている。『日本三代実録』卷八、貞観六年（八六四）正月十四日の円仁卒伝によれば、「嘉祥二年五月於<sub>二</sub>延暦寺<sub>一</sub>、始修<sub>二</sub>灌頂<sub>一</sub>。官給<sub>二</sub>二千僧供<sub>一</sub>、用<sub>二</sub>内藏寮物<sub>一</sub>。勅遣<sub>二</sub>参議從四位下守右大弁伴宿禰善男<sub>一</sub>檢校。而飲<sub>二</sub>誓水<sub>一</sub>者一千余人。（『新訂増補国史大系 日本三代実録』前編一二六頁）とあり、

円仁が帰国後の嘉祥二年（八四九）五月、一千余人に灌頂を行っていることを考えると、これらの見聞は入唐求法の成果や影響を考える上で重要な出来事の一つであろう。この点については第四章で詳述する。

四月四日、「往二青龍寺一、入二東塔院一。委細訪見諸曼茶羅一。」（小野三、三七四頁）とあり、この日円仁は青龍寺東塔院で諸曼茶羅を拝見している。四月七日は「往二大興善寺一、入二灌頂道場一随喜。及登二大聖文殊閣一。」（小野三、三七四頁）とあり、大興善寺翻經院内の灌頂道場に入り、大聖文殊閣に登っている。この大聖文殊閣は、大暦七年（七七二）不空によつて勅建されたものであるが、文殊に関する不空訳の将来伝典は、『新求目録』に『金剛頂超勝三界經說文殊五字真言勝相』一卷（「長安将来物一覽表」14）を始めとして多数見られる。

次に、曼茶羅制作について見てみると、会昌元年（八四一）四月二十八日条には「始画二胎藏幀一。」（小野三、三八一頁）とあり、絵師王恵に胎藏曼茶羅を描かせている。この後「興善寺新訳経・念誦法等、四月廿二日写了。和尚曰、余所レ解金剛界大法尽付嘱了。其法門等尽写了。更有二不足一者、別処尋覓。与二元政和尚一金、前後都計廿五両、自外不レ在二数限一。」（小野三、三八二頁）とあり、四月二十二日、元政より借り得た新訳の經典、念誦法門の書写を大興善寺にて終えている。元政が言うには、金剛界大法は悉く円仁に付嘱し終わり、伝典を全て写させたので、さらに不足があれば他所に尋ねるようにとのことであつた。この時円仁は、奈良く平安時代の小両に換算して約二七五匁前後（小野三、三八六頁）の（沙金）二十五匁を元政に納めている。なお、胎藏幀の記事については四月二十八日条に、「下レ手、画二胎藏幀一。」（小野三、三八六頁）と重複が見られる。この曼茶羅制作の指揮者については、四月四日の条に「往二青龍寺一、入二東塔院一、委細訪見諸曼茶羅一。」（小野三、三七四頁）とあり、また同四月二十八日条に「喜下遇二（義真）和尚一、求學胎藏大法上。」（小野三、三八二頁）とあることから青龍寺阿闍梨義真と推定される。『新求目録』には、長安より将来の胎藏曼茶羅として「大悲胎藏法曼茶羅」一鋪三幅苗（478）、「大悲胎藏三昧耶略曼茶羅」一鋪一幅苗（479）があるが、いずれも白描画である。

曼茶羅の将来については、会昌六年（八四六）六月二十九日の条に、「先寄功德文書之中、胎藏金剛両部大曼茶

羅盛<sup>レ</sup>色者、縁<sup>ニ</sup>淮南勅牒嚴切<sup>一</sup>劉慎言已焚訖。其余苗画及文書等、具得<sup>ニ</sup>将来<sup>一</sup>。」（小野四、二七一—二七二頁）と見える。すなわち、胎藏金剛両部曼荼羅の「盛色」（彩色）のものは焼却されたが白苗の曼荼羅は会昌廃仏の難を逃れて将来できたことが知られる。ただし、会昌元年（八四一）四月二十八日条の胎藏幀が彩色か白苗かは不明であり、『新求目録』所載の胎藏曼荼羅が四月二十八日条の胎藏幀に相当するかどうかは定かではない。

曼荼羅制作に関わる工賃については、四月三十日条に、「画<sup>ニ</sup>金剛界九会曼荼羅<sup>一</sup>功銭商量定、除<sup>ニ</sup>画絹<sup>一</sup>外六千文。真和尚教<sup>ニ</sup>化俗人<sup>一</sup>、助<sup>ニ</sup>加絹<sup>一</sup>六尺<sup>一</sup>、賜<sup>レ</sup>宛<sup>ニ</sup>画絹<sup>一</sup>。」（小野三、三八八頁）とあるように、金剛界九会曼荼羅の制作費を相談した結果、工賃は画絹以外で六千文と決まっている。そこで、義真が円仁のために画絹代として在家の人々から絹四十六尺の布施をさせている。なお、六千文は貫に換算すると六貫であり、前述の胎藏曼荼羅描画は五十九貫であったことと比較すると、功銭に差が見られる。

会昌元年（八四一）五月三日は金剛界九会曼荼羅を描き、また青龍寺にて灌頂を受けた日として注目すべきである。『巡礼記』には、

始画<sup>ニ</sup>金剛界九会曼荼羅幀五副<sup>一</sup>。除<sup>ニ</sup>画絹<sup>一</sup>外、六千文、是画功也。此日於<sup>ニ</sup>青龍寺<sup>一</sup>、設<sup>ニ</sup>供養<sup>一</sup>。便於<sup>ニ</sup>勅置本命灌頂道場<sup>一</sup>、受<sup>ニ</sup>灌頂<sup>一</sup>抛<sup>レ</sup>花。始受<sup>ニ</sup>胎藏毗盧遮那經大法<sup>一</sup>、兼蘇悉地大法<sup>一</sup>。（小野三、三九三—三四頁）

とあり、金剛界九会曼荼羅幀五幅を描いている。『新求目録』には、「金剛界九会曼荼羅」一鋪五幅苗（白描）（481）があるが、『巡礼記』の「金剛界九会曼荼羅幀五幅」が、白描か彩色かを明示していないので、『新求目録』と『巡礼記』所載の曼荼羅が同一かどうかは明らかでない。また、この日青龍寺の勅置本命灌頂道場において胎藏界大法と蘇悉地大法の灌頂を受けている。これは、灌頂壇において覆面して敷曼荼羅に向かつて花を投じ、花の当たった尊像を有縁の仏としつつ、真言密教の奥義を授けるものである。空海の『御請来目録』には、

六日上旬入<sup>ニ</sup>学法灌頂壇<sup>一</sup>。是日臨<sup>ニ</sup>大悲胎藏大曼荼羅<sup>一</sup>、依<sup>レ</sup>法抛<sup>レ</sup>花。（中略）七月上旬更臨<sup>ニ</sup>金剛界大曼

茶羅<sup>一</sup>。重受<sup>二</sup>五部灌頂<sup>一</sup>。亦抛<sup>レ</sup>花得<sup>二</sup>毗盧舍那<sup>一</sup>。（『大正藏』五五卷、一〇六〇a—b）

とあり、空海もこの青龍寺東塔院において、恵果阿闍梨の元で貞元二十年（延暦二十四年、八〇五）六月上旬に大悲胎藏大曼荼羅に臨んで学法灌頂を受け、七月上旬に金剛界大曼荼羅に臨み、五部（仏部、金剛部、宝部、蓮華部、羯磨部）灌頂を受けている。胎藏界の所依の經典である『大日經』に関する将来典籍は、『大日經略撰念誦随行法』一卷 不空（16）、青蓮院本のみ記載の『大日經序并献華樹様状』一卷（360）があり、蘇悉地については、長安にて『蘇悉地并蘇摩呼經』梵本一夾兩部二卷（334）、『蘇悉地羯羅供養真言集』一卷（351）を将来している。円仁が胎藏界と金剛界のみならず、蘇悉地大法を受け、三部大法として比叡山に伝えたことは、後に円仁によって確立された天台密教の基本的立場として注目しておかなければならないであろう。なお、『巡礼記』にはこの日誰から灌頂を受けたかということを記していないが、三千院本『慈覚大師伝』に、

巡<sup>コ</sup>赴青龍寺<sup>一</sup>、礼<sup>コ</sup>拜真大阿闍梨<sup>一</sup>、発<sup>二</sup>至誠心<sup>一</sup>。屈請為<sup>レ</sup>師、聽許已後、入<sup>二</sup>胎藏灌頂道場<sup>一</sup>、奉<sup>コ</sup>供諸尊<sup>一</sup>。方始習<sup>コ</sup>学毘盧遮那經中真言、印契、并真言教中微細儀式<sup>一</sup>。并蒙<sup>二</sup>師許可<sup>一</sup>、即至<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>図<sup>二</sup>胎藏大曼荼羅<sup>一</sup>。（『統天全』史伝二、五〇頁下）

とあり、義真に礼拝した後灌頂道場に入り諸尊を供養し、『大日經』中の真言・印契・真言教の微細な儀式について学んだとある。また、『類聚三代格』の嘉祥元年六月十五日付の「応<sup>レ</sup>修<sup>二</sup>灌頂一事<sup>一</sup>」には、

其年五月、於<sup>二</sup>青龍寺勅置本命灌頂道場不空三藏弟子義真阿闍梨辺<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>灌頂<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>大毘盧舍那經秘旨、及蘇悉地大法<sup>一</sup>。（黒板勝美編『新訂増補国史大系 類聚三代格』吉川弘文館、一九七七年、前篇七〇頁）

とあり、義真より『大日經』の秘旨と蘇悉地經大法を受けたと記されている。また、三千院本『慈覚大師伝』にも同文が引用されていることなどから、この青龍寺での灌頂は、義真からの受法であつたことは間違いないものと見られる。

六月十一日、「今上降誕日、於<sup>二</sup>内裏設斎<sup>一</sup>。両街供奉大徳及道士集談經。四対論議、二箇道士賜紫。尺門大徳

惣不レ得レ著。」(小野三、三九九頁)とあり、武宗の誕生日であるこの日内裏において三教談論が行われている。「皇帝降誕日」を書名に含む書物として、『新求目録』には、『会昌皇帝降誕日内道場論衡』一卷(460)があるが、内容は皇帝の降誕節に行われた後漢の王充(二七—一〇〇?)撰『論衡』に関する行事の書かと思われる。また、この後「南天竺三藏宝月入内対二君主」、従二自懷中、拔二出表一進、請レ帰二本国一。不二先諮一、開府惡発。」(小野三、三九九頁)とあり、前述のインド僧宝月三藏がインドに帰国することを直接武宗に要請し、開府(宦官仇士良)の怒りを招いた記述が見られる。この後の六月十五日、宝月の弟子三名が功德使によつて越官罪とされて棒で打たれ、宝月は帰国を許されなかった。円仁は翌年の会昌二年(八四二)四月に宝月より悉曇を学んでおり、彼の動向についても注目していた可能性がある。

この辺りから『巡礼記』の記述は頻度が減り、八月七日になって「為レ帰二本国一、修レ状進レ使。」(小野三、四〇三頁)とあり、円仁も本国に帰るため牒を功德使に提出し、巡礼の経過を記し処分を求めているが、宝月の帰国不許可の情報によつて、早期に帰国に向けて行動する必要性に迫られたと考えられる。十二月三日条には、「移二住西院一。」(小野三、四一〇頁)とあり、この日以降円仁は資聖寺の浄土院から西院に移つて滞在を続けることになった。

### (3) 会昌二年(八四二)―五年(八四五)の求法活動と将来物蒐集

年は会昌二年(八四二)に改まり、正月一日条に「諸寺開二俗講一。」(小野三、四一二頁)とあり、諸寺で俗講が開かれている。この俗講が開かれた正月に、円仁一行が資聖寺で写したと見られる書物が、『新求目録』の『仁王般若経疏』三卷 天台(378)である。なぜなら、京都禅林寺図書館蔵の鎌倉初期古写本『仁王経私記』巻下の奥書(下巻尾題下)には、「大唐会昌二年正月十三日、上都資聖寺写畢。帰国流伝、法輪常転。」と記されて<sup>25</sup>

おり、正しくこの時資聖寺に滞在していたのは円仁一行であり、円仁もしくはその弟子（惟正、惟曉）が写した可能性がきわめて高い。ただし、『新求目録』の『仁王般若経疏』と禅林寺本の『仁王経私記』とは少し書名が異なるが、佐藤哲英氏の研究に基づき同一書と見るのが妥当であろう。<sup>26</sup>

次に、この年円仁が行った受法について見てみよう。二月二十九日は玄法寺（長安街東第四街第六坊）の法全阿闍梨ならびに大安国寺（街東第四街第一坊の長樂坊）元簡阿闍梨の元にて受法を行った日として重要である。『巡礼記』によれば、「於ニ玄法寺法全阿闍梨所一、始受ニ胎藏大法一。又於ニ大安国寺元簡阿闍梨所一重審ニ決悉曇章一。」（小野三、四一七頁）とあり、まず法全の元にて始めて胎藏大法を受けている。法全は先述の海雲・造玄の血脈譜で見たように、善無畏三藏から数えて第四番目に当たり、恵果の孫弟子であり、法潤の弟子である。円仁が長安にて最初に胎藏大法を受けた青龍寺義真も恵果の孫弟子であり、彼は義操から法を受けている。法全からの受法のこととは、三千院本『慈覚大師伝』に引用されている嘉祥元年六月十五日の「太政官牒ニ延暦寺一、応レ修ニ灌頂一事」<sup>27</sup>によると、「從ニ会昌二年二月五日一、於ニ善無畏三藏第四弟子玄法寺法全阿闍梨所一、入ニ灌頂壇一、受ニ胎藏大法并諸尊法一。至ニ于三年三月十二日一、受ニ伝法灌頂一。」（『統天全』史伝二、五四頁上）とあり、法全からの受法を始めた日付は会昌二年（八四二）二月五日からのことであり、最終的に胎藏大法の伝法灌頂を受けたのは翌年の会昌三年（八四三）三月十二日のことと記されている。しかし、『巡礼記』によると会昌三年は武宗による廃仏の状況がかなり厳しいもの（小野三、四五九・四七八頁など）となっており、またこの年の三月中については『巡礼記』の記述が見られず、三月十二日の伝法灌頂の受法を裏付けることは難しいが、廃仏が厳しさを増す中で時期を選び、内密に灌頂が行われたものと推測される。なお、『巡礼記』にある会昌二年二月二十九日における法全からの胎藏大法の受法については、「灌頂」という表現がないので、正式な伝法灌頂を受けるための前段階の修学受法であつたと見るべきであろう。

また、『巡礼記』二月二十九日条では、大安国寺の元簡より悉曇章を審決している。この『悉曇章』は、『新求

目録』に『悉曇章』一卷 元偈かん注音(356)と見えているものである。悉曇はすでに揚州において宗叡、全雅より学んでゐるが、再度受法の必要性があったと見え、円仁は悉曇学習の重要性を認識していたといえる。この点は、『新求目録』の諸本の記載によると揚州において四十四部、長安においては八十三部、合計で百二十七部の梵語、梵漢両字經典が記載されていることから窺える。これは、『諸阿闍梨真言密教部類総録』巻下に「悉曇章一卷 仁安国寺本」(『大正』五五、一一三〇頁c)とあり、安然の注記によって大安国寺にて写したものであったことが分かる。この元簡については、『新求目録』中に『梵字悉曇字母』一卷 安国寺偈和尚本(352)、『梵本切韻十四音十二声』元偈述(357)と見えているのが元簡より得た書物と考えられる。『新求目録』において、梵語に関する書物は字書である『翻梵語』一卷(380)、『梵語千(字)文』一本 義浄(青蓮院本のみ記載、213)が見られる。

この後の会昌二年(八四二)三月三日条は、会昌廃仏の最初の詔勅が出された日として注目される。すなわち、「李宰相聞<sub>レ</sub>奏僧尼条流<sub>一</sub>。勅下、発<sub>レ</sub>遣保外無名僧<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>童子・沙弥<sub>一</sub>。」(小野三、四二〇頁)とあり、宰相李徳裕(七八七―八四九)の奏聞により保(隣保などの保の意)に所属していない無名の僧侶を追放し、同様に無所属の沙弥を置くことを禁じている。

三月八日、円仁は仏舍利会の見聞を書き留めている。「薦福寺開<sub>二</sub>仏牙<sub>一</sub>供養。詣<sub>レ</sub>寺随喜供養。街西興福寺開<sub>二</sub>仏牙<sub>一</sub>。」(小野三、四二四頁)とあり、大薦福寺(街東第一街第二坊の開化坊)にて仏牙の供養が行われている。知玄の述作については先述したが、『新求目録』に『長安左街大薦福寺讚仏牙偈』一卷 知玄述(459)があり、知玄によってこの仏牙会を讃える偈が著されている。また、この日功德使の巡院(出張所)から、「巡院転<sub>レ</sub>帖興善・青龍・資聖寺三寺外国僧三藏等<sub>一</sub>。右奉<sub>二</sub>軍容处分<sub>一</sub>、前件外国僧並仰安存、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>発遣<sub>一</sub>者、事須<sub>二</sub>転帖<sub>一</sub>。」(小野三、四二四頁)、すなわち大興善寺・青龍寺・資聖寺に滞在する外国僧(青龍寺は宝月三藏と弟子僧、資聖寺は円仁と弟子僧)を安存(保護)し、発遣することを認めない旨の牒が出されている。四月、日付はないが「玄法寺法全座主解<sub>二</sub>三部大法<sub>一</sub>。施<sub>二</sub>胎藏大軌儀三卷、兼別尊法・胎藏手契<sub>一</sub>、宛<sub>二</sub>遠国広行<sub>一</sub>。」(小野三、



四三六頁）とあり、先述の法全が円仁のために『胎藏軌儀』三卷（二卷の誤りか）、『別尊法』三卷、『胎藏手契』を施与している。このうち『胎藏軌儀』は、『新求目録』に記載の『大毗盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏悲生曼荼羅広大成就儀軌』二卷 法全（171）、『胎藏手契』は『大悲胎藏手契』一卷（492）に相当すると考えられる。

円仁は、会昌二年（八四二）五月二十六日、再度悉曇を受法している。すなわち、「五月十六日起首、於青龍寺天竺三藏宝月所一重学ニ悉曇一、親口コ受正音一。」（小野三、四五四頁）とあり、この日から青龍寺のインド僧三藏宝月に悉曇を学び、直接正しい発音を教わっている。先述の通り、悉曇は長安において元簡よりすでに学んでいたが、インド僧より正確な発音を学ぶ必要があったと見え、円仁がいかに悉曇を重視していたかが分かる。なお長安での元政・義真・法全等からの真言密教の受法により、後に確立していく円仁の密教思想について少し触れておきたい。

円仁は将来した密教經典や儀軌、論書を元に（1）円密一致論（2）顕密二教判（3）一大円教論を展開していることが、木内堯央氏によって指摘されている。<sup>28</sup>これらは円仁撰『金剛頂経疏』及び『蘇悉地経疏』に論及されており、「円密一致論」については、『法華経』（円教）と『大日経』（密教）との一致を説くものであり、最澄が示した日本天台の基調を継承したものとみられる。「顕密二教判」については、三乗教（権教）を「顕教」とし、真言密教とともに『法華』『華嚴』『維摩』『般若』等の諸大乘教もまた一乗教であるが故に「密教」と位置づけ、一乗經典と密教經典が同価値であると見ている。これは空海の密教至上主義と大いに異なる点であろう。

さらに円仁の密教観における究極の考え方は、「一大円教論」であると見られている。これは『金剛頂経疏』（『大正藏』六一卷、一六b）に、

如来但説ニ真言頓証無上法門一、曾無ニ他事一。是即名為ニ随自立一也。是故大興善寺阿闍梨云、若就ニ真言一而立レ教者、応レ云ニ一大円教一。如来所レ演無レ非ニ真言秘密道一故。

とあり、大興善寺阿闍梨すなわち元政の教示に依ったものである。それによれば、円密一致、顕密二教判を立て

てはいるが、最終的には如来の教えは全て絶対の一大円教という真言秘密道に帰着されることになるかと述べており、特にこの思想は入唐求法による成果の一端であるといえる。

会昌三年（八四三）、武宗による仏教弾圧は激しさを極めた。六月十三日条の『涅槃經』二十卷の焚焼（小野四、七頁）、六月二十九日条の勅によって内裏の仏經の焚焼及び仏像を埋める（小野四、一九頁）などの記録が見える。

なお、会昌三年七月二十五日条によると、「弟子僧惟曉從去年十二月一日病、至今年七月、都計八箇月病。会昌三年当日本承和十年七月廿四日、夜二更尽身亡。」（小野四、一二二頁）とあり、円仁は七月二十四日の夜更けに弟子僧惟曉の死去に直面している。円仁に従って異国の地を歩んできた惟曉が八ヶ月間病の床に伏せた末に三十二歳の若さで亡くなったことは、円仁の胸を痛める出来事であったと思われる。

会昌四年（八四四）は廃仏の記事で埋められ、求法に関する記述は見られない。おそらく勅によって外出も容易ではなく、資聖寺の一角で求得の経論に目を通す日々であったと想像される。

なお、『巡礼記』には見られないが、日本からもたらされた唐決である「徳円疑問」及び「光定疑問」の決答を、会昌五年（八四五）三月二十八日に長安禮泉寺の宗穎より得るとともに、『摩訶止観』を受法したことが嘉祥元年（八四八）六月十五日付の「太政官牒 延暦寺応修灌頂一事」に「又於天台大師第八弟子右街禮泉寺僧宗穎所、研習止観之微旨。」（三千院本『慈覚大師伝』、『続天全』史伝二、五四頁）とあり、また寛平入道本『慈覚大師伝』（『続天全』史伝二、六五頁）にも同様の文が記されていることよって知られる。これらは、『日本大蔵經』に「徳円疑問 宗穎決答」<sup>29</sup>及び「光定疑問 宗穎決答」<sup>30</sup>として収録されており、「徳円疑問」は十ヶ条からなり、その末尾に「上都右衛禮泉寺沙門 宗穎上」とあり、宗穎は長安禮泉寺の僧侶であったことが知られる。「光定疑問」は六ヶ条からなり、末尾に「唐会昌五年三月二十八日 上都右衛禮泉寺義学沙門 宗穎上」とあり、会昌五年三月二十八日に宗穎が決答したものであることが知られるが、会昌五年に長安に滞在していた

天台僧は円仁とその弟子惟正であり、円仁によって求められた決答であることが指摘されているものである。<sup>31</sup> 上記のことから、円仁が宗頼からの『摩訶止観』の受法と決答を得たことは間違いないものと考えられるが、これら唐決を円仁がいつ徳円らから受け取ったのかという問題がある。『巡礼記』会昌二年（八四二）五月二十五日条によると、「円載留学僊從僧仁済来。（中略）載上人委曲云、僧玄済将金廿四小両、兼有三人々書状等、付於陶十二郎帰唐。此物見在劉慎言宅。」（小野三、四四二頁）とあり、円仁は留学僧円載の僊從仁済より楚州の新羅訳語劉慎言からの書状を受け取っているが、劉慎言の所に日本の玄済阿闍梨が付した書状があることを知らされた円仁は、同年七月二十一日条に「留学僧僊人仁済帰天台去。遣惟正一相隨到楚州、令取本国書信一。」（小野三、四七五頁）、すなわち弟子僧惟正を楚州に遣わし、十月十三日条に「惟正從楚州一帰、到上都一。得本国書二封一（後略）」（小野三、四五七頁）とあり、書状二通を受け取っている。佐伯有清氏は、この書状の中に「徳円疑問」と「光定疑問」があつたと推測している。<sup>32</sup>

帰国が決定したのは会昌五年（八四五）になつてからであり、同年四月―五月（日は記載なし）に以下のように記している。

有レ勅云、外国等若無ニ祠部牒一者、且勒還俗通ニ帰本国一者。（中略）日本国僧円仁・惟正且無ニ唐国祠部牒一。功德使准レ勅、配コ入還俗例一。又帖ニ諸寺一。牒云、如有下僧尼不レ伏ニ還俗一者上、科ニ違勅罪一、当時決殺者。聞ニ此事一、装束束文書・所レ写經論・持念教法・曼荼羅等一、尽装裹訖。文書兼衣服都有ニ四籠一。便買ニ三頭驢一、待ニ処分来一。心不レ憂ニ還俗一、只憂下所レ写聖教不レ得ニ隨レ身将行一。又勅切コ断仏教一、恐下在レ路諸州府檢勘得レ実、科中違勅之罪上。（小野四、一三四頁）。

とあり、唐国の祠部の牒がない外国僧も還俗して帰国せよとの勅が出ており、円仁と惟正も功德使によって還俗の対象に定められている。次に、諸寺へ万一還俗を行わない者は違勅罪に科して決殺（死刑）にするとの牒が通達され、これを聞いた円仁は直ちに手元にある文書・写すところの經論・持念の教法・曼荼羅などを包み、文書

と衣服は四籠にまとめ、三頭の驢馬を購入している。「只憂下所<sup>レ</sup>写聖教不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身將行<sup>一</sup>。」という記述から、円仁にとって聖教類を持ち出すことができるかどうかが最大の懸念であつたことが窺える。

会昌五年(八四五)五月十三日、円仁は現地人との別れに及んで餞別の品を受け取っているが、それらは民間信仰が窺える物として注目される。「都維那僧法遇、贈<sup>ニ</sup>檀龕像一軀<sup>一</sup>、以宛<sup>ニ</sup>帰国供養<sup>一</sup>。」(小野四、一三七―一三八頁)とあり、三綱の一人であつた都維那僧法遇は円仁に檀龕像一体を贈っている。『新求目録』には、「<sup>(マ)</sup>壇龕涅槃浄土<sup>一</sup>」一合(502)、「<sup>(マ)</sup>壇龕西方浄土<sup>一</sup>」一合(503)、「<sup>(マ)</sup>壇龕僧伽誌公万廻三聖像<sup>一</sup>」一合(504)が記載されており、この時贈られたものはこのうちのいずれかであつたと思われる。これら檀龕像は、枕本尊と呼ばれる小型の檀像で、白檀などの木材に仏像が彫刻されたものである。「<sup>(マ)</sup>壇龕涅槃浄土<sup>一</sup>」、「<sup>(マ)</sup>壇龕西方浄土<sup>一</sup>」は、各々涅槃浄土及び西方浄土の様子が刻まれたものであり、「<sup>(マ)</sup>壇龕僧伽誌公万廻三聖像<sup>一</sup>」一合は三聖像すなわち泗州大師僧伽和尚(六二九―七一〇)と宝誌和尚(四二五―五一四)、万廻和尚(六三二―七一)の姿を刻んだものであり、觀世音菩薩の応化として信仰されたと見られる。<sup>33</sup>特に僧伽和尚は水路安全の守り神として民間に信仰され、<sup>34</sup>円仁が揚州滞在中の『巡礼記』開成五年(八四〇)三月七日程にも僧伽和尚に関する記述が見られ、当時広範囲で信仰が行われていたことが窺える。これらは円仁一行の道中の無事を祈って贈られたのであろう。

同日の夕方、資聖寺の僧侶に別れを告げて俗衣を纏った円仁は、五月十五日に京兆府を去り、万年県(街東宣陽坊の東南隅)に到った。この日、「大理卿中散大夫賜紫金魚袋楊敬之、曾任<sup>ニ</sup>御史中丞<sup>一</sup>。令<sup>ニ</sup>專使來問<sup>一</sup>何日出城、取<sup>ニ</sup>何路<sup>一</sup>去。」(小野四、一四三頁)とあり、第二章で触れた官僚(中散大夫)楊敬之(―八三五―)の使者が円仁の許を訪れ、円仁にいつ長安を去りどの道で帰るのかと尋ねている。『新求目録』に『維摩經疏』一卷豫州刺史楊敬之撰(379)があるが、これは楊敬之との縁によって得た可能性も考えられる。本書は鳩摩羅什訳『維摩經』三卷(『大正藏』十四、五三七a―五五七b)の注釈書の一つであり、楊敬之が『維摩經』にも造詣があ

ったことが窺える。

この後に、「当寺講ニ維摩百法一座主雲栖・講ニ涅槃經一座主靈莊、先冊已下例還俗訖。」（小野四、一四三―一四四頁）とあるが、資聖寺の雲栖座主が講義を行っていた百法論とは、天親菩薩造・玄奘訳の『大乘百法明門論』一卷（『大正蔵』三一、八五五b）を指している。これは瑜伽論関連の論書とされ、『新求目録』には、『百法論頭幽抄』十卷 従方述（398）、『大乘百法明門論疏』一卷 忠撰（399）、『百法疏抄』二卷上下 章敬寺擇隣（400）、『大乘百法論義選抄』四卷 阿中全則述（401）、『大乘百法玄枢決』一卷（402）、『大乘百法義門抄』二卷 金則述（414）の六部の注釈書が見られ、円仁の百法論への強い関心が窺える。このうち、円仁将来の『百法論頭幽抄』については、東大寺に重要文化財として『百法頭幽抄』巻第一の名称で現存しており、その巻尾の識語に、「巨唐会昌三年十月廿一日上都資聖寺写畢。惟正記。貞觀十四年二月廿五日聴聞畢、比丘令秀。伝法師前入唐求法惟正大和尚、伝授比丘喜静。謹記。」とあることから、本書は円仁の弟子惟正が会昌三年十月二十一日に資聖寺において写したものであることが知られる。<sup>36</sup>

この後、会昌五年（八四五）五月十五日条によれば、長安で約二年間円仁と懇意にしていた新羅人官吏李元佐より餞別の品として、「呉綾十疋・檀香木一・檀龕像兩種・和香一瓷瓶・銀五股抜折羅一・氈帽兩頂・銀字金剛經一卷」（小野四、一四四頁）などを贈られている。この中に見える檀龕像兩種は、先述した『新求目録』に見られる三合の檀龕像のうちの二合であろう。「銀五股抜折羅」については、『新求目録』に「金銅五鈇金剛杵一口（508）」「金銅独鈇金剛杵一口（509）」「金銅五鈇小金剛杵一口裏盛仏舍利（511）」の三点があるが、いずれも金銅製であることから『巡礼記』の「銀五股抜折羅」とは別物であろう。

最後に、これら将来物が廃仏の厳しい条件の中で長安からどのようにして運ばれたかについて見ておきたい。会昌五年（八四五）六月二十三日、煦貽県（現江蘇省淮安市盱眙県）に到った円仁は、「從煦貽県至揚州九駅。無水路。文書籠駄、每駅賃驢之。」（小野四、一八五頁）と述べ、初め水路で煦貽県から楚州を目指していた

円仁は、この後揚州に向かうことを余儀なくされ、九駅にわたる陸路を驢馬で移動している。

七月五日に楚州の劉慎言宅に到着し、登州へ向かう道中で粗悪な心を持つ人々によって隨身物に危害が加えられる可能性があることを彼より忠告された上で、「共ニ劉語ニ商量、從レ京将来聖教功德幀及僧服等都四籠子、且寄コ着訳語宅裏、分コ付訳語、囑レ令ニ檢校。」（小野四、二〇一頁）すなわち求得の法門や僧服を納めた四籠は劉慎言に預けることを決め、失うことのないよう頼んでいる。劉慎言については、開成四年（八三九）三月二十二日条にその名が見えており、揚州より遣唐使一行に通訳として同行した現地人であり、円仁の大陸留住に際して手助けを行い、滞在生活の最後まで支援していたことが分かる。

七月八日、円仁は船に乗り、十七日海州から陸路を通り、八月十六日登州に到るまでの間、辛苦を極めた山路の旅を経ている。八月二十四日、文登県に到った円仁は、赤山で出会った還俗僧李信恵ら現地の新羅人らによる保護を受け、九月二十二日以降滞留が可能となったが、このような現地の唐人及び新羅人らの支援によって円仁の求法活動が継続できたことも述べておく必要がある。<sup>37)</sup>

そして、翌会昌六年（八四六）二月五日条には、「為レ取下楚州劉慎言処ニ寄着ニ経論等上、差ニ丁雄満一就ニ閭方金船一、遣ニ楚州一。大使勾当、発コ送其船。」（小野四、二五九頁）とあり、劉慎言に預けた将来物等を取りに行かせるため入唐中行動を共にしてきた従者の丁雄満を楚州に派遣している。同年六月二十九日条には「丁雄満来到。兼得ニ楚州劉慎言書一。先寄功德幀文書中、胎藏金剛兩部大曼荼羅盛レ色者、縁ニ淮南勅牒嚴切一、劉慎言已焚訖。其余苗画及文書等、具得ニ将来一。」（小野四、二七一―二七二頁）とあり、この日楚州より戻った丁雄満より得た劉慎言からの書状には、淮南の勅により彩色が施された胎藏金剛兩部大曼荼羅は彼の手によって焼かれたが、その他の苗画及び文書などは将来できたことが窺える。以上が廃仏における将来物運搬に関する『巡礼記』の記録である。

会昌六年（八四六）四月十五日に武宗が崩御し、五月二十二日に宣宗（八一〇―八五九）の即位に伴い、天下

の州ごとに寺院を建立すべきの勅が出ている。円仁は会昌廃仏の終焉を見届けて間もなく帰国に向かうことができたのであった。

十二月二日、比叡山より太政官牒などを携えた弟子性海が円仁の元に到っている。大中元年（八四七）二月、新羅人張大使（張詠）が円仁のために帰国の船を建造し、その船に乗って六月五日楚州にて劉慎言の出迎えを受けている。六月十八日新羅人王可昌の船に乗り、八月十五日登州界（文登県界か）の船上にて剃髪し再び緇服（僧服）を纏い、九月二日赤山浦より渡海している。九月十七日博多の西南・能挙嶋に停泊して翌十八日に太宰府鴻臚館前に到着し、円仁の波乱に富んだ入唐求法は終わりを迎えたのであった。十一月七日、比叡山より仲曉・慈叡・玄曉の三名が円仁を迎接し、『巡礼記』は十二月十四日、「午後、南忠闍梨到来。」（小野四、三三九頁）とあり、比叡山より円仁を迎えに弟子南忠が到来したことを記して筆を置いている。

## 結語

以上考察してきた円仁の入唐求法の概略をまとめると、開成三年（八三八）八月二十四日から開成四年（八三九）二月十八日の六ヶ月間滞在した揚州においては、終南山の宗叡和尚より悉曇を受法し、閏正月二十一日より嵩山院の全雅阿闍梨より金剛界諸尊儀軌及び曼荼羅など密教の法門を囑授された。従って揚州での求得の法門類百二十八部百九十八巻の多くは、宗叡及び全雅から得たものであると見られる。また天台典籍の占める割合も高いことが分かってきた。そこで円仁の三目録に記された書物を中心とする将来物がいかなる背景や状況の下で求め得たかを検討したところ、次のような事柄が明らかになってきた。

唐梵対訳の三十五部の書目の入手については、『巡礼記』などに具体的記載はないが、宗叡より悉曇を受学したという『承和五年目録』末尾の文により宗叡より求め得たことは間違いないであろう。真言密教関係の将来物

については、『承和五年目録』末尾に全雅より密教を学び念誦法門を授かったことが記され、さらに『巡礼記』には全雅より金剛界関係の儀軌など数十部を借写し、また密教儀軌の散逸を戒められたことが記されている。よって揚州求得の密教書物のほとんどは全雅から得たものと考えて良いであろう。さらにまた、全雅からは胎藏界及び金剛界の曼荼羅や如意輪の儀軌なども入手していることが知られた。

十数点に上る天台典籍の求得については、『巡礼記』にその経過などの記述はないが、円仁滞在の龍興寺での入手であったことが推測される。それは龍興寺がかつて玉泉天台の法脈を継ぐ鑑真の住房であり、円仁が訪ねた折も南岳・天台両大師影が祀られており、これを写し将来している（「揚州将来物一覧表」<sup>141、142</sup>）ことなどから勘案すれば、天台関係の書目についても龍興寺を中心に蒐集したものと見られるであろう。これら天台典籍の蒐集についての鑑真をめぐる歴史的背景については、従来顧みられていない点であったので少しく考察を加えてみた。

さらに龍興寺では、天台・南岳両大師像以外にも『法華経』読誦により靈異のあった伝法和上影十<sup>143</sup>点（<sup>143</sup>—<sup>152</sup>）を写し将来しており、『法華経』を所依とする天台僧円仁の関心の深さが窺われる。その他、『維摩経』の疏記については、天台疏等を用いて無量義寺にて講義していた文襲の『浄名経記』（<sup>62</sup>）をはじめ三部の書を将来している。戒律に関しては律宗の道宣（『量处轻重儀』<sup>88</sup>）や義浄の書（『説罪要行法』<sup>91</sup>）のみならず、日本天台で重視された大乘菩薩戒に関する『受菩薩戒文』（<sup>93</sup>）を将来している。禅については、他の入唐僧が将来していない南宗禅の由来を述べた『宝林伝』（<sup>107</sup>）が注目される。この他『肇論』・因明・唯識の書や五台山の寺誌、靈驗伝など幅広い分野にわたっての蒐集が見られる。

そして、入唐八家の中でも円仁将来の特色の一つは、外典が多く見られることであり、揚州では十一部の書目が目録に見られる。また仏舍利なども蒐集したことも知られた。

次に、五台山で求め得た三十四部三十七巻の法門書籍については、その大半が天台法門に関するものであり、



天台典籍の完備していた大華嚴寺において蒐集することができた。大華嚴寺には志遠を主座として法賢・文鑑の三人の座主がおり、『法華経』をはじめ『摩訶止観』などの講義や法華三昧が修され、一心三観を心腑として天台の法脈を伝えていた。このような大華嚴寺での円仁の求法見聞と天台典籍の書写将来は、五台山での大きな成果であったといえる。なお、北谷や大暦法花寺など五台の諸処においても天台の法華三昧行法が行われていたことが知られ、その靈驗伝なども将来している。

大華嚴寺と並んで特筆すべきは、法照創建になる竹林寺における五会念仏の見聞であり、部数こそ少ないが『浄土五会念仏略法事儀讃』（『五台山将来物一覽表』<sup>21</sup>）など法照関係の書目の将来は注目される。後の開成六年（八四一）二月八日条の長安資聖寺での五会念仏の見聞と合わせ、帰国後の比叡山への浄土念仏法門の伝承として意義深いものといえる。金剛窟では、『仏頂尊勝陀羅尼』を伝えた仏陀波利の逸話と縁起を『巡礼記』に紹介しているが、その中の文殊師利菩薩の逸話を記した『五臺山金剛窟収五功德記』（『長安将来物一覽表』<sup>438</sup>）は、後に長安で求め得た書であると見られる。

『巡礼記』によれば、大華嚴寺、金閣寺、七仏教誠院及び大暦靈境寺では日本の靈仙三蔵に関する見聞や伝聞を記録しているが、靈仙に関わる詩文を写し、靈境寺の碑文（五台山将来物一覽表<sup>35</sup>）なども将来しており、靈仙の足跡を窺うべき貴重な史料であると見られる。なお、五台山の土石（<sup>36</sup>）や柴木（<sup>37</sup>）の将来は、円仁創建の比叡山文殊楼院に深く関わることになる点で注目される。

次に、開成五年（八四〇）年八月二十二日から会昌五年（八四五）五月十五日の約五年間滞在した長安での求法の要点を示すと次の如くである。長安での求法の中心は真言密教であり、円仁はまず密教の阿闍梨（持念知法人）に関する確実な情報入手した上で、胎藏界・金剛界・蘇悉地のいわゆる「三部大法」を受法した。具体的には、開成五年（八四〇）十月二十九日と会昌元年（八四一）二月十三日には大興善寺元政より金剛界灌頂、同年五月三日には青龍寺義真より胎藏界と蘇悉地大法の灌頂を受けている。さらに会昌二年（八四二）二月二十九日

には玄法寺法全より胎藏界大法を受け、会昌三年（八四三）三月十二日には伝法灌頂を受けている。また大安国寺元簡や青龍寺宝月からは悉曇を受法している。長安で蒐集した将来物の内容はこれら密教受法に関するものが大半を占めているといえる。

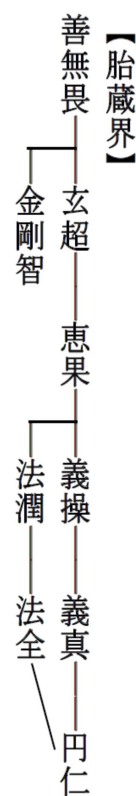
具体的に見ると、金剛界大法を受けた元政からは、目録に見られるように特に金剛界関係の儀軌や念誦法を借写したことが知られる。また受法道場である大興善寺の壁上に掛けられていたインドの金剛智（「長安将来物一覽表」<sup>498</sup>）や不空（<sup>499</sup>）など金剛界系の祖師方の真影も将来している。なおこの大興善寺は、かつて不空在住の訳場であり、かつ勅置灌頂道場であることから、不空訳の密教典籍及び文殊に関する典籍を多数蒐集している。

青龍寺にては義真より胎藏界並びに蘇悉地大法の灌頂を受けているが、『蘇悉地羯羅供養真言集』（<sup>351</sup>）など蘇悉地関係の書物はこの時に得たものと見られる。またこの灌頂に先立ち義真の指揮により制作したのが目録記載の「大悲胎藏法曼荼羅」一鋪三幅苗（<sup>478</sup>）と「大悲胎藏三昧耶略曼荼羅」一鋪一幅苗（白描、<sup>479</sup>）であろう。なお彩色の曼荼羅は会昌廃仏により焼却せざるを得なかったものと見られる。

玄法寺法全からの胎藏界大法及び大安国寺元簡からの悉曇受法について見ると、法全からは胎藏界大法を受け、目録の『胎藏儀軌』（<sup>171</sup>）や『大悲胎藏手契』（<sup>492</sup>）など胎藏界関係の書目の多くはこの時法全から授かったものと考えられる。また元簡や青龍寺宝月からの悉曇の受法については、目録に見られる梵語・梵漢両字八十三部のほとんどが両師より得たものと思われる。

なお、胎藏界と金剛界の円仁に至る師資相承の系譜について、海雲の『金胎両界師相承』及び造玄の『胎金両界血脈』、ならびに『巡礼記』等によって円仁の密教大法の血脈譜について考察した。その要点を総括的に論じると、胎藏界大法については義真と法全から受法し、金剛界大法は法全と元政から受法したことが明らかとなった。これら胎藏界と金剛界との系譜の要点を図示すると次の如くである。

図(5) 胎藏界系譜図



図(6) 金剛界系譜図



なお、円仁の密教教学の特徴は「一大円教論」にあるが、その教示については金剛界大法を授かった大興善寺阿闍梨、すなわち元政に依ったものであることを、円仁著『金剛頂経疏』によって確認することができた。しかも円仁の血脉譜において、元政は法全や義真とともに最も重要な人物の一人であったことが、『巡礼記』記載にみる大興善寺での元政の元での念誦法門の書写や、灌頂の記述によっても明瞭となった。さらに、『新求目錄』の密教関係の将来物の内容と『巡礼記』の密教受法の詳細な記述とを勘案してみると、胎藏界・金剛界・蘇悉地の三部の大法を具備する円仁の密教教学の特徴は入唐求法によってその素地が整いつつあった点が確認されるに至った。

また、円仁の毘沙門天に関する関心の深さから、不空訳の『毘沙門天王経』や『毘沙門天真言法』などを蒐集将来している。法照の五会念仏については、法照の弟子鏡霜が章敬寺を中心に、長安諸寺においても盛んにこれ

を伝えていたことが知られ、念仏に関連する書として善導の『浄土法事讃』(397)や弘素の『念仏讃』(425)なども目録に見られる。瑜伽唯識に関するものでは円仁の弟子惟正が資聖寺で書写した『百法論顕幽抄』(398)など数部の書が将来され、『百法論』への関心の高さが知られる。

その他、会昌への年号改元に関する『皇帝拜南郊儀注』(454)などの文献、また会昌二年正月資聖寺にて写したと考えられる『仁王般若経疏』(378)や三教談論大徳の知玄が著わした書物も数点(359、439、444、459)将来している。さらに円仁帰国への道中の無事を祈って贈られた檀龕像(502、504)なども目録に記載しており、円仁の外護者や交友関係を窺う上でも興味深い。

以上、円仁の九年三ヶ月に及ぶ入唐求法の内容を考察したが、これら求法は円仁の帰国後、成果としてどのように生かされたのかという点について、次章で見ていくこととする。

1 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一―第四卷(鈴木学術財団、一九六四―一九六九年)において、将来物に関する注釈が記されている頁は以下の如くである。

第一卷：二〇六頁、二五六頁、三三六頁、三三七頁、三九一―三九五頁、三九六頁、四五二頁、四八九―四九〇頁。

第二卷：七九頁、九七頁、四五三頁、四五四頁。

第三卷：六七頁、七〇頁、七一頁、八七―八八頁、一〇六頁、一一六頁、一一九頁、一七九頁、三〇六頁、三二

四頁、三二五―三二六頁、三八六頁、三八七頁、三八九頁、三九八頁、四一九―四二〇頁、四三九頁。

第四卷：一五〇頁、一五二―一五三頁、一五八頁、一五九頁。

2 西明寺については、小野勝年「長安の西明寺とわが入唐僧」(『佛教藝術』二九号、一九五六年)に詳しい。西明寺

は、唐顯慶元年（六五六）高宗（六二八―六八三）、在位六四九―六八三）によって建立された勅建寺院であり、円仁の他に空海・円載・円珍・真如・宗叡ら入唐僧が止住した寺院として知られる。

- 3 『維摩經』に関する彼ら四師の著作として、現存するものに僧肇の『維摩詰所説經注』十卷がある。また、智顗には『維摩經玄義』六卷、『維摩經文疏』二十八卷、『維摩經玄義』十卷がある。竺道生は、慧皎撰『高僧伝』卷七に「初関中僧肇始注ニ維摩」。世咸翫味、生乃更発ニ深旨一顯ニ暢新異一及諸經義疏、世皆宝焉。」（『大正蔵』五〇卷、三六七a）とあり、道融は『高僧伝』卷六に「所著法華大品金光明十地維摩等義疏。」（『大正蔵』五〇卷、三六三c）とあることから、各々『維摩經』の義疏を著していることが窺える。

- 4 智顗作『五方便念仏門』（『大正蔵』四七卷、八一c―八三a頁）については、澄観（七三八―八三九）の華嚴思想（『華嚴經大疏』（『大正蔵』三五卷、五〇三a）の影響を受けて五種念仏三昧門を示した天台の浄土文献と見られる。

- 5 『観心十二部經義』については、『伝教大師将来台州録』の「天台闕本目錄」にも『観心誦十二部法』一卷として挙げられている（『伝教大師全集』第四、三六二頁）。ただ、寛政五年（一七九三）日光の興雲律院で伝写されたという現存の写本については、中古天台の偽作とする説もあるが、円仁将来本と同一内容であったかは、なお考察を要するであろう。

- 6 『天台大師答陳宣帝書』は現存していないが、『国清百録』第一（『大正蔵』四六卷、七九九a）に「陳宣帝勅留不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>天台<sub>ニ</sub>」の記載がある。これは、智顗が太建七年（五七五）三十八歳の時、陳と金陵（南京）より台州天台山に入山しようとした時、宣帝（五二八―五八二、在位五六九―五八二）が勅により都に留連しようとした文書であると見られる。

- 7 関口真大「玉泉天台について」（『天台学报』創刊号、天台学会、一九六〇年）一二頁、武覚超『中国天台史』（叡山学院、一九八七年）三五―三七頁。

8 『宋高僧伝』（『大正蔵』五〇、七三二b）

唐荊州玉泉寺恒景伝

釈恒景、姓文氏、当陽人也。貞觀二十二年勅度聴<sub>レ</sub>習<sub>三</sub>藏<sub>一</sub>。一聞能誦如<sub>レ</sub>説而行。初就<sub>二</sub>文綱律師<sub>一</sub>隷<sub>二</sub>業毘尼<sub>一</sub>。後入<sub>二</sub>覆舟山玉泉寺<sub>一</sub>。追<sub>二</sub>智者禪師<sub>一</sub>習<sub>二</sub>止観門<sub>一</sub>。

なお、円珍撰『諸家教相同異略集』（『智証大師全集』中巻、五八五頁上）では「弘景」とあるが、『宋高僧伝』では「恒景」とあり、また李華撰『左溪大師碑』（『全唐文』三二〇・二頁右、『欽定全唐文』七、四一〇一頁下、台湾大通書局、一九七九年）では、「宏景」と種々に書かれている。このことは、関口真大、前掲注8、一二頁によっても指摘されている。

9 神田喜一郎「慈覚大師外典考証」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）九一頁。

10 神田喜一郎、前掲注9、九三頁。

11 神田喜一郎、前掲注9、九四頁。

12 牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）六九五―六九八頁。

13 石田尚豊「円仁の揚州求法について」（石田尚豊『空海の帰結―現象的史学―』中央公論美術出版、二〇〇四年）二二―二二二頁。

14 後藤基巳・山井湧『中国古典文学大系五七 明末清初政治評論集』（平凡社、一九八二年）巻末一二頁によると、唐・五代の一里は五五九・八〇メートルとされている。

15 『全唐文』巻五八七（『欽定全唐文』一二、台湾大通書局、一九七九年四版、七五三五頁下）。

16 竹林寺で行われた「同音念<sub>二</sub>阿弥陀仏<sub>一</sub>」について、小野勝年氏は「法照流の五会念仏を指す。」（小野二、四五―四六頁）と述べ、塩入良道氏は「法照が始めたといわれる五会念仏のことであろう。」（足立喜六訳注・塩入良道補注

『入唐求法巡礼行記』一（平凡社、一九七〇年、三一七頁、注三〇）と述べている。

17 仲尾俊博『日本初期天台の研究』第十章 遮那業と唐決（永田文昌堂、一九七三年）二八六―三一九頁。

18 仲尾俊博、前掲書17、三〇二頁。

19 大師是歳奏下可<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>文殊楼<sub>一</sub>之状<sub>上</sub>。特有<sub>レ</sub> 詔給<sub>二</sub>造料<sub>一</sub>。（貞観）三年、以<sub>二</sub>臺山靈石<sub>一</sub>、埋<sub>二</sub>其五方<sub>一</sub>、始作<sub>二</sub>件楼<sub>一</sub>。  
一。王公庶人、帰<sub>レ</sub>心合<sub>レ</sub>力。（『統天全』史伝二、七〇頁上）

20 同（貞観）三年（中略）六月七日奉<sub>二</sub>造文殊像<sub>一</sub>以<sub>二</sub>五臺香木<sub>一</sub>入<sub>二</sub>中心<sub>一</sub>。十月周旋供養。大師遷化之後、貞観十二年四月十九日依<sub>二</sub>大師遺囑<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>進清和院<sub>一</sub>。慈恵大師山務天元三年十月一日移<sub>二</sub>造虚空蔵峯<sub>一</sub>。（『天台座主記』一二頁）

21 海雲撰『略叙伝大毗盧舍那成仏神変加持経大教相承伝法次第記』の奥書（『大日本統蔵経』一、九五、五、四九四頁）には「巨唐大和八年歳次甲寅十月上旬有八日、清涼山大花厳寺伝法苾芻海雲集記」とあるが、その後が続いて「日本裏書、浄住寺僧道昇、玄法師僧法全・惟謹、青龍寺僧法全和尚所<sub>レ</sub>伝胎蔵大法、則有<sub>二</sub>安国寺僧敬友、永寿寺僧文懿、永保寺僧智満、新羅国僧弘印、慈恩寺僧操玄、日本国僧円仁・円載・円珍・遍明・宗叡、又当院弘悦、安国寺僧文逸、興唐自怱、薦福寺恵怱、俗居士丁建武郭茂炫<sub>一</sub>。永暦元年五月二十日於<sub>二</sub>勸修寺西明院<sub>一</sub>書了。僧範果之本。」と記されている。

22 請下於<sub>二</sub>興善寺<sub>一</sub>置<sub>中</sub>灌頂道場<sub>上</sub>状一首 并墨勅

請下大興善寺修<sub>二</sub>灌頂<sub>一</sub>道場<sub>上</sub>。右臣竊観度<sub>レ</sub>災禦<sub>レ</sub>難之法不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>秘密大乘<sub>一</sub>。大乘之門灌頂為<sub>レ</sub>最。（中略）乾元三年閏四月十四日宮苑都巡使御侮梭尉右内率員外置同正員賜紫金魚袋内飛龍驅使臣史元琮状進。（中略）請<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>墨勅一首。大興善寺三蔵沙門不空、請<sub>三</sub>為<sub>レ</sub>国置<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>。右不空聞、毘盧遮那包<sub>二</sub>括万界<sub>一</sub>。（中略）広徳元年十一月十四日、大興善寺三蔵沙門不空状進。

23 釈知玄、字後覺、姓陳氏、眉州洪雅人也。（中略）下<sub>二</sub>三峽<sub>一</sub>。歴<sub>二</sub>荊襄<sub>一</sub>抵<sub>二</sub>于神京資聖寺<sub>一</sub>。此寺四海三学之人会

要之地。玄敷「演經論」僧俗仰觀。戸外之履日其多矣。文宗皇帝聞之宣入顧問。甚愜二皇情。後学二唯識論於安国信法師。又研「習外典」。經籍百家之言無不該綜。

24 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』百華苑、一九七九年）三三—三五頁。

25 佐藤哲英『天台大師の研究』百華苑、一九六一年、五二七頁。

26 佐藤哲英、前掲書25、五二—五三頁によれば、「しかるに源信の三身義私記に「仁王經私記云。妙覺極智毘盧舍那唯獨一人生常寂光土。」とある文は明らかに現行疏（大正（三三、二七六b）と一致する。また先年青蓮院の吉水藏から検出した六即義私記の未再治本（拙稿「六即義私記の研究」龍谷学報三一七号所載参照）には「問。先約二初義一有二何証拠一。云三仁王經蜜明二等覺一也。答。仁王經私記中卷云。問。諸經有二等覺一。何故此中不立。答。依二余經一。即合有二三品一。下品（十地）中品等覺。上品妙覺。今般若時通不レ同二別教一。故但論二法雲一即及二仏地一。故大品云十地菩薩為レ如レ仏云云。（中略）問。仁王經私記文甚狼藉。可下對二正文一檢案上。」と、仁王經私記の名で引用されているものは、正しく現行疏第四卷（大正、三三、二七一a—b）の文であり、本疏の源信所覽本は觀無量壽經疏頭要記文にも、「三卷私記あり世に伝う」といっているように仁王經私記なる三卷本であったことが知られたのである。」と述べている。

27 『慈覺大師伝』（『続天全』史伝二）五四頁上。

太政官牒 延暦寺

応レ修二灌頂一事

右得二入唐廻請益伝灯法師位円仁奏狀一（中略）、会昌二年二月五日、於二善無畏三藏第四弟子玄法寺法全阿闍梨所一、入二灌頂壇一、受二胎藏大法并諸尊法一。至二于三年三月十二日一受二伝法灌頂一。

なお右の文は円仁自身の上奏文を引用したものであり、信憑性は高いと見なければならぬ。

28 木内堯央『天台密教の形成』（春秋社、一九八四年）二八七—二九三頁。



- 29 『日本大藏經』第七八卷、天台宗顯教章疏四（鈴木學術財団、一九七六年）二二一頁。
- 30 前掲注29、二二三頁。
- 31 佐伯有清『円仁』（吉川弘文館、一九八九年）一七四頁。
- 32 前掲注31、一七八頁。
- 33 牧田諦亮、前掲注12、六九七―六九八頁。
- 34 牧田諦亮、前掲注12、六九五―六九六頁。
- 35 国宝・重要文化財目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録美術工芸品編』下巻、ぎょうせい、一九九九年、一〇五八頁。
- 36 稲垣瑞穂「東大寺図書館蔵本 百法顯幽抄の古點について」（『訓点語と訓点資料』第七輯、一九五六年）二五頁。
- 37 円仁と在唐新羅人との交流についてはいくつかの論考が見られるが、特に円仁の入唐求法や遣唐使一行の帰国が中国やアジア海域における新羅人のネットワークによって支えられ実現したことは、田中俊明「アジア海域の新羅―九世紀を中心に―」（京都女子大学東洋史研究室『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学、二〇〇三年）一一―七四頁において詳細に論じられている。

## 第四章 慈覚大師円仁入唐求法の成果―比叡山仏教の確立を期して―

### 序言

円仁は、入唐後揚州で悉曇及び真言密教を学び、赤山（山東省）では新羅式の講經儀式を見聞し、五台山では五会念仏を伝承し、最後に訪ねた長安では真言密教の伝授を受けた。この多岐にわたる求法の成果は、日本天台宗の発展にどのような影響を与えたのであろうか。『巡礼記』及び円仁帰国後の諸活動とを関連づけて考察を行うことにより、円仁入唐求法の日本天台宗への影響と成果をより明確化していくことが可能になると考えられる。

そこで、本稿では三千院本ならびに寛平入道撰『慈覚大師伝』及び『三代実録』などの諸史料から、帰国直後である承和十五年（嘉祥元年・八四八）以後の円仁の活動を整理し、それらと関連すると考えられる在唐中の出来事を『巡礼記』から抜き出し、『新求目録』を用いてそれに関連する将来物にも着目し、入唐求法の成果と影響を明らかにしていきたい。

なお、円仁将来物の名称は、第三章に掲載した付表①「『入唐新求聖教目録』所掲の円仁揚州将来物一覧表」、付表②「『入唐新求聖教目録』所掲の円仁五台山将来物一覧表」、付表③「『入唐新求聖教目録』所掲の円仁長安将来物一覧表」に基づいている。

## 第一節 比叡山諸法儀の始修と整備

### (1) 法華懺法の改伝

入唐求法を終えて承和十四年（八四七）九月十八日太宰府鴻臚館に到り（『巡礼記』大中元年九月十八日条）、翌承和十五年（嘉祥元年、八四八）三月二十六日に帰京した円仁は、寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、「嘉祥元年春、奉<sup>レ</sup>詔入京。（中略）大師於<sup>レ</sup>是始改<sup>コ</sup>伝法華懺法<sup>一</sup>。先師昔伝<sup>ニ</sup>其大綱<sup>一</sup>。大師今弘<sup>ニ</sup>此精要<sup>一</sup>。」（天台宗典編纂所編『続天台宗全書』（以下『続天全』）史伝二、春秋社、一九八八年、六七頁上）とある。すなわち、嘉祥元年（八四八）円仁は法華懺法を改伝しているが、これは先師最澄が唐より伝えた法華懺法の大綱について、円仁がさらに精要を弘めたものであるとされる。このことについて承澄（一二〇五—一二八二）撰『阿婆縛抄』「諸寺縁起」下には、「嘉祥元年春、慈覚大師伝<sup>ニ</sup>半行半坐三昧行法<sup>一</sup>。毎<sup>ニ</sup>四季終<sup>一</sup>、期<sup>ニ</sup>三七日<sup>一</sup>、建<sup>ニ</sup>普賢道場<sup>一</sup>、懺<sup>ニ</sup>六根罪障<sup>一</sup>、永期<sup>ニ</sup>未來際<sup>一</sup>。法華三昧、爾來數百歳、酌<sup>ニ</sup>遺流<sup>一</sup>而不<sup>レ</sup>絶矣。」（『大日本仏教全書』鈴木學術財団、一九七一年（以下『日仏全』）第六〇、二七五頁上）とあり、嘉祥元年の春に円仁が半行半坐三昧（法華三昧）の行法を伝え、四季ごとに二十一日間普賢道場にて六根の罪障を懺悔する法華三昧を始めて以来、数百年に及んでいると記されている。

この法華懺法の改伝について具体的な内容は明らかではないが、『巡礼記』において関連する記述を見てみると、開成四年（八三九）十一月十六日、揚州での求法を終えた後に滞在した赤山法華院にて以下のような儀式を見聞している。「山院起首講<sup>ニ</sup>法華經<sup>一</sup>、限<sup>ニ</sup>來年正月十五日<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>其期<sup>一</sup>。十方衆僧及有縁施主皆來會見。就<sup>レ</sup>中聖琳和尚是講經法主。更有<sup>ニ</sup>論義二人<sup>一</sup>、僧頓証・僧常寂。男女道俗同集<sup>ニ</sup>三院裏<sup>一</sup>。白日聽講、夜頭礼懺聽<sup>レ</sup>經及<sup>ニ</sup>次第<sup>一</sup>。僧等其數卅來也。其講經礼懺、皆依<sup>ニ</sup>新羅風俗<sup>一</sup>。但黄昏寅朝二時礼懺且依<sup>ニ</sup>唐風<sup>一</sup>。自余並依<sup>ニ</sup>新羅語音<sup>一</sup>。

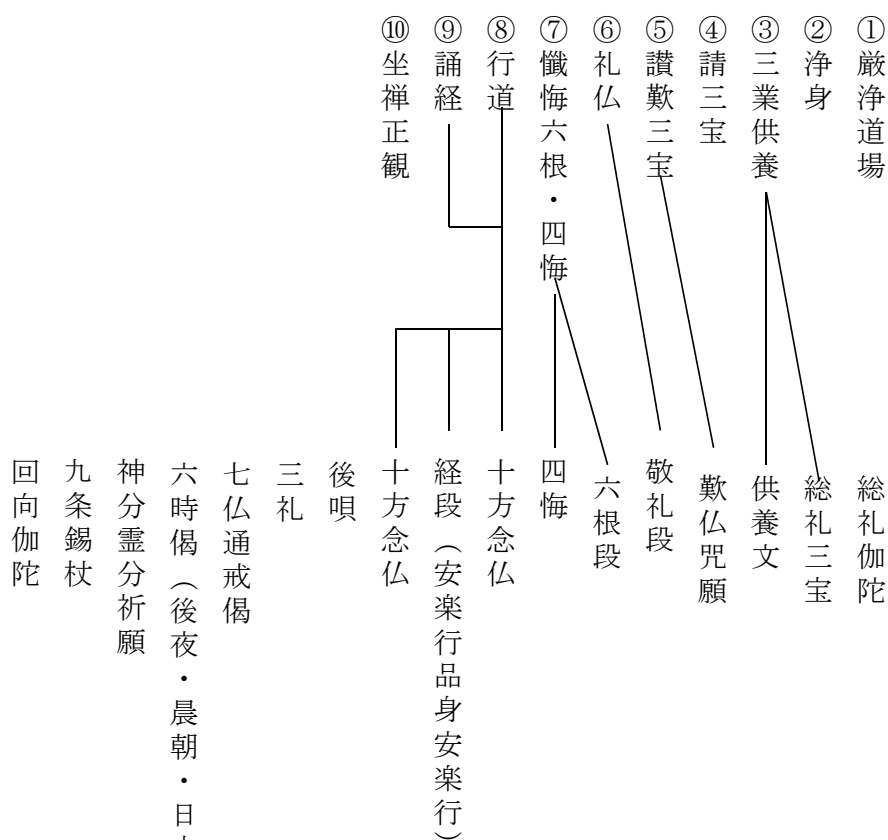
其集会道俗老少尊卑、惣是新羅人。但三僧及行者一人、日本国人耳。」（小野二、一三八頁）とあり、この日より山院（赤山法華院）にて昼間に『法華経』の講義が行われ、夜には礼懺・読経は次第に及び、その講経と礼懺は新羅の風俗に依ったとある。礼懺とは礼仏懺悔の略で、この赤山法華院では『法華経』に依る懺悔、すなわち法華三昧が行われたと考えられる。

『巡礼記』によると、この赤山法華院は新羅の清海鎮大使張宝高（一八四一）によって建立された新羅寺院であり（『巡礼記』開成四年六月七日条「赤山法花院、本張宝高初所<sub>レ</sub>建也。」）、『巡礼記』にはこの赤山法華院に住む新羅僧に関することや寺院の行事が詳しく記述されており、新羅との関わりが深い寺院であつたことが窺える。この日行われた礼懺も黄昏・寅の刻の二時に行われた唐風の礼懺以外は新羅の風俗及び言語が用いられており、参加した道俗は円仁及び弟子僧二人・行者以外は新羅人であつたことを伝えていることから、新羅との関わりが深い寺院であつたことが窺える。

また、同月二十二日、円仁はこの院において赤山院講経儀式を見聞しており、そこで「一僧唱二処世界如虚空偈<sup>一</sup>。音声頗似三本国<sup>二</sup>。」（小野二、一四三頁）と書き留めている点が注目される。すなわち、儀式の最中に一人の僧侶が唱えた「処世界如虚空偈」の発音が当時日本で行われていたものと頗る似ていることを強調しているのである。これは天台宗における現行の『台宗課誦』<sup>1</sup>に見える勤行儀における法華懺法の後唄に漢音で「処世界如虚空 如蓮華不著水 心清淨超於彼 稽首礼無上尊<sup>2</sup>」とある文に相当するものと考えられる。現在の例懺の読音は、ほぼ漢音であるものの新羅音が混じっている可能性が指摘されている<sup>3</sup>。円仁がこの時見聞いた礼懺が法華懺法の改伝に当たって、どの程度影響しているかは現在のところ明らかではないが、現行の「法華懺法」につながるものであることは間違いないであろう。そこで、現行の「法華懺法」と最澄が唐より伝えたと言われる智顗の「法華三昧行法」との関連を示すと次のようである。

〔法華三昧行法〕

〔現行の法華懺法〕



以上のように法華三昧行法の③「三業供養」が現行法華懺法の「總礼三宝」と「供養文」に、⑤「讚歎三宝」が「歎仏咒願」に、⑥「礼仏」が「敬礼段」に、⑦「懺悔六根・四悔」が「六根段」と「四悔」に、⑧「行道」

と⑨「誦經」が「十方念仏」と「經段」にそれぞれ対応でき、ほぼ同様の内容となっている。これらは天台大師の法華三昧をそのまま取り入れたものであるが、現行法華懺法に見られる総礼伽陀、後唄、三礼、七仏通戒偈、六時偈、神分靈分析願、九条錫杖、回向伽陀の部分は円仁の改伝により付加された可能性が考えられる。

五台山滞在中に見聞した法華三昧については第三章で述べたが、開成四年七月二十三日条に、大華嚴寺の志遠座主が六時の礼懺すなわち法華三昧を欠かさず、一心三觀をその心要としていたことが記されており（小野二、七一頁）、五台山の諸処においても法華三昧が盛行していた。

この法華三昧とは、『摩訶止觀』卷二に「常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧」（『大正新脩大藏經』以下『大正藏』と省略）四六卷、一一a）とあるうちの半行半坐三昧のことであり、光州大蘇山で南岳慧思禪師より法華三昧の行法を授かった『法華經』安樂行品第十四、ならびに普賢菩薩勸發品第二十八及び『觀普賢菩薩行法經』に基づいて智顗が著した『法華三昧懺儀』（『大正藏』四六卷、九四九a—九五五c）に示された行法であり、二十一日間毎日六度にわたり十の行法を行う天台止觀の修行法であることはすでに触れた通りである。比叡山には最澄が台州や天台山よりこの行法を相伝し、前述の如く円仁が帰国後、「法華懺法」として改伝したと寛平入道撰『慈覺大師伝』（『続天全』、史伝二、六七頁上）に伝えている。

円仁は、赤山法華院のみならず五台山の諸処や大暦法花寺などにおいても、法華三昧が行われていることを見聞しており、それらの儀式作法や次第を参考としつつ、帰国後比叡山での『法華懺法』改伝に及んだものと見ることができよう。

## (2) 不断念仏の始修

次に、仁寿元年（八五一）に行った念仏三昧の始修は、中国五台山での伝承を比叡山に伝えた出来事として注

目すべきである。寛平入道撰『慈覚大師伝』には、「仁寿元年移三臺山念仏三昧之法」。伝に授諸弟子等<sup>一</sup>、始に修常行三昧<sup>一</sup>。」「(『統天全』史伝二、六八頁下)とあり、五台山念仏三昧の法を諸弟子に授け、常行三昧を始修したことが述べられている。これによれば、円仁相伝の五台山の念仏三昧の法は「常行三昧」とあるが、慶滋保胤(九三二?—一〇〇二)撰の『日本往生極樂記』(九八五—九八七成立、『日仏全』第六八、一八五頁上—一九一頁中)の円仁伝の中では、「承和十四年帰朝。弥陀念仏、法花懺法、灌頂、舍利会等、大師所<sup>レ</sup>伝也。」(『日仏全』第六八、一八七頁上)と記され、「弥陀念仏」と称している。また寛平入道撰『慈覚大師伝』によると円仁遷化の翌年の記述として「(貞観)七年八月十一日、初行三大師本願不断念仏<sup>一</sup>。」(『統天全』史伝二、七三頁上)とあり、さらに源為憲(九四一—一〇一一)撰『三宝絵詞』(永観二年(九八四)成立)の「叡山不断念仏」の項には「念仏は慈覚大師のもろこしより伝て、貞観七年より始行へるなり。四種三昧の中には常行三昧となづく。仲秋の風すすしき時、中旬の月明なるほど、十一日の暁より十七日の夜にいたるまで不断に令<sup>レ</sup>行なり。身は常に仏を廻る。身の罪ことごとくうせぬらむ。口には常に経を唱ふ。口のとが皆きえぬらむ。心は常に仏を念ず。心のあやまちすべてつきぬらむ。」(『日仏全』第九〇、二七〇頁下)と説かれている。これによると、円仁遷化の翌年の貞観七年(八六五)に修された不断念仏の始行については『慈覚大師伝』と一致しており、さらにこの念仏は、四種三昧の中には常行三昧といい、期間は八月十一日より十七日までの七日間の行法であったことが知られる。『三宝絵詞』ならびに『慈覚大師伝』とも「不断念仏」と称している。『阿婆縛抄』第二〇七「胎曼釈上」の項においては「例時者、法道和尚守三極樂水鳥樹林法音<sup>(マツ)</sup>。慈覚大師又伝<sup>レ</sup>之。仍為二毎日朝暮勤行<sup>一</sup>、為三滅罪生善之方法<sup>一</sup>。」(『日仏全』第六〇、二九一頁下)とあり、円仁の伝えた法照の五会念仏は「例時<sup>5</sup>」と称し、朝暮の勤行に修していたことが窺われる。これは現在『台宗課誦』で「例時作法」として継承されているものと思われる。

以上のように円仁が五台山より伝えた法門は、比叡山では「常行三昧」、「弥陀念仏」、「不断念仏」、「例時」な

どの種々の名で呼ばれ、伝承されていたものと見られる。

円仁が唐で見聞伝承した五台山念仏三昧については、『巡礼記』開成五年五月五日、竹林寺齋礼式（無遮会）に参加する中で、「僧法師与諸僧一同音唱讚了。便打三蠡鉞、同音念三阿弥陀仏」、便休。次尼衆替僧且如前。如レ是相替讚三歎仏、直到二半夜。事畢俱出二道場一帰散。」（小野二、四四二頁）と竹林寺の僧侶が同音で阿弥陀仏を念じ、次に尼衆が交替して同様に行い、仏を讃嘆すること夜中に及んだことが記されている。さらに、開成五年（八四〇）八月二十日に滞在を始めた長安においてもこれら五会念仏の見聞が見られる。『巡礼記』開成六年（八四一）二月八日条に、「又勅令下章敬寺鏡霜法師、於三諸寺、伝中阿弥陀浄土念仏教上。廿三日起首至二廿五日、於三此資聖寺一伝三念仏教。又巡三諸寺、毎レ寺三日、毎月巡輪不レ絶。」（小野三、三五一頁）とあり、この日勅が下され、章敬寺の鏡霜法師が諸寺院において阿弥陀浄土念仏教を伝えることが命じられたと記録している。鏡霜は、五台山竹林寺を創建し五会念仏を創始した法照の弟子であることから、『巡礼記』に「阿弥陀浄土念仏教」とあるのは、法照創始の五会念仏であることは間違いなく、五台山のみならず、長安においても五会念仏を見聞き、あるいは伝承したものであると思われる。

これら円仁見聞の五会念仏については、円仁将来の法照述『浄土五会念仏略法事儀讃』一卷によると、「問曰、五会念仏出レ在二何文一。答曰、大無量寿経云、（中略）清風時発三出五会音声一。微妙宮商自然相和、皆悉念レ仏念レ法念レ僧。其聞レ音者得二深法忍一、住三不退転一至レ成二仏道一。（中略）此五会念仏声、勢点二大盡一、長者即是緩念、点二小漸短一者、即是漸急念、須レ会三此意一。第一会平声緩念二南無阿弥陀仏一。第二会平上声緩念二南無阿弥陀仏一。第三会非緩非急会念三南無阿弥陀仏一。第四会漸急念二南無阿弥陀仏一。第五会四字転レ急念二阿弥陀仏一。五会念仏竟即誦三宝鳥諸雜讃一。」（『大正蔵』四七卷、四七六a—c）とあり、『大無量寿経』を典拠とする五会念仏の唱え方が示されている。

この五会念仏と関係する将来物が『前唐院第一御厨子宝物実録』（『天台霞標』五編卷之一、『日仏全』四二、



九 a—c には、「前唐院資財実録」の名で掲載）に記載されている。すなわち、「象牙笛一管 右五臺山法道和尚入定詣ニ極樂世界ニ、水鳥樹林所レ唱七五三等之妙曲、伝ニ五台山ニ。大師即於ニ大聖竹林寺ニ、一夏九旬間、以ニ此笛ニ吹ニ伝件曲ニ、移ニ叡山ニ也。」とあり、将来目録には載せられていないが、円仁は象牙笛をもたらししており、これを比叡山東塔の前唐院に安置していたことが窺える。円仁門下の五大院安然（八四一—九〇二）著『金剛界大法対受記』に同様の記述があるが、法照和尚が極樂世界に詣でた際に聞いた水鳥樹林が唱える七五三等の妙曲が五台山に伝来し、円仁はこの象牙笛をもつて件の音曲を吹き伝えたことが述べられている。

### (3) 灌頂の始修及び菩薩戒の伝授

帰国後の円仁の諸活動において特に顕著な業績の一つとして、密教の灌頂を盛んに行ったことが挙げられる。これについては、嘉祥元年（八四八）に朝廷より灌頂の許可が下つている。

三千院本『慈覚大師伝』によると、円仁が比叡山に帰った直後の様子が次のように記されている。すなわち、「閤衆雲集。瞻ニ仰礼ニ拜新来諸尊曼荼羅楨ニ、并以恭ニ敬頂ニ戴大教諸儀軌等ニ。其後山衆欽ニ仰秘教ニ、欲レ受ニ灌頂ニ、不レ得ニ事休ニ。聞ニ奏 内裏ニ。而請下奉ニ為 国家ニ、修ニ灌頂雅事ニ、弘ニ秘密大教ニ。其聞奏文具如レ別也。陛下有レ感。」（『続天全』史伝二、五二頁上）とあり、円仁の帰山を喜んだ比叡山の僧侶らが曼荼羅及び密教の諸儀軌を瞻仰し礼拝している。その後灌頂を修して国家のために密教を弘めることを願い聞奏し、嘉祥元年六月十五日に「太政官牒延暦寺 応レ修ニ灌頂ニ事」すなわち延暦寺に灌頂を修すべきの太政官牒が出されている。この太政官牒には円仁の上奏文が引用されており、円仁は唐で受けた灌頂について以下のように記している。

同（開成五）年十月九日、始於ニ大興善寺勅翻經灌頂院、不空三藏第三弟子元政阿闍梨辺ニ、受ニ灌頂ニ。学ニ金剛界大法并諸尊法ニ。至ニ会昌元年二月十三日ニ、受ニ伝法灌頂ニ。從ニ其年五月三日ニ、於ニ青龍寺勅置本

命灌頂道場、不空三藏第三弟子義真阿闍梨<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>灌頂<sup>一</sup>。受<sup>二</sup>大毘盧舍那經秘旨、及蘇悉地大法<sup>一</sup>。從<sup>二</sup>會昌二年二月五日<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>善無畏三藏第四弟子玄法寺法全阿闍梨所<sup>一</sup>、入<sup>二</sup>灌頂壇<sup>一</sup>。受<sup>二</sup>胎藏大法并諸尊法<sup>一</sup>。

至<sup>二</sup>于三年三月十一日<sup>一</sup>受<sup>二</sup>伝法灌頂<sup>一</sup>。（『統天全』史伝二、五四頁上）

ここでは唐で受けた真言密教の概要が述べられているが、これによると、まず開成五年（八四〇）十月九日、大興善寺にて不空の第三弟子元政より金剛界大法ならびに諸尊法を学び、会昌元年（八四一）二月十三日には伝法灌頂を受けている。同年五月三日には、青龍寺にて同じく不空の第三弟子義真に灌頂を受け、『大毘盧遮那經』の秘旨と蘇悉地大法について学んでいる。会昌二年（八四二）二月五日より善無畏の弟子である玄法寺の法全の元で胎藏界大法と諸尊法を受け始め、同三年（八四三）三月十二日に伝法灌頂を受けている。

これらについては、『巡礼記』に当時の出来事が記されているので、順に見ていきたい。まず、『巡礼記』開成五年十月二十九日条に「往<sup>二</sup>大興善寺<sup>一</sup>、入<sup>二</sup>勅<sup>（レ）</sup>翻經院<sup>一</sup>。参<sup>二</sup>見元政和尚<sup>一</sup>、始受<sup>二</sup>金剛界大法<sup>一</sup>。入<sup>二</sup>勅置灌頂道場<sup>一</sup>、礼<sup>二</sup>諸大曼荼羅<sup>一</sup>。設<sup>二</sup>供養<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>灌頂<sup>一</sup>。」（小野三、三〇八頁）とあり、大興善寺の勅置翻經院において曼荼羅に礼拝し、元政より金剛界の灌頂を受けている。『慈覚大師伝』とは日付の記載が異なっているが、史料価値から見ても『巡礼記』に記されている二十九日と見るべきであろう。会昌元年二月十三日は元政より金剛界大法を受け終えた日である。「十三日、受<sup>二</sup>金剛界大法<sup>一</sup>畢。供<sup>二</sup>養金剛界曼荼羅<sup>一</sup>、及受<sup>二</sup>伝法灌頂<sup>一</sup>。以<sup>二</sup>五瓶水<sup>一</sup>、灌<sup>二</sup>於頂上<sup>一</sup>。」（小野三、三六四頁）とあり、金剛界曼荼羅を供養し、伝法灌頂を受け五瓶の水を頭頂に注がれているが、これは『慈覚大師伝』の記述と一致していることが分かる。

また、会昌元年五月三日に青龍寺で胎藏界大法・蘇悉地大法を受け、「始<sup>レ</sup>画<sup>二</sup>金剛界九会曼荼羅幀五副<sup>一</sup>。除<sup>二</sup>画絹<sup>一</sup>以外、六千文、是画功也。此日於<sup>二</sup>青龍寺<sup>一</sup>、設<sup>二</sup>供養<sup>一</sup>。便於<sup>二</sup>勅置本命灌頂道場<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>灌頂<sup>一</sup>抛<sup>レ</sup>花。始<sup>レ</sup>受<sup>二</sup>胎藏毗盧遮那經大法、兼蘇悉地大法<sup>一</sup>。」（小野三、三九三―三九四頁）とある。円仁はこの日、描き終えた金剛界九会曼荼羅を青龍寺において供養し、勅置本命灌頂道場にて灌頂を受け花を投げて仏と縁を結び、胎藏界大

法と蘇悉地大法を受けている。この会昌元年五月三日の青龍寺での受法は、『慈覚大師伝』にもあるように義真から受けたものであることは間違いないと見られる。また、玄法寺法全からの受法については『巡礼記』会昌二年二月二十九日に「於ニ玄法寺法全阿闍梨所」<sup>一</sup>、始受ニ胎藏大法」<sup>二</sup>。（小野三、四一七頁）とあり、胎藏界大法を受けている。この法全よりの受法について『慈覚大師伝』では会昌二年二月五日より三月十二日に至るまでと記されており、一ヶ月以上にわたる指導と伝法が行われたことが窺える。

次に、長安では結縁灌頂も見聞している。『巡礼記』会昌元年二月十五日に、「興唐寺奉<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>国<sub>一</sub>開<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>十五日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>四月八日<sub>一</sub>、有縁赴<sub>レ</sub>來結縁灌頂。」（小野三、三七〇頁）とあり、興唐寺（長安街東第四街大寧坊）における国家のために開かれた灌頂道場にて、降誕会までの期間に有縁の在俗に結縁灌頂が行われている。

これら唐での経験に基づき、嘉祥二年（八四九）には灌頂を始修している。三千院本『慈覚大師伝』には、「至<sub>二</sub>于嘉祥二年夏五月上旬初<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>灌頂雅業<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>内藏寮<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>一千僧供料<sub>一</sub>、兼以遣<sub>二</sub>勅使參議從四位下守右大弁伴宿禰<sub>一</sub>、檢<sub>二</sub>校其事<sub>一</sub>。受<sub>二</sub>三昧耶戒<sub>一</sub>、而飲<sub>二</sub>誓水<sub>一</sub>者、一千余人。各以<sub>二</sub>虔誠心<sub>一</sub>、臨<sub>二</sub>曼荼羅壇<sub>一</sub>、瞻<sub>二</sub>仰諸尊<sub>一</sub>。發<sub>二</sub>希有心<sub>一</sub>。悉登<sub>二</sub>蓮台<sub>一</sub>。同増<sub>二</sub>感歎<sub>一</sub>也。」（『統天全』史伝二、五四頁下―五五頁上）と記されており、この年の五月上旬に円仁が灌頂に先立って授与される三昧耶戒を一千人余りの人々に授けたことが見える。なお、灌頂に関する将来物は、『新求目録』に『不空羅索毗盧遮那仏大灌頂光真言』一卷 不空（「長安将来物一覽表」<sup>13</sup>）、『金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』一卷 不空与遍智同訳（「長安将来物一覽表」<sup>93</sup>）、『一切如来灌頂真言』一本（「長安将来物一覽表」<sup>225</sup>）、『大仏頂如来蜜因修証了義諸菩薩萬行品灌頂部録出中印契別行法門』一卷（「揚州将来物一覽表」<sup>18</sup>）、『唐梵両字灌頂心真言』一本（「揚州将来物一覽表」<sup>35</sup>）、『唐梵両字灌頂心中心真言』一本（「揚州将来物一覽表」<sup>36</sup>）が見られた。

次に、斉衡三年（八五六）以降に行っている天皇への灌頂は円仁の業績として大いに注目される。寛平入道撰『慈覚大師伝』に「（斉衡）三年三月二十一日 天皇請<sub>二</sub>大師於冷然院書堂南殿<sub>一</sub>受<sub>二</sub>両部灌頂<sub>一</sub>。王子法号素延

清原君、算延多治比君及孝忠大法師藤原、大納言正三位兼行左近衛大将藤原朝臣良相、東宮亮藤原朝臣良綱、左兵衛佐藤原朝臣基經、右衛門佐藤原朝臣常行、大内記紀朝臣夏井等同受<sup>レ</sup>之。」(『統天全』史伝二、六九頁上)とあり、文徳天皇(八二七―八五八、在位八五〇―八五八)が円仁に要請し、冷泉院の書堂の南殿において両部灌頂を受けている。この際、天皇の皇子である素延(源時有)と算延(源每有)及び藤原良相(八一三―八六七)、藤原良綱、藤原基經(八三六―八九一)、藤原常行(八三六―八七五)、紀夏井など貴族も同じく灌頂を受けている。<sup>10</sup>同年九月、「東宮又請<sup>二</sup>大師<sup>一</sup>受<sup>二</sup>灌頂<sup>一</sup>。太政大臣、及雅院 女御同預<sup>レ</sup>之。」(『統天全』史伝二、寛平入道撰『慈覚大師伝』六九頁上)とあり、東宮すなわち惟仁親王(後の清和天皇)が円仁より受戒灌頂を受け、太政大臣及び雅院女御が同じくこれに預かったと述べられている。

そして、天安二年(八五八)、「天皇又受戒灌頂。預<sup>レ</sup>之者十余人。」(『統天全』史伝二、寛平入道撰『慈覚大師伝』六九頁上)とあり、文徳天皇は再度円仁より受戒灌頂を受け、これに預かった者は十余人であった。このことについては、『文徳実録』巻第十の天安二年三月十五日条によると、常寧殿において上述の素延と算延の落髪が行われ、「是夜有<sup>二</sup>灌頂事<sup>一</sup>。」(『新訂増補国史大系 日本文徳天皇実録』一一三頁)とあることから、同日の夜に灌頂の儀式が行われたことが窺える。

ここで注目されるのは円仁と公家との関わり、すなわち師檀関係である。三千院本『慈覚大師伝』によると、嘉祥三年(八五〇)左近中将であった藤原良相が円仁に対して以下のような自筆の書状を送っている。

至<sup>二</sup>嘉祥三年未歳<sup>一</sup>、皇帝崩。率土哀慕、感慟窮矣。其年三月、儲君登極。万国歆欣、無<sup>レ</sup>任<sup>二</sup>感慶<sup>一</sup>也。左近中将藤原朝臣手書云、被<sup>二</sup>令旨<sup>一</sup>稱、大和尚虚往実帰。希世傑立、雖<sup>レ</sup>未<sup>二</sup>接話<sup>一</sup>、而情深<sup>二</sup>欽属<sup>一</sup>。右僕射与<sup>二</sup>和尚<sup>一</sup>、本自相識故也。今因<sup>二</sup>遺詔<sup>一</sup>、十七日甲子、可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>踐祚<sup>一</sup>。夫大事之中、或有<sup>二</sup>障礙<sup>一</sup>。宜<sup>レ</sup>通<sup>二</sup>達和尚<sup>一</sup>。始<sup>レ</sup>自二十五日詰朝<sup>一</sup>、迄二十八日旦<sup>一</sup>、転<sup>二</sup>読大般若<sup>一</sup>、令<sup>二</sup>以護念<sup>一</sup>。(『統天全』史伝二、五五頁上

―下)

とあり、嘉祥三年三月、道康親王（文徳天皇）の即位に際し、良相が円仁に送った書状によると、右僕射（藤原良房、八〇四―八七二）と円仁は「本自相識」、旧知の間柄であったことが記されている。そして、仁明天皇（八一〇―八五〇、在位八三三―八五〇）の遺詔に従って十七日に践祚が行われるため、円仁に十五日の朝から十八日の明け方まで『大般若経』を転読するよう道康親王の令旨が通達されている。これに続き、「四月十三日、左近中将藤原良相奉ニ台宗円和尚法前一、至二十五日一、左近中将藤原朝臣送ニ手札一云、報レ書具啓ニ 殿下一。然彼使口状、可下修ニ新密法一、必果上レ行者。但彼可レ修状、具記来耳。（中略）四月十五日、弟子左近中将藤原良相、台宗円和尚院下」（『続大全』史伝二、五五頁下）とあり、良相が円仁に対してさらに送った書状には、殿下（道康親王）のために新密法を修してその修法の様子を詳細に記すようにとの伝言が述べられている。次項において後述するように、円仁はこの要請に応じて、比叡山東塔の先師最澄点定の地において長安青龍寺を模して熾盛光法を修する法華総持院を建立したいと奏上している。そして、このような円仁と公家との師檀関係は円仁の弟子相応（建立大師、八三一―九一八）にも受け継がれていくのである。<sup>11</sup>

貞観二年（八六〇）五月、円仁は淳和太后（正子内親王、八一〇―八七九）に菩薩大戒を授けている。このことは、寛平入道撰『慈覚大師伝』に「五月 淳和太后請ニ諸寺名僧一、限ニ六箇日一、講ニ法華経一。解坐之後、別ニ請大師及二十四口僧侶一、受ニ菩薩大戒一。奉ニ 太后法名一稱ニ 良祚一。皇子恆道亭子君寂道朱雀院君等同受レ之。凡受戒者、一百五十余人、授ニ三昧耶戒、及入壇灌頂一者、二百七十余人也。」（『続大全』史伝二、六九頁下―七〇頁上）とあり、この年の五月、淳和太后が諸寺の名僧に要請して六日間『法華経』を講読させ、解坐の後円仁及び二十四名の僧侶より菩薩大戒を受けている。円仁は太后に対し、「良祚」の法名を授けるとともに、恒貞親王・基貞親王をはじめ百五十余人に菩薩戒を授け、二百七十余人に三昧耶戒及び入壇灌頂を授けている。そして、「五条太皇太后、又累年請ニ大師一受ニ菩薩戒一。預レ之者前後百有余人。」（『続大全』史伝二、寛平入道撰『慈覚大師伝』七〇頁上）とあり、貞観六年（八六四）太皇太后となった藤原順子（八〇九―八七一）が円仁よ

り菩薩戒を受けており、百人余りがこれに預かったという。

そして、同じく寛平入道撰『慈覚大師伝』に、「(貞観)五年十月、右近衛権中将藤原朝臣常行、賀<sub>ニ</sub>太政大臣美濃公六十齡<sub>一</sub>。仍請<sub>ニ</sub>大師<sub>一</sub>於<sub>ニ</sub>染殿<sub>一</sub>第一美濃公家也修<sub>ニ</sub>灌頂<sub>一</sub>。其三摩耶戒入壇灌頂者、公卿以下百四十余人、尚侍典侍女御以下六十余人。太政大臣有<sub>ニ</sub>身故<sub>一</sub>、令<sub>下</sub>中宮大進高向公補<sub>コ</sub>代身<sub>一</sub>、受<sub>中</sub>五瓶灌頂<sub>上</sub>。」(『統天全』史伝二、七〇頁上―下)とあり、同五年十月、右近衛中将藤原常行が太政大臣藤原良房の邸宅である染殿邸にて円仁に灌頂を修させており、三昧耶戒・入壇灌頂を受けた者は公卿以下百四十人余り、尚侍典侍女御以下六十人余りであった。そして、病気の良房に代わって中宮大進高向公輔(―八八〇)が円仁より五瓶灌頂を受けている。<sup>12</sup>なお、円仁伝承の胎藏界・金剛界・蘇悉地三部の灌頂は連綿と現在に伝えられ、延暦寺灌頂として「入壇灌頂」及び「開壇伝法」が毎年比叡山の法華総持院において執行されている。

#### (4) 浄土院廟供の始修

比叡山で現在行われている浄土院廟供は、円仁入唐による五台山竹林寺での廟供の伝承に起源があると見られているので、この点について検討してみたい。寛平入道撰『慈覚大師伝』によれば、「(斉衡)三年(中略)七月十六日、習<sub>ニ</sub>五台山竹林寺之風<sub>一</sub>、行<sub>ニ</sub>浄土院廟供事<sub>一</sub>。是先師廟也。」(『統天全』史伝二、六九頁上)とあり、円仁は斉衡三年(八五六)七月十六日、五台山竹林寺の風に倣って比叡山東塔にある最澄の廟所である浄土院にて廟供を行ったことが記されている。このことは、『阿婆縛抄』「諸寺縁起」下には「浄土院(中略)右院、伝教大師所<sub>ニ</sub>定置<sub>一</sub>。遷化之後、以<sub>ニ</sub>大師遺骸<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>瘞也。天安二年七月十六日、慈覚大師移<sub>ニ</sub>五臺山竹林寺風<sub>一</sub>始<sub>コ</sub>修廟供<sub>一</sub>云々。」(『日仏全』第六〇、二七八頁中)とあり、天安二年(八五八)のこととして記されており、『慈覚大師伝』の記述の二年後のこととするが、成立年代の古いことから信憑性の高い『慈覚大師伝』に拠っておく。

五台山竹林寺で見聞した廟供がどのような形態であったのかは文献が現存していないので不明であるが、最澄の御廟浄土院での廟供は現在も十二年籠山行として侍真僧により伝承されている。円仁の廟供と比較はできないが、現在行われている浄土院廟供を取り上げておきたい。

現行の制度は織田信長の元亀兵乱後、江戸中期の天台僧靈空光謙（一六五二—一七三九）によって元禄十二年（一六九九）に制定布告された『開山堂侍真条制』（『日仏全』第四一、九一頁中）ならびに『浄土院規矩』（叡山文庫止観院藏）によっている。その内容は次の通りである。

#### 開山堂侍真条制

去歳、告ニ台山闔衆一。夫初修業一紀籠山、伝教大師之垂範、而台徒之高儀也。然世遠法墜、不レ聞ニ其名一者多、良可ニ悲痛一。如有下能委ニ身命一遵ニ祖訓一者上、許下在ニ山院一而免中衆務上。又浄土院近世唯有ニ堂司一而無ニ侍真一、非レ所ヨ以尽ニ報本之道一也。議レ置ニ侍真一、称ニ吾意一焉。是歳首夏、登壇受戒、立ニ籠山誓一者二口。近又発心者二口。闔衆、新構ニ侍真之房一既成。於レ是吾喜不ニ自勝一。復告ニ闔山一、初修業僧大師之真子也。宜ニ輪流侍真、礼供無一レ闕。因立ニ条件一以為ニ永式一。

一、大小ニ食当ニ如法供養一。

一、上レ食当レ誦ニ変食呪ニ十一遍・般若心經三遍一。

一、朝課所為、晚課敬礼法、俱誦ニ梵網十戒一。

一、両業之人、各有ニ恒務一、雖レ非ニ今所一レ制而宜ニ益索修一。

一、三月遷レ居覺王之制、侍真之職不レ宣ニ久留一。三月輪周復始。至ニ於有レ閏当レ經ニ四月一。

一、於ニ三月内一無ニ切要縁一不レ得レ出レ院。

一、重病等縁レ請令ニ相代一。

已上条件、宜ニ各遵行一。雖レ非ニ急制一罄レ誠竭レ思、則庶ニ乎報ニ祖恩之涓埃一矣。

元禄十二歳次己卯十一月甲子

前天台座主一品親王 押

また、享保五年（一七二〇）にまとめられた『浄土院規矩』（叡山文庫止観院蔵）には、「第一課誦献斎之事」「第二散物油料之事」「第三大小掃除之事」「第四拜堂巡檢之事」「第五院内江付届之事」「第六輪番諸式之事」「第七交代用意之事」の七項目が記されている。これら『開山堂侍真条制』と『浄土院規矩』は現在行われている侍真の日課の基本とされている史料である。

そこで、これらに基づき修されている現行の侍真の日課について挙げておくと、午前三時半に出定（起床）、開拝殿戸、午前四時に朝課、午前五時に備御小食（大師宝前）献供作法・大黒天法楽、午前五時半に侍真小食、午前十時半に阿弥陀供一座・護国三部妙典（『仁王般若経』・『金光明経』・『法華経』）読誦・『大般若経』読誦、午前十時に献斎供養（大師宝前）・献茶（大師・弥陀・文殊）、午前十時半に侍真斎食、午後四時に晩課、午後五時に閉拝殿戸、午後九時に入定（就寝）となっている。<sup>13</sup>

このように円仁が五台山竹林寺より伝えた廟供は、形式や内容に変遷は見られたであろうが、江戸中期より十二年籠山の侍真制度としてその精神は受け継がれ、脈々と継承奉修されているのである。

## (5) 天台大師供の始修

円仁は仁寿四年（八五四）四月、延暦寺第三世座主に補任されている（『続天全』史伝二、寛平入道撰『慈寛大師伝』六八頁上、「為ニ延暦寺座主」）。が、座主就任後間もないこの年の十一月、天台大師供を始修している。寛平入道撰『慈寛大師伝』によると、「是月（十一月）制<sub>コ</sub>作天台大師供祭文及次第式一矣。」（『続天全』史伝二、六八頁下―六九頁上）とあり、十一月に『天台大師供祭文』と『次第式』を撰述しており、また『阿婆縛抄』「諸



寺縁起」下によると、「仁寿四年十一月廿四日、慈覺大師依二国清寺風一始コ修天台大師供一。」（『日仏全』第六〇、二七六頁下）とあり、智顗の命日である十一月二十四日、中国天台山国清寺風の天台大師供を修したことが伝えられている。円仁が、先師最澄の求法の地である天台山に赴くことを入唐の第一の目的としていたものの（『巡礼記』開成三年八月四日条。小野一、一六六頁）勅許はついに下りず、訪ねることができなかったことを考えると、なぜ国清寺風に依ったと記されているのであろうか。円仁が入唐中天台大師供を見聞したことは、『巡礼記』の開成三年十一月二十四日、揚州開元寺の食堂において「堂頭設レ齋。衆僧六十有余。」（小野一、二八二頁）とあることによつて窺えるが、当時天台山で行われていた天台大師供が揚州開元寺においても行われていた可能性が考えられよう。『天台霞標』三編卷之一に仁寿四年、円仁が著した『天台大師供祭文』一卷、『天台大師忌次第式』一卷が収録されており、以下その原文を挙げておく。

#### 祭二智者大師一文

維仁寿四年、歲次二甲戌十一月朔二十四日、謹以二餅菓茶菓、蔬食之饌一、敢献二故大唐法華宗第二祖師、天台大師尊靈一。伏惟、大師稟二道於鷲峯一。布二影於沙界一、備二衆徳一以利レ見、表二奇異一以降レ生。洞融二三觀一、照二万法於一心一。齊駕二白牛一、運二蒼生於露地一。不レ出二戸庭一、感コ見定光於華頂一。攀コ遊衡岳一、発コ明三昧於歩間一。其後化流二我国一、風教長敷。朝夜帰レ心、共潤二法雨一。故唐朝本朝、隔レ海通レ音。得二前師後師、度レ代同一轍。以二囊劫之縁一、遠交二資之列一。受二玄風一、独思二高朗一。汲二清流一転覺二広深一。投レ身碎レ骨、何報二厚恩一。随レ年邀レ辰、講コ聴妙典一。奉コ酬無窮之徳一、謹献二蔬食之饌一。伏願大師尊靈、大唐八祖、同垂二納饗一。（『日仏全』第四一、三〇六頁下—三〇七頁上）

この『天台大師供祭文』の記述によると、智者大師は南岳大師の後を受けて大唐法華宗第二祖として一心三觀の証悟を得るなどし、その教えは日本に伝流し深く帰依を受けたことなどを述べ、餅菓・茶菓・野菜を供えて天台大師の御徳を讃え尊靈を供養していたことが窺える。この文に続いて『天台大師忌次第式』が載せられており、

それは以下の通りである。

先僧衆参堂

次讃衆僧讃云云

帰命頂礼、大唐国中、天台大師尊靈。哀愍摂受所設供。証知大衆三業礼。

帰命頂礼、大唐国中、南岳大師尊靈。哀愍摂受所設供。証知我等至心礼。

帰命頂礼、天竺震旦日本国中、真言止観大師等、哀愍摂受所設供。感我帰命頂礼一心礼。

次仏名教化云云

次献茶

次祭文

次画讃

次献茶

次六種供養

次仏名教化云云

別伝曰、仁寿四年、製作祭<sub>ニ</sub>智者大師一文、及次第式<sub>上</sub>矣。（『日仏全』第四一、三〇七頁上）

これによると、①「僧衆参堂」 ②「僧讃」 ③「仏名教化」 ④「献茶」 ⑤「祭文」 ⑥「画讃」 ⑦「献

茶」 ⑧「六種供養」 ⑨「仏名教化」の順で供養が行われたことが窺える。円仁は揚州より「天台大師感得聖

像僧影 一鋪三幅綵色」を将来しているが、この影像是儀式において供養の対象として用いられたと考えられる。

現在比叡山では天台大師供が毎年十一月二十四日に「天台大師御影供」として東塔の大講堂で厳修されている。

その次第と円仁の『天台大師忌次第式』と対比すると、

〔天台大師忌次第式〕

〔天台大師御影供〕

先僧衆参堂	先入堂
讃衆僧讃	次僧讃
帰命頂礼天台大師尊霊	次総礼詞
帰命頂礼南岳大師尊霊	次総礼
帰命頂礼諸大師等	次勧請
次仏名教化	次仏名
次献茶	次教化
次斎文	次献茶
次画讃	次祭文
次献茶	次画讃
次六種供養	次献茶
次仏名教化	次六種
	次仏名
	次伽陀
	次出堂
	教化 廻向

となり、現行の「天台大師御影供」は田仁の『天台大師忌次第式』を基本的に取り入れていることが知られる。  
 なお、画讃は魯郡開国公・顔真卿（七〇九―七八五）撰『天台智者大師画讃』（『大日本統蔵経』一輯、二編、乙

七套、第四冊、三二八下―三二九頁）が用いられている。

## (6) 舍利会・文殊八字法・七仏薬師法の始修

貞観二年（八六〇）、円仁は法華総持院において仏舍利会を始修している。寛平入道撰『慈覚大師伝』の貞観二年（八六〇）の記述によると、「四月始<sub>レ</sub>行供仏舍利会」。自<sub>レ</sub>爾以降、此会不<sub>レ</sub>断。或以<sub>二</sub>暮春<sub>一</sub>、或以<sub>二</sub>首夏<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>定日<sub>一</sub>。唯作<sub>二</sub>華時<sub>一</sub>耳。」（『続天全』史伝二、六九頁下）すなわちこの年の四月に仏舍利会を始め、以後不断に行われたこと、その時期は暮春及び首夏の花の咲く頃であり、日を定めなかったことが窺える。

円仁は在唐中に舍利供を見聞しており、以下『巡礼記』の記事を挙げてみよう。円仁が五台山に滞在していた開成五年（八四〇）七月二十六日条には、「近日感<sub>レ</sub>得舍利<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>傾<sub>レ</sub>城人尽来供養<sub>一</sub>。僧俗満<sub>レ</sub>寺。不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其数<sub>一</sub>。（中略）太原城及諸村貴賤男女及府官上下尽来供養。」（小野三、一八二頁）とあり、最近感得された舍利を供養するため、太原城に道俗貴賤の男女が詰めかけている。この後向かった長安章敬寺において、同年九月六日「当院僧懷慶持念為<sub>レ</sub>業、将<sub>二</sub>仏舍利五粒<sub>一</sub>来礼拝。」（小野三、二八三頁）とあり、円仁は懷慶という僧侶が所持していた仏舍利五粒を礼拝している。そして、会昌元年（八四一）二月八日条には、「城中都有<sub>二</sub>四仏牙<sub>一</sub>。一、崇聖寺仏牙（中略）一、莊嚴寺仏牙（中略）一、法界和尚從<sub>二</sub>于填国<sub>一</sub>将来（中略）一、從<sub>二</sub>土蕃<sub>一</sub>将来。從<sub>レ</sub>古相伝如<sub>レ</sub>此。今在<sub>二</sub>城中四寺<sub>一</sub>供養。」（小野三、三五二頁）とあり、長安の四箇所の寺院で「四仏牙」と総称される仏舍利が祀られていることを聞いている。

『新求目録』によると、長安で入手した「金銅五鈷小金剛杵 一口裏盛仏舍利」（「長安将来物一覽表」<sup>511</sup>）、揚州求得の「舍利五粒 菩薩舍利三粒、辟支仏舍利二粒、盛白蠟小合子并安置白石瓶子一口」（「揚州将来物一覽表」<sup>154</sup>）をもたらししているが、これらは帰国後仏舍利会で用いられたと考えられる。この舍利会は現在も比叡

山に伝承され、毎年五月八日に東塔の大乗戒壇院にて奉修されている。これに関して、明治十七年（一八八四）三月十五日、南溪沙門実応写の『舍利供併法則』（延暦寺蔵）によれば、「抑考ニ此会濫觸<sup>（タマ）</sup>一、貞観二年四月上旬始被レ修ニ此会一、自レ爾以来、歴代連綿不レ絶。然元龜兵乱一山滅亡、堂宇一時灰燼。豈堪ニ悲痛一哉。時哉根本大師、於ニ香爐岡一感コ得舍利一、再帰ニ本山一。可レ謂レ奇乎。而去宝暦七年花落世繼氏、新調コ刻舍利塔一、納ニ感得舍利一、令レ安コ置戒壇院一。特抛ニ珍財淨侶一布施、永歳令下此会如ニ貞観式一不レ絶。感応豈徒哉。」とあり、貞観二年（八六〇）四月始行の仏舍利会は元龜兵乱の堂宇灰燼により一時中断したが、宝暦七年（一七五七）再び舍利塔を調刻して戒壇院に安置し、貞観式のごとく連綿と絶えることなく修されていると記されている。

次に、嘉祥三年（八五〇）二月甲子（十五日）に文殊八字法を修していることが『続日本後紀』に見えている。「又請ニ天台宗座主前入唐請益伝灯大師位円仁及定心院十禅師等一於ニ仁寿殿一、令レ修ニ文殊八字法一。」（『新訂増補国史大系三』、『続日本後紀』巻二〇、二三五頁）とあり、仁明天皇の聖体不予のため、仁寿殿において円仁及び比叡山東塔南谷定心院の十禅師に文殊八字法を修させたことが記されている。<sup>14</sup>この文殊八字法は、どのような時に用いられた修法であろうか。『阿婆縛抄』巻第一百一「文殊八字」によると、「天変日月蝕之時」「疾病厄危之時」にこれを修すべしとある（『日仏全』第五八、三一五頁中）。なお、『新求目録』によると、円仁は文殊八字法に関して唐より『梵字文殊師利菩薩八字真言』一本（「長安将来物一覽表」<sup>210</sup>）をもたらししているが、この真言を示した書物は修法の際に用いられたと考えられるであろう。

次に、同じく『続日本後紀』には、嘉祥三年三月丁酉（十九日）に、「於ニ清涼殿一、修ニ七仏薬師法一。画ニ七仏像一、懸ニ御簾前一。七重輪灯立ニ於庭中一。」（『新訂増補国史大系 続日本後紀』巻二〇、二三八頁）とあり、『阿婆縛抄』「七仏薬師」には「国史云、慈覚大師、仁明御宇嘉祥三年三月丁酉日、於ニ清涼殿一、修ニ七仏薬師法一。」（『日仏全』第五八、二頁上）とあり、円仁が清涼殿において七仏薬師法を修しており、その設えについては七仏薬師像の絵が御簾の前に懸けられ、七重の輪灯を庭中に立てて行われたものであったことが分かる。この七仏薬師法

とは、『阿婆縛抄』「七仏薬師」によると、①善名称吉祥王如来 ②宝月智嚴光音自在如来 ③金色宝光妙行成就如来 ④無憂最勝吉祥如来 ⑤法海雷音如来 ⑥法海勝瑟遊戯神通如来 ⑦薬師瑠璃光如来 の七仏薬師を本尊として修される行法であったことが分かる（『日仏全』第五八、一頁上）。どのような時にこの修法が行われたかということとは、「除病延命」「産生安穩」「日月蝕等天変」「風雨難並時節叛逆等難」のためにこれを修すべしという文によって明らかである（『日仏全』第五八、一頁下）。これに続き、『阿婆縛抄』「七仏薬師」には円仁にまつわる伝承も記されている。すなわち、「或説云、昔赤色雲聳、覆<sub>二</sub>清涼殿<sub>一</sub>。皇帝請<sub>二</sub>慈覚大師<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>七仏薬師法<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>時雲忽散了、云々。又或説云、赤雲聳<sub>二</sub>紫宸殿上<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>勅慈覚大師、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>息災法<sub>一</sub>給。于<sub>レ</sub>時雲忽散了、云々。」（『日仏全』第五八、二頁上）とあり、天変地異の際に天皇が円仁に勅してこの修法を行わせたことが語られていたようである。

また、『阿婆縛抄』「七仏薬師」には、「慈恵和尚依<sub>二</sub>七仏経<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>善名等七仏法<sub>一</sub>。」（『日仏全』第五八、一頁上）とあり、後に良源によって修されたことが窺えるが、七仏薬師法は現在比叡山東塔の根本中堂において延暦寺御修法として厳修され、継承されているのである。

## 第二節 比叡山諸堂の創建と整備

### (1) 根本観音堂の創建

円仁は帰国後間もない嘉祥元年（八四八）九月三日、比叡山横川に根本観音堂（現在の横川中堂）を創建している。『阿婆縛抄』「諸寺縁起」下及び『叡岳要記』嘉祥元年の九月三日条にこのことが載っているが、詳細な記述が見られる前者を取り上げると、

首楞嚴院、在三大寺北<sup>一</sup>、相去八九里。

根本觀音堂、俗曰三横川中堂<sup>二</sup>。在三砂碓堂ノ西<sup>一</sup>。

葺檜皮七間堂一字、前有<sup>二</sup>孫庇<sup>一</sup>。

安<sup>二</sup>置聖觀音像一体、不動毘沙門像一体<sup>一</sup>。

右慈覺大師入唐求法之後、解<sup>レ</sup>纜浮<sup>レ</sup>舶之間、忽遇<sup>二</sup>大風<sup>一</sup>、欲<sup>レ</sup>没<sup>二</sup>南海<sup>一</sup>。念<sup>二</sup>彼觀音力<sup>一</sup>、現<sup>二</sup>毘沙門身<sup>一</sup>。

大師即使<sup>レ</sup>図<sup>二</sup>画彼像<sup>一</sup>、風晴波平、須臾著<sup>二</sup>彼岸<sup>一</sup>。帰山之後、建<sup>二</sup>立一堂<sup>一</sup>、安<sup>二</sup>置觀音像・毘沙門像<sup>一</sup>。依<sup>二</sup>彼海上願<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>果遂<sup>一</sup>也。嘉祥元年九月、建<sup>二</sup>立一堂<sup>一</sup>、図<sup>二</sup>絵天像<sup>一</sup>、更造<sup>二</sup>移木像<sup>一</sup>、与<sup>二</sup>聖觀音<sup>一</sup>共安置矣、

云々。(『日仏全』第六〇、二八〇頁下)

とあり、円仁が入唐求法の折大風に遇い南海に没しようとした時、觀音力を念じたところ毘沙門天が現れ、その姿を描いたところ無事着岸した。そして、この靈驗により嘉祥元年九月、比叡山横川に根本觀音堂を創建して毘沙門天像を描き、さらに毘沙門天の木像を造り、聖觀音像とともに安置したと伝えている。

『巡礼記』における觀自在菩薩と毘沙門天に関する記述を見ると、承和三年(八三六)・承和四年(八三七)の渡海に失敗した第十五次遣唐使が承和五年(八三八)六月十七日に筑前の博多を進発し、二十三日有救島(長崎県五島の宇久島)に到った翌二十四日、「望見第四舶在<sup>レ</sup>前去。与<sup>二</sup>第一舶<sup>一</sup>相去卅里許、遙西方去。大使始画<sup>二</sup>觀音菩薩<sup>一</sup>。請益・留学法師等相共読経誓願。」(小野一、九六頁)とあり、円仁とともに第一舶に乗船していた遣唐大使藤原常嗣が觀音菩薩を描き、請益僧円仁・留学僧円載が共に読経したと記されており、航海の無事を觀音菩薩に祈願している。そして、六月二十八日嵐に遭遇した遣唐使一行は船の損壊を被り、艇に乗り七月二日揚州海陵県白潮鎮桑田郷東梁豊村に到着した。そこで円仁は、「聞大使以<sup>二</sup>六月二十九日未時<sup>一</sup>、離<sup>レ</sup>舶、以後漂流之間、風強濤猛。怕<sup>二</sup>船將沈<sup>一</sup>、捨<sup>レ</sup>釘擲<sup>レ</sup>物、口称<sup>二</sup>觀音・妙見<sup>一</sup>、意求<sup>二</sup>活路<sup>一</sup>。」(小野一、一〇八頁)とあり、嵐により船が沈没せんとした時、常嗣が觀音菩薩・妙見菩薩を唱え猛風が止んだと記している。ここでは、毘沙門天を感得した

ことは記されていないが、平信範(一一一一—一一八七)撰『兵範記』仁安四年(一一六九)二月五日条<sup>15</sup>を見てみると、次のようである。

今夕横川中堂焼亡、失火云々。忽有暴風不能消滅、遂灰燼了。(中略)詣座主檀所、訪申山上火事、被示云、件中堂慈覚大師草創。昔承和年中蒙勅入唐、漸送二年記、広訪名徳、既究仏法之奥旨、併得(アヤ)顯密之教文、同十四年帰朝之間、万里浪上、暴風吹来、大師被奉觀世之處、先依觀音之威神、忽多門天之形体顯現、渡海遁難、帰朝安穩之後、嘉祥年中手自造立觀世音毘沙門、彼山三鈷尾龍穴上、建立一堂安置二尊、其後薰修及三百歳云々。

これによると、仁安四年二月五日に横川中堂が失火により灰燼に帰しており、第五十五世座主明雲(一一一五—一一七七)の話によると横川中堂に安置されていた毘沙門天は、円仁が入唐の際暴風に遭い、観音菩薩を奉じたところ毘沙門天が現れ、渡海の難を免れたことにより造立されたものであると伝えられていたことが知られる。

聖観音に関する将来物は、『聖観自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌』一卷(「長安将来物一覽表」9)、『聖観自在菩薩根本心真言觀布字輪觀門』一卷(「長安将来物一覽表」<sup>165</sup>)をもたらししている。毘沙門天については、『巡礼記』開成五年(八四〇)九月五日条に、「夜、繫念毘沙門、誓願乞示知法人。」(小野三、二八〇頁)とあり、毘沙門天に密教の法を知る師匠を示すように誓願していることから、入唐時には毘沙門天への信仰を持っていたことが窺える。『新求目録』には『毗沙門天王經一品』一卷 不空(「長安将来物一覽表」<sup>117</sup>)、『北方毗沙門天王真言法』<sup>(130)</sup>一卷 不空が見られ、ともに長安において求得している。

この毘沙門天への誓願から、円仁は仏法護持の善神とされる毘沙門天を尊崇していたと思われるが、毘沙門天信仰の背景として、先師最澄からの影響が考えられる。すなわち、最澄は唐より『多聞天法』一卷(『伝教大師将来越州録』、『大正』五五・一〇五八c・No.二二六〇)、『青面北天陀羅尼法』一卷(『大正』五五・一〇五九b)を将来しており、さらに『伝教大師全集』所収の「鎮将夜叉秘法」(『伝全』四、五七〇頁)には、最澄が師檀の関係を



結んでいた桓武天皇の皇子一品式部卿親王に毘沙門天像を造り鎮将夜叉法を授けたことを伝え、また「彼法相承次第」には最澄から円仁への鎮将夜叉法を相承していることを伝えている。

以上のことから、入唐時航海安全を誓願し、その加護を受けたことに対して聖観音を安置するとともに、密教の持念の師匠を示されたことに対して毘沙門天を本尊として根本観音堂に安置し、入唐求法を無事終えられたことを感謝したのであろう。寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、入唐前の四十歳の頃視力の衰えた円仁が比叡山横川に草庵（後の首楞嚴院）を結び三年間蟄居し、健康が回復した後『法華経』一部を書写して小塔（後の如法堂）を建立したとされている（『統天全』史伝二、六一頁上―下）が、この根本観音堂の創建により、当時わずかに草庵と小塔が造られていた横川が発展していく基礎が築かれたものと考えられる。

なお、この横川中堂については、長元五年（一〇三二）梵照によつて撰述された、第十八世天台座主慈恵大師良源（九一二―九八五）の伝記である『慈恵大僧正拾遺伝』に、「同（天延三）改造横川中堂」。奉造等身不動明王像一、設於大会一奉開眼一。（以下省略）」（『統天全』史伝二、二〇六頁上）とあり、良源が天延三年（九七五）に改造し、等身の不動明王を造像して開眼供養が行われているが、この改造により横川中堂は本尊の観音と脇侍の毘沙門天に不動明王が追加され、観音・不動・毘沙門天三尊の天台様式が成立したのである。

## (2) 法華総持院の建立と熾盛光法の始修

次に、嘉祥三年（八五〇）に詔が下った法華総持院の建立と熾盛光法の始修について見ていきたい。寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、嘉祥三年三月に仁明天皇が崩御し、四月に文徳天皇が即位した後、まもなく円仁は以下のような文を上奏している。「大師奏曰、除災致福、熾盛光仏頂、是為最勝。是故唐朝道場之中、恆修此法一、鎮護国基一。街西街東諸内供奉、持念僧等、互相為番。奉祈宝祚一。又街東青龍寺裏、建立立皇

帝本命道場一、勤<sub>レ</sub>修真言秘法一。今須下建<sub>レ</sub>立持念道場護摩壇一、奉<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub> 陛下<sub>一</sub>、修<sub>中</sub>此法上。唯建立之处、先師昔点定矣。書奏降<sub>レ</sub> 詔曰、朕特發<sub>二</sub>心願<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>彼峯<sub>一</sub>建<sub>レ</sub>立總持院一、興<sub>レ</sub>隆仏法一。』（『統天全』史伝二、六八頁上）とあり、長安青龍寺の皇帝本命道場において、鎮護国家のための除災致福の法として最勝である熾盛光仏頂法が、長安の持念の僧らによって常に修されていたこと、また長安青龍寺の裏に皇帝本命道場が建立され、真言の秘法が勤修されていたと述べ、除災致福の熾盛光法を天皇のために修し、先師最澄が昔定めた場所に總持院を建立したいと述べている。<sup>16)</sup>

この奏上により、文徳天皇は心願を發して先師最澄がかつて点定した比叡山の峯に總持院を建立すべきの詔を下している。『類聚三代格』卷二の嘉祥元年六月十五日「修<sub>レ</sub>法灌頂一事」に所載の嘉祥元年六月十五日太政官符所引円仁上表においても、「今望、於<sub>二</sub>此雲峯先帝本願之地<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>国家一、永修<sub>二</sub>灌頂<sub>一</sub>。」（『新訂増補国史大系』第二五卷、七〇頁）とあり、それに対して「右大臣宣、奉<sub>レ</sub> 勅、依<sub>レ</sub>請」と、灌頂を修することが認められたことが記されている。

九月に出された詔には、「総持院置二十四僧一。」とあり、十四名の僧侶が總持院に置かれることになり、この修法が朝廷に待ち望まれていたことが窺える（『統天全』史伝二、寛平入道撰『慈覺大師伝』六八頁上―下、『類聚三代格』卷二 修<sub>レ</sub>法灌頂一事）。この十四名の僧侶については、三千院本『慈覺大師伝』によってその詳細が知られる。すなわち、「太政官牒 延暦寺 定<sub>二</sub>總持院拾肆僧一事 伝灯大法師位恵高年四十九、騰二十二 伝灯法師位法慶年五十八、騰二十五 伝灯法師位承誓年三十七、騰十四 伝灯満位僧安亮年三十四、騰十四 伝灯満位僧昌遠年三十八、騰十二 伝灯住位僧賢仁年四十四、騰十六 伝灯住位僧觀栖年四十二、騰十四 伝灯住位僧安勢、年三十五、騰十四 伝灯住位僧証審年三十五、騰十一 伝灯住位僧証暲年三十、騰十一 伝灯住位僧道行年三十、騰九 伝灯住位僧承岑年三十一、騰八 伝灯住位僧種演年三十八、騰七 伝灯住位僧觀朗年三十二、騰五」（『統天全』史伝二、五六頁上下）と記されており、十四僧に任命された当時の僧階、法名、年齢と騰次が判明している。『文徳実録』の嘉祥三年（八五

○九月己丑(十五日)条にも、「是日、内供奉大法師円仁奏置二天台總持院十四禪師一、簡二練行者一以充レ之。永不レ絶。」(『新訂増補国史大系』第三卷、『文徳実録』卷二、一九頁)とあり、九月十五日に十四僧が置かれ、それには練行の者が選ばれていたことが分かる。そして、九月十四日の太政官牒によると、この円仁の奏上に対する右大臣の宣には、「事須二毎月兩番一、昼夜不レ絶、如レ法祇行。」(三千院本『慈覚大師伝』、『続天全』史伝二、五六頁下)とあり、毎月兩番、昼夜を絶えず法のごとく行うべきことが通達されている。また、「十四僧供料」として、「一准二定心院十禪師法一、雜使五人料 毎日白米漆升肆合、沙弥二人 人別二升、堂童子一人・驅使二人 人別一升二合」(三千院本『慈覚大師伝』、『続天全』史伝二、五七頁上)とあり、供養料の内容が明らかとなっている。

この熾盛光法は、後に盛んに行われており、円仁の入唐求法がもたらした大きな成果の一つであるが、これについては『阿婆縛抄』『熾盛光法日記集』(『日仏全』第五八、七九頁上)に詳しい。

#### 熾盛光法日記集

仁明御宇

一嘉祥二年九月十四日、於二惣持院一慈覚大師撰。二〇<sup>(七巻)</sup>口助修被レ修二此法一。惣持院被レ置二十四禪師一、始二于此時一。山門云二鎮護国家道場一此謂也、云々。

持明房云、古人云、大唐青龍寺勅置本命灌頂道場一、是国主御本命院也。仍代々皇帝敬二重彼本命院一尤盛也。慈覚大師被レ移二青龍寺御本命院一。於二当朝上都延曆寺一、建二立惣持院一、為二公家御本命院一。天帝感悦、即賜二勅詔一云々。故代々公家、殊敬二重此院一、云々。

ここでは、初めて熾盛光法を修した年代が仁明御宇の嘉祥二年となっているが、これは先に取り上げた嘉祥三年九月十四日付の太政官牒の年次を指すと見られるので、嘉祥二年は三年の誤写ではないかと考えられる。

上記の文に続いて、熾盛光法が行われた年代が記載されているが、それを表にすると次のようになる。

「熾盛光法奉修年表」

年代	月日	場所	実施の理由
①延喜五年（九〇五）	夏	惣持院塔下	禁中頗有驚怪
②延喜十一年（九一一）	秋	豐樂院	
③天慶七年（九四四）	七月十六日	惣持院	消除天変・玉体安穩
④天慶八年（九四五）	十二月四日	惣持院	消除天変・玉体安穩
⑤天曆三年（九四九）	七月二十九日	大日殿	除天変災
⑥天徳四年（九六〇）	九月二十二日	仁寿殿	消除天変災
⑦承暦四年（一〇八〇）	七月十二日	定林房	藤原師実御悩
⑧寛治六年（一〇九二）	十月二十四日	賀陽院小寢殿	
⑨康和四年（一一〇二）	十月十九―二十日	仁寿殿	天変地夭
⑩康和五年（一一〇三）	正月十日	仁寿殿西母屋	
⑪長治二年（一一〇五）	三月五日	新大炊殿	
⑫嘉承二年（一一〇七）	十一月朔日		蝕、鳥羽院御慎不輕
⑬永久二年（一一一四）	正月		奉為聖主
⑭永久四年（一一一六）	四月二十七日		
⑮天治二年（一一二五）	八月五日	土御門内裏	天変
⑯天承二年（一一三二）	三月二十日	三条東殿西対	待賢門院息災延寿除障怖畏

①7 長承元年（一一三二）	九月十三日	禁中	消字星並地震等
①8 久安二年（一一四六）	十二月十六日	禁中	星変
①9 仁平二年（一一五二）	二月十六日	青蓮院和尚房壇所	公家御祈
②0 長寛元年（一一六三）	九月二十一日	押小路東洞院新内裏	
②1 建久五年（一一九四）	七月二十三日	閑院殿	天変降雨御祈
②2 建仁二年（一二〇二）	十一月八―二十四日	春日殿	院御祈
②3 建仁四年（一二〇四）	二月八日	平等院本堂	一院御祈
②4 元久二年（一二〇五）	二月	法勝寺	
②5 建永元年（一二〇六）	七月十五日	熾盛光堂	
②6 建永二年（一二〇七）	三月二十二日	熾盛光堂	
②7 承元二年（一二〇八）	三月二十五―四月一日	熾盛光堂	
②8 同 三年（一二〇九）	正月八―十四日	熾盛光堂	
②9 同 四年（一二一〇）	七月八日	熾盛光堂	
③0 同年（一二一〇）	十月四日	熾盛光堂	彗星御祈
③1 建暦元年（一二一一）	九月二日	熾盛光堂	
③2 建暦二年（一二一二）	正月十一―十七日	熾盛光堂	
③3 同年（一二一二）	七月四日	熾盛光堂	
③4 同年（一二一二）	十一月十六日	熾盛光堂	
③5 同三年（一二一三）	七月十二日―二十三日	熾盛光堂	
③6 建保二年（一二一四）		熾盛光堂	

③⑦ 同三年（一二一五）	十一月六日	熾盛光堂	
③⑧ 同四年（一二一六）	十一月三日	熾盛光堂	
③⑨ 同五年（一二一七）	八月五日	熾盛光堂	
④⑩ 同七年（一二一八）	閏二月十六—二十三日	水無瀬殿馬場殿	
④⑪ 同年（一二一九）	九月十二日	熾盛光堂	
④⑫ 貞永元年（一二三二）	閏九月	今出川殿	関白御祈、彗星出現
④⑬ 延応元年（一二三九）	二月	熾盛光堂	公家御祈
④⑭ 同年（一二三九）	六月	熾盛光堂	禅定大閤御祈
④⑮ 同年（一二三九）	十二月	熾盛光堂	天変御祈
④⑯ 仁治三年（一二四二）	正月	熾盛光堂	禅定大閤御祈
④⑰ 寛元元年（一二四三）	七月二十七日	隆親卿亭	公家御祈
④⑱ 寛元三年（一二四五）	三月七日	閑院内裏広御所	客星彗星変

この表によると、延喜五年（九〇五）以降盛んに修されており、建永元年（一二〇六）以降は比叡山の法華総持院内の熾盛光堂にて多く行われていたことが分かる。現在比叡山根本中堂において四年に一度の四月に御修法として厳修されており、天台密教が伝わっている青蓮院門跡においては年に二度（元旦、十月）行われている。円仁が唐より伝来の熾盛光法は、今日に至るまで途切れることなく伝えられているのである。『新求目録』の青蓮院本には、この修法に関する仏典として、『電光熾盛可畏形羅刹斯金剛最勝明経』一卷（「長安将来物一覧表」<sup>184</sup>）、『熾盛光威徳仏頂念誦儀軌』一卷（<sup>185</sup>）が見られ、これらは修法に当たって用いられたと考えられる。

### (3) 文殊楼院（常坐三昧院）の創建

現在、比叡山東塔北谷の虚空蔵尾にある文殊楼院（一行三昧院）の創建も特筆すべきである。この堂舎は、最澄が常坐三昧実修の道場として構想したことが始まりであり、寛平入道撰『慈覚大師伝』に「大師是歳奏下可造文殊楼一之状上。特有レ 詔給二造料一。三年、以二臺山靈石一、埋二其五方一、始作二件楼一。王公庶人、帰レ心合レ力。」（『続天全』史伝二、七〇頁上）とあり、五台山より将来した土石（「五台山将来物一覽表」<sup>36</sup>）を貞観三年（八六一）、壇の五方に埋めて王公庶人が力を合わせて文殊楼を建立したことが記されている。

この土石は、後年文殊楼の焼亡により灰燼に帰したが、良源が一篋を開いたところ、円仁が五台山より取得した「五台師子跡土」との銘文のある一裹物を見つけ、再び文殊師利菩薩像の師子の足下に置いたという話が『慈恵大僧正伝』（『続天全』史伝二、一九五頁上―下）に伝わっている<sup>17</sup>。そして、円仁は熱病を患った貞観六年（八六四）正月十三日、諸弟子に言い残した遺戒においてこの文殊楼にも触れており、「文殊楼結構功成、欲レ属二公家一。我没之後、若有二造畢一、慎勿レ失二本意一。」（寛平入道撰『慈覚大師伝』、『続天全』史伝二、七〇頁下）とあり、文殊楼の完成後は公家に付嘱したいことを述べている。『天台座主記』の青蓮院本には、「同（貞観）三年（中略）六月七日奉造文殊像一以二五臺香木一入二中心一。十月周旋供養。大師遷化之後、貞観十二年四月十九日依二大師遺囑一寄二進清和院一。慈恵大師山務天元三年十月一日移二造虚空蔵峯一。」（『天台座主記』一二頁）と見え、貞観三年（八六一）六月七日文殊像の胎内に五台山の香木を入れ、十月に供養を行っていることが分かる。この香木は、『新求目録』の青蓮院本に記載の「柴木一条」（「五台山将来物一覽表」<sup>37</sup>）のことであろう。そして、文殊楼院は円仁遷化の後の貞観十二年（八七〇）四月十九日、円仁の遺囑に従って清和天皇に寄進されている。『日本三代実録』によると、元慶五年（八八一）三月十一日条に、「勅、清和院大浦庄墾田二十八町五段百八十九歩、在二近江国浅井郡一。依二院牒状一、永施二捨延曆寺文殊楼七軀大聖文殊并五仏燃灯修理等料一。庄内浪人、

同以寄充。宜令三國司專<sub>レ</sub>当其事。」(『新訂増補国史大系』四、『日本三代実録』卷三九、四九五頁)とあり、勅によって近江国浅井郡の清和天皇領の墾田が、院の牒状を受けて文殊楼七軀大聖文殊と五仏燃灯の供養修理などの料として施入され、庄内の浪人も同じく寄せ充てられた。

なおまた『叡岳要記』上にも、「貞観二年大師文殊閣可<sub>二</sub>制作<sub>一</sub>状具注言上。(中略)同三年臺山靈石埋<sub>二</sub>壇五方<sub>一</sub>始作。六月七日奉<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>文殊尊像<sub>一</sub>、五臺山香木入<sub>二</sub>其中心<sub>一</sub>安<sub>二</sub>置楼下<sub>一</sub>。」(『新校群書類従』卷第四三九、一九九頁上)とあり、寛平入道撰『慈覚大師伝』と同様のことが記されている。

また、『三代実録』によると、貞観十八年(八七六)六月十五日庚申条に次のような記述が見られる。「故延暦寺座主慈覚本願文殊五間影嚮楼一基、高五丈三尺、広五丈三寸、縦三丈八尺。安<sub>二</sub>置正体文殊坐像一軀、高四尺八寸、化現文殊乗師子立像一軀、高八尺、脇侍文殊立像四軀、高各五尺三寸、侍者化現文殊童子立像一軀、高五尺三寸、師子御者化現文殊大士立像一軀、高五尺三寸。」(『新訂増補国史大系 日本三代実録』卷二九、三七七頁)とあり、高さ五丈三尺、広さ五丈三寸、縦三丈八尺の文殊楼の内に、高さ四尺八寸の正体文殊坐像一軀、高さ八尺の化現文殊乗師子立像一軀、高さ各五尺三寸の脇侍文殊立像四軀、高さ各五尺三寸の侍者化現童子立像一軀、高さ五尺三寸の師子御者化現文殊大士立像一軀を安置したことが伝えられている。

この文殊信仰について、円仁は文殊菩薩の聖地である五台山において見聞しているので、以下その概要を見てもよい。

『巡礼記』開成五年四月二十八日条に、「便入<sub>二</sub>停点普通院<sub>一</sub>、礼<sub>二</sub>拜文殊師利菩薩像<sub>一</sub>。」(小野二、四一九頁)と見え、五台山の聖域に入った円仁はまず文殊師利菩薩像に礼拝した後、五月五日条に「大衆同音念<sub>二</sub>尺迦牟尼仏・弥勒尊仏・大聖文殊師利菩薩・一万菩薩・一切菩薩摩訶(薩)<sub>一</sub>。」(小野二、四四一頁)とあり、竹林寺にて大衆が釈迦牟尼仏と弥勒仏、文殊師利菩薩などを念じている様子を見ている。また、五月十七日の夜、菩薩堂院にて大聖文殊師利菩薩像を礼拝しており、「開<sub>レ</sub>堂礼<sub>二</sub>拜大聖文殊菩薩像<sub>一</sub>。容貌顯然、端嚴無<sub>レ</sub>比。」(小野三、三



頁)すなわち文殊菩薩像の容貌が優れていることを書き留めている。

なお、『座主記』(一二頁)によれば天元三年(九八〇)十月一日に良源がこの文殊楼院を比叡山東塔北谷の虚空蔵尾の峯に移築しており、現在に至っている。

#### (4) 赤山禅院の創建

寛平入道撰『慈覚大師伝』に見られる円仁の遺戒には、「我昔入唐求法之日、有<sub>下</sub>為<sub>二</sub>天衆神祇<sub>一</sub>、書<sub>二</sub>金光明經千部<sub>一</sub>、又為<sub>二</sub>赤山神<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>禅院<sub>一</sub>之願<sub>上</sub>。是為<sub>レ</sub>令<sub>下</sub>求法之事無<sub>上</sub>有<sub>二</sub>障礙<sub>一</sub>也。若写<sub>二</sub>彼經<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>置文殊楼<sub>一</sub>。唯至<sub>二</sub>禅院<sub>一</sub>、庶道心同志者、遂<sub>二</sub>此宿願<sub>一</sub>。」(『統天全』史伝二、七〇頁下―七一頁上)とあり、昔入唐求法が障礙なく行うことができたことへの感謝を込めて、天衆神祇のために『金光明經』千部を書写して文殊楼に安置するとともに、赤山神のために禅院を造立したいとの願を起こしている。

『巡礼記』には赤山神に関する記述はないが、開成四年(八三九)六月から開成五年(八四〇)二月まで滞在した赤山に鎮座する神を勧請しようとしたことが窺える。在世中その願は叶わず、寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、「仁和四年、建<sub>二</sub>立大師本願禅院<sub>一</sub>。是南大納言山莊也。在<sub>二</sub>延暦寺西坂下<sub>一</sub>、大衆合<sub>レ</sub>力、以<sub>二</sub>錢二百貫<sub>一</sub>買得也。寛平二年、太政大臣越前公施<sub>二</sub>入年給一分一人<sub>一</sub>。其状云、為<sub>レ</sub>支<sub>二</sub>天台教主慈覚大師本願<sub>一</sub>。奉<sub>二</sub>施入<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>件。伝聞、大師昔者踰<sub>二</sub>鼈波<sub>一</sub>求<sub>二</sub>象徴<sub>一</sub>、即在<sub>二</sub>西唐<sub>一</sub>發<sub>レ</sub>下欲<sub>レ</sub>建<sub>二</sub>禅院<sub>一</sub>之願<sub>上</sub>。」(『統天全』史伝二、七三頁下)とあり、円仁入滅後の仁和四年(八八八)諸弟子が延暦寺西坂本にあった大納言南淵年名(八〇八―八七七)の山莊を買い取り、大衆がこの院を建立し、寛平二年に太政大臣藤原基経が年給一分一人を施入していることが窺える。

南淵年名の山莊を買い取って赤山神を勧請した背景を窺うと、年名が従五位下であった承和八年(八四一)当時、

文室宮田麻呂の後任として筑前守に補任されているが、文室宮田麻呂など筑前国司が張宝高ら新羅交易者との密接な関わりがあったと考えられており、<sup>19</sup>年名も国司在任時に新羅人との人脈を有していた可能性が高いと考えられる。仁和四年当時、年名没後十一年が経過しているが、赤山神を祀る場として年名の邸宅が使用されたことと無関係ではないと思われる。この赤山禅院（京都市左京区修学院）は比叡山東塔西谷に所属し、現在も皇城鬼門の守護神として鎮座している。

### 第三節 比叡山における円仁将来物の保存

最後に、円仁将来物の保存についても見ておきたい。『天台座主記』には、円仁入滅の前日である貞観六年（八六四）正月十三日の円仁の奏聞が記されており、円仁の将来典籍すなわち、真言密教典籍と顕教典籍の取り扱いについて述べられているのでその全文を掲げると、

今日真言法門検封事奏<sub>レ</sub>聞<sub>一</sub>。

叡山沙門円仁謹言。

請<sub>下</sub>以<sub>二</sub>先師並円仁所<sub>レ</sub>求真言法門及図画曼荼羅等<sub>一</sub>安<sub>コ</sub>置総持院<sub>一</sub>、令<sub>中</sub>門徒阿闍梨檢校伝弘<sub>上</sub>事。

合

先師所<sub>レ</sub>求色目在<sub>レ</sub>別。円仁所<sub>レ</sub>求

右道之為<sub>レ</sub>道在<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>伝。何況真言之法是秘中秘乎。乃有<sub>二</sub>先師所<sub>レ</sub>求真言法門<sub>一</sub>、元来混<sub>コ</sub>雜顕教法門<sub>一</sub>同納<sub>二</sub>寺家経蔵<sub>一</sub>。復有<sub>二</sub>円仁入唐求法之日所<sub>レ</sub>得真言法門並曼荼羅道具等<sub>一</sub>、頃年置<sub>二</sub>秘経蔵<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>公家経蔵<sub>一</sub>、若準<sub>レ</sub>旧私安<sub>コ</sub>置寺家経蔵<sub>一</sub>者恐非<sub>二</sub>其道<sub>一</sub>一人之類輒有<sub>二</sub>披見<sub>一</sub>歟。加以総持院者先師所<sub>レ</sub>号也。本意固為<sub>下</sub>安<sub>コ</sub>置真言法門<sub>一</sub>鎮<sub>コ</sub>護国家<sub>一</sub>福利人民<sub>上</sub>。今冀前後両度真言法門曼荼羅道具等並安<sub>コ</sub>置総持院<sub>一</sub>殊令<sub>二</sub>檢知伝

弘<sup>一</sup>。其後令<sup>下</sup>円仁門徒中所<sup>二</sup>推譲<sup>一</sup>阿闍梨相統相承檢校伝弘<sup>上</sup>。円仁所<sup>二</sup>求得<sup>一</sup>顯教法門悉以加<sup>コ</sup>納寺家經藏<sup>一</sup>。又件新度顯密法門依<sup>二</sup>先師式<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>門。伏望蒙<sup>レ</sup>降<sup>二</sup>勅制<sup>一</sup>令<sup>二</sup>後代人殊慎守<sup>一</sup>之。然則前帝御願弥増<sup>レ</sup>光饒<sup>二</sup>先師本願<sup>一</sup>倍有<sup>二</sup>満足<sup>一</sup>。謹録<sup>二</sup>事由<sup>一</sup>、伏聴<sup>二</sup>処分<sup>一</sup>。

貞觀六年正月十三日前入唐求法沙門大法師位円仁（『座主記』一四—一五頁）

とある。円仁将来の真言法門・曼荼羅道具などは近年秘經藏に置き、いまだ公家の經藏に納めておらず、旧例に準じて私に寺家の經藏に安置したならば、道にあらざる人に披見される恐れがあると述べている。そこで、前後兩度すなわち最澄・円仁将来の真言法門・曼荼羅道具等の密教関係は法華總持院に安置して、円仁門徒のうちに推薦された阿闍梨が相続して檢校し伝弘させるべきこと、円仁求得の顯教法門は全て寺家の經藏（根本經藏）に納めることとしている。また、最澄の教えによつて山門の外に出さないように、勅によつて後代の人に守らせるべきことを上申している。

これに対して、円仁入滅の翌日である正月十五日、「左大弁官下 延曆寺 応<sup>レ</sup>勘<sup>コ</sup>知故座主円仁大法師房中秘密書竝雜物等一事。（中略）宜<sup>下</sup>安惠大法師執<sup>コ</sup>当其事<sup>一</sup>每<sup>レ</sup>色勘知納<sup>中</sup>置惣持院<sup>上</sup>。不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>疎略<sup>一</sup>。」（『座主記』一五頁）との太政官符が下り、円仁の弟子安惠（七九五？—八六八）が檢校することになった。そして、この經藏は貞觀十三年（八七一）の官符によると「總持院真言藏」（『智証大師全集』下・一三二—一四頁下『余芳編年雜集』）と呼ばれていたことが知られる。また、そこに所藏されていた密教典籍は円珍の『大毘盧遮那成道經義積目錄』（『智証大師全集』中・七一—四頁上）によると、「總持院本」、「總持院藏本」と呼ばれていたようである。しかし、この真言藏は承平五年（九三五）をはじめ法華總持院の数度の火災により焼失し、<sup>20</sup>『天台座主記』には、「今年（天元三年）先造<sup>二</sup>前唐院<sup>一</sup>、又移<sup>コ</sup>作根本經藏寶藏<sup>一</sup>。」（『座主記』四五頁）とあり、天元三年（九八〇）良源によつて再興されている。この時、總持院から前唐院へ真言藏を移したことが指摘されている。<sup>21</sup>

そして、佐藤哲英氏により前唐院所藏の書籍目録が比叡山南溪藏に伝来していることが明らかにされ、<sup>22</sup>近年武

覚超氏によってこれら二種の目録の詳細な対比分析が行われているので、先学の研究に依りながら円仁将来本の保存状況を窺ってみたい。それによると、嘉保二年（一〇九五）に成立した『勘定前唐院見在書目録』に第一厨子・第二厨子合わせて四百九十八点の典籍曼荼羅図像などが載っており、建暦二年（一一二二）書写の『前唐院法文新目録』に第一厨子中階・下階合わせて三百七十点の書目が見られる。これらを円仁将来目録と対比させると、平安末期から鎌倉時代における保存状況が明らかにされている。すなわち、円仁目録に記載されている書目の割合は『勘定前唐院見在書目録』が四五・七%、『前唐院法文新目録』が三八・五%であったことが明らかとなっている。

## 結語

本稿では、慈覚大師円仁が入唐求法九年三ヵ月間に揚州・赤山・五台山・長安等において見聞し体験し修学したことや、仏典等の蒐集及び仏教諸法門の受法などの経験が、承和十四年（八四七）九月の帰国後にいかなる成果として表れ、比叡山仏教の確立や日本天台宗の発展に寄与したかについて論究した。

### 一 「比叡山諸法儀の始修と整備」

(1) 「法華懺法の改伝」については、赤山法華院での『法華経』の講経や新羅風の礼懺儀式の見聞、また五台山の諸処で盛んに修されていた天台の法華三昧の行法を参考にしつつ、「法華懺法」として改編したものであり、基本的には現行の『台宗課誦』所収の「法華懺法」に伝承されている。

(2) 「不断念仏の始修」については、円仁が五台山竹林寺で法照の五会念仏を学んで比叡山に伝えたことに始まる。円仁は、竹林寺齋礼式に参加する中で五会念仏に出会い、さらに長安章敬寺においても鏡霜より五会念仏を

見聞している。この円仁相伝の念仏三昧は「常行三昧」「弥陀念仏」「不断念仏」「例時」等と呼ばれ、伝承されていた。多少の変遷は見られるにせよ、現在「例時作法」の名で朝暮の勤行として継承されている。

(3)「灌頂の始修及び菩薩戒の伝授」については、長安での灌頂による胎藏界・金剛界・蘇悉地三部の受法や、結縁灌頂の見聞に基づき、嘉祥二年（八四九）灌頂を始修し一千余人に授けた。その後、文徳天皇や惟仁親王（後の清和天皇）、藤原良相等に伝授していることが知られた。さらに、淳和太后はじめ百五十余人に菩薩戒も授けている。円仁の伝えた灌頂は、密教相伝の最重要行事として現在に伝承され、延暦寺灌頂や結縁灌頂として毎年比叡山で厳修されている。

(4)「浄土院廟供の始修」については、円仁がかつて五台山滞在中竹林寺における廟供を習い、先師最澄の御廟所において行ったものである。この廟供の内容は、文献がなく不明であるが、最澄廟供の精神は受け継がれ、十二年籠山行として侍真僧により現在も日々修されている。

(5)「天台大師供の始修」については、揚州開元寺での見聞に基づき、仁寿四年（八五四）円仁は『天台大師供祭文』『天台大師忌次第式』を撰述し、これを奉修している。現在も「天台大師御影供」として天台大師の命日十一月二四日に修されているが、その大綱は円仁の次第式に基づいている。

(6)「舍利会・文殊八字法・七仏薬師法の始修」については、「舍利会」は五台山や長安での舍利供養の見聞及び仏舎利の将来により、貞観二年（八六〇）法華総持院にて始行している。「文殊八字法」については、文殊八字の真言を将来し、嘉祥三年（八五〇）に仁明天皇の聖体不予のため修している。「七仏薬師」については、嘉祥三年清涼殿にてこれを修している。

## 二「比叡山諸堂の創建と整備」

(1)「根本観音堂の創建」については、帰国の翌年嘉祥元年（八四八）のことであったが、その縁起については

入唐求法の遣唐船難破の折、観音を念じたところ毘沙門天が現じて無事着岸したという靈驗から、聖観音と毘沙門天を本尊に祀ったと伝えている。毘沙門天については、長安で密教持念の師匠を示された事への感謝を込めたものであったと見られる。

(2)「法華総持院の建立と熾盛光法の始修」については、嘉祥三年(八五〇)の文徳天皇の即位に際し、円仁が奏聞して総持院の建立と熾盛光法の奉修が勅許され始行されたことが知られた。円仁の奏聞は、長安の密教道場青龍寺が勅置の天子本命道場であり、常に熾盛光法を修していたことの見聞によるものであった。この法は、現在も比叡山延暦寺や青蓮院において伝承されている。

(3)「文殊楼院(常坐三昧院)の創建」については、貞観三年(八六一)五台山より将来した土石を壇の五方に埋めて建立し、さらに五台山より将来した「柴木一条」を文殊像の胎内に納めて本尊としたことが知られる。円仁は、五台山の文殊信仰を比叡山に伝えようとしたのであろう。

(4)「赤山禅院の創建」については、円仁の遺戒に基づき円仁滅後の仁和四年(八八八)に諸弟子らによって建立されたものである。円仁の遺戒によれば、円仁入唐求法の障礙がなかったことは赤山神の冥護であると考え、これを比叡山に勧請したのである。

### 三「比叡山における円仁将来物の保存」

円仁の遺戒によって真言密教の典籍は法華総持院の真言蔵に納め、顕教典籍は寺家の経蔵(根本経蔵)に納めることとし、真言蔵は後に前唐院に収納することとなった。嘉保二年(一〇九五)と建暦二年(一一二二)の二目録によって、円仁将来典籍の保存状況が知られ、それによると平安末から鎌倉時代にかけて四割程度の円仁将来物が前唐院に保存されていたと見られるが、その後の伝存状況については明らかではない。

- 1 現在天台宗で行われている勤行儀を網羅したもので、体裁は折本であり、表面は「法華懺法」「例時作法」「十二礼讃」「三句念仏」「回向段」「伝教大師ご法語」「恵心僧都ご法語」、裏面は「勤行作法第一式」「勤行作法第二式」「勤行作法第三式」「諸尊真言」「天台大師和讃」「伝教大師和讃」「叡山流詠讃歌」で構成されている。
- 2 『仏説超日明三昧経』（『大正蔵』一五卷、五三二a）に「処世間如虚空 若蓮花不著水 心清浄超於彼 稽首礼無上聖」とある。
- 3 『台宗課誦 坤』（比叡山延暦寺学問所、一九八四年）一頁に、「古来例懺の読音は漢音とされているが、その発音が純粹の漢音ではなく、新羅音も入ってこれらの音が渾然と融合した特殊な音とされている。」と述べているが、どの部分に新羅音が用いられているかについては定かではない。
- 4 『阿婆縛抄』、『前唐院第一御厨子宝物目録』、『金剛界大法対受記』の記述によると、これらの史料では法照のことを法道と称している事例がある。
- 5 西村岡紹「『例時作法』成立考」（『天台学报』第二〇号、一九七八年）六一頁によれば、「例時」の語は寛和二年（九八六）九月十五日に慶滋保胤が草した横川二十五三昧の『起請八箇条』の第五「可ニ結衆病間結番瞻視一事」の中に「毎レ至ニ日没一必勤ニ例時一。」（『恵心僧都全集』第一、三五三頁）とあるのが初見であると指摘されている。
- 6 『浄土五会念仏略法事儀讃』（『大正蔵』四七卷、四八八b）には、「歎ニ西方浄土一五会妙音讃 第一会時除ニ乱意一。第二高声遍ニ有縁一。第三響颺能ニ裏<sup>（衰力）</sup>雅一。第四和鳥<sup>（鳴力）</sup>真可レ憐。第五震動天魔散。」とあり、本文に挙げた「第一会平声緩念ニ南無阿弥陀仏一。第二会平上声緩念ニ南無阿弥陀仏一。第三会非緩非急会念ニ南無阿弥陀仏一。第四会漸急念ニ南無阿弥陀仏一。第五会四字転急念ニ阿弥陀仏一。」に対応していると考えられる。
- 7 佐藤哲英「前唐院見在書目録について―慈覚大師将来仏典は如何に伝持されたか―」（福井康順編『慈覚大師研

究』天台学会、一九六四年）一〇九頁。

8 「昔斯那国法道和上現身往ニ極国一。親聞ニ水鳥樹林念仏之声一以伝ニ斯那一。慈覚大師入ニ五台山一学ニ其音曲一以伝ニ睿山一。此有ニ長声ニ声合殺五声一。」（『大正藏』七五卷、一七九a—b）

9 同様の記事は寛平入道撰『慈覚大師伝』にも「来五月甘露八日、奉<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>聖朝一、修<sub>ニ</sub>灌頂法一。（中略）至于此日一、初修<sub>ニ</sub>灌頂一。即令<sub>ニ</sub>内蔵寮供ニ一千僧一也。詔<sub>ニ</sub>参議左大弁伴宿禰善男一檢<sub>レ</sub>校其事一。受<sub>ニ</sub>三昧耶戒一者、一千余人。於<sub>レ</sub>是大師及山衆、各抗<sub>レ</sub>表奉賀。」（『続天台宗全書』史伝二、六七頁下）とあり、ほぼ同文である。

10 このことは、『天台霞標』五編卷之一にも、「天皇屈<sub>ニ</sub>円仁於冷泉院一、受<sub>ニ</sub>両部灌頂一。」（『日仏全』第四二、一〇中）と記されている。

11 天永二年（一一一一）以前に成立したとされる『天台南山無動寺建立和尚伝』によると、相応が二十五歳の時、師の円仁が相応を良相の身代わりとして得度させたことが記されている（『続天全』史伝二、一一一頁）。また、この伝記によると、天安二年（八五八）に文徳天皇の女御で右大臣藤原良相の女藤原多可幾子（一八五八）が重病に罹った際、良相が書信を円仁に送り、相応の力を請うている。相応はこの時十二年籠山中であつたが、円仁の「八福田中看病第一。結縁内師檀尤深。」との言葉に従い、下山し西山三条御殿にて多可幾子に憑いた悪霊を屈伏させたことが相応の験を顕した最初と伝えている。円仁が結縁の中で師檀を最も重要視したのは、先師最澄が桓武天皇を始め和気広世ら公家と密接な繋がりがあつたことに起因すると考えられる。

12 佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）二九二—二九五頁によると、高向公輔は還俗前円仁より灌頂を受け、悉曇を伝授された湛契という僧侶であつたとされる。

13 武覚超『比叡山仏教の研究』（法蔵館、二〇〇八年）二二—二三頁。

14 これについては、『天台霞標』五編卷之一、『阿婆縛抄』「文殊八字」にも「嘉祥三年二月甲子、（中略）又請<sub>ニ</sub>天台宗座主、前入唐請益伝灯大法師位円仁、及定心院十禅師等一於<sub>ニ</sub>仁寿殿一、令<sub>レ</sub>修<sub>ニ</sub>文殊八字法一。」（『日仏全』第四二、



一〇頁上）、『阿婆縛抄』卷第一百一に、「扶桑略記云、嘉祥三年二月甲子日、請天台座主前入唐請益伝灯大法師位円仁及定心院十禅師等<sup>一</sup>、於仁寿殿<sup>二</sup>令修文殊八字法<sup>一</sup>。」（同、第五八、三一五頁中）とあり、同様のことが記されている。

15 増補「史料大成」刊行会編『史料大成 兵範記四』（臨川書店、一九七五年）、三一八―三一九頁。なお、円仁の毘沙門天感得説話については、鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について―不動・毘沙門研究序説―」（『佛教藝術』一四九号、一九八三年）において論じられている。

16 法華総持院の創建については、武覚超『比叡山諸堂史の研究』（法蔵館、二〇〇八年）二〇四頁によれば、『阿婆縛抄』、『山門堂舎』、『九院仏閣抄』に基づき、貞観四年（八六二）円仁が入唐中に見聞した唐都長安青龍寺の鎮国道場の形態を模し、天台密教の根本道場として十カ年の歳月をかけて完成したものであると論じられている。

17 「又山上有文殊堂<sup>一</sup>、慈覚大師所造立<sup>二</sup>也。文殊所乗師子足下之土者、五台山文殊化現師子所踏之跡也。而高樓焼亡、灰燼多積。師子跡土、混沌難<sup>レ</sup>弁。和尚移文殊樓之昔跡<sup>一</sup>。建<sup>二</sup>虚空藏之峻嶺<sup>一</sup>。雖<sup>レ</sup>造<sup>二</sup>師子<sup>一</sup>、無<sup>二</sup>足下土<sup>一</sup>。在在諸徳、皆長太息。和尚開<sup>二</sup>一篋<sup>一</sup>中出<sup>二</sup>一裹物<sup>一</sup>。其上銘三五臺師子跡土<sup>一</sup>也。是又大師入唐之時所<sup>二</sup>取得<sup>一</sup>也。如<sup>レ</sup>旧以<sup>二</sup>其土<sup>一</sup>、置<sup>二</sup>師子足下<sup>一</sup>。芳縁之至、見者嘉歎。」（『統天全』史伝二、『慈恵大僧正伝』一九五頁上―下）

また、『慈恵大僧正拾遺伝』には、「同（安和）二年己巳造文殊樓<sup>一</sup>。元立<sup>二</sup>講堂場内<sup>一</sup>。以<sup>二</sup>其薨宇相連非常可<sup>レ</sup>畏故、別古勝地所<sup>二</sup>建立<sup>一</sup>也。」（『統天全』史伝二、二〇五頁上）とあり、安和二年（九六九）に良源が新たに文殊樓を建立したことが分かる。

18 黒板勝美、国史編修会編『新訂増補国史大系 続日本後紀』承和八年正月十三日（甲申）条「從五位下南淵朝臣年名為<sup>二</sup>筑前守<sup>一</sup>。」（吉川弘文館、一九七八年）一一五頁。

19 田中史生「承和期前後の国際交易―張宝高・文室宮田麻呂・円仁とその周辺―」（平成十三年度―平成十六年度科

学研究費補助金（基盤研究C（2））研究成果報告書『入唐求法巡礼行記』に関する文献校定および基礎的研究、二〇〇五年三月）において、文室宮田麻呂と張宝高との取引実態が明らかにされており、南淵年名が藏人頭から筑前守に転出された理由として、仁明王権が筑前国府・太宰府を直接的に支配しようとしていたという政治的背景を論じている。また、李炳魯「平安初期における北東アジア世界の交渉と現況―張保臯と円仁を中心として―」（『北東アジア研究』二二号、二〇一二年）によると、平安初期太宰府と筑前国の官吏らはほとんどが張保臯と交易を行っていたと見られる。

20 武覚超、前掲注13、五八頁。

21 武覚超、前掲注13、一〇五頁。

22 佐藤哲英、前掲注7。

23 武覚超、前掲注13、五二―一〇五頁。

## 終章

第一章から第四章までの考察を総括すると次の如くである。

第一章「円仁将来三目録『日本国承和五年入唐求法目録』、『慈覚大師在唐送進録』、『入唐新求聖教目録』の成立過程」では、最澄による比叡山開創に遡り、最澄（七六六―八二二）が開いた日本天台宗がいかんにして円仁に受け継がれていったかについて考察する礎とするとともに、円仁将来三目録の成立事情を明らかにした。

第一節「伝教大師最澄による比叡山の開創と天台宗の開宗」では、最澄の根本史料である、最澄門下の釈一乗忠撰『叡山大師伝』などを用いて最澄の出家修学から得度、比叡山入山、一乗止観院の創建を考察した。最澄は比叡山入山後、華嚴宗の典籍を通して天台の教えに出会い、鑑真（六八八―七六三）将来の天台典籍を修学したこと、智証大師円珍（八一四―八九一）撰『大毘盧遮那成道経義积目録縁起』によって最澄が入唐前真言密教への関心を持っていたことが知られた。

そして、南都仏教に替わる新しい仏教を求めていた桓武天皇（七三七―八〇六）に天台教学を見出され、入唐還学僧に選出された。最澄の入唐の主たる目的は「請入唐請益表」によると天台法門の求法であったが、唐では円密禅戒の四宗の法門を学び、それらが天台宗の基本となっていくのである。

延暦二十五年（八〇六）天台宗の開宗が公認され、『摩訶止観』を読ませる止観業一名と『大毘盧遮那経』を読ませる遮那業一名の年分学生（十二年籠山僧）が設置されたが、『天台法華宗年分得度学生名帳』によると、大同二年（八〇七）から弘仁十年（八一九）に得度した者のうち、住山者は半数以下であり教学体系が整っていなかったことが窺えた。さらに、長安の最新密教を将来した弘法大師空海（七七四―八三五）の帰国により最澄が劣勢に置かれ、最澄は密教經典借覽を通して空海との交流を始めたが、見解の相違により両者の関係が断絶し、これにより比叡山は真言密教の不備をいかに解消し、また教学を確立していくかが大きな課題となったのである。

第二節「円仁入唐に至る経過と概要」では、このような状況下で最澄門下となった円仁が、入唐請益僧に選出されるまでの経過と概要について考察するに先立ち、佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）を踏まえて『慈覚大師伝』の現存諸本の検討を行った。

円仁は弘仁五年（八一四）に得度し、「授慈覚大師付法文」などに依ると、最澄の臨終に際して「一心三観<sup>がん</sup>」の要旨を伝えられており、最澄より期待と信任を寄せられていたことが窺える。最澄没後、円仁は十二年の籠山修行を経て法隆寺や四天王寺、北土（東北）に赴き天台法門の弘伝を進めていたが、四十歳の頃大病を患い三年間比叡山横川首楞嚴院に蟄居した後、入唐請益僧に選出された。その背景には、『天台座主記』によると、最澄の遺命を受けた第二世座主円澄（七七二―八三七）からの付嘱があったのであり、当時の天台教団の課題を表した三十条の疑問を円仁に託している。『元亨釈書』などの諸史料によると円澄は円仁と同じく東国の壬生氏の出身であり、円仁を比叡山に入山させた道忠門下の広智（―七九四―）と兄弟弟子であるという繋がりがあったことが知られた。円仁に託された疑問は、『唐決集』に「円澄疑問三十問」として収録されており、本稿ではそのうち第二問を取り上げたが、当時の天台教団が抱えていた天台と真言との教学的位置付けが課題であったことを提示した。

そして、請益僧に選出されるのと前後して、『慈覚大師伝』によると円仁は数度最澄の夢告を受けているが、『巡礼記』にも在唐中に見た最澄の夢告などの記述が見られることから、『慈覚大師伝』の記述は単なる伝説ではないと考えられる。このように、円仁入唐の背景には最澄の天台宗開宗による止観（天台）・遮那（密教）両業の充実及び天台と真言密教との教学的位置付けという最澄在世中から引き継がれ、また円澄より円仁に託された課題があったことが知られた。

第三節「円仁三目録『日本国承和五年入唐求法目錄』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目錄』の撰述とその背景」では、円仁の入唐の目的は台州清寺にて教学上の疑問を解決することであったが、円仁の台州行きは不許可となり、開成四年（八三九）七月に唐国残留を執行するが、それまでは遣唐使一行とともに帰国せざるを得ない

状況となっていた。このような中で撰述したのが『承和五年目録』であった。

次に、『承和五年目録』と『在唐送進録』の成立事情を考察したが、その結果、『在唐送進録』の末尾にある「其目録」は『承和五年目録』のことであり、また開成四年三月二十三日栗田家継に延暦寺宛ての消息を託したのとは別に、円仁が延暦寺宛の「円仁書」を託した相手は帰国へ向かう遣唐使第二船の栗田家継であり、その時期は開成四年七月二十一日であったと推測した。『承和五年目録』は開成四年四月二十日山東半島を航海中の船上にて円仁自ら作成したものであるが、遣唐使への委託については、同年七月十四日栗田録事に対して行ったと推測した。円仁が遣唐使第八船に託した将来物と「円仁書」は、承和六年（八三九）八月十九日以降比叡山に届けられたと考えられる。

その後延暦寺にて朝廷へ報告するため作成された『在唐送進録』と、先の『承和五年目録』に見られる相違点として、『在唐送進録』には梵漢両字經典がほとんど記載されていないことが明らかとなったが、何らかの事情により遣唐使に委託することができなかったと考えられる。また、『前唐院第一御厨子宝物実録』によって円仁将来目録に記載されていない将来物（象牙笛）があることを指摘した。『承和五年目録』を載せた第二舶は、『続日本後紀』によると承和七年（八四〇）六月に帰国した。

第三の『新求目録』は作成年のみ記しているが、承和十四年九月に帰国した円仁が朝廷へ求法の成果を報告するために十二月までの間に作成した目録であることを窺った。

第二章「円仁将来三目録の書誌学的考察と将来物の概要」では、三目録の底本の翻刻と現存諸本の間に見られる異同の確認を行い、『大正藏経』収蔵の有無と将来物の内容を考察した。

第一節「『日本国承和五年入唐求法目録』の書誌学的考察と諸本の概要」では、『承和五年目録』の現存諸本である旧青蓮院本（現京都国立博物館蔵本）、旧個人蔵本（現京都国立博物館蔵本）、四天王寺本、『大正新脩大藏経』

本、『大日本仏教全書』本の書誌学的考察を行い、現存最古の旧青蓮院本を底本として翻刻し、「校勘記」において諸本との異同を列挙した。その結果、四天王寺本は写本年代が近いことから旧青蓮院本と特徴が類似していた。一方旧個人蔵本は旧青蓮院本との俗字や正字の使用といった点に相違が見られ、『大正藏經』本及び『日仏全』本と類似しており、活字本の底本は旧個人蔵本に近い系統によるものであったと考えられる。

第二節『慈覚大師在唐送進録』の書誌学的考察と将来物の概要」では、青蓮院本、叡山文庫池田蔵本、『大正藏經』本、『日仏全』本の書誌学的考察を行い、『承和五年目録』と同様に青蓮院本を底本として翻刻を行い、諸本との異同を確認した結果、池田本は二種の活字本ときわめて類似しており、活字本の底本と写本系統は同様であると考えられる。

第三節『入唐新求聖教目録』の書誌学的考察と将来物の概要」では、『入唐新求聖教目録』の現存諸本である青蓮院本、高山寺本、比叡山南溪蔵本、叡山文庫蔵本、活字本（『大正藏經』本、『日仏全』本）の書誌学的考察を行い、青蓮院本を底本として翻刻を行い、諸本とを対校した結果、青蓮院本とその他の諸本（高山寺本・叡山文庫蔵本・『大正新脩大藏經』・『日仏全』本）と比較すると、高山寺本をはじめとするその他の諸本は欠本書目について一致が見られ、青蓮院本が最も記載の書目数が多いことが明らかとなった。その他の諸本については、異同においても高山寺本と類似点が多く見られた。また、江戸期の写本である比叡山南溪蔵本二種の異同を確認した結果、両者に大きな相違は見られなかったが、この南溪蔵本は『新求目録』のうち密教經典に絞った抄写であることが知られた。

長安においては、合計五一点の将来物の大半を真言密教の典籍すなわち經典・論疏・儀軌・戒儀・梵字が占めており、それらは長安の諸阿闍梨より伝授あるいは借写したものであったことが窺えた。また、長安においては淨土念仏、華嚴、禪、戒律、因明及び外典、民間信仰の窺える壇龕や高僧真影など、当時長安で盛行していた仏教の様相を伝えるものを多岐にわたって将来しており、円仁が天台・密教のみならず多方面に関心を寄せていたことが

明らかとなった。

次に、五台山においては、天台典籍が備わっていた大華嚴寺において慧思撰『随意三昧』、智顗撰『小止観』をはじめとする天台典籍を中心に将来しており、その他に天台声明や叡山浄土教への影響を窺う上で注目すべき書物として法照の『浄土五会念仏略法事儀讃』が挙げられた。

揚州求得では百二十三部の仏教書のうち六十三部が密教典籍であり、そのうち三十六部を梵漢両字經典が占めており、その背景には終南山宗叡からの求得あるいは借写の書であることが推測された。また、密教經典及び曼荼羅壇様の多くは、嵩山院全雅阿闍梨からの嘱授あるいは借写と考えられる。この他、揚州では『浄名経』の注釈、『法華経』の疏、『肇論』の注釈、因明、劫章、慧思・智顗・灌頂撰の天台典籍、戒律関係の書、中国各地の諸寺院の高僧に関する碑文、書儀や詩格をはじめとする外典、曼荼羅・壇様・高僧真影といった図像、舍利が主な将来物であった。

第三章「円仁の入唐求法と将来物蒐集の状況」では、三目録及び『巡礼記』を史料として円仁の将来物蒐集の状況と入唐求法の内容について分析を行った。

第一節「揚州における求法と将来物蒐集の状況」では、『承和五年目録』の末尾に記載の、揚州における終南山宗叡からの梵漢・悉曇受法及び嵩山院全雅からの金剛界諸尊儀軌などの借写を行っていることについて、『巡礼記』及び『新求目録』の内容を照合し、宗叡撰の書及び金剛界の儀軌は全雅から得たと推測した。次に、『巡礼記』における将来物に関する記述、すなわち無量義寺にて『維摩経』の注疏や、開元寺での設齋に関する斎歎文、龍興寺の祖師影及び伝法和上影について考察した。次に、『巡礼記』に記載のない将来物を概観し、その中でも比較的多く見られる天台典籍については、求得の背景に揚州龍興寺と玉泉天台の流れを汲む鑑真との関わりが挙げられることを推論した。

第二節「赤山・五台山における求法と将来物蒐集の状況」では、残留が成功した赤山において、弟子僧に講義を行った『因明論疏』について窺い、また赤山から五台山に向かう道中にて見聞した僧伽・宝誌両和尚の信仰などについて考察した。その後、五台山求法の考察では、円仁将来本の一つである竹林寺を創建した法照（一七六六―）撰の『浄土五会念仏略法事儀讃』を取り上げ、比叡山の浄土教に影響を与えた書として注目し、その内容として五会念仏の方法が記されたものであることを窺った。この五会念仏については、『巡礼記』の開成五年（八四〇）五月一日条によると、竹林寺の般舟道場はんじゆにおいて法照の念仏三昧について述べている。さらに、竹林寺で五月五日に行われた七十二賢聖供養会の見聞記録に見られる「同音念弥陀仏」の記述は、法照流の五会念仏を示すものとして注目される。円仁伝承のこの五会念仏が、比叡山のみならず、日本浄土教に及ぼした事項については今後の課題として視野に入れておきたい。

大華嚴寺での求法の成果は、常に法華三昧を修し天台の一心三觀を心要としていた志遠座主（七六四―八四四）の元での天台典籍の書写による求得であった。大華嚴寺は、元来華嚴を旨とする寺院であったが、円仁来訪時は志遠を主座として天台仏教が盛行し、天台典籍も具備していたことが知られた。

第三節「長安における求法と将来物蒐集の状況」では、開成五年（八四〇）十月には、元政より大興善寺翻經院にて金剛界大法を学び、翌年（八四一）二月伝法灌頂を受けた。さらに、元政から借り得た密教の念誦法門などの書写を四月に終えている。

同年二月には、法照の弟子である章敬寺鏡霜による「阿弥陀浄土念仏」弘伝のことを記録しているが、これは五台山でも見聞した五会念仏を指すものとして注目される。また同年二月十五日より四月八日に行われた興唐寺や大興善寺翻經院での在俗信者への結縁灌頂の見聞は、帰国後の活動につながるものであった。

次に、会昌元年（八四一）五月の青龍寺における義真からの灌頂受法の特色は、胎藏大法のみならず蘇悉地大法を受法できたことである。以上のように、長安において胎藏界・金剛界・蘇悉地の三部大法の伝授を得たことは、後



の天台密教の確立に大きな意味を持つものとなる。

さらに、会昌二年（八四二）二月には、玄法寺法全より胎藏大法を受け始め、翌三年（八四三）三月に、伝法灌頂を受けている。これら三部大法の受法と灌頂の伝授、密教典籍の取得は、後の円仁が確立する円密一致説や一大円教論などの天台密教確立の礎となったものと考えられる。また、大安国寺元簡より悉曇章の審決を得たことや、インド僧宝月より悉曇の正音を学んだことなどについても取り上げた。

第四章「円仁入唐求法の成果——比叡山仏教の確立を期して——」では、入唐求法が日本天台宗にいかなる影響を与え成果として結実したかという問題について、寛平入道本・三千院本『慈覚大師伝』及び『日本三代実録』などの諸史料を中心に、帰国直後である承和十五年（嘉祥元年・八四八）以後の円仁の活動を整理し、それらと関連すると考えられる在唐中の出来事を『巡礼記』より抜き出し、『新求目録』を用いてそれらに関連する将来物にも着目し、入唐求法の成果と影響を明らかにした。

第一節「比叡山諸法儀の始修と整備」では、最初に法華懺法の改伝について取り上げた。この改伝は、円仁帰国後間もない嘉祥元年（八四八）のことと伝えるが、それは開成四年（八三九）十一月赤山法華院での新羅式礼懺や、五台山諸処における法華三昧の見聞に依るところが大きいと見られる。天台大師智顗の「法華三昧行法」と、円仁改伝と伝える現行の「法華懺法」を対応したところ、基本的にほぼ同様の内容であるが、総礼伽陀・後唄・七仏通戒偈・六時偈などは円仁による付加の可能性が考えられる。

仁寿元年（八五一）円仁始修の念仏三昧は、「常行三昧」「弥陀念仏」「不断念仏」「例時」など種々の名称で伝承されているが、その源流は開成五年（八四〇）五月の五台山竹林寺での五会念仏の見聞と、法照撰『浄土五会念仏略法事儀讃』一巻の将来、及び開成六年（八四一）二月の長安章敬寺における鏡霜の五会念仏の見聞に遡ることができ

嘉祥元年（八四八）六月には、朝廷より延暦寺に灌頂を修すべきの太政官牒が出されており、真言密教の伝法灌頂が嘉祥二年（八四九）五月に初めて修されている。これは円仁の長安における元政・義真・法全からの胎藏界・金剛界・蘇悉地の三部大法の灌頂受法と、灌頂関係典籍の将来によるものであった。特に、文徳天皇や東宮、藤原氏をはじめとする貴族らも灌頂を受けており、円仁と公家との師檀関係についても明らかにした。

伝教大師御廟所である浄土院廟供については、斉衡三年（八五六）七月に五台山竹林寺の風に倣って、始修したことが知られた。当初の廟供の内容は不明であるが、元禄二年（一六九九）に靈空光謙によって制定布告された『開山堂侍真条制』などにより、現在に至るまで十二年籠山行として侍真僧により廟供が修されていることを論じた。

天台大師供については、円仁が延暦寺座主就任後、間もない仁寿四年（八五四）十一月二十四日、天台大師の命日に始修しているが、これは開成三年（八三八）十一月の揚州開元寺における天台大師供の見聞に依るものであり、円仁撰『天台大師供祭文』一卷、『天台大師忌次第式』一卷によって儀式の内容が知られた。

さらに、長安における舍利会見聞の成果として貞観二年（八六〇）四月法華総持院にて仏舍利会を始修している。また、文殊八字法や七仏薬師法の始修についても考察した。

第二節「比叡山諸堂の創建と整備」では、嘉祥元年（八四八）九月比叡山横川に根本観音堂（現在の横川中堂）を建立し、聖観世音菩薩と毘沙門天王の二尊を安置したことを取り上げた。この創建は、遣唐船での入唐航海中の靈験によるものと伝えているが、その証左として『巡礼記』における観音・毘沙門天に関する記述から、両尊への深い信仰と関心を持っていたことが知られた。

嘉祥三年（八五六）の詔により、文徳天皇即位に際して円仁が創建した法華総持院は、密教道場の長安青龍寺において国基を鎮護するため修されていた熾盛光法の見聞に依るものであった。したがって、法華総持院には熾盛光堂が建てられ、以後盛んにこの法が修されたことを『阿婆縛抄』『熾盛光日記』を用いて明らかにした。

比叡山東塔虚空蔵尾にある文殊楼院は、円仁が五台山より将来した土石を壇の五方に埋め、本尊文殊菩薩像の胎

内には五台山の香木を納め、貞観三年（八六一）に創建されている。この五台山土石や香木については『新求目録』に記載され、文殊信仰については文殊の靈場五台山での見聞に依るところが大きいといえる。そして、貞観十年（八七〇）四月には、円仁の遺言により清和天皇に付嘱された。

円仁の遺戒により入唐中に守護を得た山東半島の赤山神を勧請して、円仁滅後の仁和四年（八八八）諸弟子が延暦寺西坂本の大納言南淵年名の山莊を買い取って創建したのが赤山禅院であった。

第三節「比叡山における円仁将来物の保存」では、円仁将来物の保存状況について先行研究における考察を踏まえて、円仁入滅後当初は法華総持院の真言藏に納められていたが、火災により天元三年（九八〇）前唐院に安置され、鎌倉時代初期までは円仁将来目録のうち四割程度の将来物が保管されていたことが比叡山南溪藏所蔵『勘定前唐院見在書目録』（一〇九五年）及び『前唐院法文新目録』（一二二二年）によって知られた。

以上、帰国後の円仁の活動を通して、比叡山における円仁始修の諸法儀や建立の諸堂舎は、仏典将来を含めた入唐求法の成果であることを明らかにした。また、唐における円仁の経論などの蒐集は広範囲に及んだが、密教・悉曇・五会念仏・天台教学及びそれらの実践法門の中国での受法と典籍の将来により、総合仏教としての日本天台宗の確立大成に大きく貢献することになったのである。

最後に、円仁の人物像について述べておきたい。寛平入道本『慈覚大師伝』には、「大師天性聡敏、風貌温雅、身長五尺七寸。心慕<sub>二</sub>仏教<sub>一</sub>、寤寐思服。」（『続天全』史伝部二、五九頁下）とあり、天性聡明かつ俊敏、穏やかで上品な風貌であり、身長約百七十二糎、仏教を慕い寝ても覚めても考えていたと伝えている。

在唐中の円仁の姿を伝えている史料を見ると、円仁の後に続いて仁寿三年（八五三）に入唐した円珍が「請弘伝真言止観両宗官牒款状」において次のような唐国の高僧らの言葉を伝えている。すなわち、円仁が会昌二年（八四二）に胎藏大法を受けた玄法寺法全の言葉として、「（法全）和尚再三談<sub>二</sub>円仁闍梨聞法甚細<sub>一</sub>。闍梨与<sub>レ</sub>吾問法細甚、雅

操殊妙。」とあり、円仁の受法態度が甚だ細やかで節操正しい人物であったと評している。次に、円仁が会昌元年（八四一）に胎藏大法と蘇悉地大法を受けた青龍寺義真は、「青龍寺東塔院義真阿闍梨（此円仁大法師受法和上也）（中略）竝称<sub>レ</sub>嘆円仁大法師細念深慧、委探<sub>二</sub>秘教<sub>一</sub>、兼富<sub>中</sub>雅操<sub>上</sub>。」とあり、考えが細やかで智慧深く、節操に富んでいたと評している。また、円珍が求法の際に天台法門を学んだ越州開元寺の僧良諱の言葉が上記の史料に見えている。すなわち、「大中八年（八五四）（中略）九月七日出<sub>二</sub>台山<sub>一</sub>向<sub>二</sub>越府<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>開元寺<sub>一</sub>相<sub>レ</sub>遇天台智者大師第九代伝法弟子沙門良諱、講<sub>二</sub>授宗旨<sub>一</sub>時<sub>上</sub>。（中略）次話道兄円仁闍梨、多<sub>二</sub>好師徳<sub>一</sub>、何以不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>。」とあり、良諱は『巡礼記』には登場せず、円仁と面識があつたかどうかは定かではないが、円仁について徳が多いと評している。これらの評判を総合すると、円仁は考えが細やかであり節操正しく、人徳を備え、真摯な態度をもって受法していたことが窺える。

円仁が長安の人々に敬愛されていたことは、円仁が長安城を去った会昌五年（八四五）五月十五日条に窺える。すなわち、「自余相送人不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>具録<sub>一</sub>。」（小野四、一四四頁）と、多くの人から路上の用に宛てるようにとの餞別の品を贈られ、また李侍御（監察侍御史）という役人が、檀龕像などの餞別を渡し懇ろに別れを惜しみ、円仁に対して次のような言葉をかけている。

弟子多生有<sub>レ</sub>幸。得<sub>レ</sub>遇<sub>二</sub>和上遠来求<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>。数年供養、心猶未<sub>レ</sub>足。一生不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>和尚辺<sub>一</sub>。和上今遇<sub>二</sub>王難<sub>一</sub>、却<sub>二</sub>歸本國<sub>一</sub>去。弟子計今生<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>再見<sub>一</sub>。当来必在<sub>二</sub>諸仏浄土<sub>一</sub>、還如<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>和上<sub>一</sub>作<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>。和上成仏時、請莫<sub>レ</sub>忘<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>云々。又云、和上所<sub>レ</sub>着納袈裟、請留<sub>レ</sub>与<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>。将帰<sub>二</sub>宅裏<sub>一</sub>、終身焼香供養。（小野四、一四四頁）

李侍御は自らを円仁の弟子と称し、「弟子はこの生まれ変わりの生において幸い、和上が遠路はるばる仏法を求めて来られた時にお会いすることができ、数年来あなたを供養させて頂いたがまだ十分ではなく、一生和尚の側を離れたくない。和上は今王難（会昌廃仏）に遭い日本に帰ることとなり、我々は今生において再会することはできな

いだろう。来世は諸仏の浄土においてまた和上の弟子となり、成仏される時はこの弟子をお忘れにならないで頂きたい。和上がお召しになっていた袈裟を与えて頂き、自宅で終生焼香し供養致そう。」と述べている。

また、『三代実録』巻八、貞観六年正月十四日(辛丑)条に見える「円仁卒伝」には、次のように記されている。

円仁性寛柔、慈悲甚深。喜怒不<sub>レ</sub>形<sub>二</sub>于色<sub>一</sub>。(中略)又行路之時、目無<sub>レ</sub>邪<sub>二</sub>視路傍左右<sub>一</sub>。時有<sub>二</sub>遇者<sub>一</sub>、直置而去。不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>人。於<sub>二</sub>向行方<sub>一</sub>、適有<sub>二</sub>相遇<sub>一</sub>、乃揖而前、其專<sub>レ</sub>心無<sub>二</sub>余執<sub>一</sub>。皆此類矣<sub>4</sub>。

円仁は慈悲深く喜びや怒りを顔色に出さない人柄であり、また道を歩く時は周りを邪視することなく、行く方向で人に会えば会釈をし、心を専一にして執着がなかったと伝えられているが、この逸話は『巡礼記』の記述を通して、円仁が様々な未経験の事態に対して冷静沈着に行動していたこと、円仁がひたすら法門を求める旅人であった姿と重なるであろう。

寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、嘉祥元年(八四八)六月二十七日に位記が下され、円仁は伝灯大法師位を授かっているが、仁明天皇の勅書には円仁について次のように評されている。

(嘉祥元年六月)二十七日給<sub>二</sub>位記<sub>一</sub>状云、伝灯法師位円仁、年五十、臘三十二、今授<sub>二</sub>伝灯大法師位<sub>一</sub>。勅、幽求

一紀<sub>一</sub>深入<sub>二</sub>三藏<sub>一</sub>、觀<sub>二</sub>聖跡於竹林<sub>一</sub>、聽<sub>二</sub>微言於宝月<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>唯止觀之宗匠<sub>一</sub>、寔是白黒之津梁。宜<sub>下</sub>崇<sub>二</sub>伝灯之名<sub>一</sub>。載答<sub>中</sub>遊方之効<sub>上</sub>。(『統天全』史伝二、六七頁上)。

比叡山での一紀(十二年)籠山行を終えた円仁は、深く三蔵に入り、入唐した後聖跡を竹林寺に訪ね、三蔵宝月より悉曇を学び、ただ止觀に優れた師匠であるのみならず、道俗の橋渡しとなる存在であると述べ、幅広い分野にわたって受法し四方に旅した功績が高く評価されたといえる。

円仁の入唐求法は、当初遣唐使とともに揚州滞在の一年程で終了する予定であったのであるが、求法継続のため赤山にて唐残留計画を決行し、さらに五台山へ向かい、長安においては会昌廃仏の嵐に巻き込まれることとなり、緊張と波乱に満ちた求法生活となった。特に、唐残留に当たっては中国政府の役人に発覚し、罪に問われる可能性

が高い中で実行した円仁の心境には、万一この機会を逃せば二度と訪れることはできないであろう大唐国の地で、納得のいくまで法門の受法と経巻蒐集を果たし、必ずや本国に将来しなければならぬという、強固な意志があったと考えられ、円仁の果敢な精神が窺える。

寛平入道撰『慈覚大師伝』によると、円仁は、貞観五年（八六三）十月熱病にかかり、翌六年正月十三日、諸弟子を召して遺戒している（『続大全』史伝二、七〇頁下）。さらに円仁の晩年の弟子遍昭（八一六―八九〇）への遺書には、遍昭が求めている両部大法は、安恵に随って学ぶよう述べ、「助<sub>レ</sub>伝我道<sub>一</sub>、勿<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>墜失<sub>一</sub>。」（『続大全』史伝二、七一頁下）と言いつ残しているが、我が仏法の道を失うことなく伝えよとの悲願の思いが窺える。そして、十四日子の刻、手に印契を結び口に真言を唱え、北首右脅<sup>（脇）</sup>にして遷化した。春秋七十一、夏臘四十九であった。十六日、円仁が生前定めておいた比叡山の天梯尾の中岳に葬られ、この地を華芳谷と名付けたという（『続大全』史伝二、七二頁上）。

没後二年の貞観八年（八六六）七月十四日、法印大和尚位を追贈され、日本初の大師号である慈覚大師の諡号を贈られたが、その勅書には次のように見えている。「給<sub>二</sub>贈位諡号<sub>一</sub> 勅書<sub>一</sub>、其文曰、（中略）故天台座主円仁、慈襟不測、慧翅高飛、（中略）朕昔以<sub>二</sub>眇身<sub>一</sub>頻接<sub>二</sub>慈顔<sub>一</sub>。（中略）宜<sub>下</sub>贈<sub>二</sub>法印大和尚位<sub>一</sub>号<sub>中</sub>慈覚大師<sub>上</sub>。」（『続大全』史伝二、七三頁上）とあり、十六歳の清和天皇は、幼少の頃しばしば穏やかな円仁の顔に接したと回顧している。

本稿では、円仁の入唐求法の成果として帰国後の諸活動について考察を行ったが、これを踏まえて個々の活動についてさらに考察を深めていく必要があるといえる。特に、円仁の入唐求法の成果を知る上で著作を見落とすことはできない。帰国後、『金剛頂大教王経疏』七卷、『蘇悉地羯羅経略疏』七卷、『顕揚大戒論』八卷などを撰述しており、その他にも多数修学の成果をまとめているが、これら著作の研究を通して円仁の思想面にも迫っていく必要がある。現在円仁の著作として伝えられている書は多数残っているが、その中には真偽未決の書が見られる。これら真偽について明らかにした上で、真撰については成立年代を明らかにし、その内容について考察するという課題

がある。

また、帰山後、円仁が始修した法華懺法、不断念仏、灌頂、天台大師供、舍利会、文殊八字法、七仏薬師法、熾盛光法などの諸法儀は日本天台史の中でどのように発展し、修されていたか、それぞれの分野について明らかにし、考察を深めていきたい。

1 園城寺事務所『智証大師全集』下巻、一九一八年、一三二〇頁下。

2 前掲注1、一三一頁上。

3 前掲注1、一三一〇頁下。

4 『新訂増補国史大系 三代実録』前編（吉川弘文館、一九七七年）一二七頁。また、寛平入道本『慈覚大師伝』にも「大師天性寛柔、喜怒不<sub>レ</sub>形<sub>ニ</sub>於色」。経<sub>ニ</sub>歴行路<sub>一</sub>、目無<sub>レ</sub>邪<sub>ニ</sub>視路傍<sub>一</sub>。時遇<sub>ニ</sub>行人<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>知而直去。知人正有<sub>ニ</sub>相逢<sub>一</sub>。乃揖而前。其専心無<sub>ニ</sub>攀縁<sub>一</sub>。皆此類也。」（『続天全』史伝部二、七二頁）とあり、「卒伝」との記述のわずかな相違について、佐伯有清氏は『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）において、『三代実録』の円仁卒伝のほうが話を正しく伝えており、現行本『慈覚大師伝』は、その話に後の改変の手が加わっていることを思わせる。」（一三三—一三四頁）と述べている。

## 参考文献

### 《写本》

- ・青蓮院吉水藏『慈覺大師在唐送進錄』（東京大学史料編纂所撮影）
- ・青蓮院吉水藏『入唐新求聖教目錄』（東京大学史料編纂所撮影）
- ・高山寺藏『入唐新求聖教目錄』（Ⅱ部五三号）
- ・四天王寺藏『日本国承和五年入唐求法目錄』
- ・叡山文庫藏『慈覺大師請来目錄』（池田内典一―五七）
- ・同『前唐院經藏目錄』（池田内典一―五〇）
- ・比叡山南溪藏『注進 勘定前唐院見在書目錄』
- ・比叡山延曆寺藏『舍利供併法則』

### 《版本》

- ・大谷大学図書館藏『天台入唐招来目錄』（余大一七六四）

### 《一次文献》

- ・園城寺編『園城寺文書』一（講談社、一九九八年）。
- ・『叡岳要記』（塙保己一編『群書類従』第二四輯、続群書類従完成会、一九八〇年、五〇四頁）。
- ・『山門堂舎』（『群書類従』第二四輯・四六八頁）。
- ・黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 続日本後紀』（吉川弘文館、一九七八年）。



- 黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 日本三代実録』前編(吉川弘文館、一九七七年)。
- 黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 日本文徳天皇実録』前編(吉川弘文館、一九七七年)。
- 黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 類聚三代格』前編(吉川弘文館、一九七七年)。
- 黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 日本後紀』(吉川弘文館、一九七八年)。
- 黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系 日本紀略』前編、第一〇卷(吉川弘文館、一九七九年)。
- 欧陽修・宋祁撰『新唐書』第五冊・卷五〇至卷六〇(志)(中華書局、一九六六年)。
- 『新唐書』第一六冊・卷一五三至卷一七〇(傳)。
- 増補「史料大成」刊行会編『史料大成 兵範記四』(臨川書店、一九七五年、三一八頁)。
- 『南嶽弥陀和尚碑并序』(『全唐文』卷五八七、『欽定全唐文』一二、七五三五頁下、一九七九年四版、台灣大通書局)。
- 李華撰『左溪大師碑』(『全唐文』卷三二〇、『欽定全唐文』七、四一〇一頁下、台灣大通書局、一九七九年四版)。
- 脱脱等撰『宋史』卷二〇九、芸志(台北、藝文印書館)。
- 三千院本『慈覺大師伝』(天台宗典編纂所編『続天台宗全書』史伝二、日本天台僧伝類Ⅰ、春秋社、一九八八年、四四頁)。
- 寛平入道撰『慈覺大師伝』(『続天全』史伝二、五八頁)。
- 『天台南山無動寺建立和尚伝』(『続天全』史伝二、一二〇頁)。
- 『慈恵大僧正伝』(『続天全』史伝二、一九一頁)。
- 『慈恵大僧正拾遺伝』(『続天全』史伝二、二〇二頁)。
- 澄観撰『大方広仏華嚴経疏』(『大正蔵』三五卷、五〇三a)。

- ・智顗撰『摩訶止觀』（『大正藏』四六卷、一a）。
- ・智顗撰『修習止觀坐禪法要』（『大正藏』四六卷、四六二a）。
- ・灌頂纂『国清百錄』（『大正藏』四六卷、七九三a）。
- ・智顗撰『法華三昧懺儀』（『大正藏』四六卷、九四九a）。
- ・智顗撰『五方便念仏門』（『大正藏』四七卷、八一c）。
- ・法照述『浄土五会念仏略法事儀讃』（『大正藏』四七卷、四七四c）。
- ・慧皎撰『高僧伝』（『大正藏』五〇卷、三二二c）。
- ・贊寧等撰『宋高僧伝』（『大正藏』五〇卷、七〇九b）。
- ・慧祥撰『弘贊法華伝』（『大正藏』五一卷、一二b）。
- ・延一撰『広清涼伝』（『大正藏』五一卷、一一〇一a）。
- ・『広弘明集』（『大正藏』五二卷、九七a）。
- ・円照集『代宗朝贈司空大弁正広智三藏和上表制集』卷一（『大正藏』五二卷、八二六c）。
- ・円照撰『貞元新定釈教目録』（『大正藏』五五卷、七七一a）。
- ・最澄撰『伝教大師将来台州録』（『大正藏』五五卷、一〇五五a）。
- ・最澄撰『伝教大師将来越州録』（『大正藏』五五卷、一〇五八b）。
- ・空海撰『御請来目録』（『大正藏』五五卷、一〇六〇b）。
- ・常曉撰『常曉和尚請来目録』（『大正藏』五五卷、一〇六八c）。
- ・円行撰『靈巖寺和尚請来法門道具等目録』（『大正藏』五五卷、一〇七一c）。
- ・円仁撰『日本国承和五年入唐求法目録』（『大正藏』五五卷、一〇七四a）。
- ・『慈覺大師在唐送進録』（『大正藏』五五卷、一〇七六b）。

- ・ 円仁撰『入唐新求聖教目錄』（青蓮院本・『大正藏』五五卷、一〇七八b）。
- ・ 惠運撰『惠運禪師將來教法目錄』（『大正藏』五五卷、一〇八七c）。
- ・ 惠運撰『惠運律師書目錄』（『大正藏』五五卷、一〇八九a）。
- ・ 円珍撰『日本比丘円珍入唐求法目錄』（『大正藏』五五卷、一〇九七b）。
- ・ 円珍撰『智証大師請來目錄』（『大正藏』五五卷、一一〇二a）。
- ・ 安然撰『諸阿闍梨密教部類總錄』（『大正藏』五五卷、一一一三b）。
- ・ 円仁撰『金剛頂經疏』（『大正藏』六一卷、七b）。
- ・ 安然記『金剛界大法對受記』（『大正藏』七五卷、一一六a）。
- ・ 法照撰『淨土五會念仏誦經觀行儀』（『大正藏』八五卷、一二四二c）。
- ・ 明空述『勝鬘經疏義私鈔』（『大日本統藏經』第一輯第三〇套第四冊、三二〇頁）。
- ・ 海雲撰『略叙伝大毗盧舍那成仏神變加持經大教相承伝法次第記』（『大日本統藏經』第一輯第九五套第五冊、四九三頁）。
- ・ 海雲撰『金胎両界師資相承』（前田慧雲編『大日本統藏經』第一輯第九五套第五冊、四九六頁）。
- ・ 造玄『胎金両界血脈』（『大日本統藏經』第一輯九五套第五冊、四九七頁）。
- ・ 顔真卿撰『天台智者大師画讃』（『大日本統藏經』第一輯二編乙第七套第四冊、三二八頁）。
- ・ 円仁撰『天台大師供祭文』（『日仏全』第四一、三〇六c、『天台霞標』三編卷之一所収）。
- ・ 円仁撰『天台大師忌次第式』（『日仏全』第四一、三〇七a、『天台霞標』三編卷之一所収）。
- ・ 『前唐院資財実録』（『大日本仏教全書』第四二、九a、『天台霞標』五編卷之一所収）。
- ・ 『開山堂侍真条制』（『日仏全』第四一、九一b、『天台霞標』六編、卷之三所収）。
- ・ 『阿娑縛抄』「七仏薬師」（『日仏全』第五八、一a）。

- ・『阿娑縛抄』「熾盛光日記集」(『日仏全』第五八、七九 a)。
- ・『阿娑縛抄』「文殊八字」(『日仏全』第五八、三一五 b)。
- ・『阿娑縛抄』「明匠等略伝日本下」(『日仏全』第六〇、四五 b)。
- ・『阿娑縛抄』「諸寺縁起」(『日仏全』第六〇、二六三 b)。
- ・『三国仏法伝通縁起』(『日仏全』第六二、七 a)。
- ・虎関師鍊撰『元亨釈書』(『日仏全』第六二、六六 a)。
- ・『本朝高僧伝』(『日仏全』第六三、一 a)。
- ・慶滋保胤撰『日本往生極楽記』(『日仏全』第六八、一八五 a)。
- ・法空撰『聖德太子平氏伝雜勘文』(『日仏全』第七一、一四一 a)。
- ・成尋撰『参天台五臺山記』(『日仏全』第七二、二二八 a)。
- ・『三宝絵詞』(『日仏全』第九〇、二七〇 c)。
- ・円仁撰『日本国承和五年入唐求法目錄』(『日仏全』第九五、二三六 a)。
- ・『慈覚大師在唐送進録』(『日仏全』九五、二三九 a)。
- ・円仁撰『入唐新求聖教目錄』(『日仏全』九五、二四二 a)。
- ・円珍撰『大毘盧遮那成道経義釈目錄縁起』(園城寺編纂『智証大師全集』中卷、園城寺事務所、一九一八年、七〇一頁。)
- ・円珍撰『諸家教相同異略集』(『智証大師全集』中卷、五八五頁)。
- ・『唐決』(『日本大蔵経』第七八卷、天台宗顕教章疏四(鈴木学術財団、一九七六年、八七頁・一六五頁・一九三頁・二二一頁・二二三頁)。
- ・渋谷慈鎧編『天台座主記』(比叡山延暦寺開創記念事務局、一九三五年)。

- ・『願文』（比叡山專修院附属叡山学院編『伝教大師全集』第一、日本仏書刊行会、一九六八年、一頁）。
- ・最澄撰『顕戒論』（『伝全』第一、二五頁）。
- ・「請立大乘戒表」（『伝全』第一、二四八頁）。
- ・『内証仏法相承血脈譜』（『伝全』第一、一九九頁）。
- ・『天台法華宗年分得度学生名帳』（『伝全』第一、二五〇頁）。
- ・光定撰『伝述一心戒文』（『伝全』第一、五二三頁）。
- ・最澄撰『依憑天台集』（『伝全』三、三四三頁）
- ・「請入唐請益表」（『伝全』第五、附録一頁、『叡山大師伝』所収）。
- ・釈一乗忠撰『叡山大師伝』（『伝全』第五、附録一頁）。
- ・「度牒」（『伝全』第五、附録一〇一頁）。
- ・「戒牒」（『伝全』第五、附録一〇三頁）。
- ・『伝教大師消息』（『伝全』第五、四四一頁）。
- ・「授慈覚大師付法文」（『伝全』五、四二七頁）。
- ・王溥撰『唐会要』中（中華書局、一九五五年）。
- ・『唐詩紀事』卷五六（四部叢刊正編九九冊、台灣商務印書館、一九七九年）。
- ・足立喜六訳注・塩入良道補注『入唐求法巡礼行記』（平凡社、一九七〇年）。
- ・小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一卷―第四卷（鈴木学術財団、一九六四―一九六九年）。

## 《二次文献》

- ・大谷大学図書館編『大谷大学図書館和漢書分類目録』（一九二六年）。

- ・小野玄妙、丸山孝雄編『仏書解説大辞典』（大東出版社、一九三三年）。
- ・望月信享、塚本善隆編『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九三三年）。
- ・佐藤哲英「『仏典の蒐集整備に関する伝教・慈覚・智証三大師の態度について』（『仏教学報』二号、一九三九年）。
- ・稲垣瑞穂「東大寺図書館蔵本 百法頌幽抄の古點について」（『訓点語と訓点資料』第七輯、一九五六年）。
- ・小野勝年「長安の西明寺とわが入唐僧」（『佛教藝術』二九号、一九五六年）。
- ・関口真大「玉泉天台について」（『天台学報』創刊号、天台学会、一九六〇年）。
- ・佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九六一年）。
- ・牧田諦亮「唐長安大安国寺利渉について」（『東方学報』第三一冊、一九六一年）。
- ・神田喜一郎「慈覚大師外典考証」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）。
- ・牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」（福井康順『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）。
- ・神田喜一郎「慈覚大師外典考証」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）。
- ・福井康順編『慈覚大師研究』（天台学会、一九六四年）。
- ・小野勝年「前唐院見在書目録とその解説」（『大和文化研究』第一〇巻四号、一九六五年）。
- ・馬君武『神会和尚遺集―附胡先生晚年的研究―』（胡適紀年館、一九六八年）。
- ・高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録』第一（東京大学出版会、一九七三年）。
- ・仲尾俊博『日本初期天台の研究』（永田文昌堂、一九七三年）。
- ・塚本善隆『唐中期の浄土教』（法蔵館、一九七五年）。
- ・渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』上下増補版（法蔵館、一九七八年）。
- ・西村岡紹「『例時作法』成立考」（『天台学報』第二〇号、一九七八年）。

- ・佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九年）。
- ・後藤基巳・山井湧『中国古典文学大系五七 明末清初政治評論集』（平凡社、一九八二年）。
- ・鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について―不動・毘沙門研究序説―」（『佛教藝術』一四九号、一九八三年）。
- ・木内堯央『天台密教の形成』（春秋社、一九八四年）。
- ・清田寂雲「伝教大師と密教―その出会い―」（『叡山学院研究紀要』第七号、一九八四年）。
- ・『台宗課誦 坤』（比叡山延暦寺学問所、一九八四年）。
- ・禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』（大修館書店、一九八五年）。
- ・佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）。
- ・武覚超『中国天台史』（叡山学院、一九八六年）。
- ・小野勝年『中国隋唐長安寺院史料集成』史料編（法蔵館、一九八九年）。
- ・佐伯有清『円仁』（吉川弘文館、一九八九年）。
- ・国宝・重要文化財総合目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録 美術工芸品編』上巻（ぎょうせい、一九九八年）。
- ・鎌田茂雄他編『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版社、一九九八年）。
- ・吉水蔵聖教調査団編『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』（汲古書院、一九九九年）。
- ・高橋聖「遣唐僧による請来目録作成の意義―円仁の三種の請来目録を中心に―」（『史学研究集録』第二六号、二〇〇一年）。
- ・辛徳勇「唐長安城の基本的文献」（『都市文化研究』二号、二〇〇三年）。
- ・田中俊明「アジア海域の新羅人―九世紀を中心に―」（京都女子大学東洋史研究室『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学、二〇〇三年）。

- ・石田尚豊「円仁の揚州求法について」（『空海の帰結―現象的史学―』中央公論美術出版、二〇〇四年）。
- ・田中史生「承和期前後の国際交易―張宝高・文室宮田麻呂・円仁とその周辺―」（平成十三年度～平成十六年度科学研究費補助金（基盤研究C（2））研究成果報告書『入唐求法巡礼行記』に関する文献校定および基礎的研究、二〇〇五年三月）。
- ・上田雄『遣唐使全航海』（草思社、二〇〇六年）。
- ・小川隆『神会―敦煌文献と初期の禅宗史―』臨川書店、二〇〇六年）。
- ・張志哲主編『中華佛教人物大辞典』（黄山書社、二〇〇六年）。
- ・武覚超『比叡山仏教の研究』（法蔵館、二〇〇八年）。
- ・武覚超『比叡山諸堂史の研究』（法蔵館、二〇〇八年）。
- ・李炳魯「平安初期における北東アジア世界の交渉と現況―張保皋と円仁を中心として―」（『北東アジア研究』二二号、二〇一二年）。
- ・小南沙月（妙覚）「円仁将来目録の研究―『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析―」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第一五号、二〇一六年）。
- ・小南沙月（妙覚）「慈覚大師円仁『入唐新求聖教目録』」（『史窓』第七四号、二〇一七年）。

## データベース

- ・e 国宝 国立博物館所蔵国宝・重要文化財」<http://www.emuseum.jp/> 「円仁承和五年求法目録」
- ・「国指定文化財等データベース」<http://kuniishitei.bunka.go.jp/> 「円仁入唐求法目録（開成四年四月二十日／＼）」。



- ・「SAT大正新脩テキストデータベース」<http://21dzk1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>
- ・教育部異體字辞典「<http://dict.variants.moe.edu.tw/>」。

## 初出一覧

- ・小南沙月(妙覚)「円仁将来目録の研究―『日本国和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の成立過程―」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第一四号、二〇一五年)。
- ・小南沙月(妙覚)「円仁将来目録の研究―『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析―」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第一五号、二〇一六年)。
- ・小南沙月(妙覚)「慈覚大師円仁『入唐新求聖教目録』」(『史窓』第七四号、二〇一七年)。
- ・小南沙月(妙覚)「慈覚大師円仁将来目録の研究―『入唐新求聖教目録』の概要―」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第一六号、二〇一七年)。
- ・小南妙覚「慈覚大師円仁の将来物蒐集に関する研究」(富士ゼロックス株式会社、二〇一七年)。
- ・小南妙覚「慈覚大師円仁の揚州における将来物蒐集について―悉曇・密教・天台典籍を中心に―」(『日本宗教文化史研究』第二一卷第二号、二〇一七年)。

- ・小南妙覚「慈覚大師円仁入唐求法の成果―比叡山仏教の確立を期して―」（京都女子大学史学会『史窓』第七五号、二〇一八年）。
- ・小南妙覚「慈覚大師円仁将来目録の研究―『入唐求法巡礼行記』との関連を中心に―」（龍谷大学アジア仏教文化研究センター『二〇一七年度研究報告書』、二〇一八年）。
- ・小南妙覚「慈覚大師円仁の長安における将来物菟集に関する研究」（龍谷大学世界仏教文化研究センター『世界仏教文化研究E-journal』創刊号、二〇一八年）。
- ・小南妙覚「慈覚大師円仁の五台山における将来物菟集について」（『天台学報』第六〇号、二〇一八年）。